

福岡市

有田・小田部

第2集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第81集

1 9 8 2

福岡市教育委員会

有田・小田部

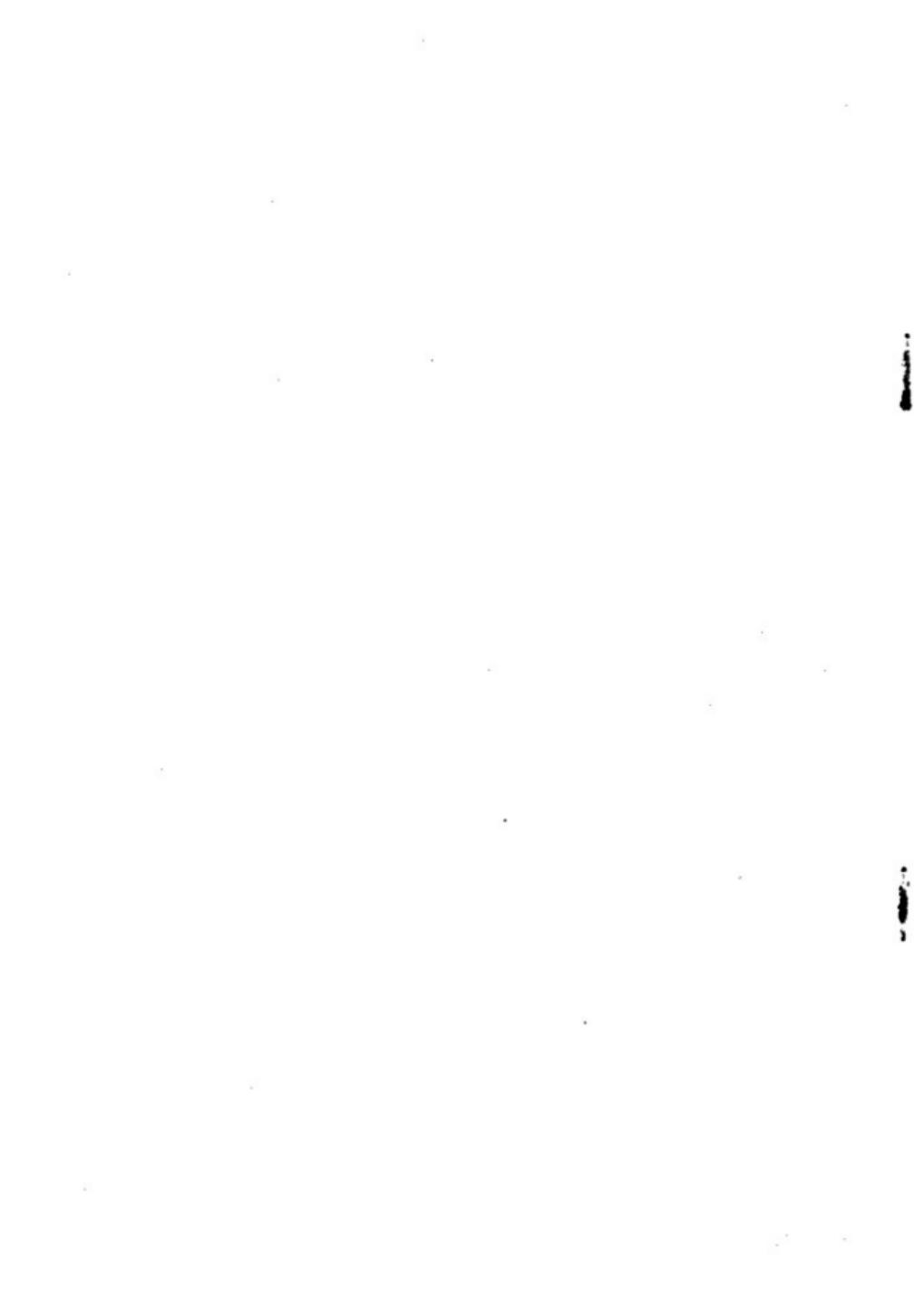
〈福岡市西区有田、小田部における遺跡群の発掘調査報告〉

第2集



昭和57年3月

福岡市教育委員会



序 文

福岡市の西南部に位置する早良平野の中でも、有田・小田部の台地は中心的な位置を占めており、昭和41～43年の区画整理に伴う埋蔵文化財の発掘調査で、この地域が旧石器時代～中世に及ぶ遺跡であることが明らかになりました。

福岡市教育委員会は、宅地化などの開発によって消滅する遺跡について昭和50年より国庫補助事業として、発掘調査を継続して行ない、あわせて有田・小田部周辺地域の歴史の解明に努めています。

昭和55年度は9ヵ所の発掘調査を実施し、弥生時代中期から17世紀に及ぶ遺構、遺物を検出しました。本報告書は第一集につづき、発掘調査の成果を収録したものです。本書が文化財に対するご理解への一助となれば幸いです。

報告書の刊行に当り、調査にご協力いただいた地元の方々をはじめ、関係各位のご援助とご配慮に、深甚の敬意を表すものであります。

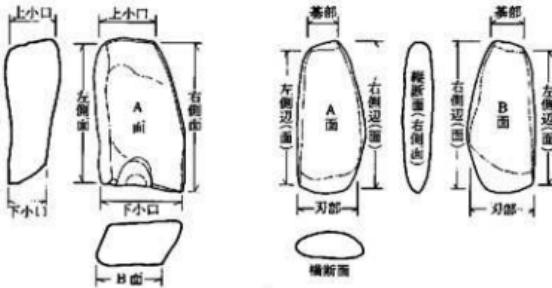
昭和57年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 津 茂 美

例　　言

- (1) 本書は、福岡市西区有田・小田部地域内における住宅開発等に伴い、福岡市教育委員会が国庫補助を得て、実施した緊急発掘調査報告書である。
- (2) 本書には、昭和55年度事業の第33～34次迄の2カ所、昭和54年度事業の第28次～29次、31次迄の3カ所、昭和52年度事業の第7次～8次の2カ所を収録するものである。
- (3) 本書では、有田・小田部台地上的遺跡を一連のものと見做し、広義の有田遺跡と呼称する。
- (4) 本書掲載のFig4「有田地区調査地域図」は第1、2次調査報告の「遺構概要図」及び、「福岡市文化財分布地図－西部Ⅰ」をもとに作製した。
- (5) 本書に収録した発掘調査は、第7～第8次については井沢洋一が、第28～31次、第33～34次については井沢、山崎龍雄が担当した。
- (6) 本書掲載の遺構写真の撮影は、井沢・山崎が行ない、遺物写真の撮影、及び写真の焼付けは宮崎成昭氏、山崎が担当した。
- (7) 本書掲載の遺構の実測は、主に井沢、山崎、児玉健一郎、池田孝弘が行った。遺物の実測は、第7～8次、第28次を井沢、児玉が、第29次、第31次、を井沢が担当した。遺構、遺物の整図は、井沢、山崎、原秋代、平井彩子が行った。以上の外、実測、整図にあたっては、杉山富雄氏、花田早苗氏、石橋千恵氏、松尾正直氏の協力を得た。
- (8) 本書の執筆は井沢が担当した。編集は山崎の協力を得て、井沢が担当した。
- (9) 本書文中で使用する石器の部分名称は下の図のようとする。



本文目次

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査の組織	2
第Ⅱ章 遺跡の立地と調査の概要	4
第Ⅲ章 調査経過	12
1. 第7次調査	12
調査の概要	12
検出遺構	12
出土遺物	27
小 結	47
2. 第8次調査	49
調査の概要	49
検出遺構	49
出土遺物	58
小 結	75
3. 第28次調査	77
調査の概要	77
検出遺構	77
出土遺物	84
小 結	95
4. 第29次調査	96
調査の概要	96
検出遺構	96
出土遺物	103
小 結	106
5. 第31次調査	107
調査の概要	107
検出遺構	107
出土遺物	114
小 結	118
6. 第33次調査	119

調査の概要	119
検出遺構	121
出土遺物	128
小 結	134
7. 第34次調査	135
調査の概要	135
検出遺構	135
出土遺物	141
小 結	142

挿 図 目 次

Fig. 1 有田・小田部周辺の遺跡	(1/25000)	3
Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点	(1/5000)	5
Fig. 3 有田・小田部台地の旧地形図	(1/5000)	7
Fig. 4 有田地区調査地域図	(1/2500)	9, 10
Fig. 5 第7次調査位置図	(1/2500)	12
Fig. 6 遺構配置図	(1/150)	13
Fig. 7 溝SD01 (1/80), 土層図	(1/30)	15, 16
Fig. 8 溝SD02	(1/60)	17, 18
Fig. 9 溝SD03	(1/60)	19, 20
Fig. 10 溝SD04~07	(1/60) (1/30)	22
Fig. 11 堀立柱建物SB01	(1/60)	23
Fig. 12 堀立柱建物SB02, 03	(1/60)	25
Fig. 13 (1)Pit 206, (2)Pit 208	(1/20)	27
Fig. 14 SD 01出土遺物	(1/3)	28
Fig. 15 SD 01出土遺物	(1/3)	29
Fig. 16 SD 01出土遺物	(1/3)	30
Fig. 17 SD 01出土遺物	(1/3)	32
Fig. 18 SD 01出土遺物	(1/3)	33
Fig. 19 SD 01出土遺物	(1/3)	35
Fig. 20 SD 02出土遺物	(1/4)	36
Fig. 21 SD 02出土遺物	(1/4)	38
Fig. 22 SD 02出土遺物	(1/3)	39

Fig. 23 S D 03出土遺物	(1/3)	41
Fig. 24 S D 03出土遺物	(1/3)	42
Fig. 25 S D 05出土遺物	(1/4)	43
Fig. 26 Pit 206, 208出土遺物	(1/4), (2/3)	44
Fig. 27 Pit 及び造構面出土遺物	(1/3), (1/4)	45
Fig. 28 表土出土遺物	(1/3)	47
Fig. 29 中世造構配置図	(1/400)	48
Fig. 30 第8次調査地位置図	(1/2500)	49
Fig. 31 造構配置図(1/200)及び土層図	(1/60)	50
Fig. 32 住居跡SI01, 02	(1/60)	51
Fig. 33 住居跡SI03, 04, 05	(1/60)	52
Fig. 34 住居跡SI07	(1/60)	53
Fig. 35 住居跡SI08 遺物出土状況	(1/30)	53
Fig. 36 住居跡SI08	(1/60)	54
Fig. 37 住居跡SI09, 10	(1/60)	55
Fig. 38 住居跡SI09 内かまど	(1/30)	56
Fig. 39 住居跡SI11	(1/60)	56
Fig. 40 堀立柱建物SB01	(1/3)	57
Fig. 41 住居跡SI01, 03出土遺物	(1/3)	58
Fig. 42 住居跡SI07, 09出土遺物	(1/3)	59
Fig. 43 住居跡SI08出土遺物	(1/3)	61
Fig. 44 SI08出土遺物	(1/3)	62
Fig. 45 Pit 出土遺物	(1/3)	64
Fig. 46 造構面及び包含層出土遺物	(1/3)	66
Fig. 47 造構面及び包含層出土遺物	(1/4), (1/3)	68
Fig. 48 造構面及び包含層出土遺物	(1/3)	70
Fig. 49 造構面及び包含層出土遺物	(1/3)	71
Fig. 50 造構面及び包含層出土遺物	(1/3), (1/2)	73
Fig. 51 第28次調査地位置図	(1/2500)	77
Fig. 52 造構配置図	(1/100)	78
Fig. 53 土層図	(1/40)	79, 80
Fig. 54 清SD03, 敷石造構	(1/30)	81, 82
Fig. 55 S D 01出土遺物	(1/3)	84

Fig. 56 S D 01出土遺物	(1/4)	85
Fig. 57 S D 01出土遺物	(1/4), (1/3)	86
Fig. 58 S D 01出土石器	(1/3)	87
Fig. 59 S D 01出土遺物	(1/3)	88
Fig. 60 S D 02出土遺物	(1/3)	88
Fig. 61 S D 03, 敷石遺構出土遺物	(1/3)	89
Fig. 62 S D 03出土遺物	(1/3)	92
Fig. 63 S D 03出土遺物	(1/3)	93
Fig. 64 表土出土遺物	(1/3)	94
Fig. 65 第29次調査位置図	(1/2500)	96
Fig. 66 周辺の調査状況図	(1/400)	97
Fig. 67 遺構配置図	(1/150)	98
Fig. 68 住居跡SI01	(1/60)	99
Fig. 69 土壌SK01	(1/30)	100
Fig. 70 住居跡SI02, SI03	(1/30), (1/60)	101
Fig. 71 捜立柱建物SB01	(1/60)	102
Fig. 72 出土遺物	(1/3)	104
Fig. 73 出土遺物	(1/3)	105
Fig. 74 第31次調査位置図	(1/2500)	107
Fig. 75 遺構配置図	(1/150)	108
Fig. 76 住居跡SI01, かまど, 貯藏穴	(1/60), (1/30)	109
Fig. 77 捜立柱建物SB01, 02	(1/60)	111
Fig. 78 捜立柱建物SB03, 04	(1/60)	112
Fig. 79 土壌SK01	(1/30)	114
Fig. 80 住居跡SI01 出土遺物	(1/3)	115
Fig. 81 出土遺物	(1/3)	116
Fig. 82 周辺地形図	(1/400)	119
Fig. 83 土層図	(1/80)	119
Fig. 84 遺構配置図	(1/150)	120
Fig. 85 住居跡SI01	(1/60)	122
Fig. 86 住居跡SI01内D1, D2	(1/30)	123
Fig. 87 住居跡SI02	(1/60)	124
Fig. 88 土壌SK01, 02, 03	(1/40)	125, 126

Fig. 89 挖立柱建物 SB01	(1/60)	127
Fig. 90 住居跡 SI01 出土遺物	(1/3)	129
Fig. 91 住居跡 SI01 出土遺物	(1/3)	131
Fig. 92 出土遺物	(1/3)	132
Fig. 93 第34次調査地位置図	(1/2500)	135
Fig. 94 遺構配置図	(1/200)	136
Fig. 95 住居跡 SI01	(1/60)	137
Fig. 96 挖立柱建物 SB01, 02	(1/60)	138
Fig. 97 挖立柱建物 SB03, 04	(1/60)	140
Fig. 98 挖立柱建物 SB05	(1/60)	141
Fig. 99 出土遺物	(1/3)	141

図 版 目 次

PL. 1 有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）	
PL. 2 有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）	
PL. 3 第7次調査、遺跡全景	
PL. 4 (1) 遺跡全景（西から）	(2) 溝SD01,03（東から）
PL. 5 (1) 溝SD01調査中（南から）	(2) 溝SD01発掘完了（南から）
PL. 6 (1) 淹り部分（南から）	(2) SD 01淹り部分土層（南から）
(3) SD 01 南側上層	
PL. 7 (1) 溝SD 01 碓群検出状況	(2) 遺物出土の状況
(3) 遺物の出土状況	
PL. 8 (1) 溝SD 01内遺物出土状況	(2) (1)に同じ
(3) (1)に同じ	(4) (1)に同じ
PL. 9 (1) 溝SD 02（南から）	(2) 北壁土層（南から）
(3) 中央アゼ土層（南から）	
PL. 10 (1) 溝SD 02内遺物出土状況	(2) (1)に同じ
(3) (1)に同じ	(4) (1)に同じ
PL. 11 (1) 溝SD 03（西から）	(2) SD 03（東から）
PL. 12 (1) SD 03 東端部分碓群	(2) SD 03 西端部分
PL. 13 (1) SD 03 遺物出土状況	(2) 遺物出土状況
(3) 溝中央土層	(4) 溝東側土層
PL. 14 (1) 挖立柱建物 SB01（南から）	(2) SB 01（西から）

- PL. 15 (1) 桁立柱建物 SB 02, 03 (西から) (2) 溝 SD 04~07 (西から)
 PL. 16 (1) SD04の土層 (2) SD05の土層
 (3) SD06の土層 (4) SD07の土層
 PL. 17 (1) Pit 206 (2) Pit 206内貨銭出土状況
 PL. 18 SD01出土遺物
 PL. 19 SD01出土遺物
 PL. 20 SD02出土遺物
 PL. 21 SD02出土遺物
 PL. 22 SD03出土遺物
 PL. 23 Pit 206, Pit 208, SD05 出土遺物
 PL. 24 遺構面出土遺物
 PL. 25 (1) 第8次調査全景 (2) 遺構北半分
 PL. 26 (1) 遺構南半分 (2) 通路部分
 PL. 27 (1) 住居跡 SI03, 04, 05, 桁立柱建物 SB01 (2) 遺物出土状況 (3) 遺物出土状況
 PL. 28 (1) 住居跡 SI03, 04 (東から) (2) 住居跡 SI04, 05 (東から)
 PL. 29 (1) 住居跡 SI 01, 02 (東から) (2) 住居跡 SI10 (東から)
 PL. 30 (1) 住居跡 SI 07, 08 (東から) (2) 住居跡 SI08, 09 (北から)
 PL. 31 (1) 住居跡 SI 07 (南から) (2) 住居跡 SI11 (南から)
 PL. 32 (1) 住居跡 SI 08 (北から) (2) 遺物の出土状況
 PL. 33 (1) 住居跡 SI 09 (南から) (2) かまどの出土状況
 PL. 34 住居跡 SI01, 03, 07, 09出土遺物
 PL. 35 住居跡 SI08出土遺物
 PL. 36 遺構面出土遺物
 PL. 37 遺構面出土遺物
 PL. 38 (1) 遺構面出土遺物 (2) Pit出土遺物
 PL. 39 (1) 第28次調査全景 (2) 遺構南側
 PL. 40 (1) 溝 SD 01 (南から) (2) 溝 SD 03 (北から)
 PL. 41 (1) 溝 SD 02 土層 (2) 溝 SD 03 上層
 (3) 溝 SD 03 砂出土状況
 PL. 42 (1) 遺構北半 (西から) (2) 遺構北半 (南から)
 PL. 43 (1) SD03 砂出土状況 (南から) (2) (1)に同じ
 PL. 44 (1) SD 01, SD 03 北壁上層 (2) SD 03 北壁上層
 (3) SD 03 東壁土層

- | | |
|----------------------------------|---------------------------|
| PL. 45 (1) 溝 SD 01, SD 03 | (2) SD 01中央土層 (北から) |
| PL. 46 SD01 出土遺物 | |
| PL. 47 SD01 山土遺物 | |
| PL. 48 SD02, SD03出土遺物 | |
| PL. 49 SD02, SD03出土遺物 | |
| PL. 50 SD02, SD03出土遺物 | |
| PL. 51 (1) 第29次調査北半 | (2) 造構南半 |
| PL. 52 (1) 挖立柱建物SB 01 (北から) | (2) SB01 (東から) |
| PL. 53 (1) 住居跡SI 01 | (2) SI01 |
| PL. 54 (1) 住居跡SI 01, SI 02 | (2) SI01内D-4 |
| PL. 55 (1) 住居跡SI 02内D-5 (東から) | (2) Pit 7 内鉄斧出土状況 |
| PL. 56 (1) 住居跡SI 03 | (2) SI03内土壤 |
| PL. 57 (1) 土壇 SK 01 | (2) 出土遺物 |
| PL. 58 出土遺物 | |
| PL. 59 (1) 第31次調査全景 (東から) | (2) 第31次調査全景 (東から) |
| PL. 60 (1) 挖立柱建物 SB 01, 02 (南から) | (2) SD 01, 03 (東から) |
| PL. 61 (1) 挖立柱建物 SB 02 (東から) | (2) 挖立柱建物 SB 03 (東から) |
| PL. 62 (1) 住居跡 SI 01 (東から) | (2) SI 01かまどの状態 |
| PL. 63 (1) かまどの状態 | (2) かまどの状態 |
| (3) かまどの支脚 | (4) 砥石の出土状況 |
| PL. 64 (1) SI 01内土壤及び工作台 | (2) 土壇 SK 01 (北から) |
| PL. 65 SI 01出土遺物 | |
| PL. 66 出土遺物 | |
| PL. 67 (1) 第33次調査全景 | (2) 造構東側 |
| PL. 68 (1) 住居跡 SI 02 (東から) | (2) 住居跡 SI 01 (南から) |
| PL. 69 (1) SI 01内土壤 | (2) 遺物出土状況 |
| PL. 70 (1) 遺物出土状況 | (2) (1)に同じ |
| (3) (1)に同じ | (4) (1)に同じ |
| PL. 71 (1) かまどの状態 | (2) かまどの土層状態 |
| (3) 北壁の土層状態 | (4) 北壁の上層状態 |
| PL. 72 (1) 造構西半分 (北から) | (2) 造構西半分 (東から) |
| PL. 73 (1) 西側段落ち状況 | (2) 上壇SK 01, 02, 03 (西から) |
| PL. 74 (1) 土壇 SK 01, 02 (西から) | (2) SK02 内 鑿出土状況 |

- | | |
|------------------------------|-----------------------|
| PL. 75 (1) 土壌 SK 03 (西から) | (2) 土壌 SK 04 (東から) |
| PL. 76 SI01出土遺物 | |
| PL. 77 出土遺物 | |
| PL. 78 (1) 第34次調査現況 (西から) | (2) 遺構全景 (東から) |
| PL. 79 (1) 遺構東側 (南から) | (2) 遺構西側 (南から) |
| PL. 80 (1) 住居跡 SI01 (東から) | (2) 堀立柱建物 SB 01 (南から) |
| PL. 81 (1) 堀立柱建物 SB 02 (東から) | (2) 堀立柱建物 SB 03 (北から) |
| PL. 82 (1) 堀立柱建物 SB 04 (東から) | (2) 出土遺物 |

表 目 次

表1 有田・小田部発掘調査一覧表	11
表2 SB01計測表	24
表3 SB02計測表	24
表4 SB03計測表	26
表5 SB01計測表	58
表6 SB01計測表	110
表7 SB02計測表	113
表8 SB03計測表	113
表9 玉類計測表	118
表10 SB01計測表	127
表11 SB02計測表	143
表12 SB03計測表	143
表13 SB04計測表	143
表14 SB04計測表	143
表15 第29次SB01計測表	144

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市西区有田・小田部所在の有田遺跡は、古くは昭和41年～43年の区画整理に伴い、九州大学考古学研究室によって発掘調査が実施されている。その後、著しい開発の波を受け、純粹たる畑作地域だった有田・小田部の風景は既に無く、住宅地としては一等地の様相を呈している。福岡市教育委員会は、そうした小規模開発から遺跡の消滅を防ぐため昭和50年度より国庫補助を得て記録保存に努めている。又、調査担当の文化課は、関係各課と協議を重ね、昭和50年には、「建築確認申請」や「埋蔵文化財事前調査願」等の書類審査をも設け、遺跡が組織的にかつ、粗漏なく調査できるよう体制作りを行っている。

さて今回、有田・小田部地区において、住宅建設等の「建築確認申請」或いは「埋蔵文化財事前調査願」の審査によって検出した遺跡の内、特に緊急性のあるものについて、福岡市教育委員会が国庫補助を得て、昭和55年～56年度事業として発掘調査を実施した。昭和55年度の発掘調査は第33次～第41次迄の9カ所で、以下に示すとおりである。尚、報告書については昭和52～53年度事業の第7～8次、昭和54年度事業の第28～29次、第31次、昭和55年度事業の第33～34次、迄の計7カ所を報告する。

昭和52～53年度発掘調査地

4 第7次 福岡市西区有田1丁目8-10	面積573m ²	申請者	野田 耕造
5 第8次 福岡市西区有田1丁目13-12	面積115m ²	申請者	川島 武志

昭和54年度発掘調査地（有田・小田部第1集参照）

9 第28次 福岡市西区有田1丁目20-2	面積280m ²	申請者	本山 信義
10 第29次 福岡市西区有田1丁目133-2	面積280m ²	申請者	真子 游
12 第31次 福岡市西区有田1丁目34-2	面積580m ²	申請者	坂口 好春

昭和55年度発掘調査地

1 第33次 福岡市西区小田部1丁目230-231	面積491m ²	申請者	吉田 純一
2 第34次 福岡市西区小田部1丁目157	面積612m ²	申請者	渡 公代
3 第35次 福岡市西区小田部5丁目150	面積843m ²	申請者	金子 亮二
4 第36次 福岡市西区小田部5丁目143	面積247m ²	申請者	井上 悟
5 第37次 福岡市西区小田部1丁目237-3	面積347m ²	申請者	占館 雄
6 第38次 福岡市西区小田部198	面積430m ²	申請者	日野 佳弘
7 第39次 福岡市西区有田1丁目37-7	面積523m ²	申請者	松井 長雄
8 第40次 福岡市西区有田1丁目26-2	面積376m ²	申請者	坂口 崇一

9 第41次 福岡市西区小田部3丁目307

面積325m² 申請者 増田 吉久

2. 発掘調査の組織

<第7、8次調査>

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当 福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係

発掘担当 井沢洋一 四武勝利（事務）

調査協力者 <発掘に際して>

野田耕造、川島武士（地主）、松尾 修、今泉雄二、中富一夫、藤野栄一、山内正美、吉田富美子（以上福岡大学）、入江誠剛（西南大学）、富田逸郎（東京教育大学）、持田 久、山下一郎、撫養吉則、坂田美土里、小沢正子、小林ツチエ、小林アキエ、松尾スミ、下田モト、松井フユ子、山本キクノ、和玉八重子、松尾キミ子、坂口フミ子、松尾ヒサヨ、松尾鈴子、清原ユリ子、野田洋子、野田克子

<資料整理に際して>

宮島成昭、児玉健一郎、松尾正直、藤たかえ、花田早苗、原 秋代

<第28次～第31次調査>

ー有田・小田部第1集参照ー

<第33次～第41次調査>

調査主体 福岡市教育委員会

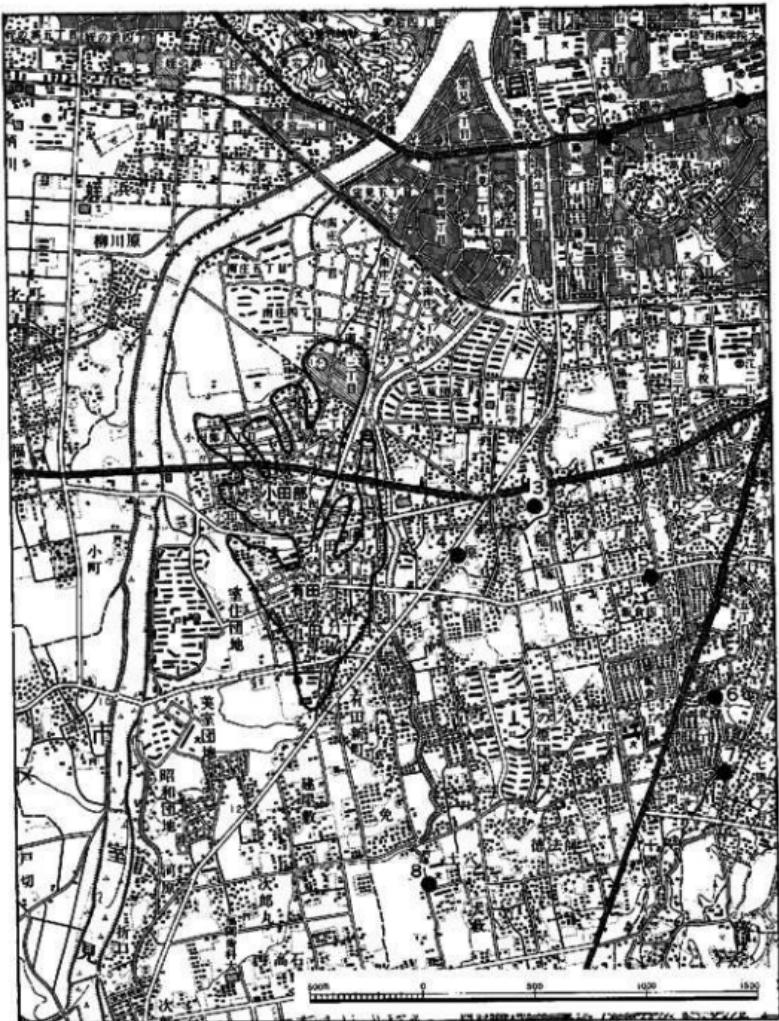
調査担当 福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財2係

発掘担当 井沢洋一、山崎龍雄、岡島洋一（事務）

調査協力者 <発掘調査に際して> 松尾和雄、岩城庄助、高浜謙一、西原俊一、阿部典広、池野尚昭、池田健一、田代定行、川口清吾、麻生達也、渡辺武子、野村美砂恵、松尾圭子、内尾トミ子、佐々木光子、北原君代、松井フユコ、清原ユリ子、佐藤テル子、金子山理子、坂口フミ子、和玉八重子、岩谷ふたみ、真子昌子、井上照野、西尾たつよ、松尾スミ（以上地元の方々）児玉健一郎、池田孝弘、山口勝己、安達昌利、松尾正直、前田治郎、安部宏（以上西南大学歴史探究会）、安岡洋二、堺裕明（以上西南大学郷土史研究会）永目尚子、鳥越のり子、古莊千栄子（以上熊本大学考古学研究室）

<資料整理に際して> 宮嶋成昭、児玉健一郎、池田孝弘、花田早苗、原秋代、上原一重、竹嶋多賀子、岩本京子、五島恵美子、堀内郁子、山中かおり、鶴丸直美、青柳米子、平井彩子、佐藤玲子

以上の他、発掘調査、資料整理期間中、土地所有の方々、或いは多くの地元の方から、多大な援助をいただいた。これらの方々に末筆ながら、深くお礼申し上げる次第です。



1. 西新町遺跡 2. 藤崎遺跡 3. 原小園遺跡 4. 原談儀遺跡 5. 飯合遺跡
 6. 飯合原遺跡 7. 千歳遺跡 8. 鶴町遺跡

Fig. 1 有田・小田部周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)

第Ⅱ章 遺跡の立地と概要

立 地 福岡市西区有田・小田部の位置する台地は、室見川の開析によって形成された早良平野のほぼ真中に位置し、長軸を南北方向に向けた標高15m前後を示す独立中位段丘である。台地の形成は、洪積世に位置づけられ、八女粘土、鳥柄、新期ロームの層位をなしている。旧地形は、有田1～2丁目を最高所にして標高約16mを測り、周辺の水田面との比高差は10m前後を測る。現在の比高差は5m～7mで、沖積化の著しさを示している。この丘陵は南北の長さ約1km、最大幅0.7kmを測り、北へ緩やかに傾斜している。台地の東側には金剛川が、台地の西には室見川が流下しているところから、台地の縁辺は浸蝕を受け、小断崖を形成している。また、台地内に深く切り込んだ比較的浅く、緩やかな谷も幾つか存在し、これらの谷が、北方向から切り込むことによって、台地はハッピ手状に分岐する。有田・小田部両地区共に昭和40年代の初めに区画整理事業によって著しい現状変更が行われている。

概 要 昭和55年度は前年度に引きつづいて発掘調査に重点を置いた。又、従来、試掘調査は本調査とは別に事前審査班が実施していたが、試掘調査結果が本調査に生かされることが少なかったため、本年度からは本調査と併せて担当することになった。発掘調査対象件数は前年度の繰り越し分の9件を含めて、計24件で、この内、特に緊急を要する9件について発掘調査を実施した。対象面積は4,194m²である。昭和55年度の試掘調査は計22件で、埋蔵文化財の存在を確認した12件の内、年度内に発掘調査を終了したのは3件である。

発掘調査は5月20日～11月19日迄実施した。調査は小規模開発が対象のため、同時に複数件を併行して行ない、期間と調査費用の省力化を計ったが夏季の長雨のため予想以上に調査が遅滞した。検出した遺構は弥生時代から17C代に至る時期である。第33次調査は古墳時代後期～中世の時期で、標高4～5m前後の低斜面に遺構が存在することを確認した。特に製鉄跡と思われる土壤は有田遺跡の製鉄跡を考える意味で重要である。第34次調査では掘立柱建物5棟を検出したが、南側の第4次調査の建物群が北に拡がることを示している。第35次調査は時期不詳の櫛跡と中期後半の墓塚を検出した。東側隣地の試掘調査では前期墓塚を検出しており、この墓塚群が前期後半に始まる事を示している。又、第36次調査は4C～5C代の住居跡を10軒検出しており、土器のセット関係、及び住居跡の変遷を理解することが可能である。第37次調査では台地推定線外に遺構が存在すること、又、谷内の水田化が18C代に遡る可能性を示している。第38次調査は第12次調査の南側の段落ち部分で、弥生時代～中世の多数の柱穴と土壤を検出した。掘立柱建物群の存在が考えられる。第39次調査では、14C～15C初頭の濠状遺構が東西に設けられている。この地点は台地のくびれ部分であるため、丘尾切断した中世城館に伴う濠の可能性が強い。第40次調査は15～16C代の溝状遺構を2条検出した。S D01は南北から東西方向への溝である。この地域は旧字名「宮城」と称しており、S D01は建物群を巡る溝の可能性が充分にある。以上の調査結果については更に検討を加え、漸次詳しく報告したい。

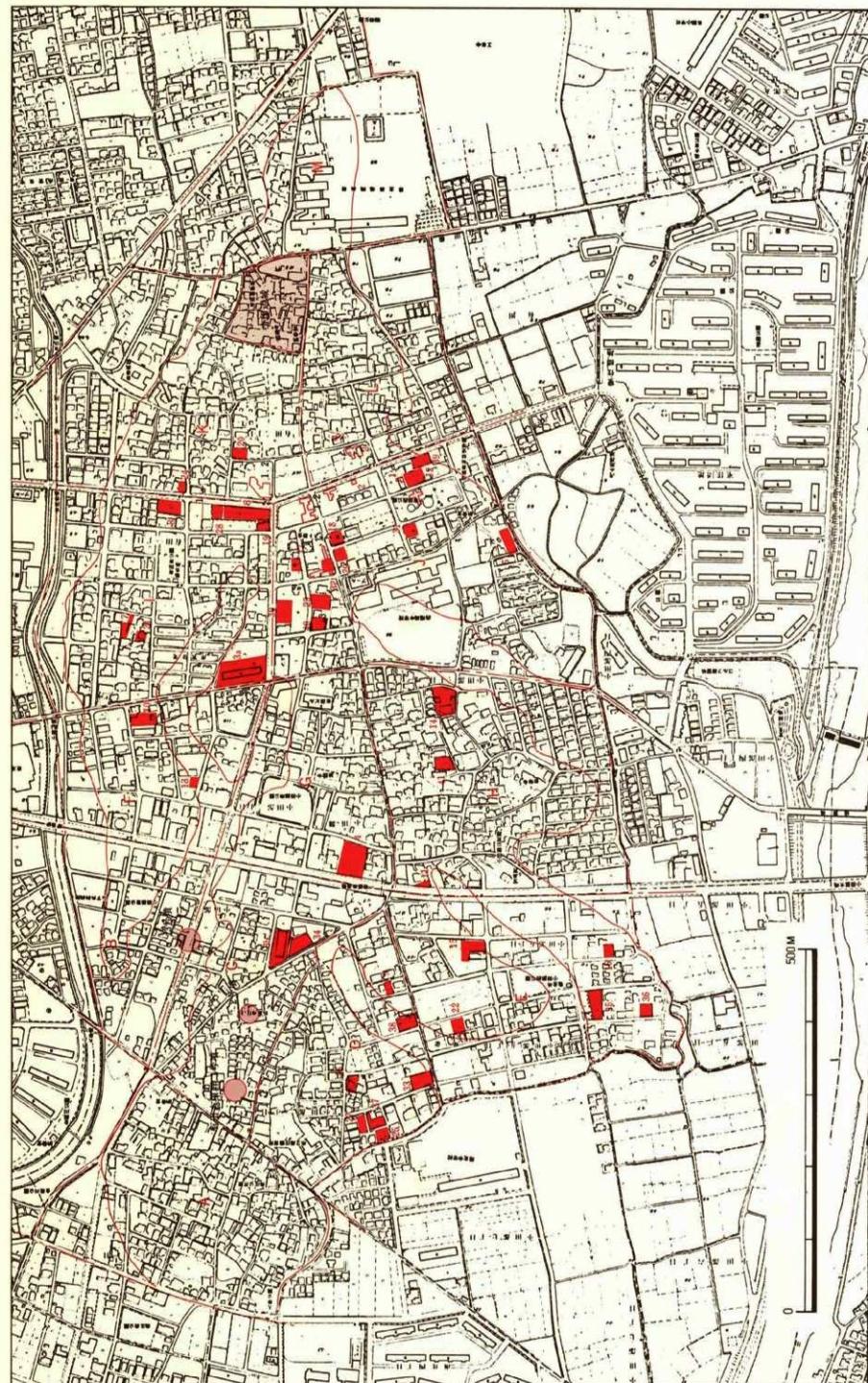


Fig. 2 小田原台地と狛橋原野地 (1/5,000) 紅色で示すは大体を表わす。

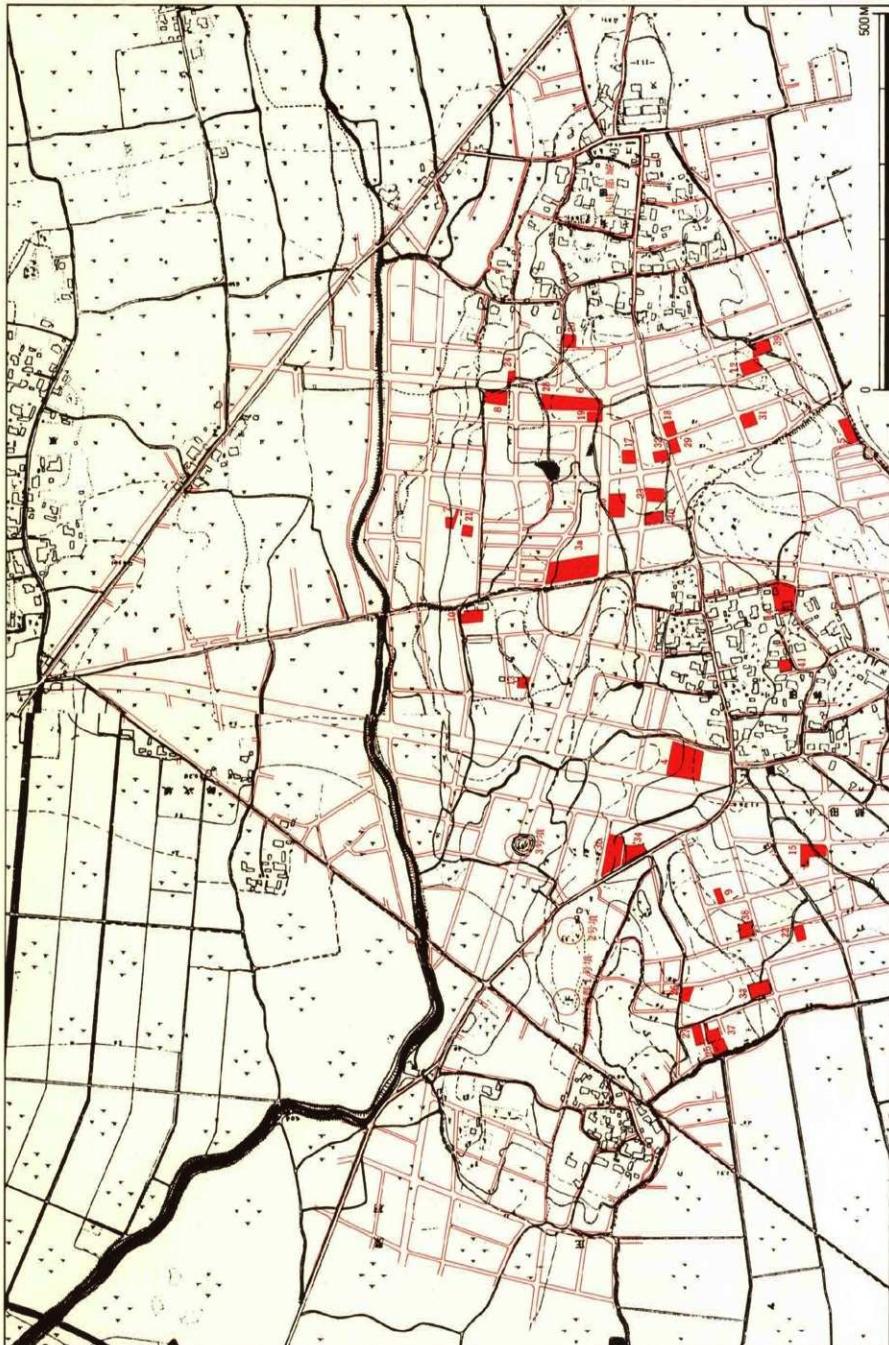


図3 有田・小田原地の地形図(1/5,000) ■赤枠は測量点を表わす。

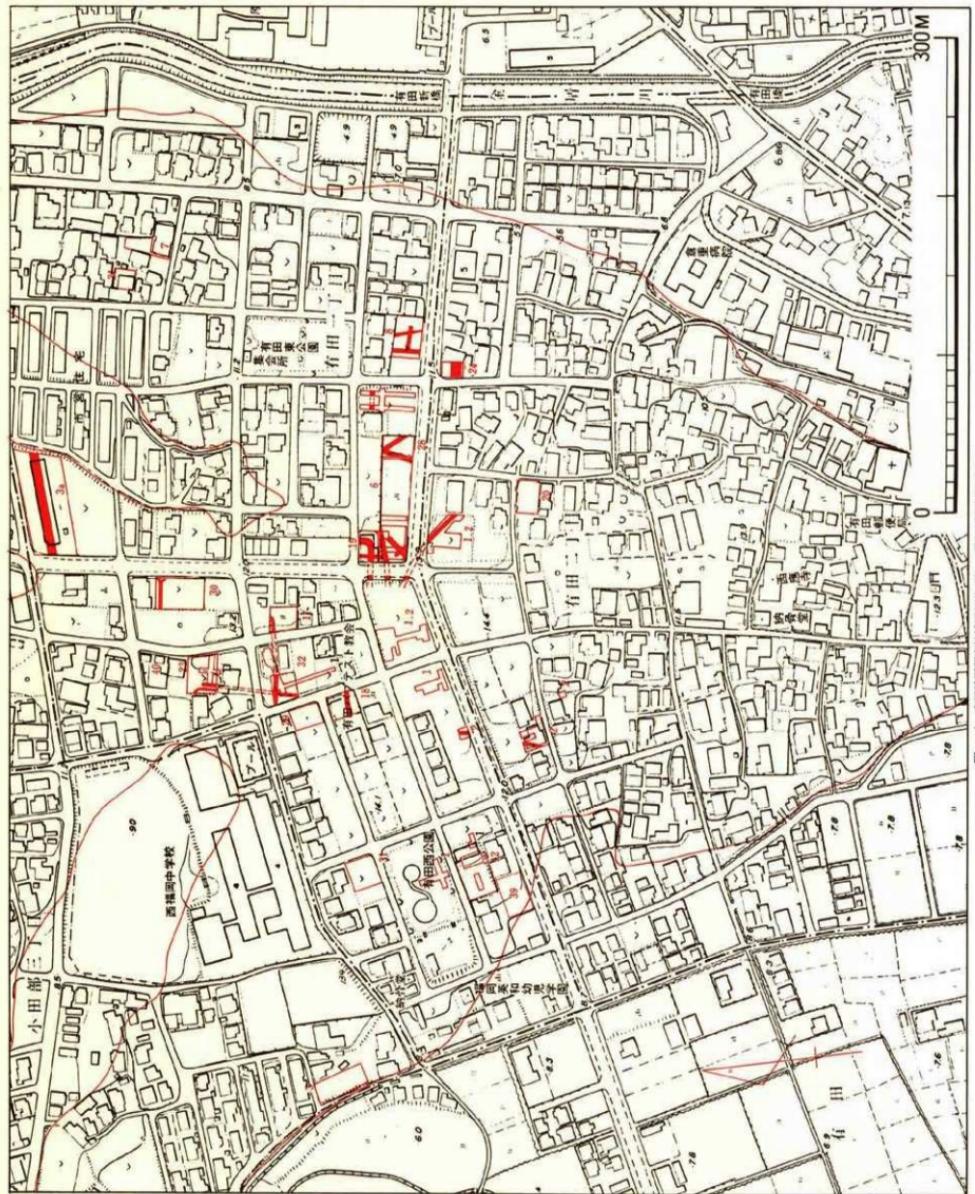


Fig. 4 有田地区周辺地図(1/2,500 緑野庄周辺地図参考)

調査次数	地点名	高さ(地盤)	測定面積	測定期間	備考	
第1次		8ヶ所	500m ²	42年2月20日～3月11日	後生時代初期下層1、古墳時代中期住居跡2、後世住居跡1、古墳時代中期2。	
+ 2 +		7ヶ所	900m ²	43年2月20日～3月11日	古墳時代中期1、古墳時代中期2。	
+ 3a +	c-d-1	西区小山町1丁目427 439-1, 499-2	1,082m ²	50年12月8日～2月10日	古墳時代中期住居跡1、古墳時代中期2、古墳時代中期3、古墳時代中期4、古墳時代中期5、古墳時代中期6。	
+ 3b +	I-a-1	有田1丁目23-1	1,486m ²	51年2月16日～6月16日	後生時代初期住居跡1、中期住居跡4、井戸2、後期住居跡1、古墳時代住居跡8、古墳時代中期1、平安時代1。	
+ 4 +	G-a-1	小山町2丁目139	1,691m ²	52年6月9日～8月19日	古墳時代以降の獨立住居跡10堆、製鉄炉跡。	
+ 5 +	J-c-1	+	704	900m ²	6月20日～11月23日	
+ 6 +	I-u-1	有田1丁目20-3	1,288m ²	8月18日～10月20日	後生時代中期2、古墳時代住居跡2、廻避1器出土、中世城1、古墳時代中期跡。	
+ 7 +	I-v-1	+	8-10	573m ²	53年3月8日～4月20日	
+ 8 +	I-d-1	+	13-12	191m ²	3月17日～5月15日	
+ 9 +	D-i-1	小山町1丁目174-2	211m ²	5月29日～6月9日 6月15日～6月30日	後生時代住居跡2、土塹1	
+ 10 +	F-g-1	+	2丁目57	436m ²	5月30日～6月14日	
+ 11 +	H-d-1	+	168-3-4	186m ²	5月27日～6月2日	
+ 12 +	J-g-1	有田1丁目37-11	360m ²	6月6日～6月29日	後生時代中期1、古墳時代中期物1、溝2、墓2、馬頭1	
+ 13 +	F-d-1	小山町2丁目73-2	152m ²	7月17日～7月24日		
+ 14 +	H-j-1	+	3丁目261-2	539m ²	8月2日～8月21日	
+ 15 +	E-p-1	+	5丁目54-11	276m ²	8月29日～10月2日	
+ 16 +	I-n-1	+	3丁目312	107m ²	古墳時代中期5、廻避1	
+ 17 +	J-p-1	有田1丁目20-9	136m ²	54年3月9日～3月20日	中世城1	
+ 18 +	J-n-1	+	32-1	248m ²	4月16日～21日22日	
+ 19 +	I-u-2	+	24-4	250m ²	6月16日～7月8日	
+ 20 +	K-e-1	+	2丁目14-20	250m ²	6月3日	
+ 21 +	I-d-2	+	13-16	442m ²	7月13日～7月18日	
+ 22 +	E-j-1	小山町5丁目25	385m ²	7月13日～7月26日	獨立住居跡12。	
+ 23 +	J-g-1	有田1丁目27-2	485m ²	7月27日～8月23日	中世城2。	
+ 24 +	K-e-1	+	2丁目10-7	143m ²	8月3日～9月10日	
+ 25 +	D-s-1	小山町5丁目237-1	298m ²	8月8日～8月11日	中世城独立住居跡4。	
+ 26 +	D-u-1	+	219	245m ²	8月23日～9月10日	
+ 27 +	D-s-2	+	241	244m ²	9月10日～9月17日	
+ 28 +	I-u-3	有田1丁目20-2	179m ²	9月14日～10月2日	後生時代中期Ⅳ李成1、中世城1、道路路2。	
+ 29 +	J-e-1	+	33-2	280m ²	10月5日～11月12日	古墳時代住居跡3、奈良時代中期住居跡1。
+ 30 +	J-k-1	小山町3丁目268	586m ²	10月16日～12月3日	後生時代中期1、中世城独立住居跡2、火葬場1。	
+ 31 +	J-h-1	有田1丁目34-2	580m ²	11月12日～12月1日	古墳時代住居跡1、廻避1件遺物2。	
+ 32 +	J-o-1	+	29-9	237m ²	55年12月14日～2月10日 2月16日～3月17日	
+ 33 +	小山町1丁目230-231	491m ²	5月20日～6月7日	古墳時代中期2、獨立住居跡2、製鐵炉跡2。		
+ 34 +	+	157	612m ²	6月9日～6月19日	古墳時代住居跡1、獨立住居跡4。	
+ 35 +	+	5丁目150	843m ²	6月19日～11月7日	古墳時代初期～後期住居跡10、後生時代初期住居跡1、中世城2、中世城3、獨立住居跡1、土塁4。	
+ 36 +	+	26-2	247m ²	6月23日～7月23日	後生時代中期後半～太秦朝倉2、中世城2、中世城3。	
+ 37 +	+	1丁目237-3	347m ²	7月24日～8月30日	獨立住居跡。	
+ 38 +	+	198	430m ²	8月5日～8月19日	中世城2。	
+ 39 +	+	有田1丁目37-7	527m ²	9月26日～10月29日	中世城～山世 廃文及遺物10件數 土塁2。	
+ 40 +	+	26-2	376m ²	10月2日～10月31日	中世城2、獨立住居跡、土塁2。	
+ 41 +	+	小山町3丁目307	325m ²	11月4日～11月19日	中世城3、中世城4。	

表 1. 有田・小山町発掘調査一覧表

第Ⅲ章 調査報告

1. 第7次調査

調査の概要

調査対象地は、福岡市西区有田1丁目8-10に所在する。発掘対象面積は573m²である。当該地は、標高15m前後を測る台地の最高所より東側の緩斜面に位置している。当該地の西側は道路を挟んで第1、第2次調査が実施されており、当該地も遺跡の存在が予想されるところであった。昭和52年秋に事前審査にて有田周辺を巡回中に地下作業が行なわれているのを知り、ただちに工事の中止を要請し、発掘調査を行う旨、土地所有者、売買契約者との協議を行なった。

発掘調査は昭和52年度の継続事業として昭和53年3月8日～4月20日迄実施した。当該地は標高11.50mを測る畠地であったが、前述のとおり既に50～60cmに及ぶ地表面の削平を受けていた。そのため、道路付近での擾乱及び遺構の削平は著しいものであった。遺構面での標高は10.80mを測る。西側隣接地との比高差1.2m、第1、2次調査地点との比高差3.5mを測る。当初、当該地が後世の削平のため遺跡が著しく破壊されているのではないかと考えられた。しかし、擾乱土の排除、遺構面の精査によって、思いの外、遺構の残存状態は良好であり、多くの遺構を検出した。

遺構はローム層上に検出され、弥生時代の溝1条、中世の溝2条、時期不詳の溝状遺構4条、掘立柱建物3棟、中世の上塙2を検出した。

検出遺構

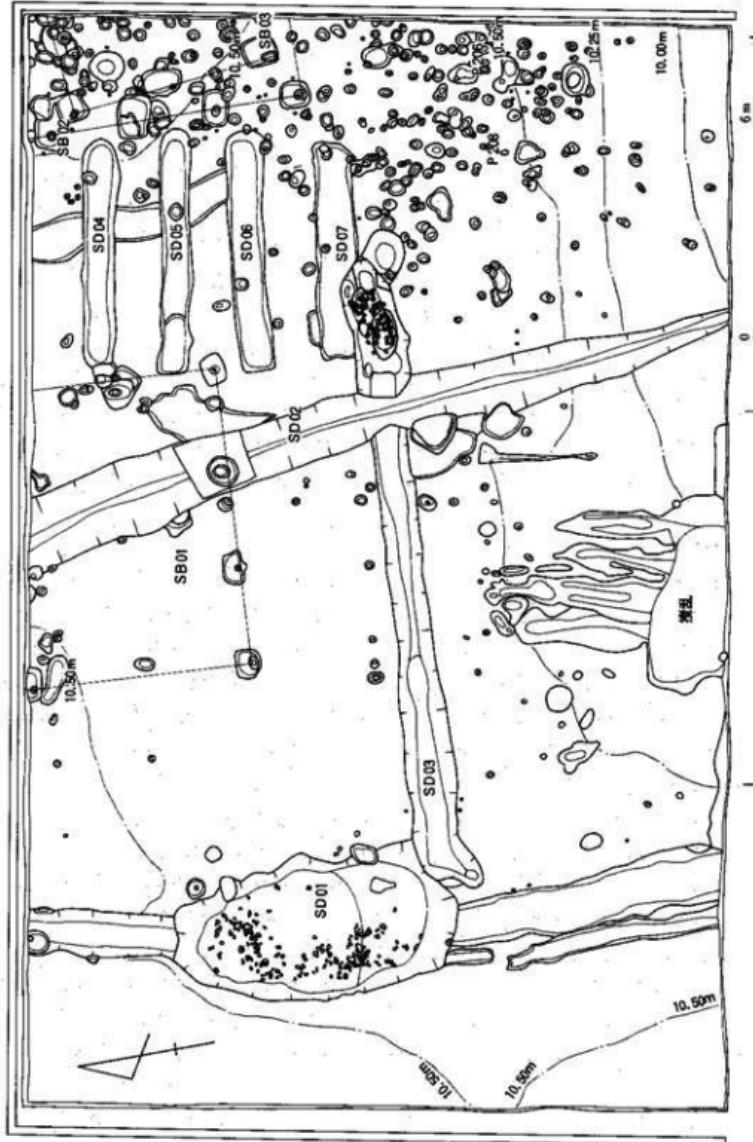
溝(SD)

弥生時代に属するもの1条、中世に属するもの2条、時期不詳4条である。いずれも著しい削平を受けているため、本来の深さを示すものではない。溝SD01、SD03はT字形に接し、方形区画された内部に掘立柱建物SB01を配する。このことからSD01、SD03、SB01は、同一時期の遺構と考えられる。



Fig. 5 第7次調査地位図

Fig.6. 通構配置図 (1/150)



SD 01 (Fig 7, PL 5 ~ 8)

主軸を南北方向に置き、現存長18.4m、現存幅は最狭部分1m、最大部分で2.30m、現存の深さは北側で5cm～8cm、南側で30cmを残している。溝の中間には幅広く横円形を呈した水溜り状の造構を形成する。この水溜り状造構は長さ7.5m、幅4m、深さ40cmを測り、断面レンズ状を呈する。土層は黒褐色粘質土を主体として、褐色土や八女粘土のブロックが混入するもので、埋め込まれた状態を示している。又、溝は、この水溜り状造構の南側から2条に分岐し、溝底は疊水の流れた跡の状態を示し、凹凸が著しい。溝の北端は削平のため、8cm程の深さしか残していないが、削平以前は約60cmの深さがあり、断面U字形をなしている。底は不整である。この溝には遺物を多く含んでおり、特に水溜り状造構には多くの礫と共に遺物が多く含まれていた。礫及び遺物は西に偏し、その多くが底面より浮いた状態で出土した。礫は10～20cmの花崗岩の転石が最も多く、他に、綠泥岩、粘板岩質、安山岩質の角礫、砂岩の割石などを含んでいる。遺物には、土師皿、杯、須恵器片、瓦質土器、土師質土器、瓦片、青磁碗、壺、白磁などが多く出土している。

SD 02 (Fig 8, PL 9.10)

主軸を南北方向にとった断面V字形をなす溝である。溝の中央でSD 03に切られている。溝の南側は削平が著しく、溝幅、深さ共に旧形をとどめていない。現存長19.4m、現存幅1.66m、深さ1m前後を測る。溝底は南方向に緩く傾斜する。遺物は、弥生時代前期末の土器片を上層から下層迄まんべんなく含まれるが、上層には板付I式の變片なども含まれる。中層、下層には壺の完形品も含まれており、全て板付II式時期の遺物である。出土遺物は變形土器、壺形土器、土鏡4コ、磨製石斧2、磨製石錐1、砥石2、などである。

SD 03 (Fig 9, PL 11～13)

主軸を東西方向に置いた、断面U字形を呈す溝である。溝の現存長は17m、幅約90～130cm、深さは東側で50cm、中央で35cm、西側で40cmを測る。この溝は中央部分が幅も狭く、しかも溝底は東、西の先端部に比べて、約15cm高くなっている。東側の先端では袋部を形成し、溝底には径20cm前後の花崗岩礫が散きつめられており、この部分の溝底は凸凹に荒れている。西側先端部分も同様に袋部を形成するが、南側に突き出しており、水の流入口の状態を示す。特にその部分の底は荒れ、水の流れのあったことを示している。溝の土層は3ヶ所に於いて若干の相違があるが、総じて同様な状況を示している。第1層、黒褐色粘質土（八女粘土、褐色土のブロックが多く混入）、第2層、黒褐色粘質土（褐色土のブロックが多く混入）、第3層、黒褐色粘質土、（褐色土の大ブロックが多く混入）、第4層、黒褐色粘土、もしくは黒色粘土に褐色土が少し混入する層、第5層、この層は西側部分にみられる。暗褐色粘質土、（淡黒色土ブロックを混入）、第6層、黒褐色粘土、もしくは黒色粘土（暗褐色土を混入）。以上、層位を観察する

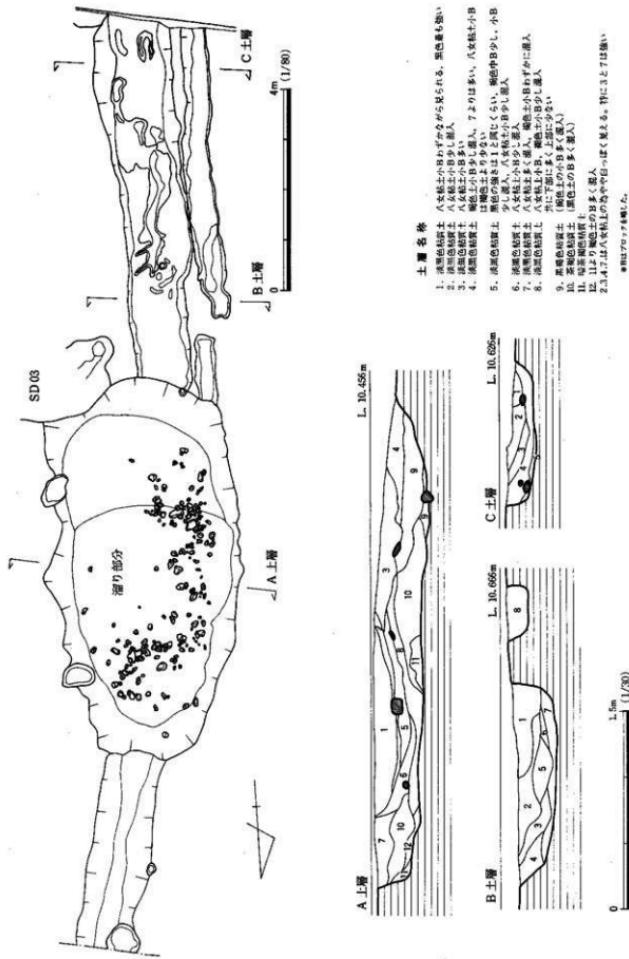


Fig. 7 SD01 鉆 (1/80) (1/30)

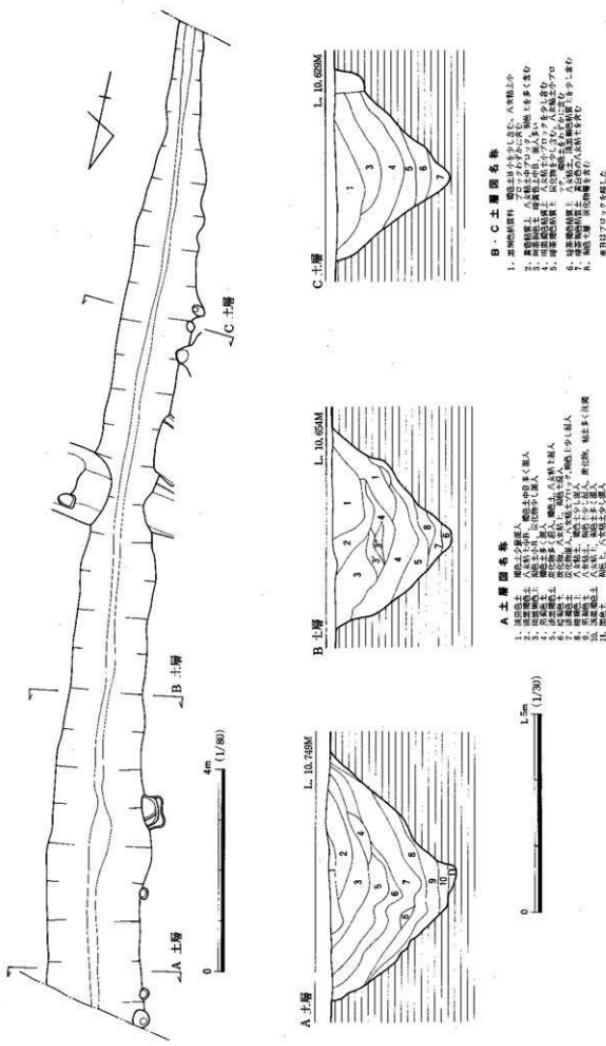


FIG. 8 SD02 Δ (1/80) + Δ (1/30)

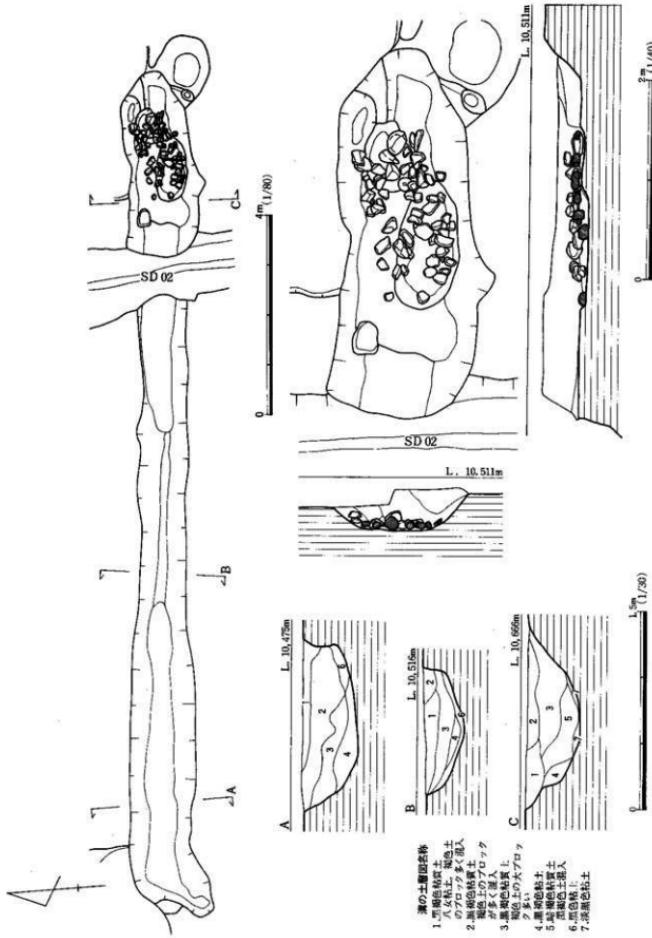


Fig. 9 SD 03 滝 (1/80)

と第1層～第3層迄は黒褐色粘質土に、八女粘土、褐色土のブロックが多く混入するなど、投げ込まれた状態を示す。しかし、第4、第6層は、いずれも粘土の堆積層であることからこの溝がある程度の流水、もしくは、水量を保っていたことが考えられる。雨落ち溝的な要素をもったものであろうか。この先端はSD01の池状構造と切り合っている。しかし、この切合関係は覆土に於いて明確では無く、同一時期に存在したものと考えられる。出土遺物は土師器一杯、皿、瓦質土器一鉢、擂鉢、土師質土器一鍋、鉢、磁器、磁石などを検出された。

SD04～07 (Fig. 10, PL15, 16)

溝状の遺構として報告する。いずれも同一の形態を示し、土軸を東西方向にとり、等間隔に並んでいるので、溝以外の機能が考えられるかもしれない。いずれも溝底は、明瞭ではなく、黒色土、明褐色土が混入し荒れている。

SD04 断面はU字形をなす。全長5.9m、幅80～100cm、深さ25cm前後を測る。覆土は第1層、淡黒褐色粘質土（八女粘土の小ブロック少し混入）、第2層、淡黒褐色土。（褐色土のブロックが多い）である。

SD05 断面U字形をなす。全長6.5m、幅80cm、深さ27cm前後を測る。覆土は第1層、淡黒褐色粘質土（褐色土混入）、第2層、淡黒褐色土（褐色土のブロックが少し混入）、第3層、淡黒褐色粘質土（褐色土のブロックが多い）である。

SD06 断面U字形をなす。全長6.4m、幅90cm、深さ35cm前後を測る。覆土は、第1層、淡黒褐色粘質土（八女粘土ブロック、及び褐色土のブロックが少し混入）、第2層、淡黒褐色粘質土（褐色土のブロックが多く混入）である。

SD07 断面U字形をなす。全長5.7m、幅約100cm、深さ約20cmを測る。覆土は第1層、淡黒褐色粘質土（褐色土の小ブロックが多く混入）、第2層、淡黒褐色粘質土（八女粘土のブロックが少し混入）である。

以上のように、SD04～07は覆土、形態共に共通しており、同一時期の形成と考えられる。又、土層には粘土の堆積は無く、又、溝底の不整さは溝として機能したことは考えがたい。弥生時代～古墳時代の遺物を含んでいるが、いずれも破片である。

掘立柱建物 (SB)

SB01 (Fig. 11, PL. 14)

SD02を切って作られた掘立柱建物である。SD01とSD02によってL字形に開まれた内側に存在する。調査区の境界にある為、全容は明らかではないが、現存では、梁行2間？×桁行3間の建物である。建物が更に北へ延びて、南北方向に設けられた建物の可能性もある。柱穴は掘方径80～90cm、深さ20～30cm、柱根径約20cm、深さ45cmを測る。柱間は梁行5.91m、梁間平均2.93m、桁行7.92m、桁間平均2.64mを測る。柱穴掘方の覆土は淡黒褐色粘質土に、褐色土のブロック、及び八女粘土の小ブロックを少し含んだ土である。遺物は、いずれも土師器、

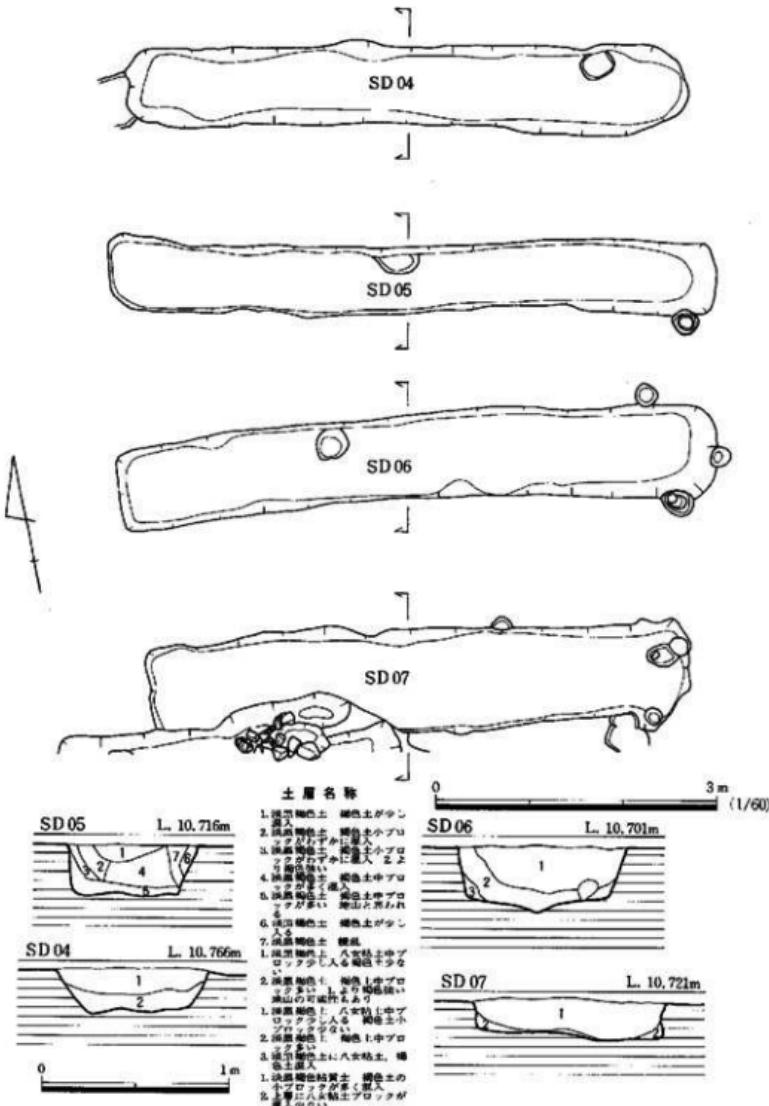


Fig. 19 摄 SD04~07 (1/60), (1/30)

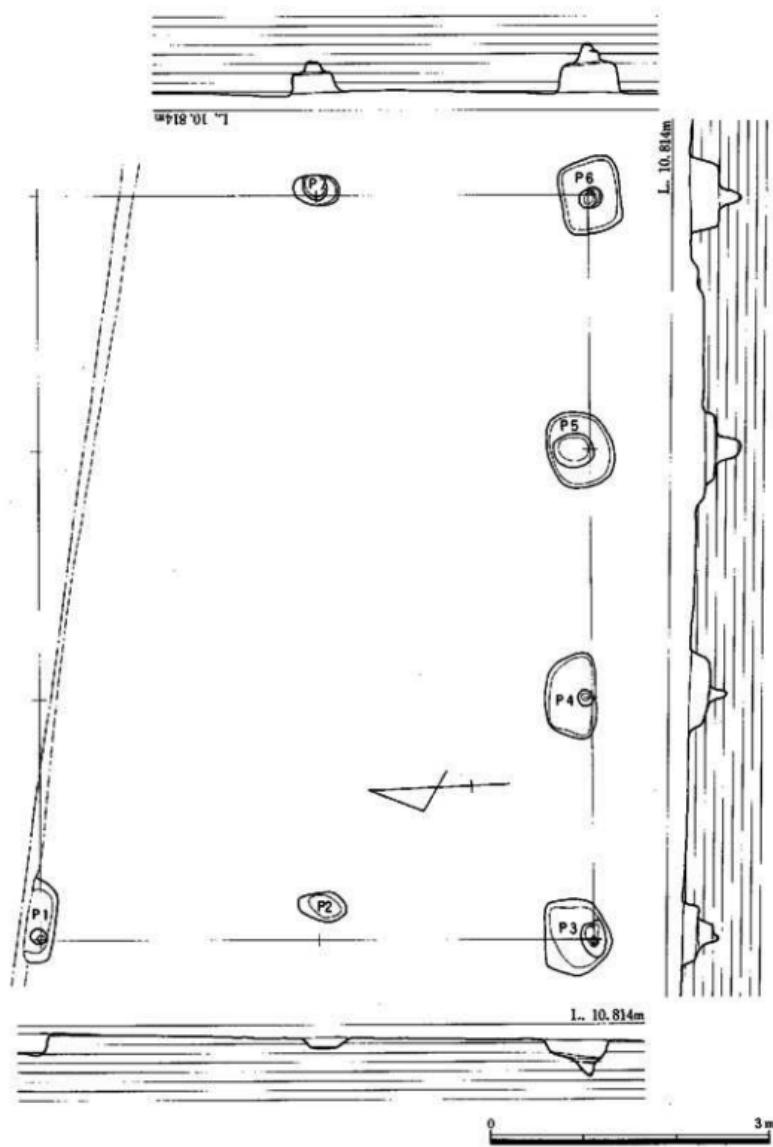


Fig.11 柱立柱建物 SB 01 (1/60)

須恵器等の細片を検出したが時期決定の手掛りとなるものではない。主軸方位はN 87° 30' Wに置いている。

単位: cm

	梁間	梁行間	桁行	桁間	桁行間	P	深さ	長径	短径
P1, P2	299	591	P3, P4	256		1	25	118	32?
P2, P3	292		P4, P5	264	792	2	12	70	42
P6, P7	289		P5, P6	272		3	32	108	94
						4	30	122	72
						5	38	110	92
						6	44	106	88
						7	35	62	48
平均	293		平均	264		平均	30.8	99.4	72.6

表2. SB01計測表

SB 02 (Fig. 12, PL. 15)

調査区の北東隅で検出されたもので、SB 03と切合う。主軸をほぼ磁北方向に置いた梁行2間×桁行2間の建物だが、調査区境に位置するため全容は明らかではない。建物が更に北へ延びる可能性を含んでいる。柱穴掘方径80~120cm、幅70cm、深さ20~35cm、柱根径20~25cm、深さ35~47cmを測る。柱間は桁行6.81m、桁間平均2.29mを測る。柱穴の覆土は淡黒褐色粘質土に褐色土、及び八女粘土の小ブロックを少し含んだ土である。遺物はやはり細片であり、時期決定できるものは出土しなかった。尚、SB 01とは約6mを隔てて同一方向に並んでおり、SB 01が磁北よりも2°東へ主軸を振っている。

単位: cm

梁行	梁間	梁行間	桁行	桁間	桁行間	P	深さ	長径	短径
			P1, P2	236		1	43	98	80
			P2, P3	225	687	2	37	115	85
			P3, P4	226		3	51	100	65
						4	47	80	75
平均				229		平均	44.5	98.25	76.25

表3. SB02計測表

SB 03 (Fig. 12, PL. 15)

調査区の北東隅で検出された建物で、SB 02から切られており、SB 02よりも古い建物である。調査区の境界に位置しているため、SB 02と同様に建物の全容は明らかではない。東へ延びる建物の可能性がある。主軸は磁北よりも6°西へ振っている。梁行1間?×桁行2間の建物で、

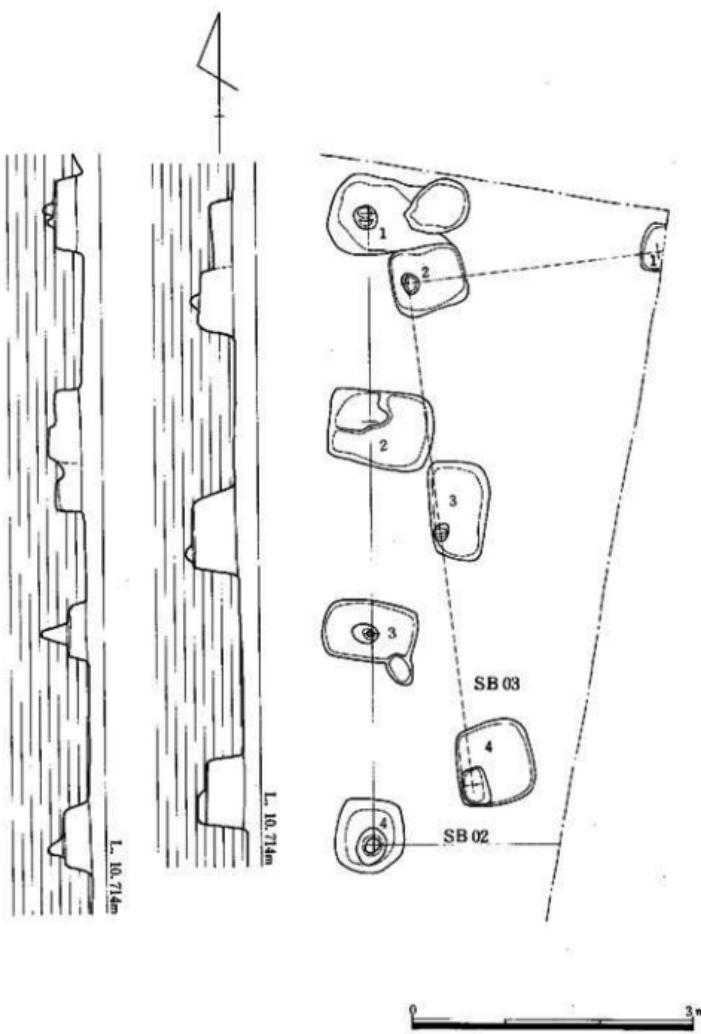


Fig. 12 据立柱建物 SB 02, 03 (1/60)

梁行 2.7m 以上、桁行 5.5m を測る。桁行柱間は平均で 2.65m を測る。梁行柱間も現存長から同様の間隔を保つと考えられる。柱穴掘方は長径 75~100cm × 短径 65~80cm、深さ約 40cm、柱根径約 25cm、深さ 46cm を測る。覆土は淡黒褐色粘質土に褐色土のブロック、或いは褐色土のブロックを含む上である。遺物は全て土器細片ばかりで建物の年代を比定できるものは出土しなかった。

単位: cm

	梁間	梁行間	桁行	桁間	桁行間	P	深さ	長径	短径
P1, P2	252?		P2, P3	268	530	1	19	25?	55
			P3, P4	262		2	49	80	70
						3	58	100	65
						4	57	80	81
			平均	265		平均	45.75	71.5	67.75

表4. SB03 計測表

3棟の建物は、いずれも主軸を磁北方向にとっており、SB03がわずかに6°西に振り、SB01、SB02と相違する他は、柱穴径、覆土に於いても然程変化はない。SB02はSB03よりも新しく、しかもSB01と主軸を同じくし、並列関係に位置している。以上のことから、3棟の建物は建物の規模、及び覆土などから短時間に構成されたもので、特にSB01とSB02は同時に存在した可能性が強いと思われる。

火葬墓

墓跡と思われる遺構は、2基検出された。いずれも調査区内の東南隅から検出された。調査区の東側は、遺構の残存状態が良好で、特に東南部は古墳時代～中世に至る迄の柱穴が多数検出されている。これらの柱穴の内、中世の時期に比定されるものは、覆土が淡黒褐色粘質土、もしくは暗茶褐色粘質土である。2基の土壙墓は、いずれも暗茶褐色粘質土で充填されており、他のPitに比較して一回り大きなPitである。

P-206 (Fig. 13, PL. 17)

平面形は不正規円形状を、断面は船底を呈したPitで、長さ80cm、幅45cm、現存の深さ25cmを測る。内部からは貨幣が6枚検出された。いずれもPitの底部東側よりに10cm前後浮いた状態で、しかも散乱した状態で出土した。木炭、焼土などは検出されなかった。貨幣の名称は以下の通りである。

1. 開元通寶
2. 大觀通寶
3. 褒聖元寶
4. 元豐通寶
5. 天祐通寶
6. 嘉祐通寶

P-208 (Fig. 13)

P-206から西に1.4m離れた位置にある。他のPitから2ヶ所切られているが、平面形は隅丸

方形状を呈する。断面は浅いU字形を呈する。長さ60cm、幅50cm、深さ25cmを測る。内部には施設陶器が埋められていたらしく、多数の壺片が検出されたが、後世の擾乱を受け、著しく破碎されていた。胴部片の幾つかは原位置をとどめていたが、底部は検出できなかった。原位置をとどめていた胴部片の状態から推測すると、底部を打欠かれたものを用い、しかもPit内部が深く迄擾乱を受けていないことを考慮すると、胴部片の大きなものを幾つか用いて施設を作ったことが考えられる。施設の大きさは40cm前後のU字形の構造であろう。施設の内部から木炭、焼土などは検出されなかった。

出土遺物

SD 01出土遺物

(Fig. 14~19, PL. 18, 19)

須恵器

杯蓋 (2) 内面にかえりをもたない蓋である。外径15.5cm、現高1.2cmを測る。天井部と体部の境は明瞭な段がつく。口縁端部は内側へ折り曲げている。

高台付杯 (1, 3) 復元径10.2~10.4cmを測る。高台は断面コの字形を呈し、低い。1の体部は高台貼付部分から立上る。

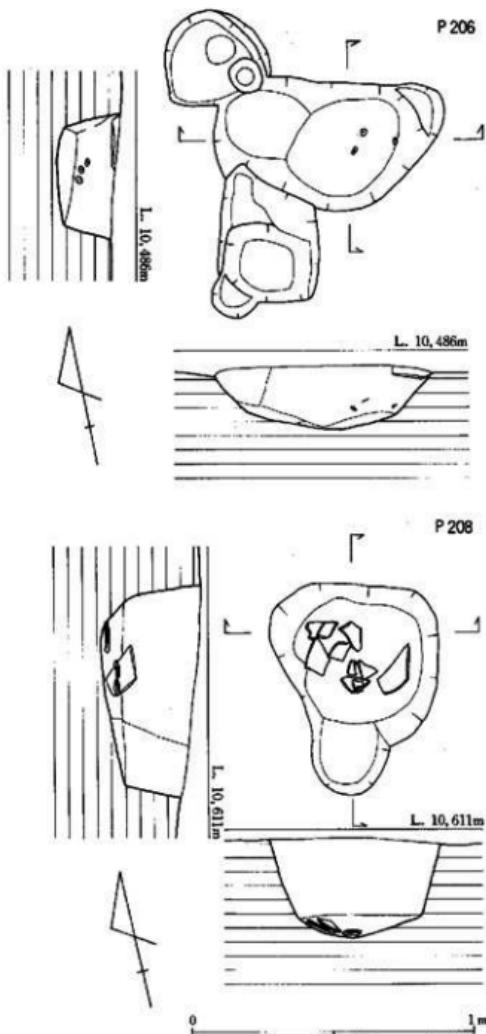


Fig. 13. (1) P 206, (2) P 208 (1/20)

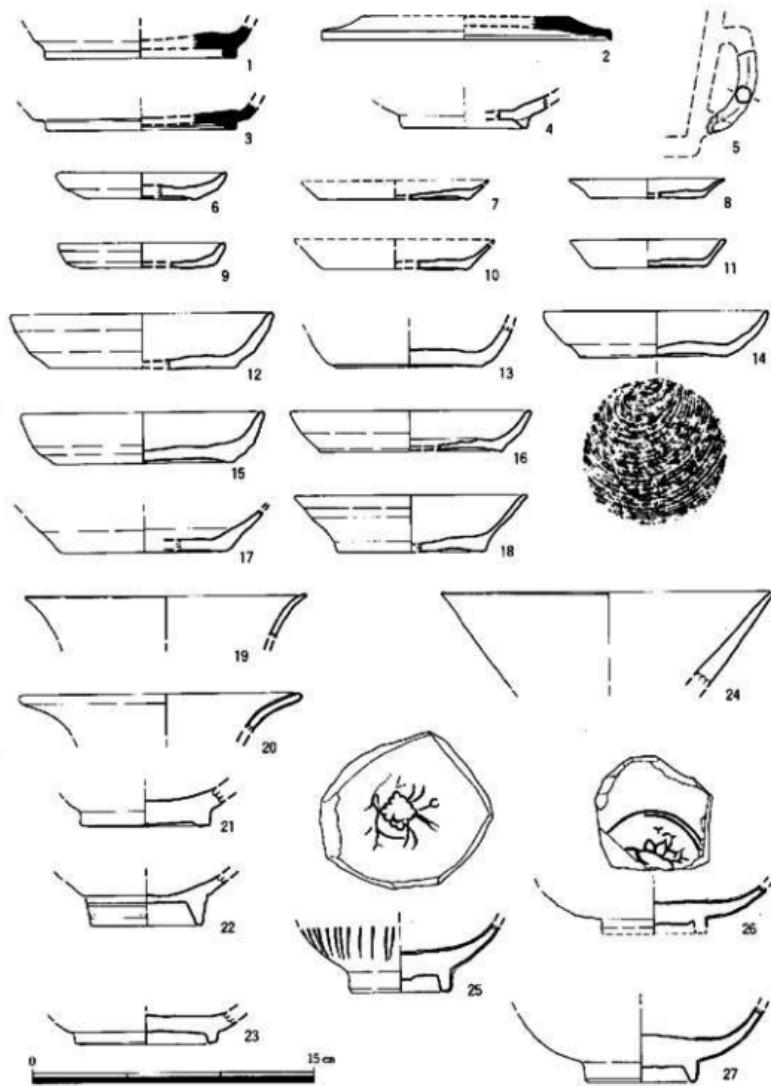


Fig. 14 SD01 山土遺物 (1/3)

把手（5） 断面円形を呈し、径7mmを測る。外面に指圧整形痕を残している。色調は灰青色を呈している。ジョッキ形土器の把手であろう。

土師器

椀（4） 黒色土器で推定高台径6.8cmを測る。断面三角形の高台を貼付けた椀で、内外黒灰色を呈する。内外摩滅している。

皿（6～11） いずれも糸切り底である。6は口径9cm、器高1.4cm、9は口径8.9cm、器高1.3cm、10は推定口径10.5cm、推定器高1.6cm、7は推定口径10.1cm、推定器高1.1cm、8は口径8.8cm、器高1.1cm、11は口径8.4cm、器高1.5cmを測る。いずれもナデ調整が施される。7、10は他に比べ口径が大きく、体部の立上りが鋭い。11は他に比べ口径が最も小さく、器高が深い。

杯（12～18） 全て糸切り底である。12は口径14cm、器高3cm、13は底径7.8cm、16は口径12.9cm、器高2.2cm、15は口径13cm、器高2.75cm、14は口径12cm、器高2.5cm、17は推定口径13.2cm、18は口径12.5cm、器高3.1cmを測る。いずれもナデ調整が施される。17、18は他に比べ体部の立上りが強く、器高も深い。

把手（28, 29） 28の断面は円形で径4cmを測り、先端が上反りした形状である。把手の真中を水平に透しを切込んでいる。幅2.5mmを測る。接合は貼付け方法である。明黄褐色を呈する。29の断面は円形で径3.5cmを測る。接合は挿入方法である。黄灰色を呈している。

白磁 (Fig. 14-19, 21, 22, 24)

器形から3種に分けることができる。

椀1（24） 24は口径17.8cmを測る。体部は直線的に開き、口縁端部がわずかに外反する。器壁は底部から口縁端部へ薄くなっていく。釉色はくすんだ灰色である。

椀2（21） 21は、大きな玉縁口縁を有し、見込みに沈線の圓線を巡らす底部である。底部の外面は直に、内面を浅く削った高台である。底径7cmを測る。釉は外面と下部には施されない。

椀3（19, 22） 19は口径15cmを測る。端反りの口縁部で、器壁は薄い。口縁端部は口ハゲである。釉は灰白色を呈する。22は底径6cmを測る。外面は直に、内面を深く削った基部が太く、疊付の細い高台を有する。端部がかるく外反する口縁を有する器形であろう。釉は体部下位に施されない。釉色は古味をもった灰白色を呈する。

青磁 (Fig. 14-20, 23, 25, 26,

27, 30)

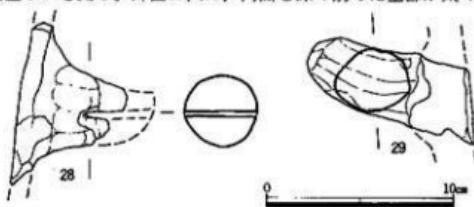


Fig. 15 SD01山土遺物 (1/3)

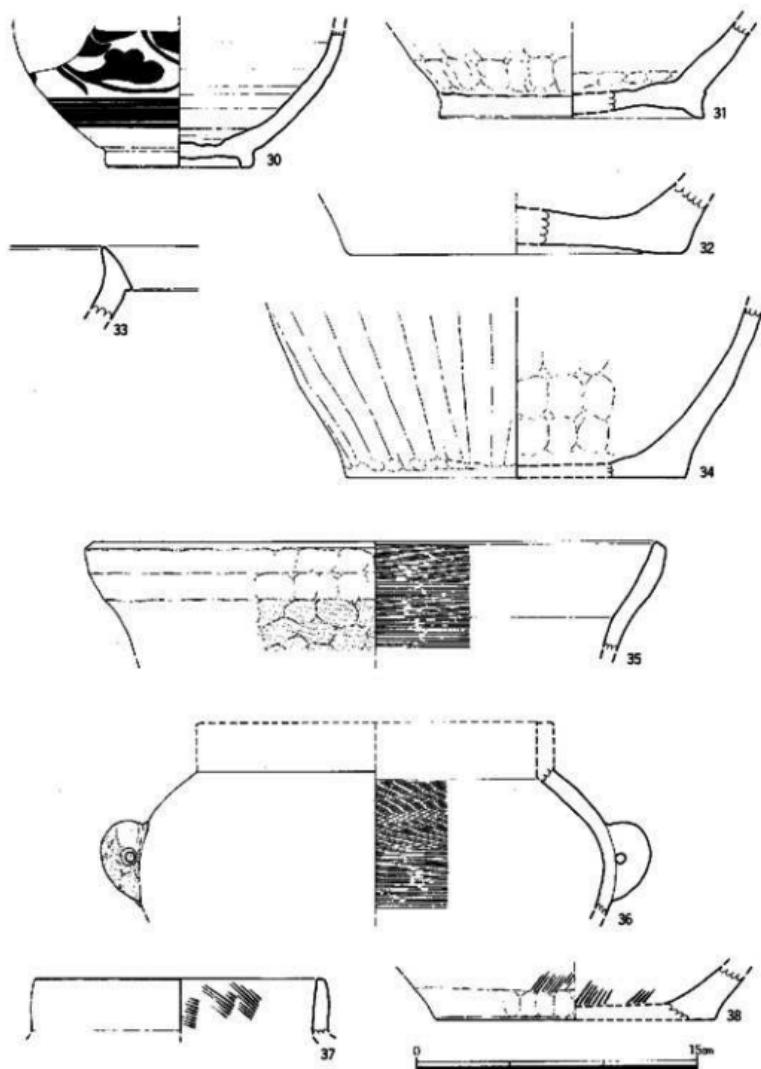


Fig. 16 SD01 出土遺物 (1/3)

椀1 (20) 20は口径25cmを測る。口縁部を大きく外反し、端部は丸味をもつ。釉は内外に厚目に施し、緑灰色を呈する。口縁の形態から長頸瓶の口縁も考えられる。

椀2 (23) 底径7.5cmを測る。高台はやや外へ張った断面「コの字形」の高台である。釉は外底部迄施しているが、豊付は目痕が残るため剥落する。又、内底見込みにも目痕が残っている。釉は緑灰色を呈している。越州窯系の椀であろう。

椀3 (25~27) いずれも底部の器内は厚い。27は無文の椀である。高台外面は直に、内面はナナメに深く削る。底部は厚く肥厚し、体部は丸味をもって立上がる。釉は外底面迄施すが、高台内側は釉をカキ取っている。釉は厚目で、内外に気泡がある。内底見込みに二条の沈線を圓線状に施し、内面の釉を径3cmの範囲でカキ取っている。釉は暗緑灰色を呈する。25は体部の立上りが強い椀で、高台径5.5cmを測る。高台は外面を直に、内面をややナナメに深く削っている。豊付の端部外面をナナメに削り落している。釉は厚目に、豊付迄施されるが、一部高台内側に流れている。内外に貫入がある。外面には線描き蓮弁を、内面には印花を施す。豊付に目痕が残る。釉色は明緑青色である。26は体部の立上りが緩く、高台は断面「コの字形」を呈する。高台径5.6cmを測る。釉は厚目に高台外面迄施される。内底見込みに沈線が螺旋状に施され、内底には印花が施される。気泡が多い。釉色は淡青灰色を呈する。

瓶 (30) 体部上半を欠損しているので、壺の可能性もある。高台径8cm、現存高7.2cmを測る。高台の外面は丸味をもち、内面は内鴻気味に削っており、底部器壁は薄い。底部の成形は粘土紐の巻き上げ状を呈している。体部は球体に近い丸味をもち、外面には乳白色の上をもって象嵌を施す。文様は体部下位に6本の横線を、その上位に牡丹文を施す。釉は内外に施すが、内底には釉が溜っている。豊付には細かい砂が付着している。釉はくすんだ緑灰色を呈している。生地はやや荒い。李朝の磁器と考えられる。粉青沙器象嵌牡丹文瓶であろう。

陶器 (Fig. 16-31, 34)

鉢形土器 (31) 素焼である。高台径14.3cmを測る。断面三角形で、外へ強く張った高台を有し、体部は外へ直線的に開く。外底部には荒い指圧痕がある。ヨコナデ調整をしているが、内面は使用のため摩滅している。胎土に砂粒を多く含み、色調は暗灰青色を呈する。美濃焼の握鉢である。

甕形土器 (34) 無釉である。底径18.3cmを測る平底である。外面には指圧痕があるがタテ方向のヘラナデが施される。底部には砂粒が付着している。胎土に微砂を含み、色調は暗青灰色を呈する。美濃系の土器である。

構釉陶器 (Fig. 16-32)

甕形土器 (32) 底径18cmを測り、上げ底である。作りは荒く外面に釉を施す。釉は茶灰色を呈し、気泡が多い。胎土に砂粒を多く含み褐色を呈する。内底は黒灰色に変色している。

壠鉢 (33) 口縁端部を上下につまみ出し肥厚させ、稜をもった三角形の口縁を形成する。端部は内傾する。ヨコナデ調整されている。色調は茶褐色を呈している。備前焼である。

土師質土器 (Fig. 16-35)

鍋 (35) 口径31cmを測る。体部と口縁は緩やかな屈折をし、内面に段をもつ。口縁は内溝気味に外反している。体部外面と内面にヨコハケを施している。又、内面に一部煤が付着している。色調は淡赤褐色を呈する。

瓦質土器 (Fig. 16-36~38, Fig. 17-39~41)

羽釜 (36, 37) 36は口縁を欠いている。推定口径19cmを測る。口縁部は直口するもので、体部は丸味をもつ。体部上位には一対の耳が貼付けられる。耳には穿孔があり、径5mmを測る。内面にはヨコハケが施される。色調は黄土色を呈している。37は口縁部片で、直口するが、外側は丸味をもっている。内面にはナメのハケが施されるがナデ消されている。色調は外面灰黒色を呈している。

括鉢 (38~39) 38は推定口径15cmを測る。底部は平底で、体部は開く。内面には7本単位の細い条線が施される。外面はハケ目が残っていてナデ調整される。灰白色を呈する。39は体部片である。内面には4本単位の条線を施すが、底部迄達していない。内面はヨコハケが、外面は指圧痕が残っている。外面は灰黒色を呈している。

支脚 (41) 脂の脚と考えられる。扁平な脚で現存長7.8cm、幅3.5cmを測り、断面は長方形状を呈する。表面はナデ調整だが、部分的にタタキ状の痕跡が認められる。灰褐色を呈する。

その他 (40) 火舍、或いは鉢の破片である。体部は丸味をもち、内面にヨコ方向の目の粗いハケを施す。色調は灰黒色を呈する。

瓦類

数十点出土したが図示できたのは以下の4点だけである。

平瓦 (42) 厚さ1.7cmを測る。外面には二重の斜格子のタタキを施し、内面には布目が残っている。粗砂を含み、褐色を呈する。

丸瓦 (43~45) 45、43は玉縁を有した丸瓦片である。45は現存長16cm、玉縁の長さ3.8cmを、43は玉縁の長さ

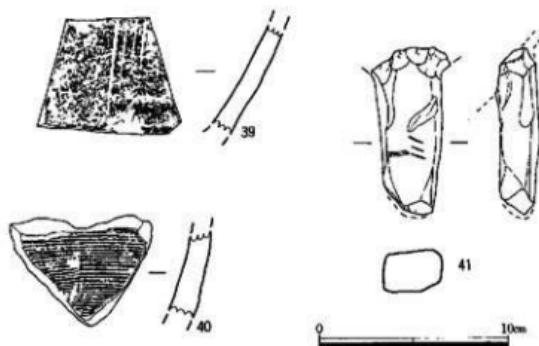


Fig. 17 SD01出土遺物 (1/3)

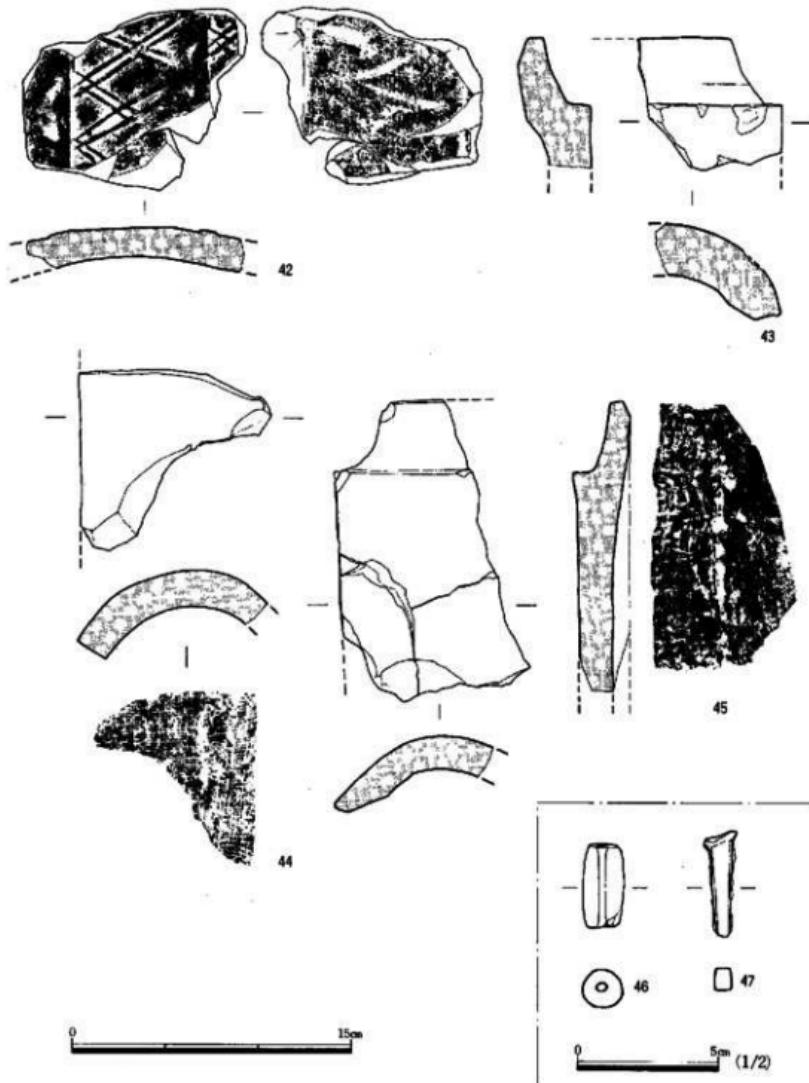


Fig. 18 SD01出土遺物 (1/3)

3.6cmを測る。45は玉縁の小口内側1.5cm幅と、側辺内側2cm幅をヘラ削りをしている。43は玉縁の小口内側1~1.5cm幅、側辺の内側2.5cm幅をヘラ削りしている。44の側辺はヘラで切り落した状態のままである。内面に細かい布目を残している。43は外面に織目タタキ痕が残る。45の内面には粗い網目が残る。外面は摩滅している。44は黒灰色、45は灰色、43は淡黒褐色を呈する。

土鍤 (Fig. 18-46)

円筒形状で、長さ3.0cm、径1.3cm、孔径0.3cmを測る。両小口は面取りし、孔は二方向からの穿孔である。

鉄製品 (Fig. 18-47)

釘 方柱状を呈し、頭部は潰れて平たくなっている。現存長3.8cm、厚みは径0.8cm×0.6cmを測る。

石 器

SD01の水溜り状遺構内に散乱した礫群の中より検出した。

石斧(49) 刃部を欠いている。現存長9.4cm、最大幅6.5cm、厚さ4.0cmを測る。断面は梢円形を呈する鎌刀石斧である。全面に敲打痕が残っている。又、破損した箇所には新たに敲打を加えている。凝灰岩の石材である。

石庖丁(50) A面は研磨が施されるが、表面剥離し、B面は節理面で完全に分離している。背部は直線的で、腹部はやや湾曲する。腹部は刃が研ぎ出されるが鈍角を呈している。大型の石庖丁だろうか、石庖丁としては若干の疑問も残る。頁岩製で、現存長9.7cm、最大幅5.1cm、厚さ9.5mmを測る。

砥石(48, 51, 52) 48は台形状を呈し、長さ13.8cm、最大幅12.5cm、最大厚6.8cmを測る。A面と両側辺の3面を砥面として利用している。両小口は面取りの打撃痕を残している。左側面は一部自然面が残る。粒子の細かい軟質砂岩である。二次的に火を受けている。51は板状の礫を利用し、縁辺は小さく打撃し、形状を整えている。A面を砥面とし、B面は自然面である。気泡の多い材質で硬質砂岩である。現存長15.5cm、最大幅9.1cm、最大厚2.7cmを測る。52は現存長6.5cm、最大幅5.5cm、厚み2.0cmを測り、断面は長方形を呈する。A面を砥面として利用し、両側面と下小口は面取り研磨している。B面は一部粗い削りを行ない、面取りしている。気泡の多い頁岩である。

SD 02出土遺物 (Fig. 20~22, PL. 20, 21)

溝内からは弥生時代板付II式併行の壺形土器、壺形土器、土鍤が出土した。

弥生式土器

壺形土器(1~10) 1は完形品で15.8cm、器高35cm、最大胴径29.8cmを測る。大きく外反した口縁で、口縁外面に粘土を貼付けて肥厚させる。肩部に二条のヘラ描き沈線を施す。口縁に

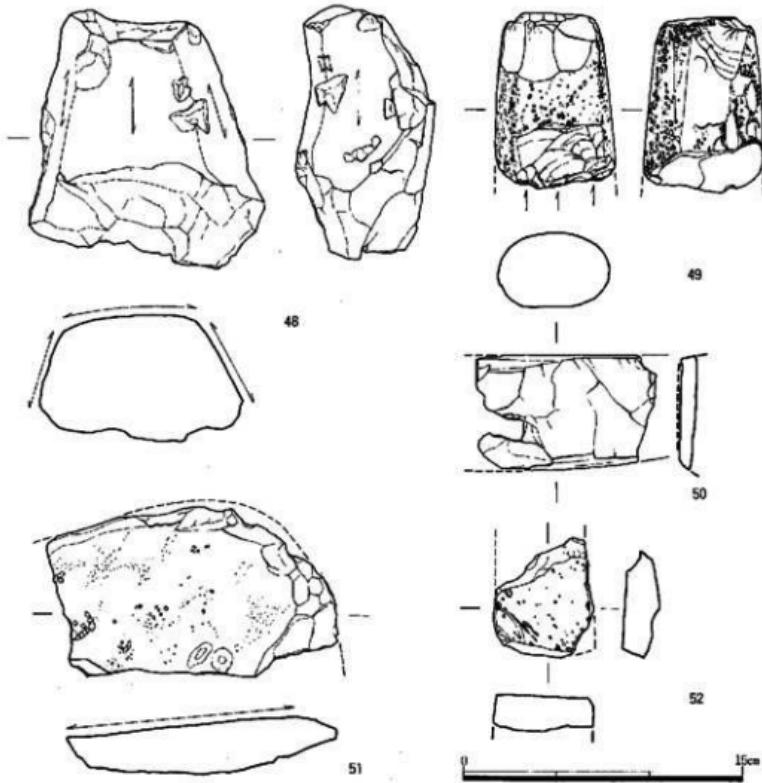


Fig. 19 SD01出土上遺物 (1/3)

比べ肩部が発達し、最大胴径は上位にある。全面にヘラ研磨を施す。色調は褐色を呈する。2は口径19.5cmを測る。口縁の外面に粘土を貼付けて肥厚させるが、頸部との境は明瞭ではない。頸部と肩部の境には二条のヘラ描き沈線を有する。外面はヘラ磨きを施している。色調は黄土色を呈する。3は底径9cmを測る平底で、立上りは外へ大きく開く。2の口縁部と接合するものと考えられる。外面はナナメ、ヨコ方向にヘラ磨きが施される。4は完形品で1に比べ口縁は薄く、肩部は張らない。口径15.5cm、器高11.0cm、最大胴径18.2cmを測る。外反した口縁は肥厚しない。肩部の肩は張らず、口縁、頸部、胴部の境は、各々三条のヘラ描き沈線で区別している。肩部の沈線下には三重の連弧文を施している。上げ底である。外面から口縁内側迄は

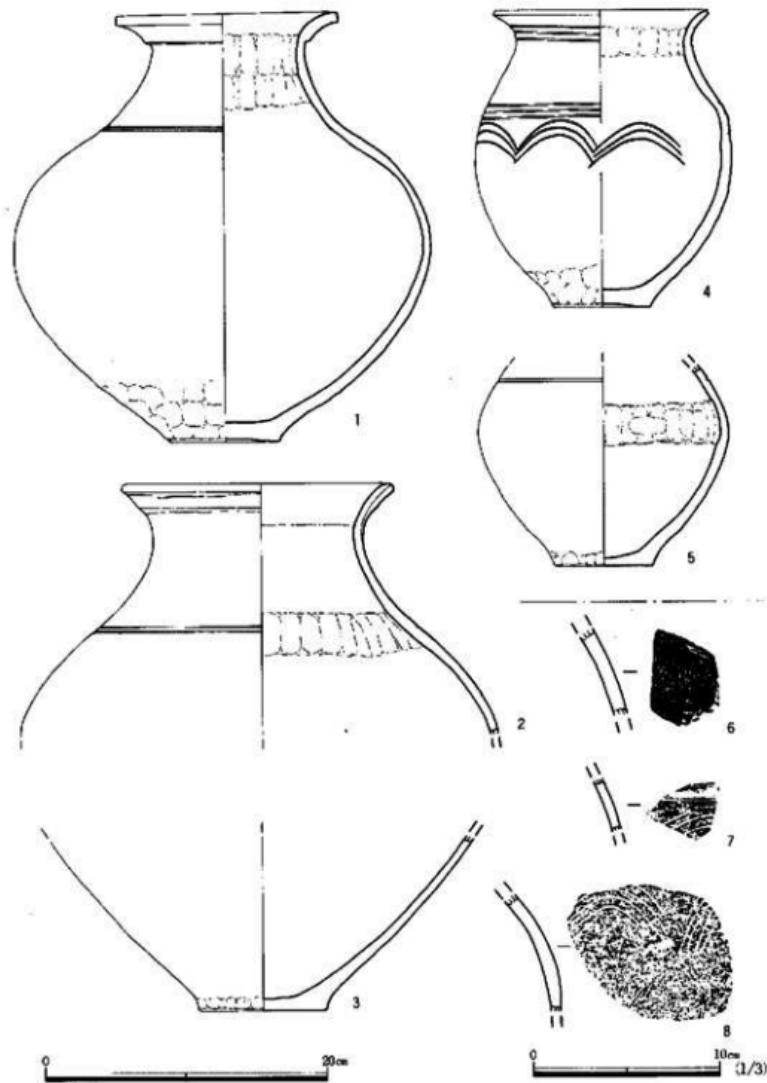


Fig. 20 SD02 出土遺物 (1/4)

ヘラ研磨を施し、頸部以上はヨコ方向、腹部は右下りのナナメ方向である。色調は黄褐色を呈する。5は口縁部を欠き底径7cm、現存高15.8cmを測る。4に比べ肩が張り、腰高な器形で、最大径18cmを測る。頸部と肩部の境にヘラ描き沈線を一条施す。外面はヨコ方向のヘラ研磨を施す。胎土に石英粒子を含み、黄灰色を呈している。6、7、8は肩部の破片で、7は三条の沈線下に四重の連弧文を描いている。6、8も同じ四重の連弧文をヘラ描きしており、色調や、厚みに違いはあるものの、6・7・8共に同一個体と考えられる。表面はヘラ研磨されており、色調は黄土色系である。9・10は大型の壺である。9は口径25.6cmを測り、口縁は強く外反し、内面に段を有す。外面には粘土を貼付けて肥厚させ、頸部との境に段を形成している。頸部は締っており、やや肩の張った肩部が続くと考えられる。口縁部と頸部の内面には粗目のヨコハケ調整を施している。やや暗い黄褐色を呈する。10は口径24.6cmを測る。外反した口縁内面に粘土を貼付けて、平坦面を形成している。外面には粘土を貼付け、頸部との境に低い段を有している。口縁部の上下にヘラ刻みを施している。内外面ナデ調整である。色調は茶褐色を呈している。

鉢形土器 (11) 脊部下半を欠いており、口径30.2cmを測る。口縁は小さく外反し、端部は丸味をもつ。浅い器形で、口縁端部には刻目が施されない。外面ナデ調整で、色調はやや暗い褐色を呈している。

變形土器 (12~17) いずれも如意形口縁を有し、肩部が余り張らない。12は口径25cmを測る。口縁は小さく外反し、口縁端部下位にヘラ刻みを施す。灰褐色を呈する。13は図上復元である。口径23.5cm、復元高25.2cmを測る。口縁はやや強く外反し、内面に強い稜を形成する。頸部と肩部の境はかるい段をなし、肩を形成している。体部は余り張ることなく、径10.5cmを測り、平底の底部に至っている。口縁端部下位にヘラ刻みを施す。肩部外面にタテ、ナナメ方向のヘラナデが認められる。特に底部周辺は頭著に認められる。内外褐色を呈する。16は口径14.3cmを測る。口縁はやや強く外反し、内面に段を有する。口縁端部には、ややナナメ方向にヘラ刻みを施す。茶褐色を呈している。17は径8cmを測る平底の底部で、立上りは余り開かず、直線的である。色調は茶褐色を呈する。14、15は小さく外反する口縁を有し、肩部上位に二条のヘラ描き沈線を施し、その直下に二重のヘラ描き連弧文を施している。器形、文様、胎土から同一個体であろう。色調は黄褐色を呈している。その他、18は底径10cmを測る。底部はやや上げ底で、立上りは開いているので窓か、鉢の底部が考えられる。底部外面に葉脈痕が認められた、暗褐色を呈する。

土錘 (Fig. 23-18~21)

18、19は体部が丸味をもった円筒状を呈し、両小口を面取りしている。孔は二方向から穿孔される。外面は指圧痕を残すが、一部に3~4本を単位としたタタキ状の痕跡が認められる。20は体部が球体を呈し、両小口は面取りしている。孔は二方向から穿孔されている。長さ3.4

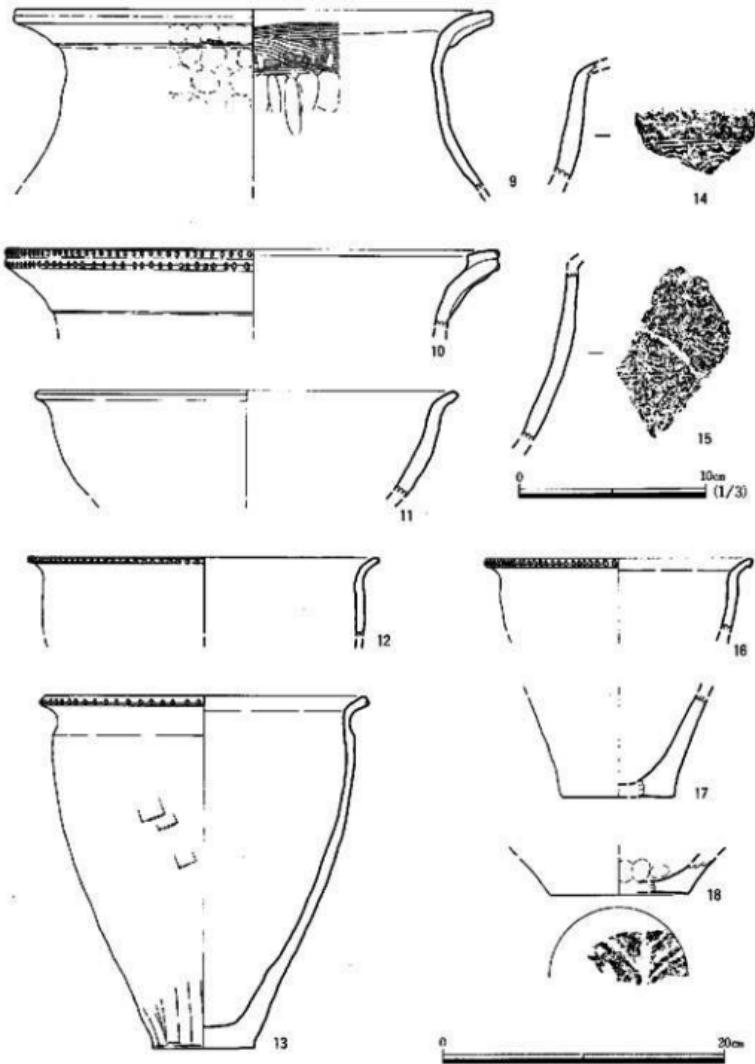


Fig. 21 SD 02 出土遺物(1/4)

cm, 最大厚 3.5cm, 孔径 0.6cm を測る。指圧痕を残している。21は断面形が扁平な橢円形を呈しており、長さ44cm, 最大幅 3.8cm, 厚さ 2.8cm, 孔径 0.7cm を測る。指圧痕を残している。いずれも丁寧なナデ仕上げをしており、18は黒灰色、19は黒灰色、20は暗黄褐色、21は真黒色を呈する。

石器 (Fig. 22-23~27)

石斧 (23, 24) 23は刃部の破片で、現存長 9.8cm, 現存幅 6.6cm を測る始刀の石斧である。基部と B面を欠いている。刃部も破損している。刃部が研ぎ山されている以外は、全面に敲打痕を残している。破損した右側刃と基部方向の部分は新たに敲打作業を行っている。再加工中途である。玄武岩製である。24は始刀石斧の破片である。表面は風化剥離している。右側刃は

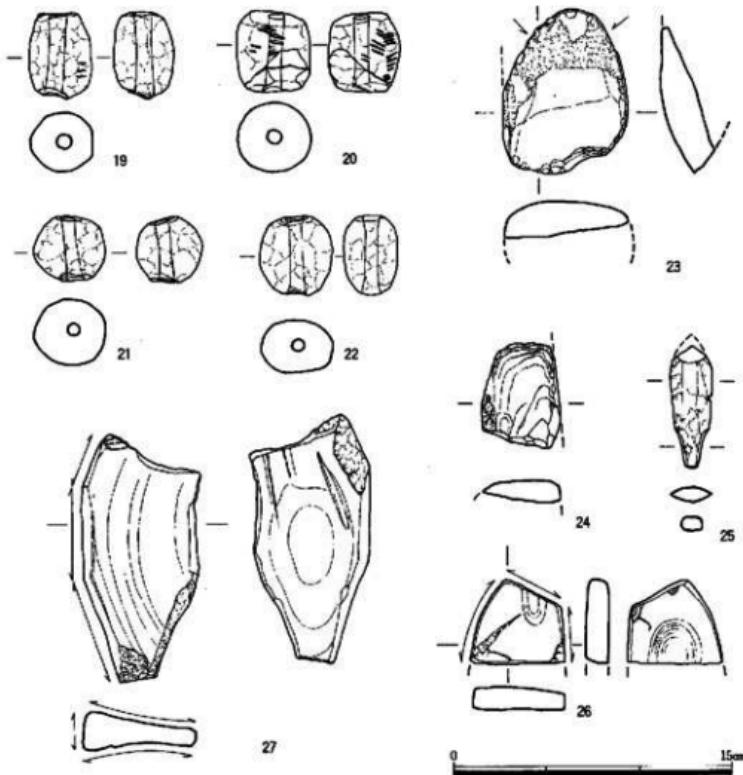


Fig. 22 SD02出土遺物 (1/3)

面取りされている。現存長 5.6cm、幅 4.4cm を測る。石材は凝灰岩であろう。

磨製石鎌 (25) 先端を欠損している。柳葉形を呈した有茎石鎌である。現存長 4.5cm、現存幅 2.3cm、茎子長 2.0cm、茎子幅 1.2cm、茎子厚 0.8cm を測る。A面には 2 本の鋸を、B面には 1 本の緩い鋸を形成している。体部の断面形はレンズ状を、茎子の断面形は長方形を呈する。表面は風化摩滅している。粘板岩製である。

砥石 (26, 27) 27 は扁平な礫を利用したもので、不整形である。長さ 13cm、最大幅 6.1cm、最大厚 2.1cm を測る。A、B 2 面を砥面として利用している。左側面は研磨面取りし、右側面は部分的に研磨面取りしているが、上下の小口は自然面のままである。砥面は使い込まれて中凹みを呈す。粗い粒子の砂岩である。26 は下部を欠損している。現存長 4.5cm、最大幅 5.2cm、厚さ 1.2cm を測る。A、B 面を砥面として用い、側面、小口ともに研磨面取りしている。B 面は中凹みを呈する。中粒砂岩製である。

SD 03出土遺物 (Fig. 23, 24 PL. 22)

土師器

皿 (2) 糸切り底である。口径 9cm、器高 1.5cm を測り、体部は丸味をもつ。ヨコナデ調整され、褐色を呈する。

杯 (1) 糸切り底である。口径 13.5cm、器高 3.1cm を測る。体部は丸味をもって立上がる。淡茶褐色を呈する。

白磁

壺 (3) 3 は壺の体部下半部分の破片と思われる。内面は無釉である。釉色は灰白色を呈している。最大径 19.2cm を測る。

土師質土器

鍋 (6) 口径 35.5cm、現存高 6.8cm を測る。体部はやや丸味をもって開く。口縁部は「くの字」形に外反するが、やや内凹気味である。内面には段を有する。外面には、タテハケを口縁中位から頸部迄、内面はヨコハケを施す。内外に煤が付着している。色調は灰白色を呈する。

瓦質土器

鉢形土器 (4, 5) いずれも体部は直線的に開き片口を呈す。口縁端部を肥厚させている。内面にはヨコ方向のハケを施し、5 の内面には 5 本単位の条線を下から上方向に施す。外面は指圧痕を残している。5 は口径 29.3cm、現存高 9.3cm を測る摺鉢である。4 は捏鉢である。破片のため、復元口径は信頼できない。4, 5 ともに灰白色を有する。

火呑 (7) 7 の口径は 52.7cm、現存高 11.5cm、推定高 14cm を測る。口縁端部の内側を肥厚させ、上面を平坦に形成している。平底を呈するが、脚付きと思われる。口縁外面直下には、三直文のスタンプを施している。外面はヘラ磨きを、内面は粗目のハケを施す。色調は黒灰色を呈する。

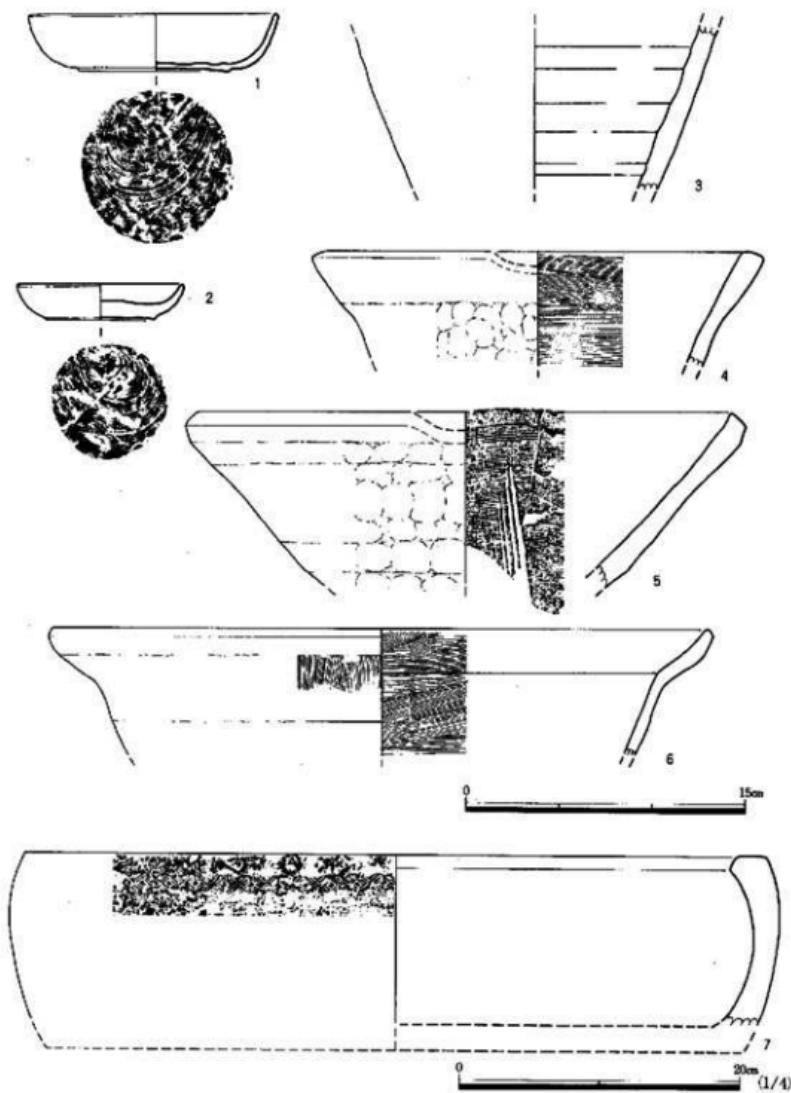


Fig. 23 SD 03 出土遺物 (1/3), (1/4)

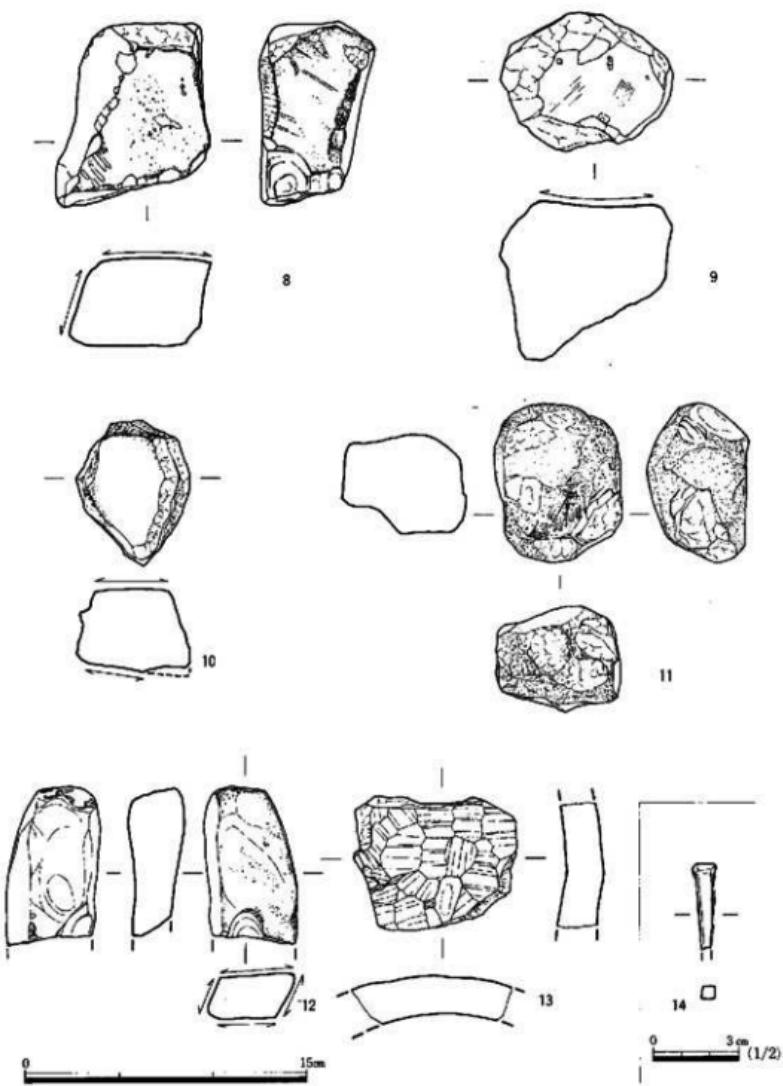


Fig. 24 SD03出土遺物 (1/3), (1/2)

石器 (8~13)

敲打器 (11) 長さ 8.4cm, 最大幅 6.8cm, 最大厚 5.3cm を測る。形状は不整隅丸長方形を呈する。角張った疎に打撃を加えて成形したもので、丸味をもつ。左側面、B面には打裂面を残し、A、B面は部分的に研磨が施されている。左側面、B面を除いて敲打痕は多いが、特に上、下の小口部分に集中している。これは使川箇所の頻度を示すものであろう。玄武岩製である。

砥石 (8~10, 12) 8は長さ 9.8cm, 最大幅 8.2cm, 最大厚 6.8cm を測る。A面と左側辺の2面を砥面として利用。他の4面は自然面を残すが、面取り、敲打痕を残している。A面中央に敲打痕が残る。中粒砂岩製である。9は長さ 5.2cm, 最大幅 5.0cm, 最大厚 5.7cm を測り、不定形を呈する。自然疎を用いたもので、A面のみ砥面として利用する。A面の周囲は調整痕が残る。粗い砂岩である。10は長さ 5.2cm, 最大幅 4.0cm, 最大厚 3.0cm を測る不定形の砾石で、A、B面の2面を砥面として利用。側辺は敲打調整されるが不整形である。粗い粒子の砂岩である。12は長さ 5.6cm, 最大幅 3.1cm, 最大厚 1.7cm を測る。不整長方形を呈し、A、B面、両側面の4面を砥面として利用している。両小口は敲打面取りしている。A、B面とも中凹み状になっている。軟質の砂岩で、下小口部分に自然穿孔がある。さざれ石を利用したものであろう。

滑石製品 (13) 13は石綿片である。外面は規則性の無い粗い削りである。内面はヨコ方向の粗い削りのため条痕を残している。軟質で灰色を呈す。

鉄製品 (Fig. 24)

釘 (14) 方柱状を呈し、先端を欠いている。頭は4角形を呈している。現存長 3.1cm, 頭部径 0.7cm, 釘身の断面径 0.5cm を測る。

SD 05出土遺物 (Fig. 25)

弥生式土器

変形土器 (Fig. 25) 腹部の破片で、端部の肥厚した突帯を貼付けている。突帯の中心は沈線状にくぼんでいる。突帯上面をヘラでナナメに刻みを施す。内外ナデ調整する。焼成は良好で黄褐色を呈する。

火葬墓出土遺物

P-206出土遺物 (Fig. 26, PL. 23)

貨幣は唐代1枚、北宋5枚の計6枚が出土した。腐蝕が著しい。

P-208出土遺物 (Fig. 26, PL. 23)

陶器 (Fig. 26)

1は破片を図上復元した。口縁部と底部を欠いている。肩はやや張っており、3条の低い削り出した突帯を巡らす。腹部下半は余り丸味をもたず底部へ至る。内面には同心円のタタキが、外面はヨコナデが施される。外面は暗茶褐色、或いは茶褐色を、内面は黄土色を呈する。器壁

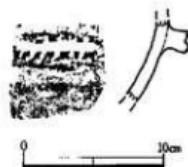
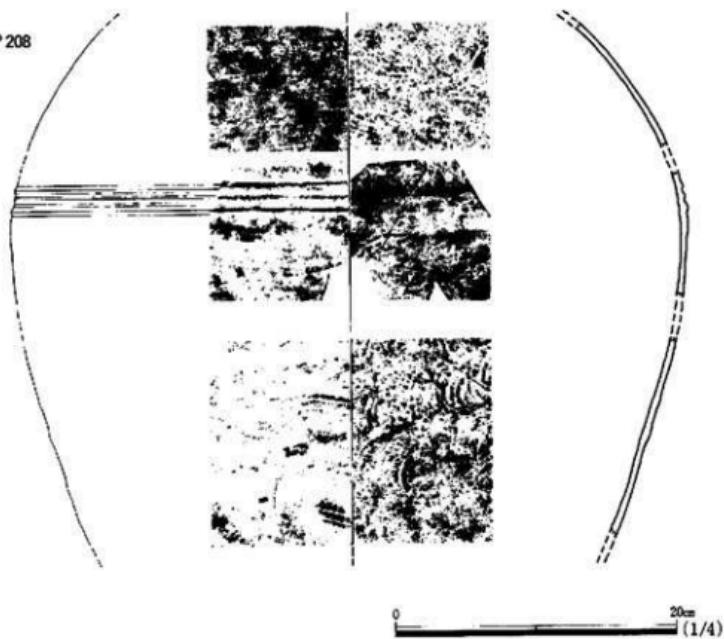
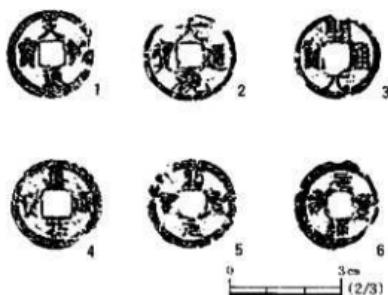


Fig. 25 SD 05出土遺物 (1/4)

P 208



P 206



图号 番号	器物名	外 形 特 征			片 种 序 号	材 料 年 代
		外 径	内 径	厚 度		
1	大泉当百	φ12.3 cm	2.4 cm	0.2 cm	北京 安成2年 AD. 1023	
2	大泉当百	2.5 cm	φ12.5 cm	0.2cm	北京 人和元年 AD. 1107	
3	五铢铜钱	φ12.3 cm	φ12.3 cm	0.2cm	铜 武帝 4年 AD. 621	
4	五铢铜钱	2.4cm	2.4 cm	0.2 cm	北京 延和 2年 AD. 1067	
5	五铢铜钱	2.4 cm	2.2 cm	0.2 cm	北京 延和元年 AD. 1064	
6	五铢铜钱	φ12.3cm	2.5 cm	0.2cm	北京 安成元年 AD. 1027	

Fig. 26 P 206, P 208出土遺物 (1/4), (2/3)

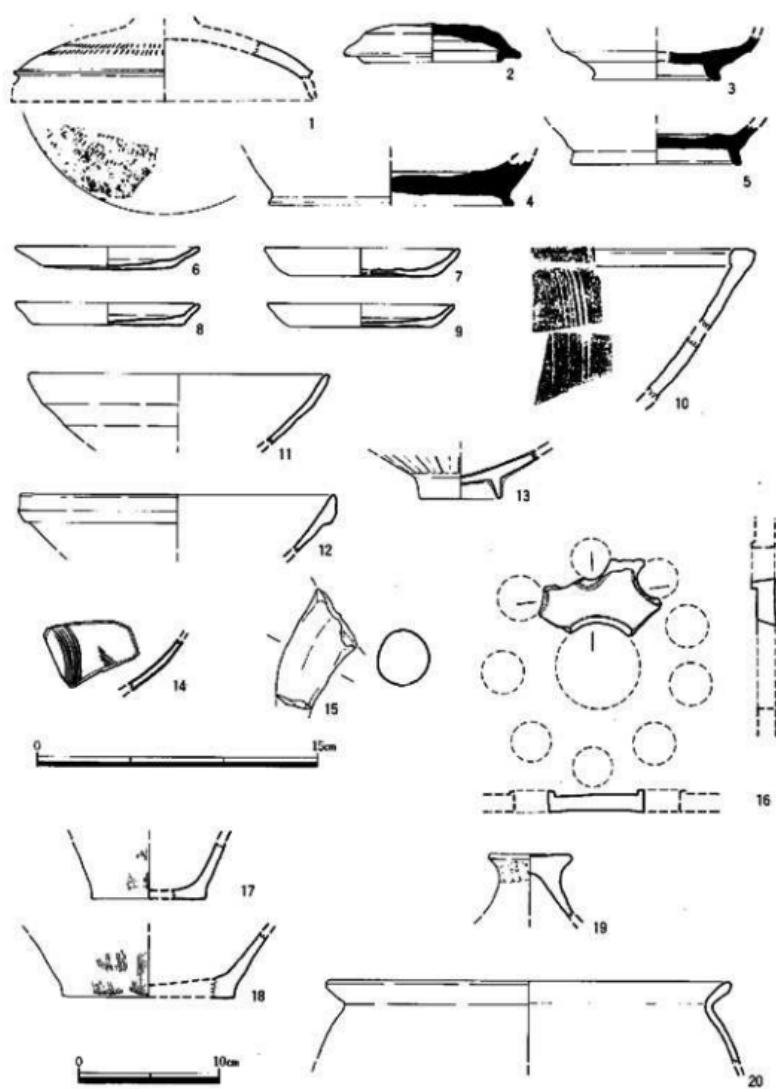


Fig. 27 Pit 及び構造面出土遺物 (1/3), (1/4)

には火ぶくれが認められる。胎土は灰褐色を呈し、精選されている。李朝の壺形土器で、同例は青森県尻八館遺跡に1例ある。

邊構面及びPit出土遺物 (Fig. 27, PL. 24)

弥生式土器

壺形土器 (17~20) 17はP132より出土。底径8.2cmを測る。体部は余り開かず、直線的に立ち上がる。外面にタテ方向のハケ目が施される。黄灰色を呈す。18はP136より出土。大型壺の底部で、外面にタテ方向のハケを施す。赤味がかった黄灰色を呈する。20は口径28.5cmを測る。くの字形に口縁は外反し、内面に稜をもつ。口縁端部は肥厚し丸味をもつ。茶褐色を呈する。中期後半の時期である。蓋形土器 (19) 底径6cmを測る。底部縁辺をつまみ出している。体部は緩やかに外反する。黄灰色を呈する。P58より出土。

須恵器

杯蓋 (1, 2) 1は陶質土器と思われる。体部は緩やかな丸味をもち、口縁部は強く内側へ屈折し、体部との境に深い沈線を巡らす。推定口径16.4cm、推定器高2.0cmを測り、天井部につまみが付く器形である。体部には、長さ1cmを測るヘラ描きの刻みを、放射状に二重に施している。胎土に白っぽい砂を含み、淡灰青色を呈す。2は口径7.1cm、口縁端部9.4cm、器高2.1cmを測る。天井部と体部の境にはゆるく段がつき、内面のかえりは先端が細く内傾する。かえりは口縁端部より下に0.5cm出る。天井部はヘラ削りが施され、削りの方向は時計回りである。つまみをもたない。暗青灰色を呈する。

杯身 (3~5) いずれも高台を有する。3は高台径6.8cm、5は高台径9.2cmを測る。外へ開いた高台で、5の立ち上りは高台接合部分から直線的に開き、3は緩やかな丸みをもつ。いずれも灰白色を呈す。4は3, 5に比べ径が大きく、長頸壺の底の可能性がある。細く外へ開いた高台で、端部は内外へつまみ出している。底部、体部の器壁は厚い。体部の立ち上りは強い。高台径13.1cmを測る。灰白色を呈する。

土師器

皿 (6~9) 6, 7は糸切り底である。8, 9は摩滅のため不明である。6は口径9.8cm、器高1.1cmを、7は口径10.7cm、器高1.2cmを、8は口径9.8cm、器高1.2cm、9は口径10cm、器高1.3cmを測る。いずれも器高、口径に大差は無いが、7, 9の体部は器壁が厚く、丸味をもっている。7は灰白色を、8は黄灰色を、9は黄土色、10は灰褐色を呈する。

瓶底 (16) P135より出土。厚さ0.9cmを測る。粘土板を焼成前に穿孔したものである。中心の孔は径約4.6cmを、周囲の孔は径2cm前後を測る。復元すると、中心の大孔の周囲に9個の小孔をもつ円盤で、径は15cm以上を推測する。

白 磁

椀 (11, 12, 14) 11は口径16cmを測る。体部はわずかに丸味をもって立ち上がり、口縁部を内

湾させる。釉は内外に施され、灰白色を呈する。12は玉縁の口縁を有す器形で、玉縁はさほど大きくなはない。口径16.9cmを測る。釉色は灰白色である。14は体部の破片で、釉はやや厚目に施す。釉は緑味を帯びた灰色である。内面に櫛描き文を施す。

青 磁

楕 (13) 高台は外へ張った細く高いもので、径4.5cmを測る。体部に錦蘿弁を施し、釉は厚目に、高台外底迄施す。豊付は釉のカキ取りを行っている。釉色は茶色がかった淡緑色を呈する。

その他、遺構面より竜泉系青磁皿一
皿4bが1点出土。又、P239より同安
窯系の碗片が出土している。I類に属
するもので、口縁は端反りしない。灰
青色の釉である。

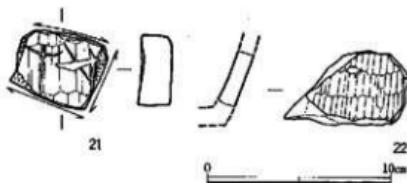


Fig. 28 表土出土遺物 (1/3)

括鉢 (10) 10は体部は直線的に開き、口縁部は内側に粘土を三角形に貼付けて肥厚させる。内面には8本単位の条線を底部から上へ施している。内底は摩滅している。非常に硬質の焼きで、陶器の素焼きと間違える。色は灰褐色を呈する。15は鼎の脚である。断面は円形を呈し、径3.0cmを測る。ナデ調整で、暗灰色を呈する。二次的な火を受けている。

石 器

滑石製品 (21, 22) 21は石鍋の再生品で、長さ5.7cm、幅4.9cm、厚さ1.7cmを測る。3側辺を削って面取りしている。外面にタテ長の削り痕を残す。内面は削り痕が無く、再生時に新たに傷つけられる。22は、小型の石鍋片で、器壁は1cmを測る。外面にタテ長の削り痕を残し、内面は丁寧な仕上げである。煤のため内外黒色を呈する。

小 結

遺構の内、溝SD02以外は中世が考えられる。SD02から出土した壺形土器は大小の器形がある。小型の内、Fig20-1の様にII縁、頸部、胸部の境が明瞭であるものと2, 4, 5の様に沈線によって区別するものがある。壺形土器は、器形的な変化は認められない。この内、胸部上位に連弧文を施す例もある。上層から板付I式の壺形土器を数点検出したが、その他は板付II式後半期の土器群である。SD02は台地縁辺を巡る溝で、その方向はほぼ磁北方向である。約70m西側の第28次調査で検出した溝もやはり台地を巡る周溝で、SD02と平行の位置にある。しかし、この溝の方向は磁北から約30°東へ振っており、北側の延長線上でSD02と交差する可能性がある。これらの溝は出土遺物から時期差は考えられない。このことから、これらの溝は北側で二方向に分岐した同一溝か、又は、標高13m以上を測る台地を巡る溝と、更に一段下の標

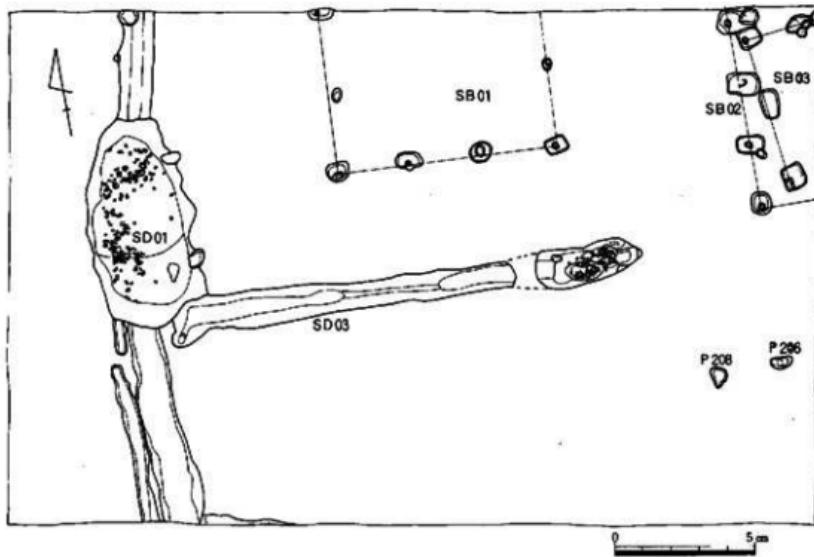


Fig. 29. 中世遺構配置図 (1/400)

高約10mを測る台地縁辺を大きく巡る溝との二重の構造の溝が考えられる。

掘立柱建物SB01は、溝SD01, 03の区画する内側に存在する。SD01は中央部分に池状の大きな水溜りの部分を形成している。この水溜り部分に接して東西方向にSD03が設けられている。この溝の西側端部はSD01より水が流れ込んだ跡みが認めらる。東側の袋部は深く壅み、壁を敷きつめており、上位からの落水を意識したものと考えられる。SB02, 03は方向からみて建て替えが考えられ、SB01, 02はほぼ一方位を示しており同時に存在したものであろう。SD01の出土遺物は、前項で述べた他、^昔の羽口が1点ある。陶磁器の中で李朝の瓶と甕は国内での出土が非常に少ない。染付は出土していない。土師器の皿 (Fig. 14-6, 9) は、口径9cmを測り、口径に対し底径が小さく体部は丸味をもっている。杯は一種類あって、口径13cm前後、器高2.6cm前後を測り、体部が丸味をもつタイプと、口径12.6cm前後、器高3cm前後を測り器高の高く、体部が大きく開くタイプに分けられる。後者は14C代の杯に比べ口径と底部の比が大きい。SD03出土の杯、皿もSD01と同様な傾向を示している。共伴遺物の内面に印紋を施した青磁は14C末から15C初めに出土すると言われており、李朝の瓶は15C代に属するところから、これらSD01, 03の終末の時期は概ね15C後半代が考えられる。ゆえに掘立柱建物は15C代に属し、池泉状の遺構を伴った屋敷跡と思われる。又、当該地の西側は比高差約4.2mを測る段落ちを形成し、その上部は標高13m前後を測る。建物の形成にあたって大規模な整地が施されたことが考えられる。

2. 第8次調査

調査の概要

調査対象地は福岡市西区有田1丁目13-12番地に所在し、対象面積は192m²である。

有田地区の最高所より北東、或いは北へ向って舌状に突出した狭長な台地上に位置する。台地は標高10m前後を測り、西側は開析された谷が存在し、東側は金屑川へ向って傾斜している。

調査地点の西側隣地には、昭和54年度に第21次調査が実施され、古墳時代の住居跡や、掘立柱建物が検出されている。昭和52年10月に建築確認が申請されたので、試掘調査を行なった結果、全面に遺構を検出したので発掘調査を実施した。

調査は、排土作業の関係から、対象地を南北の二つに区分して行なった。対象地は昭和42年の区画整理によって、削平を受けている。又、東側は幅2mにわたり、区画整理以前の畠地の開墾によって削除されている。遺構は表1下10~40cmで検出される。東側の斜面には5~10cmの包含層が堆積している。検出遺構は、住居跡10軒、掘立柱建物1棟を検出した。



Fig. 30 第8次調査地位置図 (1/2,500)

検出遺構

住居跡 (SI)

SI01・02 (Fig. 32, PL. 29)

調査区東側の標高9.20m前後の斜面で検出した。いずれも耕地開墾時に削平を受け、西側壁を残しているだけである。SI01, 02とともに建替えの状態を示していると考えられる。

SI01は南北壁の現存長2.3m、東西壁の現存長0.3m、深さ20cmを測る。周溝は存在しない。SI02は南北壁の現存長2.85m、東西壁の現存長1.0m、深さ35cmを測る。周溝下には、幅5~12cm、深さ6~12cmの周溝が巡っている。SI02を切って径45cm、深さ64cmのPitが設けられている。このPitはSI01に伴うと考えられる。SI01より高杯の脚部片が出土している。

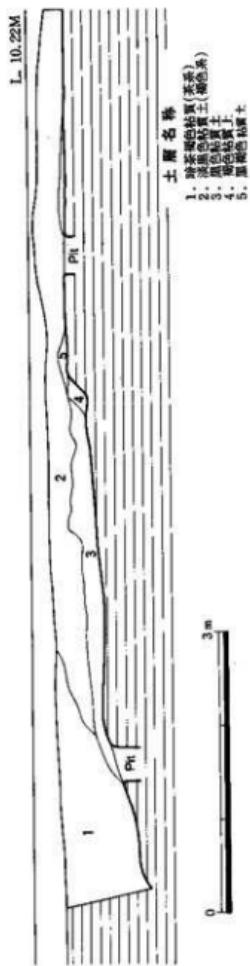


Fig. 31 連續面圖及び土層図 (1/200, 1/60)

SI03-04-05 (Fig. 33,

PL. 27, 28)

いずれも、西側の隣地境界部分で検出したため、形態を充分に知り得なかった。削平を受け残存状態が悪く、切合い関係も不明である。SI03は南北壁の現存長2.3m、東西壁の現存長1.25m、深さ15cmを測る。内側には、南北壁長1.26m、東西壁の現存長0.57mを測る方形の掘り込みがある。以上から、周壁にベットを付設し、

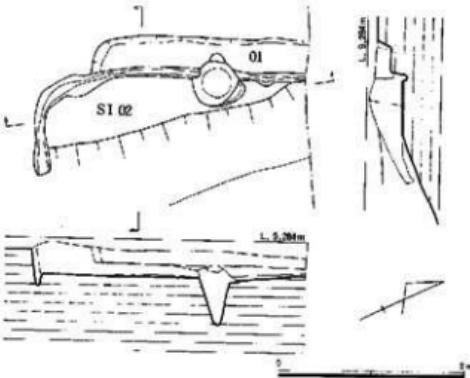


Fig. 32 住居跡 SI01, 02 (1/60)

周壁がベットの高さ迄削平された住居跡であることが考えられる。又、ベットと考えられる部分は、床が判然とせず、凹凸を呈する。このことは、貼床のベットで、その幅は50~70cm、残存高15cmを測るものと考えられる。又、東西壁の一部には、幅15cm、深さ3~12.5cmの崩溝が長さ1.35mに亘って残っており、本米、崩溝が巡っていたと考えられる。SI04は南北壁の現存長1.25m、東西壁の現存長0.65m、深さ9.5cmを測る。形状は全く判然としない。SI05は南北壁の現存長3m、東西壁の長さ0.9m、深さ16cmを測り長方形を呈する。ただし、SI05の東南の隅角が鋭角に飛び出しており、本来の形状を残していないことも考えられる。SI04との比高差は2cmばかりで、殆ど差はない。東西壁、南北壁の方向の関係からSI04-05は同一の住居跡を形成することも充分に考えられる。遺物は、SI03より高杯の杯部分が出上している。

SI06

調査地の北西隅より検出したもので、現存長1.3m、深さ4cmを測るが、境界地にあるため、住居跡か否か判然としない。

SI07 (Fig. 34, PL. 31)

調査地の東南部分で検出した。東西の現存長2.30m、南北の現存長3.4mを測り隅丸長方形を呈する。床は西から東へ傾斜し、比高差17cmを測る。西壁の現存長は3cmである。内部には多くの柱穴を検出したが、特にP1~P4は、径40~45cm、深さは地山面より13~20cmを測り、同一の規模を示している。P1は西壁に接近し過ぎている感もあるが、ほぼこれらの4本の柱穴が、この住居跡に伴うと考えて良いだろう。住居跡内からは土師器の変形土器、小型丸底壺、高杯などが出土している。

SI08 (Fig. 35, 36, PL. 32)

削平を受けて、壁及びベットなど全て消失しており、形状は全く不明。炉を中心として南北方向の馬溝状の遺構が3条検出された。周溝状遺構1は長さ128cm、幅14~16cm、深さ6cmを測る。北側はレンズ状を呈する。浅い土壤によって、切り取られているが、土壤の底に周溝の痕跡を認める。周溝状遺構2は長さ156cm、幅20cm前後、深さ6cmを測る。南端部分は幅14cm、深さ8cmを測る。小溝と切合っている。又、この周溝状遺構は炉を切っており、SI08とは関係ない遺構と考えられる。周溝状遺構3は長さ140cm、幅12~18cm、深さ4cmを測る。炉周辺に検出された土器群は、一部この周溝状遺構の上に乗っており、この周溝もSI08には直接関係ないものと考えられる。炉の北側には長さ3.7m、幅2.5mを測る浅いレンズ状の落ち込みが掘り込まれる。2~3軒の住居跡が切合っていることと考えられる。検出した土器群は變形土器、壺形土器、鉢形土器、高杯土器などである。遺物は床面に密着した状態で検出したが、数種類の器形の土器が搔き集められた状態を呈していた。

SI09 (Fig. 37~38, PL. 33)

隣地との境界に位置しているため、約1/3の範囲しか調査できなかった。南壁長は3.8m、東壁の現存長2.9m、深さ15cmを測る。南壁の東寄りにカマドを付設している。又、カマドの両側壁下と北壁下にかけて、幅13cm、深さ3~5cmを測る周溝が認められた。床は暗褐色粘質土の貼り付けによって整えられている。カマドは青灰色粘土を用いて、平面を

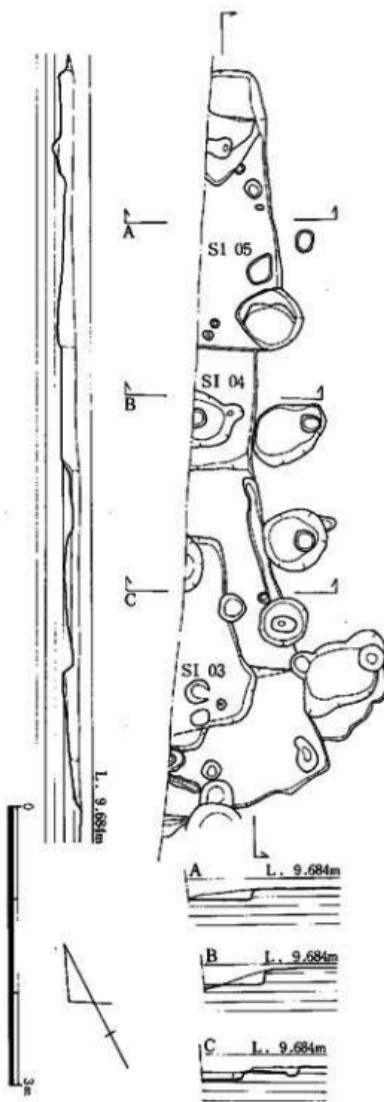


Fig. 33 住居跡SI03, 04, 05(1/60)

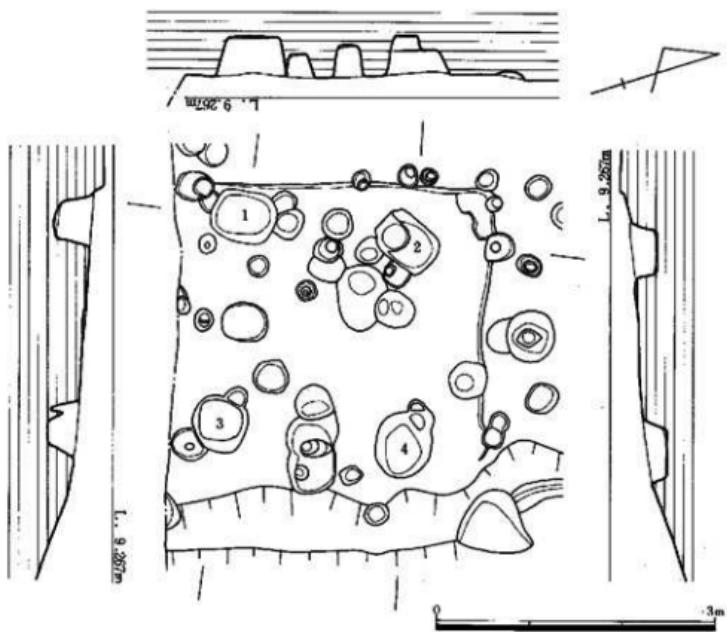


Fig. 34 住居跡SI07 (1/60)

馬蹄形状に、断面を袋状に構築している。カマドの中央に高杯を逆に組えて支脚としている。カマドの底部は皿状で、焼土で充填されている。P1及びP1とカマドをつなぐ幅8cm、深さ10cmを測る小溝からは、焼土や粘土が出土しており、カマドとの位置関係から煙出しども考えられる。出土遺物はカマド内より出土した高杯だけである。

SI10 (Fig. 37, PL. 29)

申請地の通路部分より検出されたので、全形は確認できないが、方形を呈すると考えられる。SI09に切られるため、北側壁は判別できない。西側壁の現存長2.2m、深さ11cmを測る。主柱についても判別できなかつた。遺物は全て細片であった。

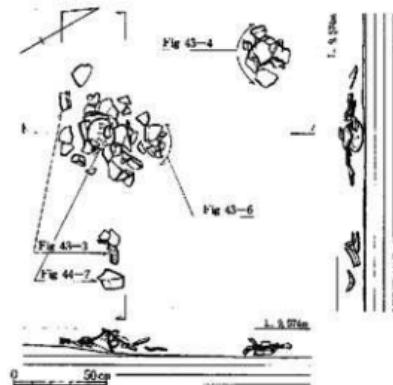


Fig. 35 住居跡SI08 遺物状況出土 (1/30)

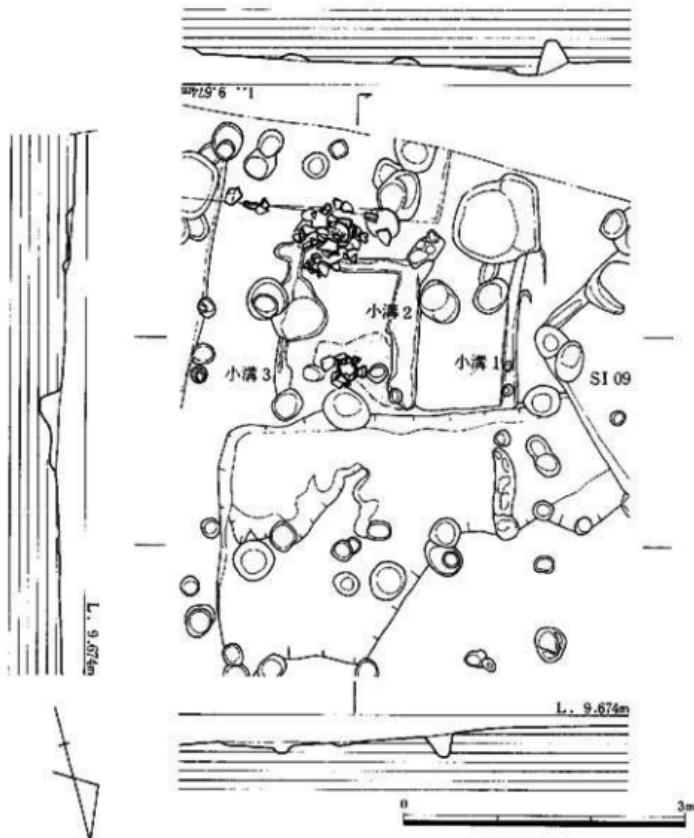


Fig. 36 住居跡 SI08 (1/60)

SIII (Fig. 39, PL. 31)

調査地の東側、標高 9.1m 前後を測る斜面に位置している。既に開墾時に削平を受け、わずかに西壁下の周溝部分を残しているだけである。周溝は現存長 1.48m、深さ 8cm を測る。遺物の出土はない。

掘立柱建物 (SB)

柱列の並ぶ柱穴群を多く検出したが、掘立柱建物として構成し得たのは 1 棟だけである。但し、大規模な柱穴も多く存在しているので他にも存在することは確実である。

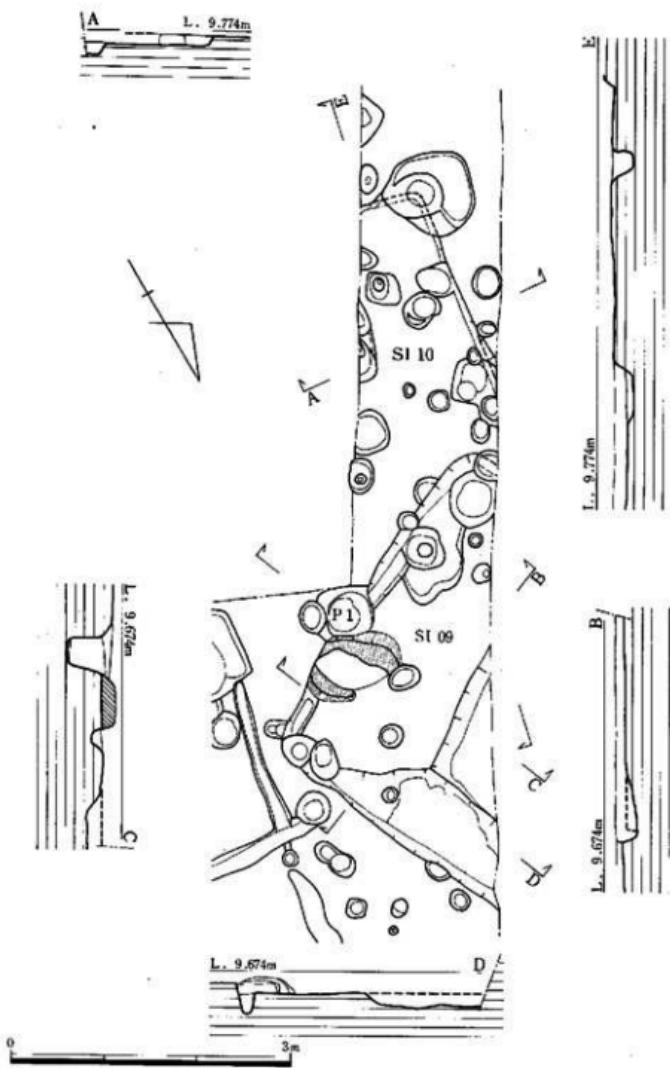


Fig. 37 住居跡SI10, 10 (1/60)

SB01 (Fig. 40, PL. 27)

調査地の北西側、標高10mを測る位置にある。隣地との境界部分に存在するため全形は確認できなかった。柱穴の組合せから、2通りの形態をもった建物が推測できる。ひとつは主軸方位をN19°Eに置いた梁行2間以上×桁行2間以上の建物である。又、もうひとつはP4～P8の桁行間に間柱と考える柱穴も存在していることから、主軸方位をN81°Wに置いて、桁行に2本の間柱を有した梁行2間×桁行2間以上の建物とも考えられる。柱穴の規模は径60～80cm、深さ60～80cm、柱根は径20cm前後、深さ70～80cmを測る。柱穴の覆土は、いずれも黒褐色粘質土であった。遺物はP6から須恵器の高杯脚片 (Fig. 45-3) が出土している他は全て細片であった。

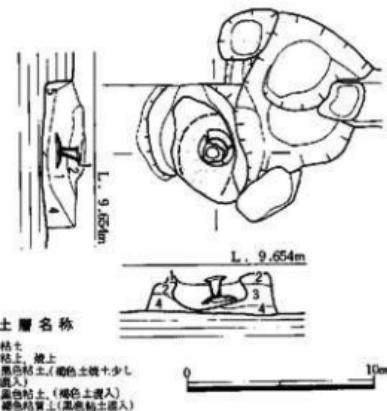


Fig. 38 住居跡SI09内かまど (1/30)

出土遺物

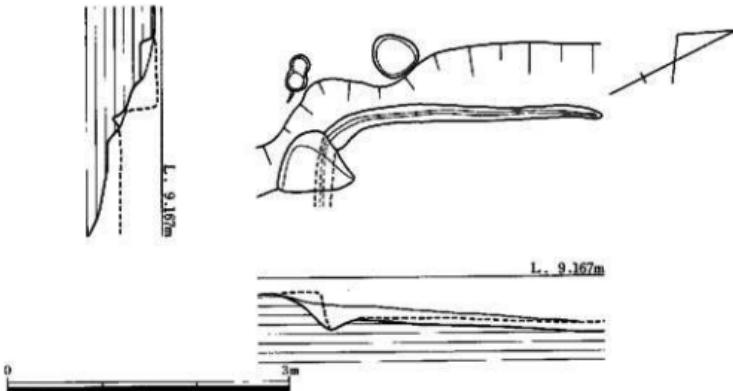


Fig. 39 住居跡SI11 (1/60)

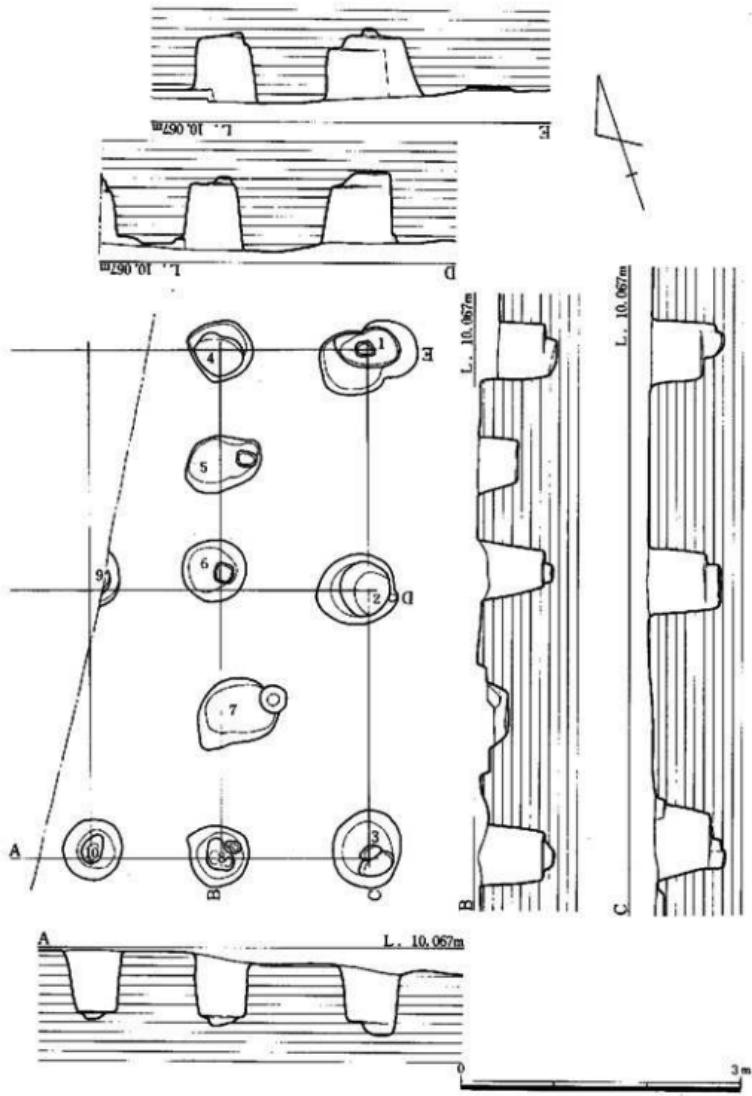


Fig. 40 拆立柱建物 SB01 (1/60)

単位: cm

	梁間	梁行間	桁行	桁間	桁行間	P	深さ	長径	短径
P1 P2	260	540	P1 P4	155		1	70	65	63
P2 P3	280		P3 P8	165	297	2	80	75	73
P4 P5	240	540	P8 P10	132		3	68	82	70
P6 P8	300					4	62	63	62
P9 P10	300					5	61	60?	58
						6	70	69	66
						7	90	83	69
						8	61	65	64
						9	60?	?	60?
						10	65	62	61
平均	276	540	平均	150.6	297?	平均	68.7	69.33	58.6

表5 SB01計測表

SI01出土遺物

土師器 (Fig.41, PL.34-8)

高杯（1） 脚径14cmを測る。脚裾部分は、くの字形に強く屈折し、内面に棱を形成する。筒部分の膨みは大きくなない。脚部は、内湾気味に開き、端部は細く仕上げる。筒部外面にはタテハケが施された後、ナデ消される。内面はヘラによるヨコ方向のナデが施される。色調は褐色を呈する。

SI03出土遺物 (Fig.41, PL.34-7)

土師器

高杯（2） 脚部を欠損している。杯部口径18cm、器高6cmを測る。底部と体部との境に緩い段を有する。体部はやや外湾気味で、直線的に開き、口縁端部を細く丁寧に仕上げている。器面の摩滅のため調整は不明だが、外面部下位にタテ方向のハケの痕跡が認められる。胎上は精選されており、色調は暗い黄褐色を呈する。

SI07出土遺物 (Fig. 42-1~5, PL.34)

土師器

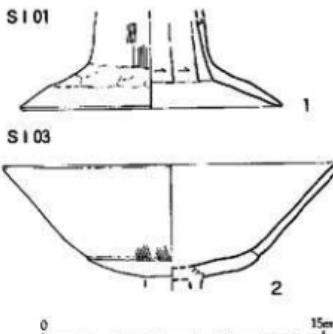
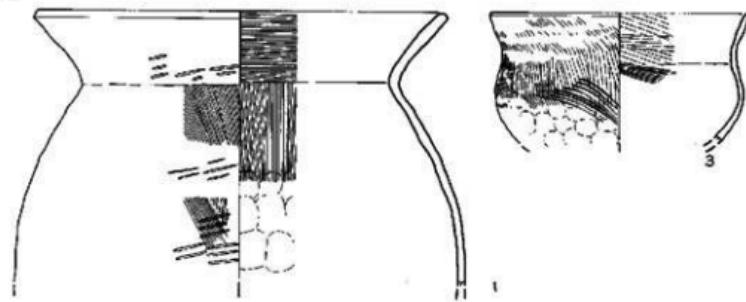
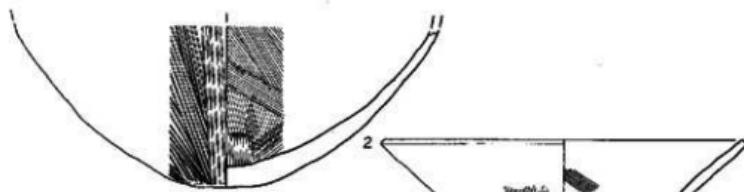


Fig.41 住居跡SI01, 03出土遺物(1/3)

S1 07



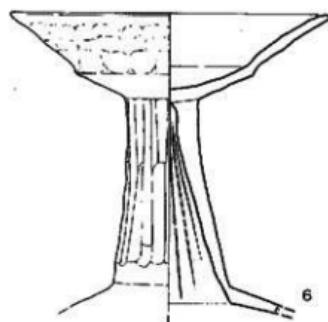
2



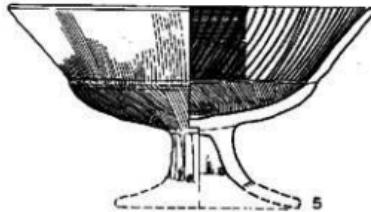
2

1

S1 09



6



5



Fig. 42 住居跡S107, 09出土遺物 (1/3)

壺形土器（1, 2） 1は口径22cmを測り、胴部下半を欠いている。口縁は外反し頸部内面に有す。口縁端部は丁寧に仕上げ、稜を有する。胴部は卵形を呈し、やや長胴化した器形であろう。胴部外面上位はタテ方向のハケ調整を施す。下半は摩滅のため不明である。頸部及び胴部に3本単位以上のタタキがヨコ方向に施されている。口縁内面はヨコ方向のハケが、胴部はタテ方向のハケ調整が施される。淡黄褐色を呈する。2は尖り気味の丸底を呈し、卵形の胴部を有すると思われる。外面にはタテ方向の粗いハケを、内面は細かいハケ調整を、タテ、ナナメ方向に施す。胎土、調整から、1と同一個体と考えられる。

小型丸底壺（3） 口径14cm、現存高6.8cmを測り、底部を欠いている。口縁は小さく外反し、端部は尖り気味で、最大径を口縁部に有している。胴部はやや扁平な球体を呈する。口縁内外は、粗いナナメ方向のハケを施した後、ナデ消している。胴部外面上位は、タテ方向の粗いハケを、内面上位には、ヨコ方向の細かいハケを施す。淡茶褐色を呈する。

高杯（4, 5） 4は脚部を欠いている。口径は20cm、杯の器高5.8cmを測る。杯の底部は丸底を呈し、体部との境は段を持つ。内面に緩い稜を有す。体部は大きく外反するが、口縁端部はやや内湾する。外面はタテ方向の細かいハケを施し、ナデ消す。内面は体部にタテ、ナナメ方向の細かいハケ調整を、底部はタテ方向の丁寧なハケを施している。褐色を呈するが、二次熱を受け一部赤変する。5は口径19.7cm、杯高6.5cmを測る。脚部縁を欠いている。4と同様な作りで、口縁端部は軽く外反している。又、底部との境である内面の段は、4よりも甘い。脚は低く裾が外へ長く開いた器形であろう。口縁（体部）内面には、タテ方向にヘラ描きの暗文を施す。脚の箇部内外は、タテ方向のハケが認められる。色調は褐色を呈すが、二次的な熱を受け、赤変する。

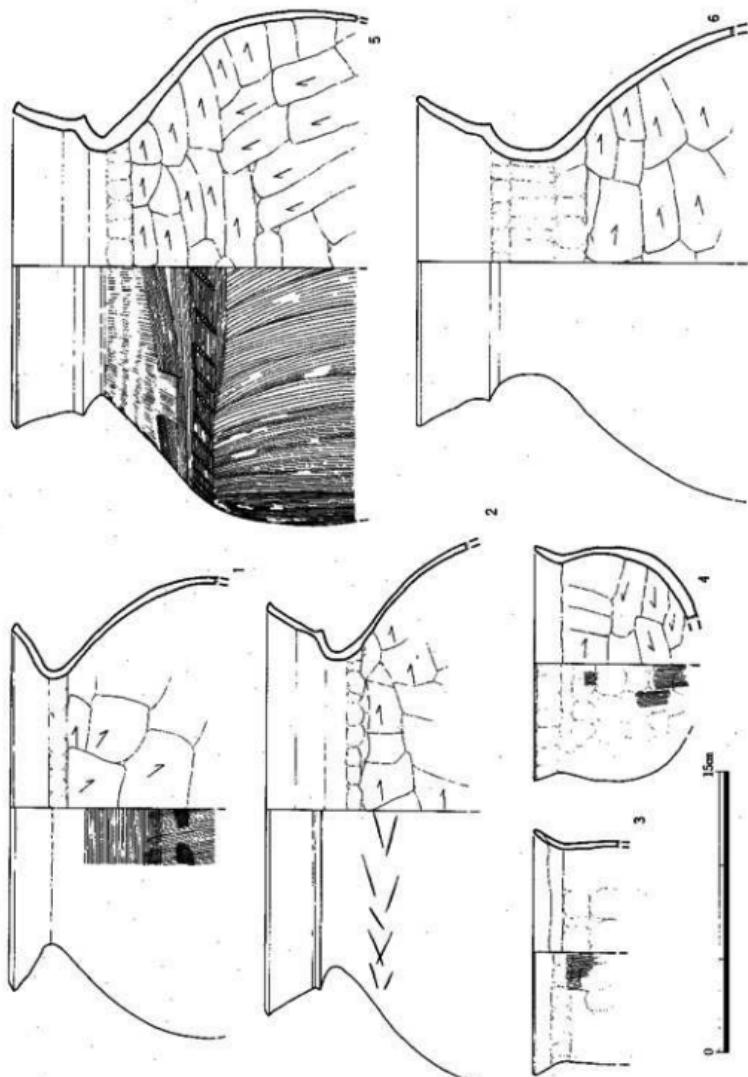
SI08出土遺物 (Fig. 43-44, PL.35)

土師器 (Fig. 43-1~6, Fig. 44-7~10)

壺形土器（1, 10） 1は口径19.6cm、現存高11.0cmを測る。胴部下半を欠損している。口縁は内湾気味に外反し、端部は上下にややつまみ出して平坦にする。胴部はやや肩の張った卵形を呈する。胴部外面上位はヨコ方向のハケを、下位にタテ方向のハケを施す。胴部内面はヘラ削りである。灰白色を呈し摩滅著しい。10は壺形土器1に比べ、器壁も厚く、作りが雑である。底部を欠いており、口径17.8cm、現存高30.5cmを測る。口縁部は緩やかに外湾し、端部は丸味をもつ。胴部は最大径を中位にあって長胴形である。外面はナデ調整だが、部分的にタテ方向の粗いハケが施される。下位には、ヨコ方向のタタキ痕が認められる。内面は、タテ方向のヘラ削りである。色調は暗黄土色を呈し、下位は黒変する。

壺形土器（2, 5, 6） いずれも二重口縁を有する。2は口径22cmを測る。口縁の段は強く張り、断面三角形を呈する。口縁端部は下方へつまみだして平坦にする。肩の張った大きな胴部で、肩部にヘラ描きの羽状文を施す。胴部内面はヘラ削りを施す。色調はやや暗い灰色を呈する。

Fig. 43 住民井S108出土遺物 (1/3)



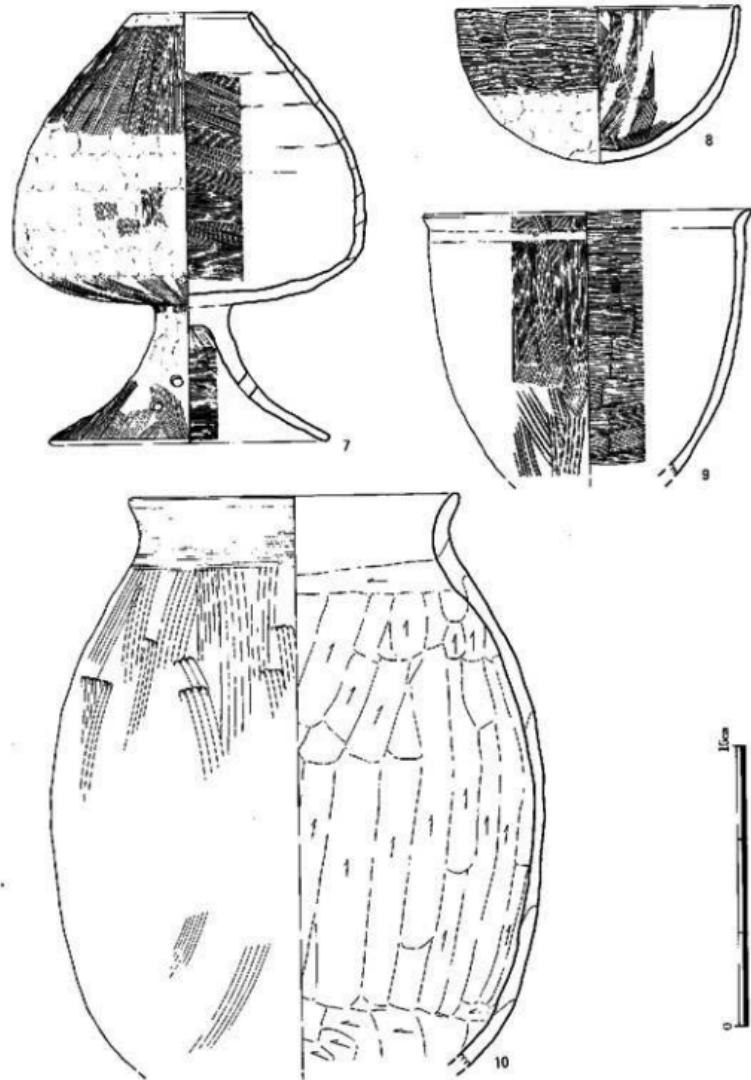


Fig. 44 住居跡SI08出土遺物 (1/3)

5は口径17.5cm、現高18.5cmを測る。口縁の段は強く屈折し、立ち上りはかるく外反する程度で、端部は下方につまみ出して平坦にする。胸部は肩の張った卵形を呈し、外面はタテハケを施し、頸部から肩部まではナデ消している。更に肩部には、ヨコ方向のハケを施し、貝殻腹縁によるナナメ方向の刻み目を施す。肩部以下のハケの方向は、胸上位のハケの方向と相違する。内面胸部はヘラ削りである。色調は黄灰色を呈する。6は口径17.6cm、現高17.0cmを測る。口縁の外反は強くない。端部は丸味をもっているが、これは摩滅のためかもしれない。頸の屈折は2、5に比べて緩慢である。肩ははらない。摩滅が著しく、色調は灰黃白色を呈する。

小型丸底壺 (3, 4) 3は口径13cmを測る。口縁は小さく外反し、端部は丸味をもっている。頸部内面に稜を有す。胸部は余り張らない器形である。外面にはタテ方向のハケが施される。色調は淡黄褐色を呈している。4は底部を欠いているもので、口径12.5cm、現存高8.7cm、推定高9.2cmを測る。頸部内面に稜を有し、口縁は小さく外反する。端部上面は小さく平坦にする。胸部は丸く球体を呈する。胸部外面にはタテ方向のハケ痕が残り、内面はヘラ削りである。色調は淡黄褐色である。摩滅は著しい。

高台付無頸壺 (7) 完形品である。口径6.5cm、器高15.6cm、脚径15cm、脚高7.4cmを測る。口のそばまた三角フラスコ形をした無頸壺で、口縁端部はやや外反し、丸味をもっている。脚は大きく開き端部は稜を有する。外面上位はタテ方向のヘラナデを丁寧に施す。胸部下位と底部は細かいハケを施す。口縁内面周辺はヨコナデ調整を、下位はヨコハケ調整を施す。脚の外面はタテハケ調整を、内面はヨコ方向のハケである。しばり痕がある。色調は褐色を呈する。脚に径8mmの孔を二孔施している。

椀 (8) 器形は楕円形である。図上復元したもので、口径は14~15.2cmを、器高8.3cmを測る。体部は半球体を呈し、口縁部は直立し、端部は丸味をもっている。外面上半には、5本単位のタスキがヨコ方向に施される。内面はタテ方向のハケが施されるが、更にヘラ状の工具で、タテ方向にナデ消している。色調は淡黄褐色を呈し、一部分黒変する。

鉢形土器 (9) 底部を欠いている。口径17.5cm、現存高14.2cmを測る。口縁は小さく外反し、端部は丸味をもっている。内面には稜を有する。胸部はあまり張らず、碗形を呈している。内面にはヨコ方向のハケを、外面は胸部下部迄タテ方向のハケを施す。下位は板状工具による引摺き状の整形である。淡茶褐色を呈し、一部分黒変する。

SI09出土遺物 (Fig. 42-6, PL. 34)

土師器

高杯形土器 (6) カマドの支脚として用いられたもので、脚部部分を欠いている。口径17.2cm、杯高4.8cm、現存高16cmを測る。杯は体部に段を有し、口縁は大きく外反するが、容量は浅い。端部は細く仕上げる。脚は高く筒部が開かない。脚部は大きく開き、筒部との境は内外に明瞭な段を有する。摩滅しているが、杯部内外はヘラナデが認められる。又、脚の筒部外面

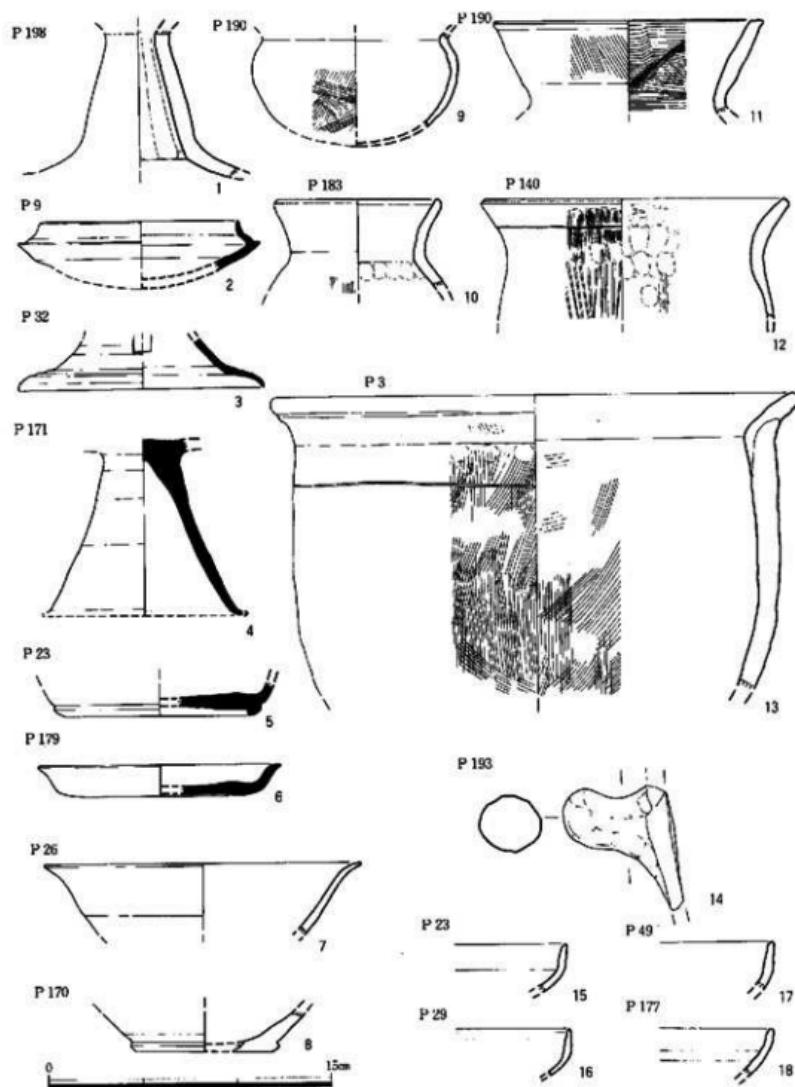


Fig. 45 Pit 出土遺物 (1/3)

にはヘラによるタテ方向の丁寧なナデを施している。内面はヨコ方向のヘラ削り調整を施す。色調は褐色を呈する。

Pit出土遺物 (Fig. 45)

土師器

高杯（1） P198出土。杯部、脚裾を欠いている。筒部分はやや膨らみ、脚裾は大きく開く。内面に強い稜をもつ。筒部内面はヨコ方向のヘラケズリを行なう。明茶褐色を呈する。

小型丸底壺（9, 10） 9はP190出土。半球体を呈した体部に外反した口縁が付く。外面にはヨコ、ナメ方向の粗いハケが施される。外面は褐色を内面は茶褐色を呈する。10はP183出土。口径8.6cmを測る。頸部内面に強い稜を有し、II縁は緩く外反し、端部はやや内湾する。胴部外面には、わずかにハケの痕跡がある。色調は茶褐色を呈する。

甕形土器（11, 12, 13） 11はP190出土で9と共伴する。口径14.5cmを測る。頸で強く屈折し、やや内湾気味に外反する。端部はつまみ出して、上面を平坦にしている。口縁は肥厚する。暗茶褐色を呈する。12は口径28cm、現存高15.7cmを測る。口縁は小さく、強く外反する。内面に稜を有し、端部は丸味を帯びる。胴部内外にタテ、ヨコ方向の粗いハケ調整を施している。色調は茶褐色を呈している。13はP140出土。小型の甕で口径16.5cmを測る。II縁は緩く外反し、内面に稜をもたない。頸部の器壁は厚い。外面にタテ方向のハケを、内面にはヨコ方向のハケを施す。色調は黄土色である。

把手（14） 端部が上反りの形状で、断面は円形を呈する。「寧なナデ仕上げ」が施される。色調は暗黄褐色を呈する。

須恵器

杯身（2） P9出土。口径10.8cmを測る。蓋受けは小さく、かえりの長さ1.5cmを測り、内傾する。器壁は薄い作りである。灰色を呈する。

高杯（3, 4） 3はP32出土。脚裾部分である。脚径13.2cmを測る。開いた脚で、裾はやや内湾する。内面には軽く段を有し、脚裾端部は下方につまみ出して尖がらせている。筒部には幅1cmを測る透しが4ヶ所、切り込まれる。4はP171の出土。杯部、脚端部を欠いている。開いた脚に、小さく水平に屈折した脚端部が付く。外面には縁味を帯びた灰白釉が1/3ほど付着している。色調は灰色を呈している。

皿（5） P33出土。高台径6.5cmを測る。小さく低い高台である。体部の立ち上りは強い。色調は灰色を呈する。

皿（6） P179出土。II径13.0cm、高さ1.7cmを測る。体部は丸味を持って立ち上り、口縁は外反する。端部を細く仕上げている。ナデ調整を施しており、灰青色を呈する。器形からみて、蓋の可能性もある。

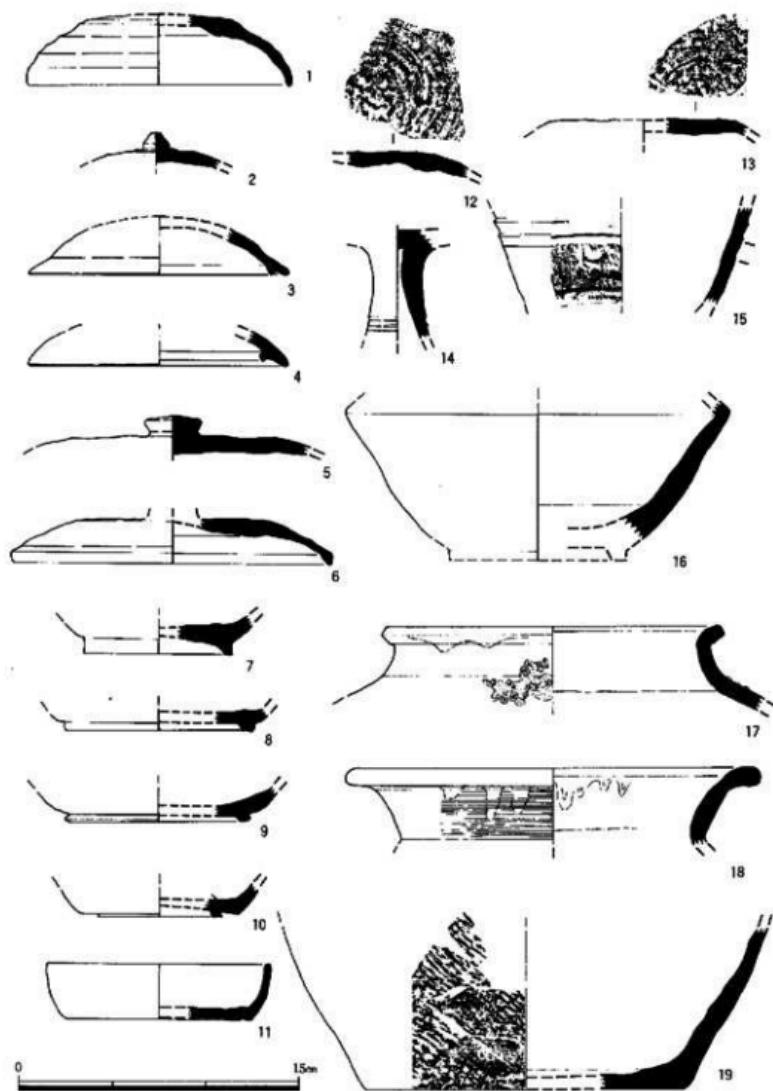


Fig. 46 遺構面及び包含層出土遺物 (1/3)

青 磁

椀（7, 8） 7はP36出土。口径17cmを測る。体部は丸味を持ち、口縁は外反する。口縁部は薄く仕上げる。釉は薄目で内外に施され、細かい貫人が認められる。釉は暗いうぐいす色を呈する。8はP170出土。底径7.6cmを測る。底部はやや上げ底気味で外面は張り出し、軽い稜を有している。釉は内面に施されるが風化のため、剥落が著しい。胎土は灰青色を呈し、釉は緑黄色を呈している。

瓦 器

椀（15～18） いずれも口縁部の破片である。推定口径は、15が14cm, 16は16cm, 17は16.2cm, 18は13.2cmを測る。15はP23, 16はP29, 17はP49, 18はP177出土である。

造構面及び包含層出土遺物 (Fig. 46～50, PL. 36～38)

弥生式土器 (Fig. 48-23, 59)

壺形土器（23, 59） 23は幅2cmの扁平な突帯を貼付け上面にヘラ描きの浅い斜格子文を施す。灰褐色を呈する。59は平底を呈し、胴部の立ち上りは強い。外面はタテハケを施す。黄褐色を呈する。弥生時代前期の壺形土器である。外底面に粗痕がある。

須恵器 (Fig. 46, 47-20)

杯蓋（1～6, 12, 13） 1は口径16.2cm, 器高3.8cmを測る。天井部と体部の境は段をもっている。体部は丸味をもち、口縁端部内面にかえりをもたない。天井部にヘラ削りを施す。削りの方向は時計回りである。暗青灰色を呈する。2は天井部が丸味をもち、宝珠形つまみを有す。ナデ調整を施し、灰色を有する。3は口径12cm, 口縁端部径14cmを測る。体部は丸味をもち、口縁はやや外反する。丸味をもった口縁端部内面には、断面三角形を呈した小さなかえりを有す。かえりは口縁端部より下に出ない。色調は茶褐色を呈す。4は口径11.2cm, 口縁端部径は13.8cmを測る。3と同じく口縁端部内面にかえりをもつ。かえりは小さく、端部は外反する。口縁端部より下に出ない。体部は丸味をもち、器壁は厚い。灰色を呈する。5と6は天井部に擬宝珠形のつまみを有す。6は口縁端部を下につまみ出して、外面を平坦にしている。ナデ調整が施される。5は灰白色を、6は灰色を呈する。12, 13は天井部にヘラ記号を施している。体部との境はかるい段を有す。12の天井部はヘラ削りを行っている。13は暗青灰色を、12は灰青色を呈す。

杯（11） 口径12cm, 器高3cmを測る。底部はヘラ切り離しでやや上げ底である。体部は内溝して立ち上がる。口縁は直口する。暗い灰色を呈する。

高台付杯（7～10） いずれも高台を貼付ける。7は高台径8cmを測る。やや外へ張った細い高台である。底部の器壁は厚い。8, 9, 10はいずれも低い高台である。高台径は8が10.3cm, 9が10cm, 10が6.6cmを測る。9の高台は外へ張っており、体部は丸味をもって立ち上る。10の体部は底部との境に強い屈折をもって立ち上がる。高台は外へ張っているが、底部端から1.3

cmばかり内側に貼付けている。杯では無く壺、瓶などの底部とも考えられる。8は青灰色を、9は灰白色を、10は灰青色を呈する。

高杯 (14) 杯部、脚下半を欠損している。現存高5.7cmを測る。脚中位に2条の沈線を巡らしている。外面ナデ調整である。灰色を呈する。

鉢形土器 (15) 口縁部と底部を欠いている。上位の径13.9cm、下位の径10.4cmを測る。下位に1条、上位に2条の低い突帯を巡らす。突帯間には波状文を施している。又、上位の突帯直下には、把手の貼付痕が認められる。ジョッキ形土器の可能性がある。胎土は精選され、灰色を呈し、焼成は非常に良好である。

長頸壺 (16) 底部及び頸部以上を欠いている。体部は外へ開いて立ち上り肩部は逆くの字形に内傾する。肩の張った壺器である。最大径27cmを測る。暗灰色を呈する。

広口壺 (19) 底部の破片で、底径15cmを測る。外面はナナメ方向に粗い格子目タスキが施される。底部の周辺は幅6cmに渡ってヨコナデ調整が施される。胎土に微砂を含み、焼成はやや弱い。暗灰色を呈する。

変形土器 (17, 18, 20) 17, 18は器壁外面にフジツボと思われる貝殻が付着している。17は口径18.5cm、頸部は内傾し口縁は小さく外反する。口縁端部は断面“コの字”形に仕上げる。肩が張る胴部を有する。暗灰青色を呈する。18は口径22.2cmを測る。口縁はゆるく外反する。端部は肥厚し、丸味をもっている。口縁外面にはヨコ方向の粗いカキ目が施される。外面に自然釉がかかっている。風化剥落が著しい。暗灰色を呈する。これらの壺は貝殻の付着から見て、長期間海辺の作業に使用されたことが想像される。20は大型の壺で、口径42.4cmを測る。

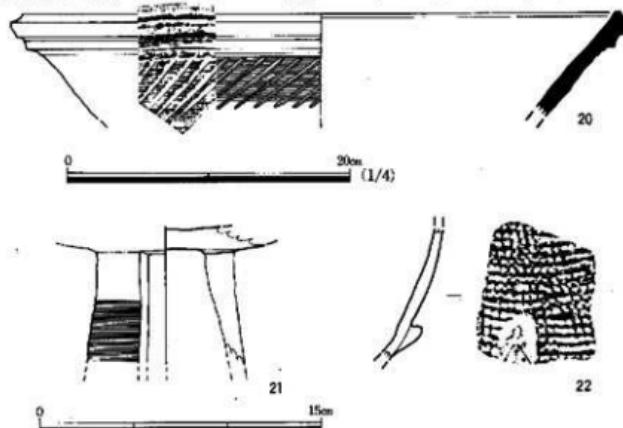


Fig. 47 遺構面及び包含層山十遺物 (1/3), (1/4)

口縁は強く外反し、端部は外面を肥厚させる。口唇部は指によって沈線を施す。口縁直下に三角突帯を貼付ける。突帯の下には長さ 9.2cm、幅 6mm を測るヘラ描きの条線文を等間隔でナナメ方向に施している。色調は暗青灰色を呈する。17は炻器質である。

赤焼土器 (Fig. 47-21, 22)

高杯 (21) 脚部の一部を残しているので、脚の上位径 7.4cm、下位径 8.4cm を測る。脚はあまり開くものではない。タテ方向に幅 2.8cm を測る透しが 1ヶ所設けられ、脚中位にはヨコ方向のカキリが施される。外面ヨコナデ調整を施す。胎土に微砂を含み、淡褐色を呈する。焼成は弱く摩滅している。器台の可能性もある。

甕形土器 (22) 器壁は 6mm を測り、外面には格子目タタキを施す。体部は丸味をもっており、長さ 2cm の上向きにとがった小さな耳がついている。内面はヨコナデ調整である。砂粒を少量含み、焼成は良好である。褐色を呈する。南朝鮮の赤焼土器である。

土師器 (Fig. 48-23~45, Fig. 49-46)

高杯 (24, 25) 杯部、脚裾を欠いている。脚は余り開かない。25は脚中位がやや膨らんでいる。24は外面をタテ方向にヘラナデ調整されている。24は褐色を、25は黄褐色を呈する。

器台 (26) 大きく開いた脚で、端部は小さく外反するものであろう。胎土、調整とともに丁寧な作りである。黄灰色を呈する。

杯 1 (27, 29) 27は口径 13.4cm、器高 7.1cm を測る。底部は平底状をなし、体部は丸い。口縁は強く内傾し、端部に稜を有す。外面にヨコ、ナナメ方向のハケ調整を施す。淡褐色を呈す。29は底部を欠くが、半球体の体部を有す。口縁端部は尖り、やや内傾する。外面下位はヨコ、ナナメの粗いハケを施す。

杯 2 (43) 糸切り底である。口径 15.6cm、器高 4.0cm を測る。体部は高く大きく開く器形である。色調は黄褐色を呈する。

皿 1 (36) ヘラ切り底で、口径 11cm、器高 2.0cm を測る。体部は丸味をもつ。色調は褐色を呈する。

皿 2 (39, 40) 39はヘラ切り底である。口径 10cm、器高 1.1cm を測る。ナデ調整である。灰白色を呈する。40は口径 11cm、器高 1.0cm を測る。切り離し方法は不明。灰白色を呈する。

皿 3 (38) 口径 6cm、器高 1.7cm、底 5.0cm を測る。糸切り底で、体部はかるく外反する。淡褐色を呈する。

椀 1 (32, 35) 高台を有す。やや外へ開いた高く、細い高台を有する椀である。高台径は 32 が 8cm、35 が 6.8cm を測る。底部はヘラ切り離してある。32 が淡褐色を、35 が褐色を呈する。

椀 2 (44, 45) 高台を有す。いずれも口縁部を欠いている。体部は丸味をもっているが立上りは強い。44 は高台径 8cm を測る。外へ強く張った高台で、器壁は厚い。45 は高台径 7.4cm を測る。44, 45 は茶褐色を呈している。

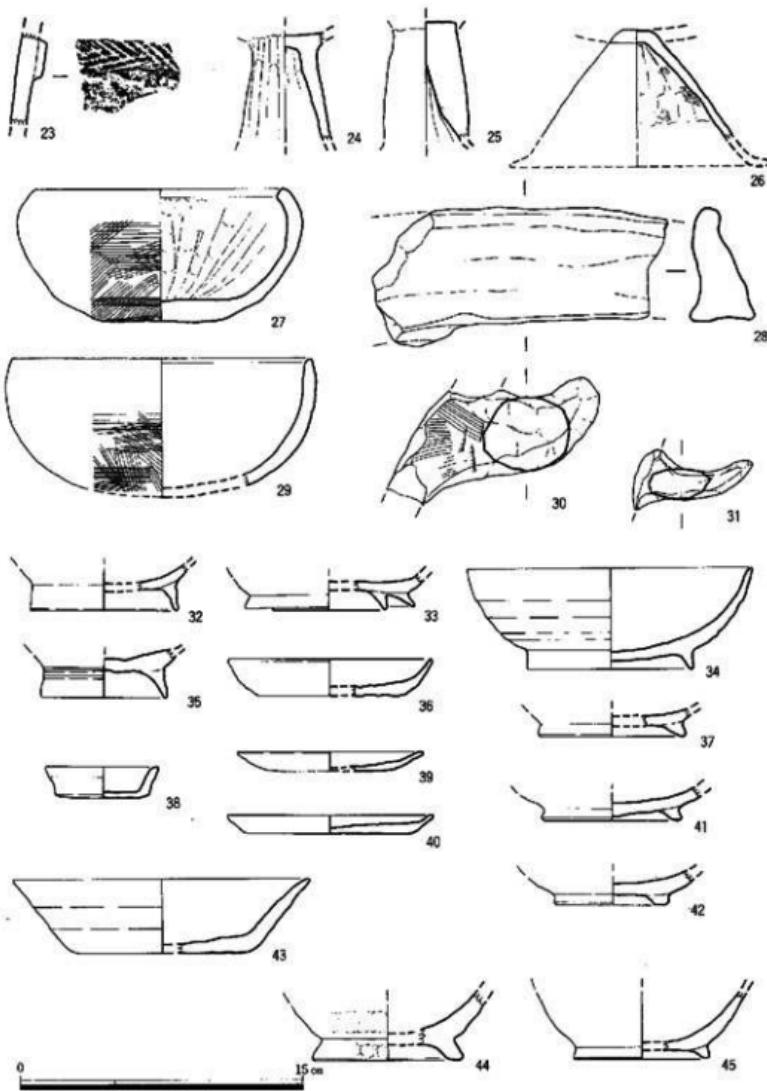


Fig. 48 遺構面及び包含層出土遺物 (1/3)

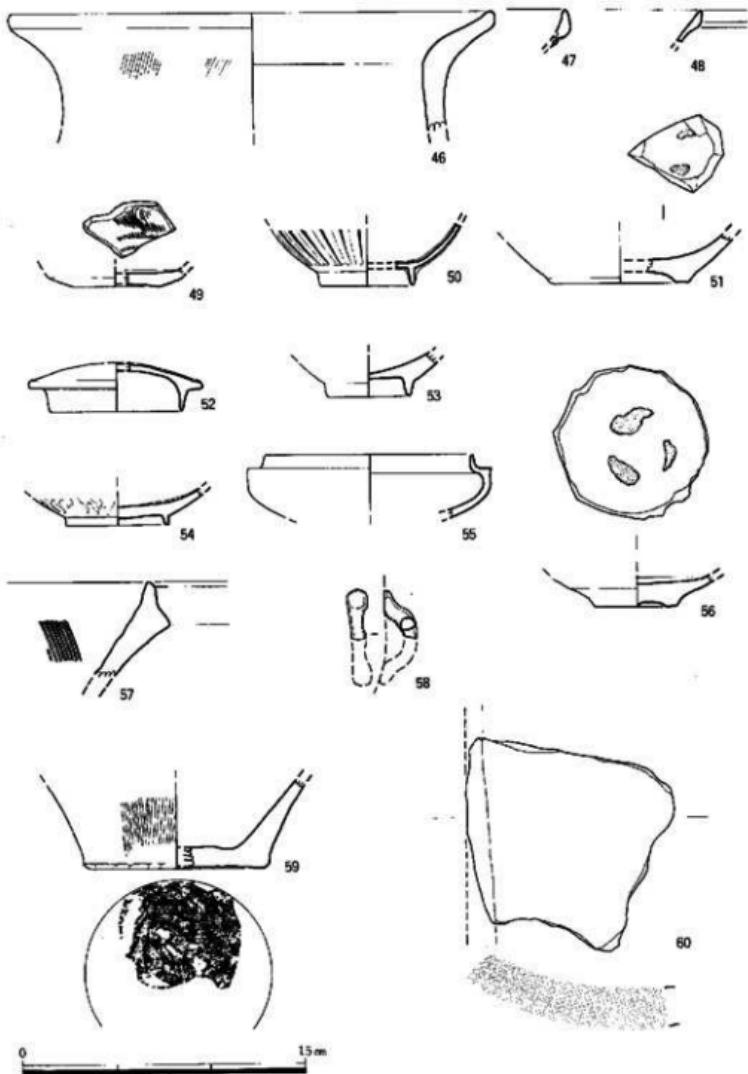


Fig. 49 遺構面及び包含層出土遺物 (1/3)

椀3 (34) 完成品である。口径15.4cm、器高5.5cmを測る。体部は丸みをもって立ち上がるが、外面に粘土紙の巻き上げ成形痕を残している。細く高い高台を有する。内面は黒色研磨を施す。外面は灰黄白色を呈する。内黒の椀である。

椀4 (33, 37, 41, 42) 33は二重の高台を有し、外側の高台径9.2cm、内側の高台径6.2cmを測る。高台は外へ強く張った、細く尖った高台を貼付ける。内面は黒色研磨が施される。37、41は外に張った断面三角形に近い高台を有する。内面を黒色研磨している。高台径は37が8cm、41が7.5cmを測る。37は外面摩滅しており、茶灰色を呈する。41は内外黒色である。42は外へ張った低い高台を有する。内面は黒色研磨している。内外黒色を呈する。いずれも黒色研磨土器である。

甕形土器 (46) 口径26cmを測る。口縁は内湾気味に大きく外反する。口縁端部は丸味をもつ。外面にタテ方向のハケ痕がある。色調は灰黄色を呈する。

カマド形上器 (28) 移動式カマドの鉢と考えられる。残存長15.7cm、幅6.3cmを測る。接合部分は厚く、端部は薄く引き伸ばし、丸味をもたせ上向きに仕上げる。淡褐色を呈する。

把手 (30, 31) 31の断面は径4.5×4cmを測る。梢円形を呈し端部は上反りさせる。貼付けによる接合である。小型の甕の把手であろう。30は挿入による接合である。

白磁 (Fig. 49-47, 48)

椀 (47, 48) 47は大きな玉縁を、48は小さく薄い玉縁を有する口縁である。48の玉縁には段を有する。釉色は47が青味をもった白色、48が灰白色を呈する。

青磁

小椀 (50, 53) 50は高台径5cmを測る。細く高い高台を有し、体部は丸味をもつ。外面には錦運弁を施す。釉は厚目に外底部迄施し、疊付はカキ取っている。暗緑灰色を呈する。53は高台径4.5cmを測る。高台は高く仕上げ、体部の立ち上がりは強い。釉は厚目に外底部迄施され、疊付はカキ取られる。釉色は暗茶褐色を呈する。

椀 (51) 高台径7.5cmを測る。高台内面を浅く削り、外面は体部との境にわずかに段を有す。釉は薄目に高台外面迄施す。内底の見込みと高台疊付に目痕がある。釉は灰緑色を呈する。越州窯系の椀である。

皿 (49) 底径5.8cmを測る。体部と口径部の境に段を有す。釉は薄目で、外底部はカキ取られている。内底には猫描き文を施す。釉は灰緑色を呈する。同安窯系の皿である。

合子 (55) 口径11cmを測る。体部は丸味をもつ。受け部は水平に仕上げ、かえりの立ち上りは長さ8mmを測り、やや内傾する。釉は全体に施され、淡灰緑色を呈する。釉の風化剥落は著しい。

天目 (PL-37) 破片が1点出土している。釉はやや厚目に施し、飴色を呈している。

陶 器

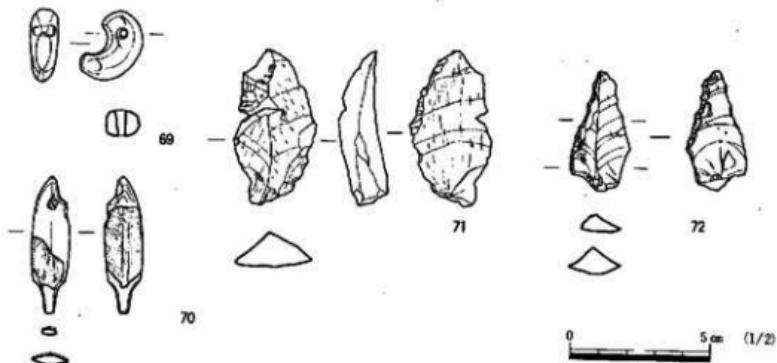
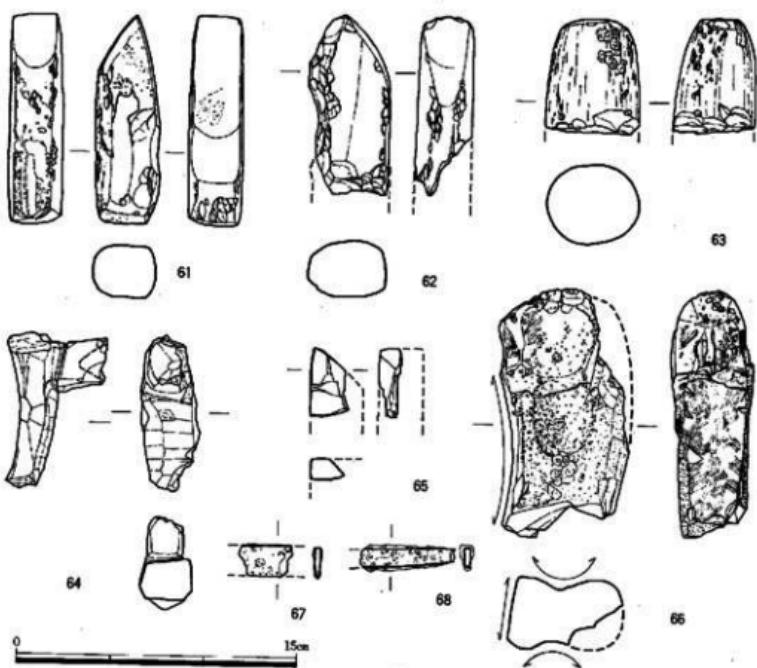


Fig. 50 造構面及び包含層出土遺物 (1/3), (1/2)

蓋 (52) 推定口径7.2cm、口縁端部径9.2cmを測る。天井部は丸味をもち、つまみを有する器形であろう。口縁部は水平に引出し、かるい稜をもっている。かえりは細く高いもので、推定長1.2cmを測る。釉は天井部外面にやや厚目に施される。胎土に細い砂を含む。釉は黒緑色を、胎土は黒褐色を呈している。国産陶器である。

椀 (54, 56) 54は外に張った低く細い高台を有し、高台径5.5cmを測る。体部は丸味をもち、底部の器壁は厚い。釉は外底部迄施されるが、疊付はカキ取っている。釉の厚さは一定ではなく、内底見込みに釉が溜っており、外面は流れている。釉は内底が鉛色を、外面はくすんだ緑灰色を呈する。国産陶器で、肥後地方産と思われる。56は径が小さく低い高台で、高台径4.5cmを測る。高台外面をナメに、内底はナメに浅く削っている。釉は薄目で外面の体部下位迄しか施されない。内底見込と疊付には3か所の凹痕がある。釉は淡灰緑色を呈する。絵唐津である。

耳 (58) 厚さは径8mm×7mmを測る。断面は橢円形を呈し、透明釉が薄くかかっている。胎土は精選されており、焼成は良好である。

褐釉陶器

摺鉢 (57) 体部が大きく開く器形である。口縁端部を肥厚させ、さらに上端をつまみ上げて、断面三角形状の口縁を形成する。内面には8本単位の条線を施す。外面は茶褐色、内面は暗青灰色を呈する。備前焼の摺鉢である。

瓦類

平瓦 (60) 厚さ約2cmを測る。側辺はヘラ切り落としのままである。上面には布目痕が残る。摩滅している。2次的に熱を受け暗赤褐色を呈する。

石器 (Fig. 50, PL. 38)

各地点出土の遺物をまとめて報告する。

石斧 (61~63, 65) 3は始刀石斧の基部で、現存長6cmを測る。断面は径5cm×4.2cmを測り、橢円形を呈す。研磨整形は完了しているが、部分的に敲打痕を残している。凝灰岩質で気泡が多い材である。61, 62, 65は抉入石斧である。61は長さ11.2cm、幅3.5cm、厚さ2.8cmを測る。左側辺に敲打痕を多く残し、基部には打裂痕を残している。刃部の研ぎ出しが完了している。J型岩製である。62は基部を欠損し現存長9.5cm、幅4.3cm、厚さ3cmを測る。研磨整形を完了しているが、右側辺に敲打痕、打裂痕を残している。又、欠損後再加工のため抉入部分と刃部に再度打撃が加えられている。風化しており、凝灰岩質の材と思われる。65は刃部片である。現存長3.7cm、現存幅1.2cmを測る。研磨整形は完了している。B面に再調整の研磨が認められる。頁岩製である。

磨製石錐 (70) 長さ4.9cm、最大幅1.3cm、茎子長1.1cmを測る。体部は卵葉形を呈し、切先は鋭い。A, B面の錐は弱く、断面レンズ状を呈する。表面の剥落著しい。粘板岩製である。

砥石 (66) 下半を欠損しており、現存長13.2cm、幅6.5cm、厚さ3.9cmを測る。左側辺を砥面として利用している。A、B面は敲打による凹みがある。凹石として利用された可能性がある。上小口は敲打面取りし、下小口には破損後一部に研磨を加えている。泥岩製である。

ナイフ型石器 (71, 72) 71はP200出土。72はSI101出土。71は長さ5.5cm、最大幅2.8cmを測る。72は長さ4.3cm、最大幅1.9cmを測る。いずれもB面に打瘤を残した断面三角形を呈した剝片を利用している。71は左縁辺の一部に表裏面から剥離調整を加える。気泡の多い材質で、サメカイト製である。72は左縁辺を表裏面から剥離調整を加えている。黒曜石製である。

勾玉 (69) 長さ2.6cm、厚さ0.7cm~1cm、孔径0.4cmを測る。C字形を呈し、頭部はやや幅広である。孔は一方向から穿孔している。研磨は雑で一部成形痕を残す。色調は乳白色で一部淡青色を呈する。硬玉製である。

滑石製品 (64) 石鍋片を再利用するもの。把手の部分を残した石鍋片の上下を断ち割って利用している。現存長8.5cm、現存幅3cm、厚さ2cmを測る。両側辺を面取りし、右側辺は研磨が完了。左側辺の研磨は一部だけである。方形の把手の基部には浅い溝が彫られる。又、上面には断面円錐形の凹みをつける。A面にはタテ長の削りを残す。B面は再加工時の削り痕がある。色調は淡灰緑色を呈する。

鉄器

刀子 (67, 68) 67は刃部片で、現存長3cm、幅1.8cm、最大厚0.3cmを測る。背部は丸味をもっており、刃部は両刃である。68は茎子片である。現存長は5.1cm、幅1cm、厚さ0.3~0.4cmを測る。断面は丸味をもった長方形を呈する。背部がやや厚い。茎部は若干欠いている。

小結

削平が著しいことや狭い調査範囲であったため充分な遺構の検出はできなかった。検出遺構は住居跡11軒、孤立柱建物1棟である。これらの遺構上面には暗茶褐色粘質土層、又は黒褐色粘質土層が覆っており多くの遺物を包含している。遺物は弥生時代から近世の陶磁器遺を含んでいるが、黒褐色粘質土層からは染付及び近世の陶磁器は検出されない。中近世の遺構は暗茶褐色粘質土の覆土で、黒褐色粘質土層上から掘り込んでいる。暗茶褐色粘質土層に古唐津などの近世の陶磁器類を含んでいるところから近世の古い段階に形成されたものと考えられる。以上の包含層から山上した遺物の内で特徴的なものとして朝鮮の陶質土器、具殻を器面に付着させた須恵器の壺形土器、移動式のかまと片などが出土している。陶質土器と思われるFig46-15は青灰色を呈し、硬質で把手を有する土器である。ジョッキ型の器型であろう。Fig47-19, 20は赤焼土器で、褐色を呈した軟質の土器である。19は須恵器の赤焼土器と思われたが、脚部に縱長の透しが1ヶ所あるなど須恵器とは器形を異にする。20は格子目の叩きを外面に施し、口縁はくの字形を呈す。肩部に1対の耳を貼付けた壺形土器と思われる。これらの土器は南鮮南部で産出された金海式土器の範疇に入るものと思われる。Fig46-17, 18は貝殻を付着した須恵器壺形土器で、付着していた貝はフジツボの一種とみられ、土器の器形

から大形のタコを取るために用いられたものであろう。17は焰器質の上器で頸部が内傾し、口縁は角張った玉縁を作り、やや赤味がかった焼成である。須恵器としては疑問が残る。18は外反した口縁端部を丸く成形している。17, 18は須恵器の新しい時期に属すると思われ、11C～12C代の時期が考えられる。本遺跡は博多湾沿岸地帯に位置しており、こうした時期には大規模な漁労活動も行なわれていたのだろう。検出した遺構の内、住居跡は全て古墳時代に属している。住居跡の平面形は方形もしくは長方形を呈する。削平や境界地に位置しているため規模の確認はできなかった。この内ベッドを有するものはSI03, 04, 05, 08である。SI04, 05は構造から南壁にベットを有した同一の住居跡の可能性が強い。かまどを設けた住居跡はSI09だけである。かまどを付設した住居跡は裏の田道跡などで6C代に出現することが確認されている。有田遺跡では6C中頃～7C前半迄の住居跡が検出されている。SI09はかまどの支脚として用いた高杯から6Cの終りの時期が考えられる。又、移動式かまどへの移行は一般に8C代と言われており、かまどの破片の検出は、本遺跡で何時頃移動式のかまどへ移行するか。又第29次調査の結果、有川地区の中心部では律令時代に大規模な建物群が形成されることが予想されることから、これらの集落がどの地に営まれるのか今後の課題である。住居跡SI01, 03, 07, 08からは古墳時代前期に属した土師器が出土している。この時期の早良平野に於いては幾つかの編年が試みられている。それらの編年に基づいて分類に試みるとI類-SI07出土遺物、II類-SI08出土遺物、III類-SI03出土遺物に分類できる。I類の甕は外反した口縁端部を肥厚させ頸部内面に稜を有す。腹部は卵形を呈し、内外面にタテハケ調整を施し、外面上位に左下りのタタキを施す。小型丸底壺は口縁が長く、緩く外反し頸部内面に稜をもたない。内外面ハケ調整である。高杯は杯部の底部が丸く、体部との境は内外面に段を有す。口縁端部に稜を有す。高台は低く、緩く外反している。I類土器はいずれも在地性が強く高杯は宮の前期A期の高杯が変化したものと考えられる。調整はハケだけである。II類の甕は内凹気味に外反した口縁端部を上下につまみ出して平坦にし、胴部上位はヨコハケ調整を、内面はヘラ削りを施す。壺形土器は二重口縁を有し、口縁は余り開かない。頸部内面に稜を有するものと無いものがある。3, 4は肩部にヘラ描きの羽状文、又は貝殻模様による刻みを施しており、山陰系の土器と思われる。早良平野では原深町遺跡に出土例がある。小型丸底壺の口縁は小さく外反し、体部は球形である。頸部内面に稜をもち、胴部はヘラ削りである。II類に伴う鉢形土器、高台付無頸壺はハケ調整のみであり、壺の外面上位には粗い平行タタキを施しているなど古い要素が残っている。III類の高杯は、杯底部が丸をもち、体部との境は下位にあって外面に段を有している。I類の土器は在地系土器の要素を強く残しており、宮の前B期併行期を、II類は壺、甕、小型丸底壺の内面にヘラ削りを行なうが、壺、鉢形土器、無頸壺の成形に前段階の要素を強く残しているところから布留式土器の古期に併行すると思われる。III類はセット関係が不明確だが器型から有田1B期に位置づけられる土器である。前述の分類についてはセット関係が不明の部分が多く、今後の資料を待ちたい。

掘立柱建物はP 6より高杯 (Fig 45-3) が出土している。

註1. 福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告一X編」1973

註2. 武末純一「福岡県・早良平野の古式土器」古文化調査 第5集所収 1978

註3. 福岡市教育委員会「原深町遺跡」1981

3. 第28次調査

調査の概要

調査対象地は、福岡市西区有田1丁目20-2番地に所在する。発掘対象面積は179m²である。

当該地は有田地区では、台地中央部分の最高所近くに位置し、標高14m前後を測る。当該地は、昭和42~43年に九州大学考古学研究室が発掘調査した31街区の一部に該当する。31街区についてはその後、昭和52年に第6次調査が、昭和54年には第19次調査が実施され、弥生時代前期~中世の遺構、遺物が数多く検出されている。当該地は、第6次調査地の東に隣接し、又当該地の東側には第1次調査地が接するため、弥生時代の遺構が数多く存在することが予想された。昭和54年度の建築確認が申請されたことにより、発掘調査を実施した。

発掘調査は、昭和54年9月14日~10月2日迄実施した。層位的に観察すると、遺構面であるローム層は、表土下約45cmで検出される。しかし、東側の大部分の表土下は、約30cmの厚さの灰茶褐色粘質土となる。Fig.53で観察の通り、この層は西側ではローム層を切り込み、西から東にかけて段落ち状部分は幅広い範囲を占めている。土層内には、中世~近世の遺物を含んでおり、当初、遺構として考えられた。しかし、埋土の状態や地元の聞き取り調査によって、区画整理以前の畑作地の段落ちとして考えていいようだ。この畑作地の段落ちによって、溝1の北側と溝3の上面が削平を受けている。段落ち状内からは瓦質土器、施釉陶器が出土している。遺構は、弥生時代前期の溝1条、中世の溝1条及び中世の溝に付設すると思われる敷石遺構などを検出した。溝のSD01、SD03は、いずれも南北方向に長軸をとっており、遺構面の北側で交差する。敷石遺構は遺構面の北東側で、SD03の東側にみられるもので、土層及び検出状況からSD03に付設するものと考える。又、遺物は弥生時代前期の土器、石器、古墳時代の土器及び中世の雜器を多数検出した。

検出遺構

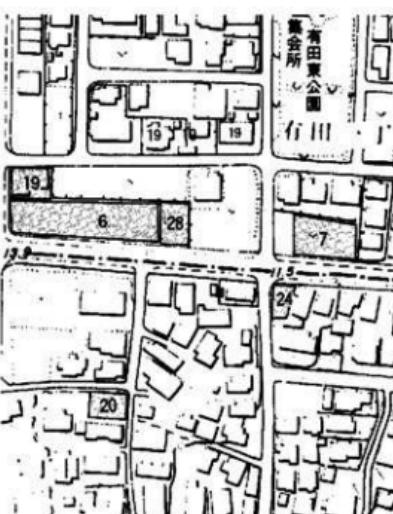


Fig. 51 第28次調査地位置図 (1/2,500)

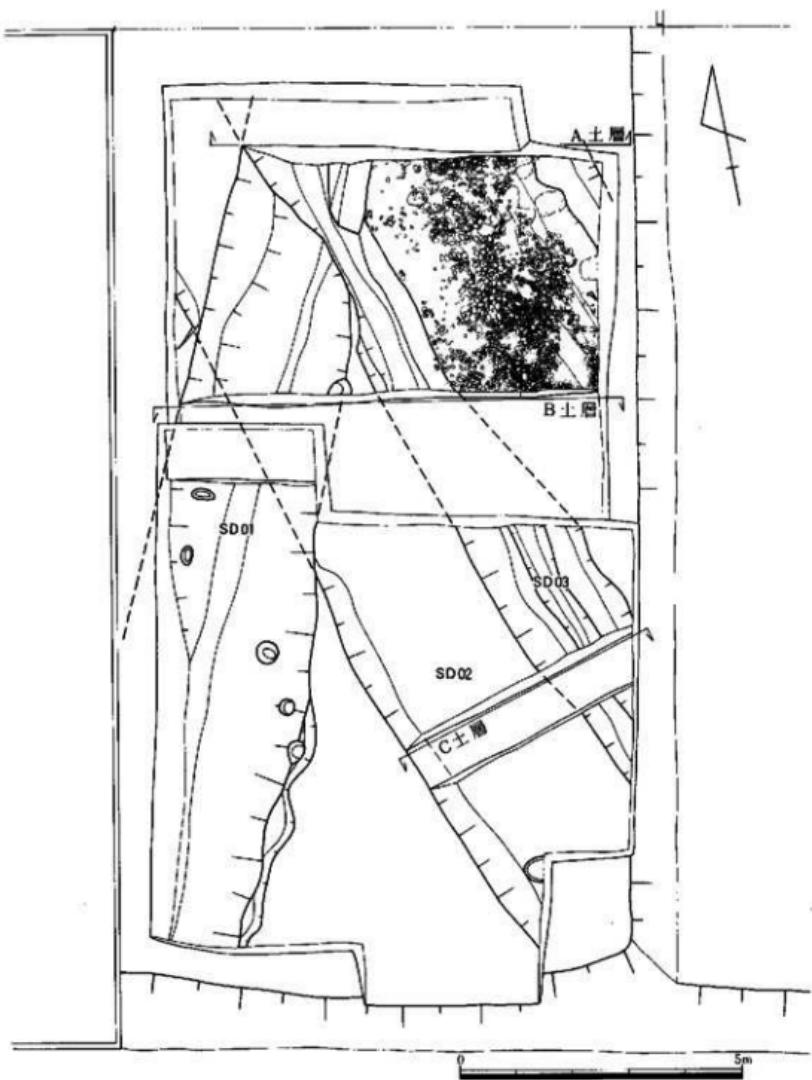


Fig. 52 遺構配置図 (1/100)

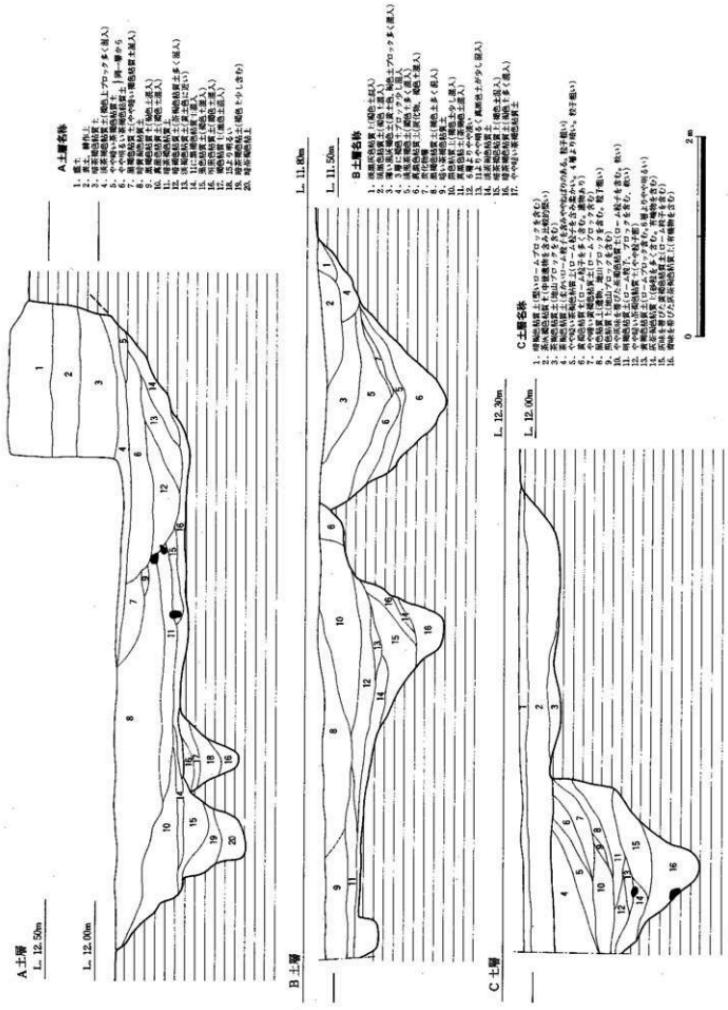


Fig. 53 上層圖 (1/40)

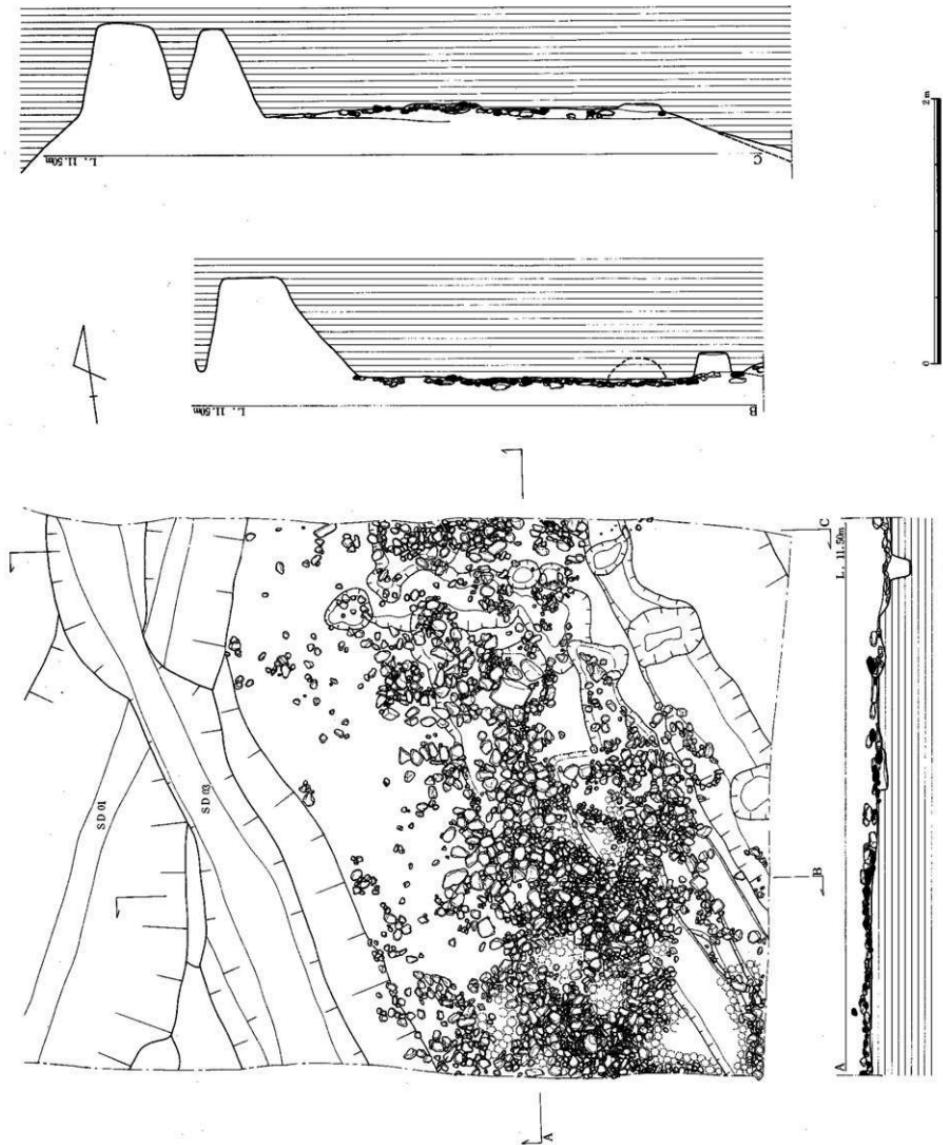


Fig. 34 故石遺標 (1/30)

溝 (SD)

SD01 (Fig. 52, PL. 40)

現存長約17m, 幅約3m, 深さ約1.5mを測り, 断面V字状形をなす溝である。この溝は長軸を南北の方向にとり, 南から北へ直線的に伸びる。後世の畑作による段落ちとSD03によって削平を受けるため, 遺構の残存は南側に於いてのみ良好であった。この溝の埋土はレンズ状に堆積し, 9層に分けられる。溝の残存状態が良好な南側は,隣接の第6次調査で大半を発掘されており, 今回の調査では遺物の出土は少なかった。遺物は弥生時代前期後半の甕形土器, 壺形土器, 石器を出土したが, 第1, 2層ではやや古い時期の土器, 或いは, 古墳時代の土師器なども流入していた。

SD02 (Fig. 52, PL. 41)

東南方向に主軸を置いた幅5.5m以上, 深さ約50cmを測る段落ち状遺構で, 当初, 幅広い溝を想定したが, 埋土が余りにも粘性が弱く, 又, 砂質を多く含んだ茶灰褐色を呈するなど, 有田・小田部にみる遺構の覆土とは全く相違していた。地元の聞き込みによって, 区画整理以前に畑が存在していたこと, 又, 戰前の地図 (Fig. 3) の中に旧道が記録されているが, その道筋が当該地に相当するなど, 現代の段落ちである可能性が強い。そのためこの溝状遺構については, 遺構として認められない。

SD03 (Fig. 52, PL. 40, 41)

長軸をほぼ南北方向にとり, 南から北へ伸びる溝で, 断面は薬研掘りである。溝幅は約2m, 深さは西肩で150cm, 東肩で80cmを測る。この溝の東側の肩は, 後述する敷石状遺構へと接続する。言いかえるならば, 敷石はSD03の東側肩まで敷きつめられている。敷石面での溝幅は約170cm, 深さは80cmを測る。出土遺物は少ないが, 土師器杯, 須恵器, 高台付杯, 瓦質土器, 青磁碗, 染付碗などを出土している。

敷石状遺構 (Fig. 54, PL. 43)

溝SD03の東側に接続する遺構で, SD03同様, 方位をほぼ東南方向にとる。礫は径3~10cmの花崗岩の河原石を主に用い, 面を揃えて敷きつめられている。敷石面は南から北へ斜めに傾斜する。緊急を要したため, 機械を導入した結果, 相当に敷石面の破損を生じたが, 南側の敷石の状態から, 隙間もなく敷きつめられていたことが考えられる。北側の敷石面は不整で密度も低く, 高低差が著しい。又, 地山の凹みに敷きつめられるなど, 南側とは若干の相違を見る。更には, これら礫群の下には数条の溝状, 凹み状の落ち込みがあることが観察できる。地山の不整状況は北側に於いて特に著しく, 敷石面の不整と関連をもつと考える。溝状の落ち込みは, 北から南へ傾斜する。Fig. 53の上層図で観察できるとおり, 敷石面の東側では地山が立ち上りをみせている。調査区外になるため明確ではないが, SD03の西側の肩と同じく, 標高13.10mの高さまで立ち上ることが考えられる。

以上から推測すると、SD03と敷石面は、各々別個の遺構とは考えられず、SD03は敷石に付設するものと考えた方が良い。床面に敷石とSD03を伴う幅6m以上の溝状遺構、又は側溝を伴う切通しの敷石路が考えられよう。切通しの道路と仮定すれば、敷石遺構の北側礫面の不整と礫下の溝状、不整形の落ち込みは、雨水などの流れた跡と考えても良く、雨など自然現象による床面の乱れを防ぎ、或いは補修のため礫が利用されたことが推測できる。又、SD03は側溝として設けられたと考えたい。狭い範囲のため即断はできないが、切通しの通路の可能性は強い。この敷石遺構の覆土は大きく9層に分けられ、いずれも暗茶褐色を呈した軟質土である。遺物は覆土から、板碑、瓦器、瓦、磁石、白磁、染付、須恵器、上師器、須恵質土器、瓦質土器などが出土している。

出土遺物

SD01出土遺物 (Fig. 55~59, PL. 46, 47)

縄文土器 (Fig. 55)

壺形土器 (1, 2) いずれも上げ底を呈し、縁辺が外へ強く張り出している。1は底径4.6cm, 2は底径4.2cmを測る。胴部の立ち上りは強く、1の外面にはナナメ方向のハケが施される。1は明灰褐色を、2は内外面摩滅しており、淡赤褐色を呈している。

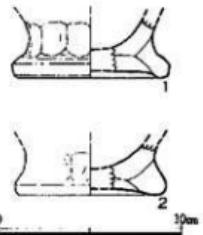
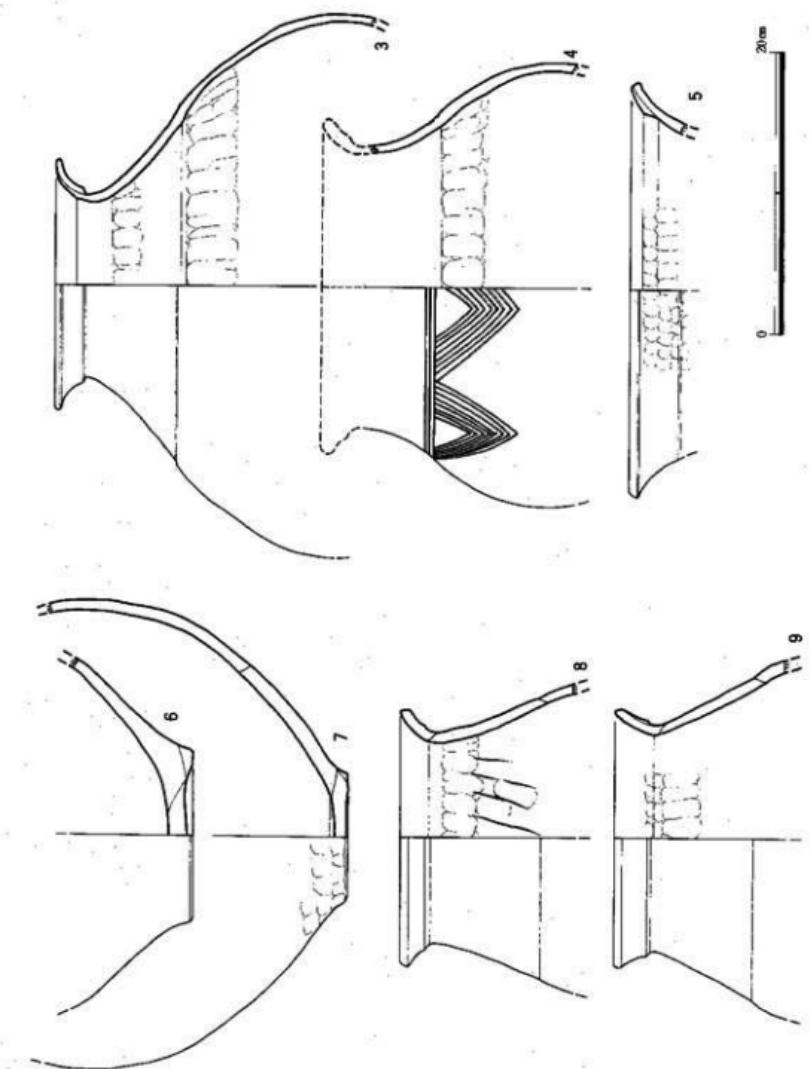


Fig. 55 SD01出土遺物 (1/3)

壺形土器 (3~17) 3は底部を欠いており、口径18cm、胴部最大径39cmを測る。胴部の張りに対し、口径は小さい。頸部と胴部の境はゆるい段をなす。頸部はそぼまつて、口縁は強く外反する。口縁部は外面に粘土を貼りつけて肥厚させ、頸部との境に段を有する。胴部に黒斑がある。外面と内面の頸部迄はヘラ磨きを施す。外面は黄褐色を呈する。4は口縁部と底部を欠いている。残存高15.5cm、胴部最大径31.8cmを測る。胴部は張っており、頸部との境には三条のヘラ描き沈線を巡らす。その下にはヘラ描きで8重の逆山形文を施している。外面はヘラ磨きを施す。一部に黒斑がある。5は口径25.8cmを測る。口縁内面に粘土を貼り付けて肥厚させる。外面は頸部との境にわざかに段をなすが、明瞭ではなく削り出し状を呈する。外面に丁寧な研磨を施す。暗茶褐色を呈する。8は口径18.2cmを測る。張りの無い胴部で、頸部との境は沈線状の段を有している。頸部は長く直線的で、かるく内傾する。広口である。口縁は外反し内面に稜を有す。外面に粘土を少量貼り付けて段としている。外面と口縁内面はヨコ方向のヘラ磨きを施す。黄灰色を呈す。9は口径18.4cmを測る。肩部が張っており、緩い段を有す。頸部は8同様長く、内傾する。口縁部は小さく外反するが、内面に稜を有す。外面には粘土を貼り付けて段をなす。黄灰色を呈し、一部に黒斑がある。11は口径19.6cmを測る。口縁はやや肥厚して、緩く外湾する。頸部との境には、二条のヘラ

Fig. 56 SD01 出土遺物 (1/4)



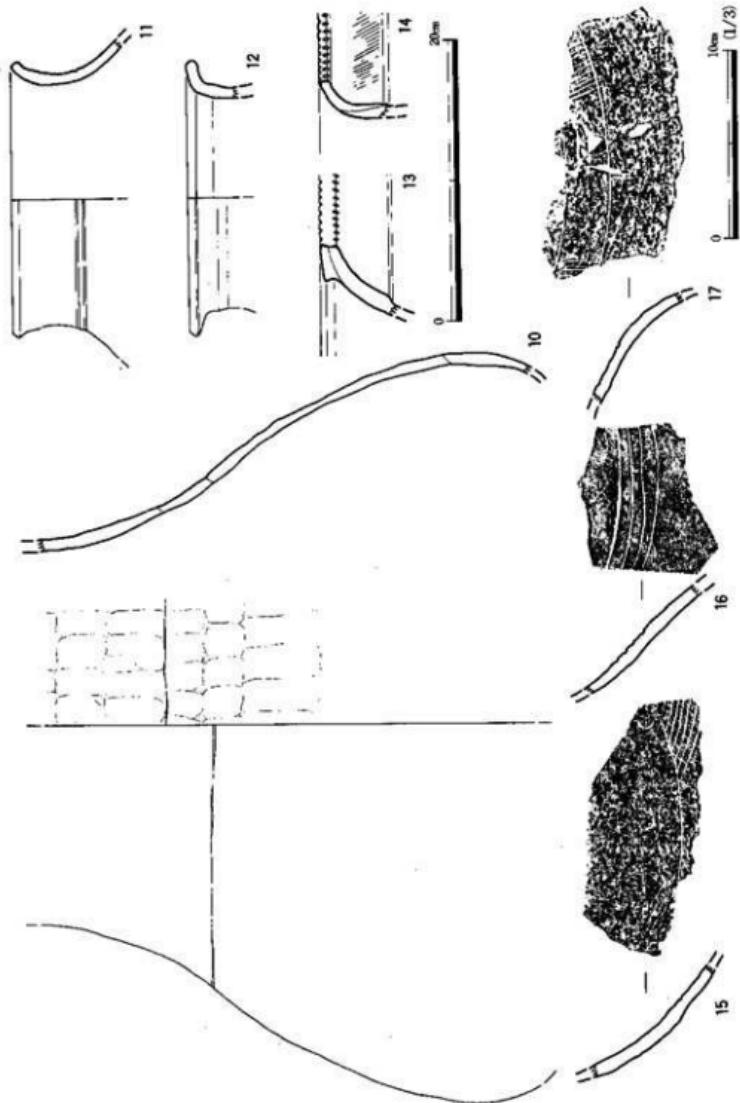


Fig. 57 SD01 出土遺物 (1/4), (1/3)

描き沈線を巡らしている。内外面はヘラ研磨を施す。黄灰色を呈しているが、口縁は黒変している。12は口径19.8cmを測る。口縁部はくの字形に外反しており、内面に稜を有す。外面の口縁直下には、低い稜が巡る。器表面は、内外磨滅している。黄灰色を呈する。13は、大型壺の口縁で、内面に粘土を貼り付けて、上面を平坦にしている。端部は指で中凹み状に成形し、上下端をヘラによって刻みを施す。内外にナデ調整を行なう。淡黄褐色を呈する。10は大型壺で、口縁と低部を欠いている。現存高36cm、胴部最大径52.4cm、頸部最小径27.6cmを測る。胴部最大径は下位にあって、肩は張らず、ナデ肩である。頸部との境も明瞭ではなく、わずかに途切れがちな、ヘラ描き沈線が施される。外面は淡赤褐色を呈する。15、16、17は肩部周辺の破片である。16は、頸部との境にヘラ描きの四条の沈線を巡らしている。やや暗い黄褐色を呈する。15は肩部にヘラ描き沈線を巡らして、胴部との境とし、沈線下に斜格子目文を等間隔に配している。外面は研磨痕が残っている。黄灰色を呈する。17は肩部にヘラ描き沈線三条を施し、その間に等間隔の羽状文を配している。外面はヘラ研磨が施される。又、黒斑が認められる。色調は黄灰色を呈する。6、7は底部で、6は明瞭な上げ底を、7は上げ底状を呈する。6は底径12.4cmを測る。外面はヘラ磨きが施され、下位はナナメ、ヨコ方向である。外面は褐色を呈している。7は最大胴径33.3cm、残存高22cmを測る。頸部以上を欠いている。胴部が良く発達しており、球形を呈する。外面はヨコ方向のヘラ磨きを施されるが、指圧痕が残り、器面は滑らかではない。外面は黄褐色を呈する。7の口縁部とは、器形、胎土、焼成とも類似しており、同一個体の可能性が強い。

甕形土器 尖端ができるものは、わずかに1点だけである。壺の数に対し、甕形土器は極端に少ない。12は、頸部外面に粘土を貼り付けて肥厚させ、胴部との境に段を有している。口縁部は、緩く外反し、口唇部上下にヘラ刻みを有する。口縁部外面には粗いヨコ方向のハケが施される。色調は黄褐色を呈する。

石器 (Fig. 58)

スリ石 (18) 溝の上層より検出した。玄武岩の角礫を利用し、打裂調整を加え、不整椭円形状で、断面形は隅丸三角形状に整形している。長さ 5.9cm、最大幅 5.2cm、最大厚 4.6cm を測る。左側面と B 面は面取りされたままで、自然面を残している他、部分的に打裂痕、剥離痕がある。スリ石面は石器の縁辺部分を利用しておらず、滑らかである。

土師器 (Fig. 59)

S D 01 の上層より出土。S D 01 を切り込んだ遺構が存在したと思われるが、調査時に於いては検出ができなかった。

鉢形土器 (1) 高台付きの鉢形土器で、高台が残存して

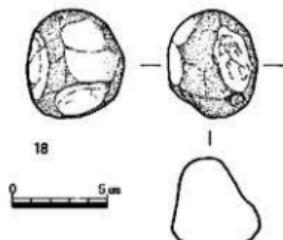


Fig. 58 SD 01出土石器 (1/3)



Fig. 59 SD 01 出土遺物 (1/3)

いる。底径約 7.2cm を測る。高台の器壁は薄く、強く外へ張り、八の字形を呈している。高台高は 2.5cm を測る。外面は摩滅しており、淡赤褐色を呈する。二次的な熱を受けている。

杯 (2) 底部を欠いている。口径 20.3cm を測る。体部は丸味をもって立ち上り、口縁部はやや内湾する浅い器形である。口縁端部は丸味をもつ。外面はヨコ、タテ方向の荒いハケが施され、内面はヨコ、タテ、ナナメの丁寧なハケである。色調は淡黄褐色を呈する。

SD 02出土遺物 (Fig. 60, PL. 48~50)

遺構というよりも、区画整理以前の畑作面と考えた方が良いと思われる。

土師器

杯 (1) 口径 12.7cm、器高 2.6cm を測る。底部は糸切り離しである。体部は内湾気味に立ち上がる。ナデ調整を施す。淡黄灰色を呈す。

青磁

椀 (2) 高台径 5.9cm を測る。高台外面を直に、内面を浅くナナメに削っているため、底部の器壁は厚い。体部は丸味をもって立ち上がるが、底部との境に屈折をもつていて。内底見込みに圓錐状の沈線が施される。釉は淡緑青色を呈する。

褐釉陶器

甕形土器 (3) 口縁は内湾気味でくの字形に外反し、内面に稜を有す。口縁の端部を外へ折り曲げて、玉縁を呈している。色調はやや暗い茶褐色を呈し、一部灰褐色を帯びる。

SD 03出土遺物 (Fig. 61~63, PL. 48~50)

煮石内、及び側溝内から検出した遺物は少なく、大部分を覆土中より検出した。

須恵器 (1~3)

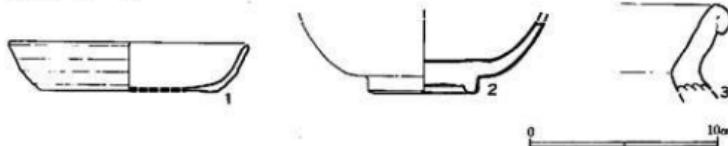


Fig. 60 SD 02 出土遺物 (1/3)

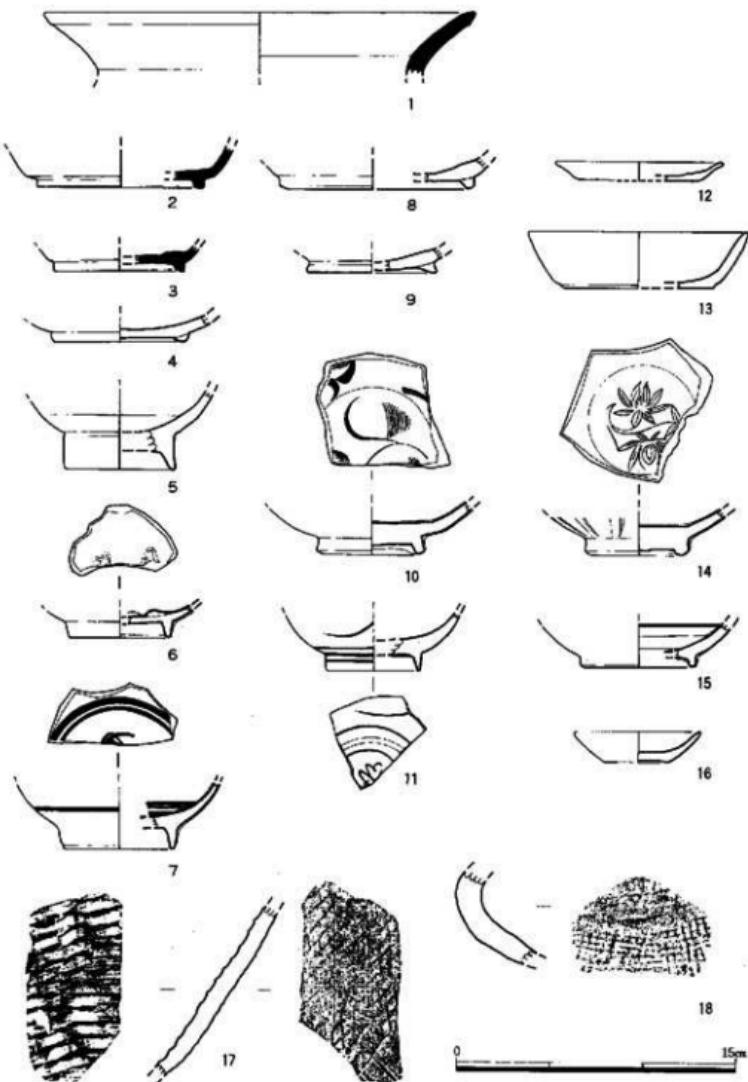


Fig. 61 SD 03, 敷石遺構出土遺物 (1/3)

壺形土器（1） 口径23cmを測る。口縁は大きく外反し、口唇部を細く仕上げる。口縁外面直下に低い段を形成している。ナデ調整である。灰青色を呈する。

高台付杯（2，3） 高台径は2が7cm, 3が9cmを測る。高台は低くやや外へ張っている。3の縁付は外縁をつまみ出している。体部は丸味をもって立ち上がる。2は縁付に板目痕がある。2は暗灰色、3は暗青灰色を呈する。

土師器

椀（8, 9） 8は高台貼り付けの椀で、高台は低く外へ張っている。高台径9cmを測る。磨滅のため調整不明。内面は黄灰色を呈し外墨の椀である。体部外面は淡黒色にいぶしている。9の高台は断面二角形を呈し、外側へ強く張っている。高台径は7cmを測る。内面は黒色研磨を施す。外面はくすんだ黄灰色を呈す。内墨の椀である。

皿（12） 口径9cm, 器高1cmを測る。糸切り離し底である。体部は大きく開いている。黄白色を呈する。

杯（13） 口径11.8cm, 器高3.1cmを測る。糸切り離し底である。体部はやや丸味をもつ。褐色を呈する。

瓦器

椀（4） 断面三角形の高台を貼り付ける。高台径7.4cmを測る。内面は黒色研磨を施す。色潤は黒灰色を呈する。

白磁

椀（5） 5は高台径5.9cmを測る。高台外面を直に、内面をナナメに深く削った縁付の細い高台を有す。底部、器壁は厚く、内底見込みには小さい段がある。釉は薄目に体部外面迄施される。釉色はやや青味をもった灰白色である。

青磁

椀（10, 14） 10は高台径5.8cmを測る。断面コの字形を呈す高台は外へ強く張っている。体部は丸味をもって立ち上り、体部内面と内底見込みにはハラ描きの雲文と猫描き文の組合せ文様を施している。釉は厚目で縁付迄かけられるが、一部外底部迄流れている。内外に荒い貫人が認められる。釉色は淡緑黄色である。14は高台径5.7cmを測る。高台外面を直に、内面を浅く削った低い高台である。縁付外面はナナメに削り落としている。内底見込みには蓮華花文をスタンプし、体部外面には築蓮弁を施す。釉は厚目で縁付迄かかっている。釉色は緑灰色を呈する。その他、同安窯系の椀I類が出土している。

小椀（6） 高台径5.5cmを測る。高台は内面を深く削って、縁付を細く仕上げている。釉は厚目で、外底部迄かけられるが、縁付周辺はカキ取られている。内底に双魚文の陽文が施される。釉色は灰緑色である。

染付（Fig. 61-7, 11, 15）

いずれも伊万里系の椀である。他に瓶の破片が一点出土している。

椀 (7, 11, 15) 7は高台径 6.2cmを測る。高台は細く高いもので、外面はやや丸味をもつてゐる。体部外面下位に一条、内面見込みに二条の圓線を呉須で施す。又、内底にも図案を施すが、文様形は不明である。釉はやや厚目で高台外面迄施す。釉色は青味のある灰白色で呉須は空色である。内外に荒い貫入が、外面に気泡がある。11は高台径 5cmを測る。内面を深く削って、細く高くした高台を有す。体部は丸味をもち、外へ開かない。釉は外底面迄かけられる。体部外面下位に一条、高台外面に二条、外底見込みに一条の圓線を施す。外底、及び体部外面に図案を施すが、文様形は不明である。高台周辺から外底部にかけて、赤橙色に発色している。釉色は灰白色で、呉須は濃青色である。15の高台径は 6cmを測る。体部は外開きで丸味を帯びる。高台は外面が丸味を帯び、やや底い。釉は外底部迄かけられるが、豊付はカキ取っている。内底見込みは輪状のカキ取りを行ない、呉須による圓線を一条施す。外面には気泡が多く、釉色は青味を帯びた灰色を呈する。

陶器

皿 (16) 口径 6.9cm、器高 1.7cmを測る。体部は丸味をもち、大きく開いている。底部はやや上げ底である。釉は内面に施し、口唇部と外面は露胎である。釉は暗い緑茶色を呈し、部分的に灰緑色である。

甕形土器 底径 22cmを測る。平底で、褐釉は茶褐色を呈する。備前焼である。

須恵質土器

甕形土器 (17) 甕銅部片で、内面は幅広の平行タタキを、外面は斜格子のタタキを施している。軟質で色調は暗灰色を呈する。

土師質土器

鉢形土器 (19) 片口の捏鉢であろう。口径 36cmを測る。体部は逆八の字状に開き、口縁部はやや肥厚する。内外ナデ調整で、下位には煤が付着している。摩滅のため暗黄灰色を呈する。内面に淡黒色を呈す部分を残している。

瓦質土器 (Fig. 61-18, Fig. 62-20)

甕形土器 (18) 頭部は緩く崩折し、口縁部は大きく外反する器形である。外面銅部は格子目のタタキが、口縁にはナデ調整が施される。外面は淡黒色を呈する。

捏鉢 (20) 口径 34cm、器高 8.4-10.7cmを測り、ひずんだ器形である。底部は平底をなし、逆八の字形に大きく開いた器形で、口縁端部内面には三角形状の粘土を貼付けて肥厚させ、口唇部分はナデによる凹みをつける。外面にはタテ方向のハケ痕があり、内面にはヨコハケが施される。摩滅して灰色を呈するが、本来、淡黒色を呈する。器形のひずみが大きい。

瓦類

平瓦 (21) 厚さ 1.7cmを測る。外面は大きな斜格子のタタキを施し、内面は布目痕が明瞭

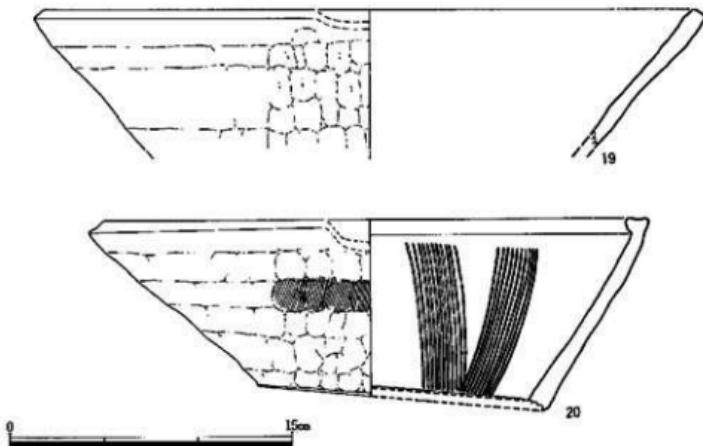


Fig. 62 SD 03 出土遺物 (1/3)

に残っている。暗青灰色を呈する。表面には艶がある。

瓦磚 (22) 厚さ 3.8cm を測る。側辺の面取りは丁寧であるが、縁をナナメに切り落としている。A 面にはナナメ方向のハケ痕がある。幅 2mm の傷が数条つけられるが、廃棄後のものである。灰色を呈する。

石器 (Fig. 63-23, 24)

板碑 (23) 板碑の頭部で、現存長 17.6cm、幅 14.6cm、最大厚 10.5cm を測る。頭部を三角形に成形し、A 面は丁寧な削りを行ない、平坦にする。更に、断面三角形を呈する溝を二条彫り込み、主体部との境は段を設けて区切る。B 面は荒成形のままで、部分的に削りが残る。側辺も頭部の三角部分は丁寧な削りだが、左右側辺は荒削り面を部分的に残している。主体部に梵字が彫られるが、字体の復元はできなかった。中粒砂岩製である。二次的に火を受け、全面淡黒色を呈する。

砥石 (24) 中粒砂岩製である。長さ 10cm、厚さ 2.7-3.6cm を測る。扁平な板石を利用したもので、A・B 面と上小口を砥面として利用している。他の部分は荒成形の状態である。A 面の下小口近くに玉を磨いたような浅い研磨痕がある。一部二次的に火を受け黒変している。

表土出土遺物 (Fig. 64-1~6)

瓦質土器

鼎 (1) 底部と脚を欠いている。口径 27cm を測る。底部は丸底を呈し、体部との境はかるく屈折する。口縁は内面に強い稜を有して、外反する。やや内湾している。口縁端部内側をつまみ出して、口唇部を幅広く形成する。底部外面には格子目のタタキが施され、内面下半に荒い

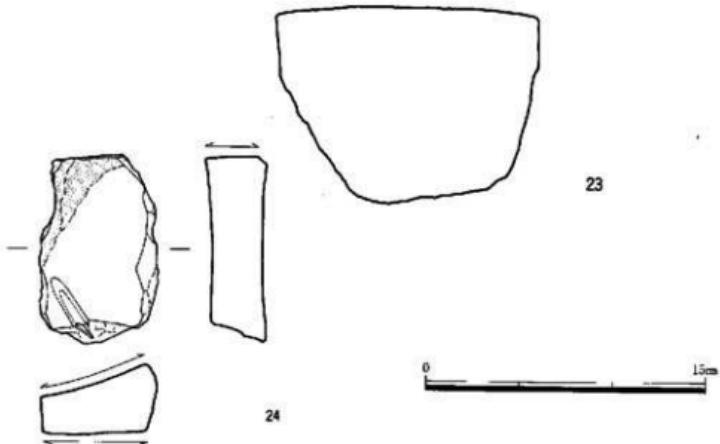
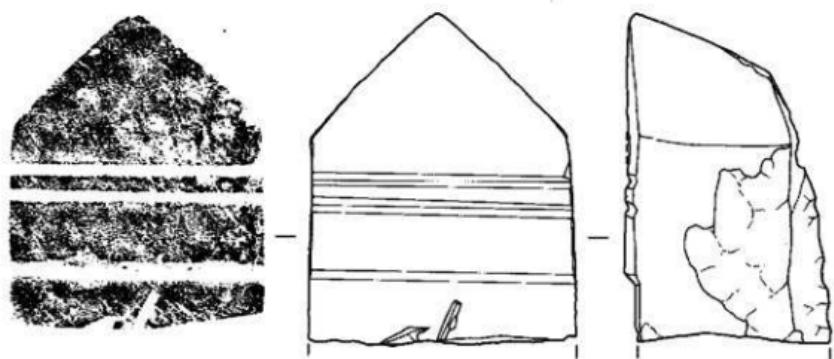
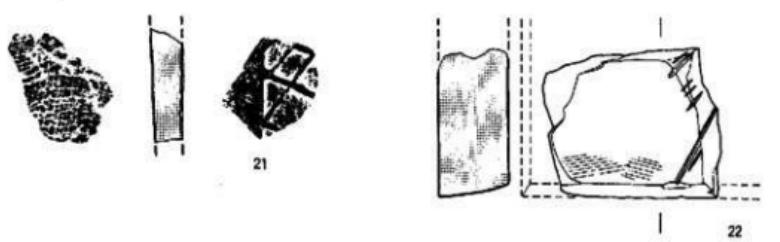


Fig.63 SD 03 出土遺物(1/3)

ヨコハケが施される。外面下半には煤の付着がみられる。暗灰色を呈する。

短頸壺（2） 口径17cmを測る。口縁は直口し、高さ 0.7cmを測る。口唇部は平坦に仕上げてある。体部は球形を呈し、上位に菊花文のスタンプを配している。内面は細かいヨコハケ調整を施す。暗灰色を呈する。

瓦類

軒平瓦（3） 瓦当幅 4.1cm、瓦厚 1.8cmを測る。瓦に反当面となる粘土を下に貼付け成形したもので、瓦当縁辺は断面コの字形である。瓦当の文様は中心飾りに退化した宝珠を抱え、

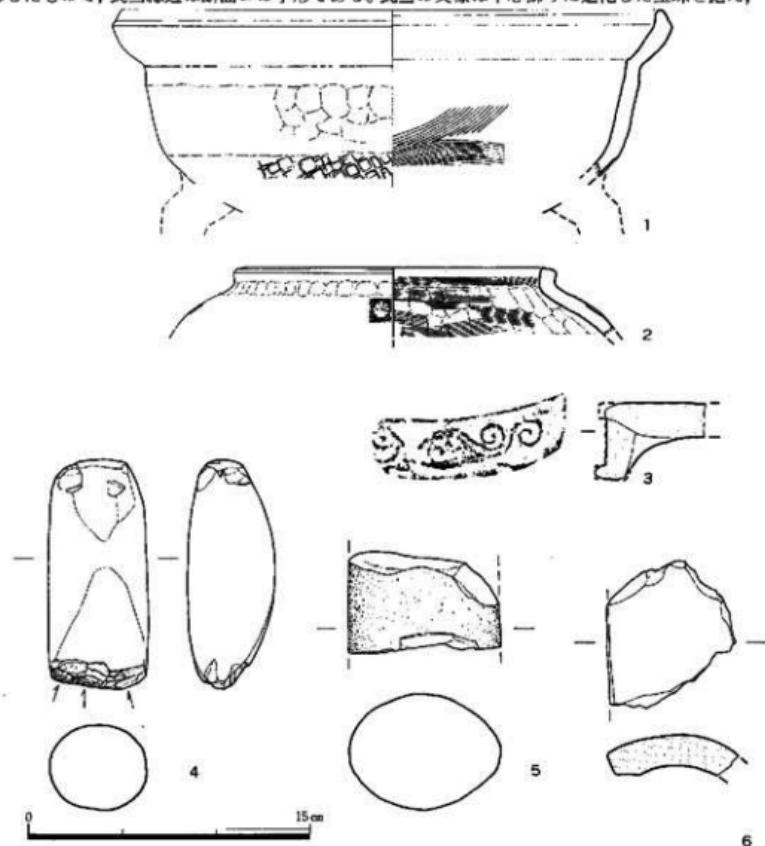


Fig. 64 表 土 出 土 遺 物 (1/3)

左右に一本の唐草文を配している。瓦当裏面はナデ調整を施す。

丸瓦（6） 厚さ1.6cmを測る。側面はヘラ切りで、内面の1.5cm幅をヘラ削り調整している。表面は綱引のタタキ痕が、裏面は布目痕、及び糸切痕が残っている。暗黄褐色を呈し、二次的に火を受けている。

石器 (Fig. 64-4~5)

石斧（4, 5） いずれも始刃石斧で玄武岩製である。5は大型である。4は長さ12.3cm、最大幅5.4cm、最大厚4.7cmを測り、断面は円形に近い。厚さは一定ではなく、基部は極端に薄くなる。刃部は両面から研ぎ出しが、A面からの研ぎ出しが大きいため片刃状的印象を与える。刃部先端は使用による破損を受けている。研磨は丁寧に行っているが、基部に打裂痕を残している。5は基部、刃部を欠いている。厚さ8cm×6.3cmを測り、断面は梢円形を呈す。全体に敲打痕が残っており、特に側辺は著しい。

小 結

検出した遺構は溝状遺構3条であった。SD02については先述した様に、地元の聞き込みや昭和10年代の地図により近世から現代に利用された道路、或いは煙突の可能性が強い。SD01は上層にわずかに古墳時代前期の遺物を含み、他は弥生時代前期後半の遺物を主体として、一部に板付I式、夜臼式の甕形土器片を含んでいる。古墳時代前期の土器については、西隣接地の第6次調査に於いて同一溝上層からタコ壺を多数出土しており、タコ壺と併存する可能性をもつていて。時期は4C代と考えられる。弥生時代前期後半の遺物は、甕形土器に比べて壺形土器が圧倒的に多い。この壺形土器の内には口縁部と頸部の境、肩部の段が不明瞭になるものが多く、沈線によって区別している。又、II縁部に粘土の貼付を施さない器形も含まれているところから、SD02の時期は前期後半末に比定されよう。SD03、及び敷石遺構は密接な関係をもち、A土層図、C土層図にみると、敷石遺構は東側で立ち上り、SD03の西側壁はSD02に切られているものの遺構上面迄立ち上がっている。又、SD03は敷石遺構と切合う状態を示していないことから、SD03が敷石遺構の西側に付設された側溝と考えて差しつかえないだろう。この敷石は発掘作業中に破損したもの、3cm~20cm内外の河原石をびっしり敷き詰めている。部分的に水が流れた状態で床面が凸を呈しているが、石による横圧を施すなど道路としての機能が充分に考えられる。この覆土、床面からは奈良時代~17C代の遺物を出土する。SD03、敷石面に密着した土器が少ないが覆土中に出土した染付は、初期伊万里に属するもので、有田天狗谷窯跡等で出土する例と考えられる。よって、このSD03、敷石遺構の埋没の時期は17C代以降と考えることができる。

*註1. 福岡市文化課山崎純男氏のご教授による。

4. 第29次調査

調査の概要

調査対象地は、福岡市西区有田1丁目33-2番地に所在し、対象面積は280m²である。有田地区では、台地の最高所は標高14m前後を測り、平坦部を形成するが北東側と北西側には谷が入り込んでおりこの平坦部は約200m四方に限られている。調査地は、この平坦地の北西部に位置しており、標高12.50mを測る。北側には開析された谷が深く切り込んでいる。この地域は、近年発掘調査が集中して行なわれている。第1、2次調査、第18次調査は南側で、17次、32次は東側で23次、30次は北東側で実施されている。

いずれも、弥生時代から中世に至る時期の遺構を検出しておらず、当該地も同様な遺構の検出が予想された。昭和54年6月に建築確認が申請されたので試掘調査を実施し、遺構を検出した。

発掘調査は、昭和54年10月5日～11月12日迄実施した。調査地は、区画整理時の削平を受けており遺構の残存状況は良好ではなかった。表土は耕作土で約23cmの厚さである。遺構面はローム層で、西側1/3ほどは約30cmの段落ちになっており、耕作土の下に暗茶褐色を呈する層が存在する。この段落ちは、区画整理以前の畠地境を示しており、暗茶褐色上層は旧耕作土と考えられる。検出した遺構は、古墳時代の住居跡3軒、歴史時代の掘立柱建物1棟、他、土壤数基、掘立柱建物1である。住居跡の削平は著しく、規模確認が困難であった。又、歴史時代の掘立柱建物は規模が大きく官衙に伴う遺構の存在を推測させ得るものである。

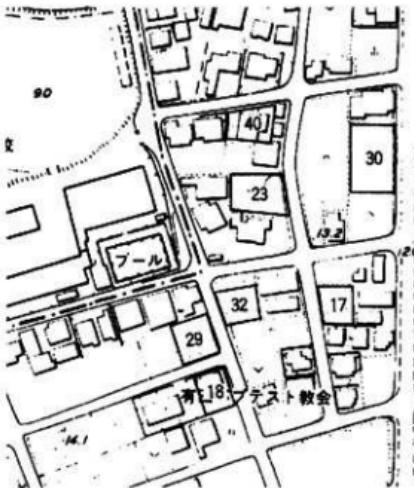


Fig. 65 第29次調査地位置図 (1/2,500)

検出遺構

住居跡 (SI)

SI01 (Fig. 68, PL. 53)

区画整理のため、壁、ベットなど削平を受けており、更にSB01によって切られている。周溝の検出状態から、二軒の住居跡の切合の状態を呈する。仮にA、B軒とすれば、A軒は長さ4.16m × 3.4mのやや台形状のプランを呈するもの。B軒は、先のプランを囲むようにした長さ5.22m、幅3.92mを測り、長方形プランを呈する。しかし、ががA軒のほぼ中央に検出されたの

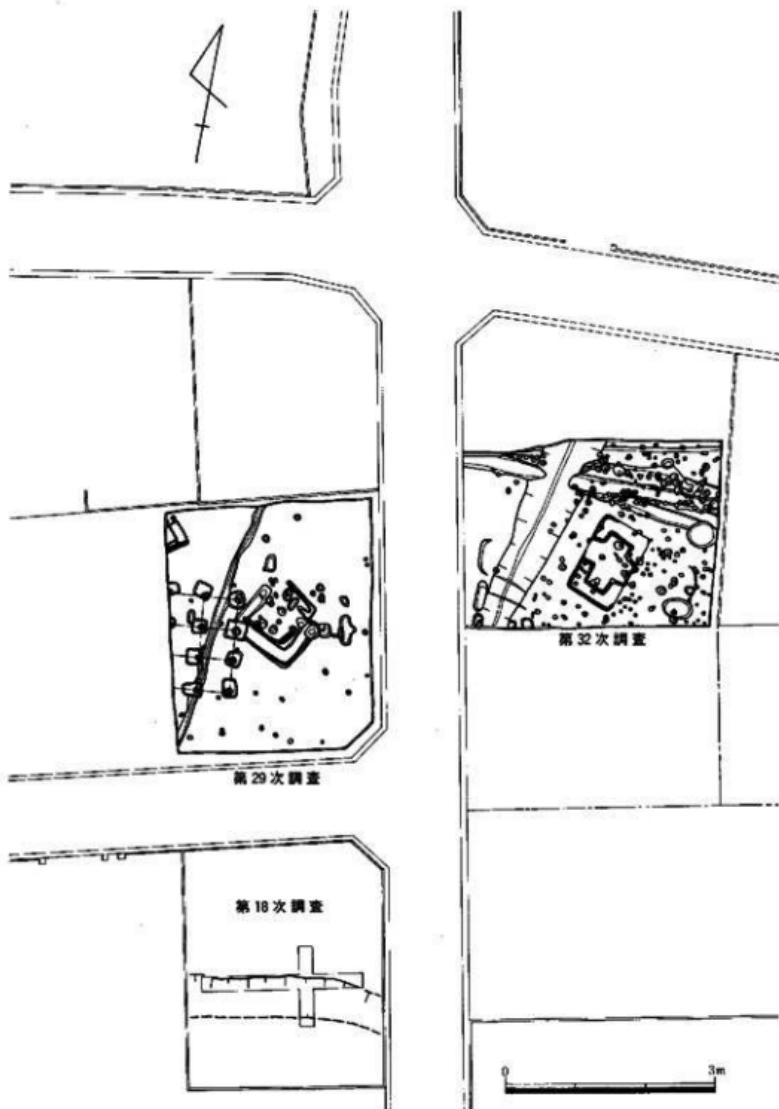


Fig.66 周辺の調査状況図(1/400)

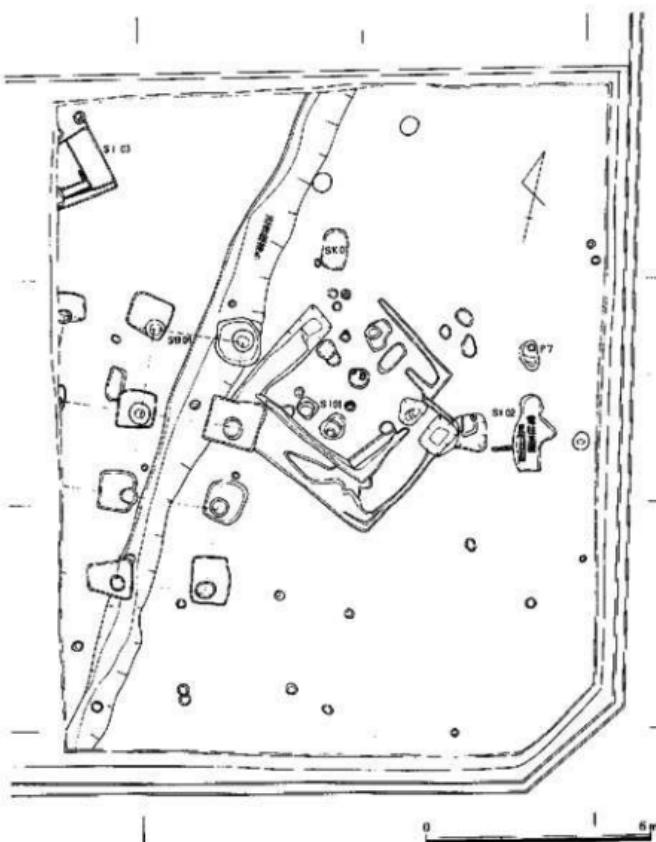


Fig. 67 造構配図 (1/150)

に対し、B軒では検出されない。覆土では、A軒が黒褐色に対し、B軒は黒褐色に褐色土のブロックを多く混入し、更に床が幅1mに渡って凹凸しており、一定ではない。A軒の周溝がP3で途絶え、B軒の南北方向の周溝もD4をはさんで東西方向に長さ1.14m伸びると考えると、B軒の幅1mの凹凸部分は貼り付けのベットを掘った結果であり、又A、B軒の周溝は周壁或いはベット下を巡っていたと考えられるから、A、B軒は同一住居跡と考えて良いだろう。周壁に幅1m前後のベットをもった長さ6m?×幅5.2mの規模を測る台形状プランの住居跡であ

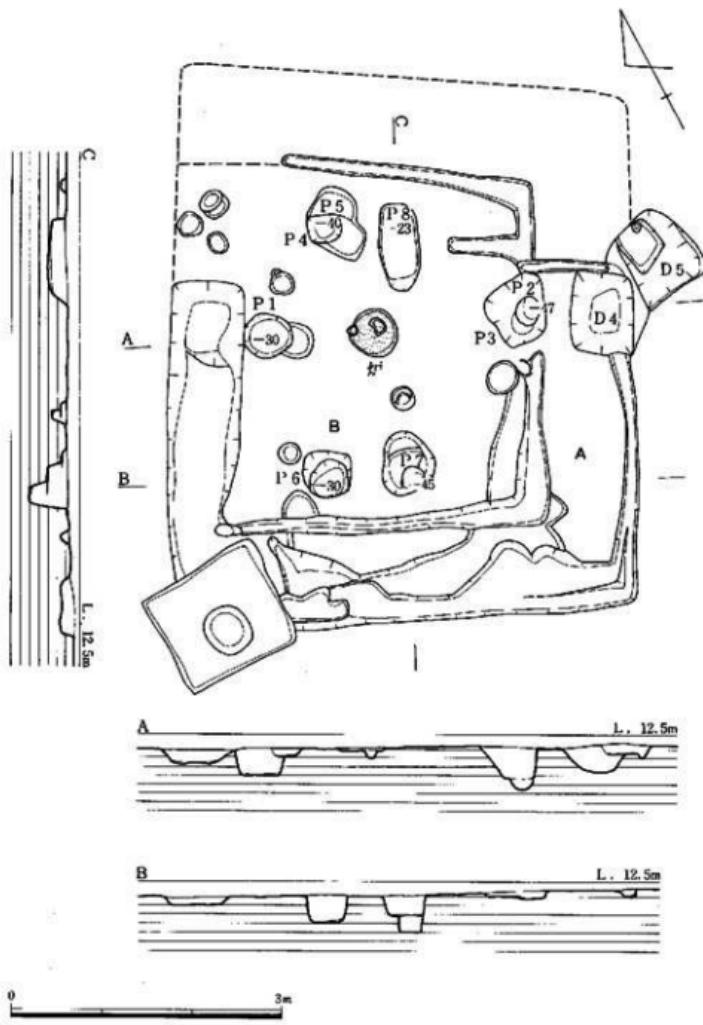


Fig. 68 住居跡 S 101 (1/60)

る。周壁は壁下、ベット下を巡るが北西隅角では検出されなかった。又、この部分ではベットは存在しておらず、出入口の部分に相当するかもしれない。D 4 は、貯蔵穴である。主柱は、各々の対応するPitの関係から、P1-P2, P4-P6 の可能性が強い。遺物D 4 より高台付鉢が1点出土している。

SI02 (Fig. 70, PL. 54)

削平のため周壁、床面共に消失しており、わずかに東西方向の周溝の一部と貯蔵穴D 5 を検出したにとどまった。周溝は長さ60cm、幅11cmしか残存していない。D 5 はSI01の貯蔵穴を切っており、長さ92cm、幅84cmの隅丸方形プランを呈し二段掘りになっている。1段目は深さ15～20cmを測り、2段目は深さ40cmを測って、底は一定ではない。1段目より壺形土器、高杯形土器、合付鉢、砥石2点出土している。

SI03 (Fig. 70, PL. 56)

調査地の北西隅の境界地に検出したもので、他の住居跡同様に著しい削平を受けており、周溝及び貯蔵穴の一部を検出すことにとどまった。標高12.10mを測る位置にある。外形は、南北長2.0?m、東西長1.72?mを測り、長方形を呈する。又、南北壁に沿って、床より8cm高く、約1m幅のベットが付設されている。貯蔵穴は幅48cm、深さは床より15cmを測り、隅丸長方形を呈する。内部より砥石と花崗岩の礫が各一点出土した。

土壤 (SK)

SK01 (Fig. 69, PL. 57)

長さ105cm、幅70cm、深さ40cmを測り、隅丸長方形を呈する。覆土は暗茶褐色粘質土を呈しているが、内部より遺物の出土は無かった。

掘立柱建物 (SB)

SB01 (Fig. 71, PL. 52)

調査地西側の境界地に検出された。柱穴の覆土は2～3層に分かれ。第I層は掘方の覆土で黒褐色粘質土である。P1, P2, P8以外はI層のみで充填される。第II層は暗褐色粘質土で、黒色土、或いは褐色土のブロックを多く含む層である。第III層は、柱根の痕と云うべきもので、黒褐色粘質土に褐色粘質土粒子、或いはブロックを多く含ん

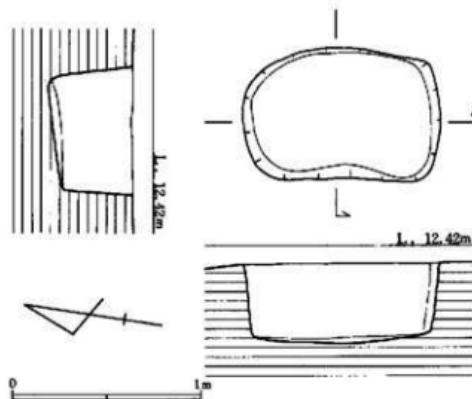


Fig. 69 SK01 (1/30)

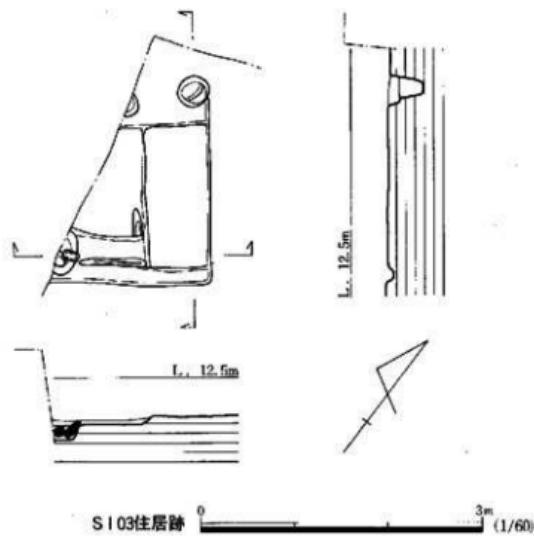
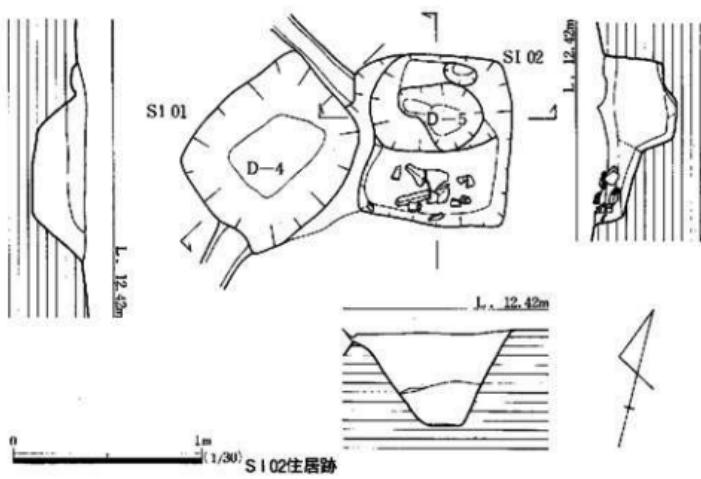


Fig. 70 住居跡 SI02 (1/30), SI03(1/60)

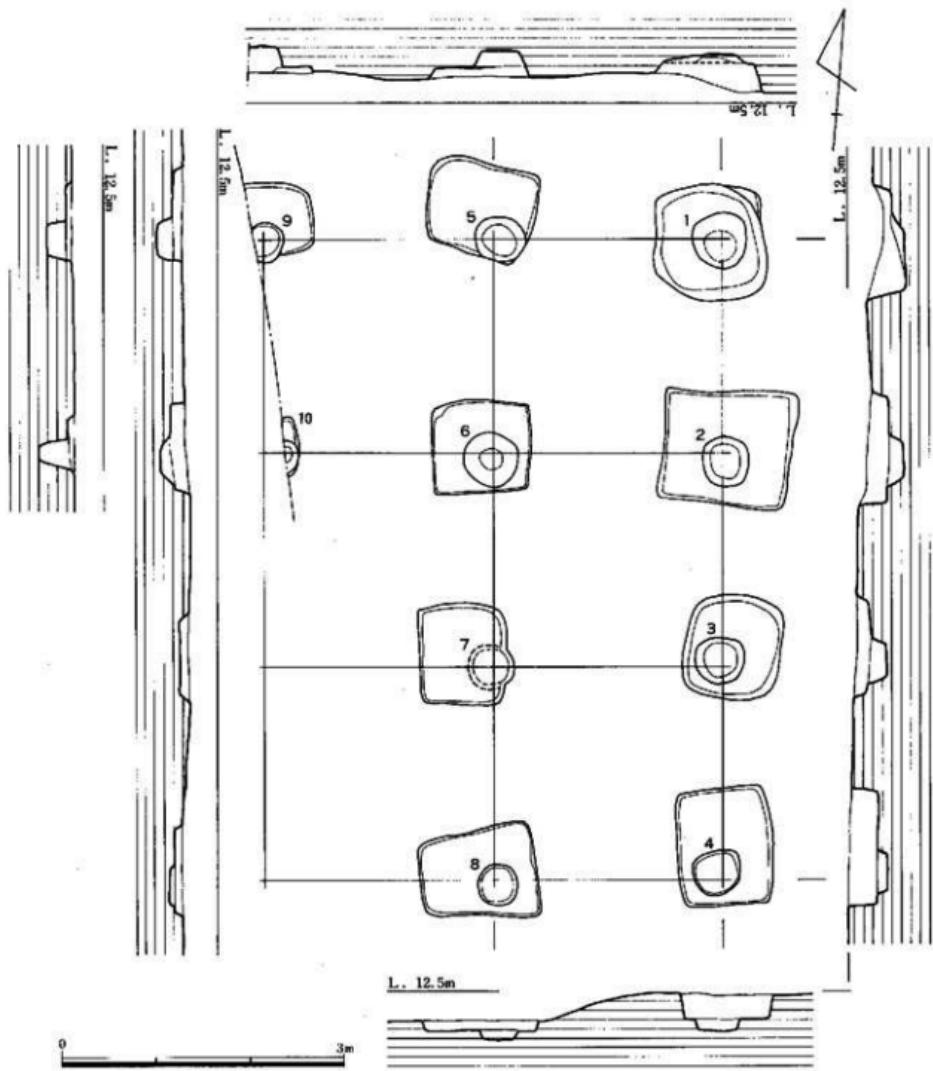


Fig. 71 柱立柱建物 SB01 (1/60)

でいる。主軸方位をN 8° Wに置いた梁行3間×桁行2間以上の掘立柱建物である。梁行は6.72m、梁間平均2.24mを測る。桁行は4.72m以上、桁間は平均2.35mを測る。柱穴掘方は長さ1.0m～1.45m、幅68～117cmを測り隅丸長方形を呈する。深さは、一定でない。柱根については、掘方上面では確認できず、底部に於いて検出した。柱根径は50cm前後を測る。しかし、遺存度の最も良好なP 9、P 10の柱根径は36cmと42cmを測るところから実際の柱径は40cm前後であったと推測される。時期については、掘方、柱根内より時期比定となる遺物の出土が無く、又規模、構造も不明である。但し、掘方、柱根等の規模をみても、他に例をみないため郡衙等の官衙に付設する建物が考えられる。

昭和56年度調査では西側隣接地を調査し、この建物が東西方向に主軸を置いた梁行3間×桁行4間の総柱の掘立柱建物であること。又、この建物を切って南北方向に主軸を置いた同規模の建物が存在することを確認した。

出土遺物

S101出土遺物 (Fig. 72, PL. 57, 58)

土師器

台付鉢形土器(7) D 4内より出土。口径27.2cm、器高9.4cm、脚部径10.6cmを測る。鉢は浅く、体部は内渦しつつ大きく開き、口縁端部は丸味をもつ。脚は低く、外へ強く聞く。脚外面には指圧調整痕が残っており、内面はヘラによるヨコナデ調整が施される。脚端部内外はヨコナデが施される。鉢の調整は摩滅のため不明。胎土に粗砂を含んでおり、色調は暗黄土色を呈す。焼成は良好である。

S102出土遺物 (Fig. 72, PL. 57, 58)

いずれもD 5より出土。

土師器

甕形上器(1) 口径27cmを測る大型の甕で、胴部下半を失っている。口縁は頸部内面に稜を作り、外方へ直線的に開き、端部は肥厚する。胴部は、最大径が中位にあって長胴化するものと考えられる。口縁と胴部外面はタテ方向のハケ目が施され、頸部はナデ消される。又、胴部には、部分的に4本単位のタキ痕が認められた。内面は、摩滅している。胎土に粗砂を多く含み、色調は暗黄土色を呈する。焼成は良好である。

台付鉢形土器(2, 3) 共に鉢部上位と脚部下位を欠損している。脚接合部の径は、2が3.4cm、3が2.6cmを測り、大きな器形ではない。2は脚が低く、裾長く広がる器形である。胎土に粗砂を含み暗茶褐色を呈する。内外面摩滅し、焼成は不良である。3は外面にタテ方向のヘラナデ痕を残している。胎土に粗砂を含み、黄灰色を呈する。焼成はやや不良である。

高杯(4) 4は脚部の一部である。小型の高杯で、脚は余り開かず、裾は強く屈折して閉く。内面にヘラによるヨコナデ調整が施される。器面は摩滅している。胎土に粗砂を少し含み、黄

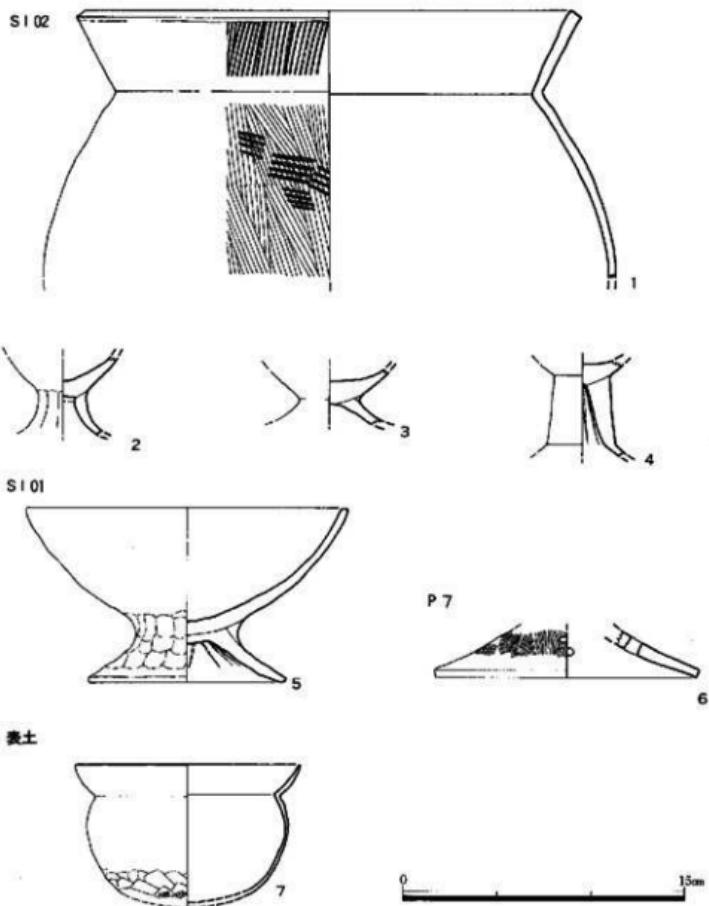


Fig. 72 出土遺物 (1/3)

褐色を呈する。焼成はやや不良である。

石器

砥石(1, 2) いずれもD 5出土。1は断面長方形を呈し、長さ30cm, 幅5.2cm, 厚さ2.6cmを測る。4面を砥面として利用している。下小口は面取りし、一部に研磨を施す。上小口は自

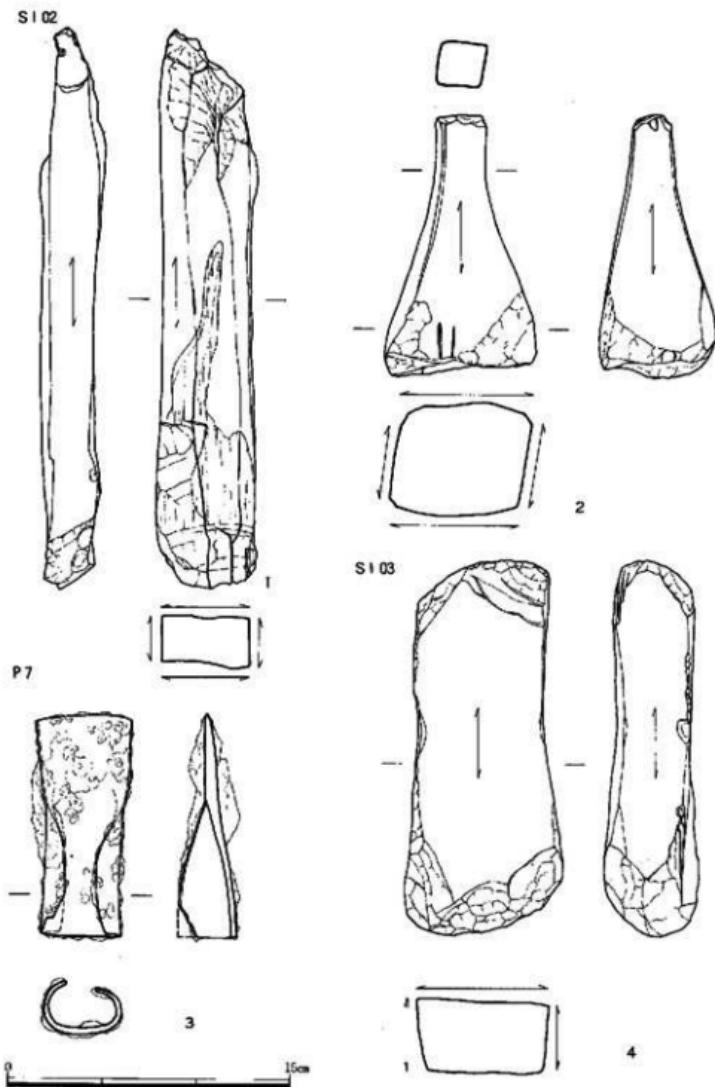


Fig. 73 出土遺物 (1/3)

然面をそのまま残している。砥面は中凹みし、良く使用されている。泥岩製である。2は中粒砂岩製で、長さ14cm、幅2.5cm～7cm、厚さ2.3cm～6.0cmを測る。断面長方形状でバチ状を呈する。両小口は面取りされている。A面の小口近くに幅1～2mmの2本の条線痕が認められる。4面を砥面として利用している。

SI03出土遺物 (Fig. 73, PL. 57, 58)

石器

砥石(4) 住居跡内の土壤より出土。砂岩製で、長さ20cm、最大幅8.5cm、厚さ4cmを測り、断面長方形を呈する。A面と両側面の3面を利用してあり、B面は敲打痕を残した荒成形の状態で、研磨はわずかである。両小口は、打撃による面取り調整が施されている。

P 7出土遺物 (Fig. 72, 73, PL. 57, 58)

土師器

高杯(6) 高杯の脚である。脚径14.2cmを測り、大きく外へ開き、端部はやや内湾気味におさめている。外面にタテ方向のハケ調整を行い、端部、及び内面ヨコナデを施している。筒状部分との接合部近くに径7mmの孔が4ヶ所施されている。

鉄製品 (Fig. 73-3)

鉄斧 P 7の底部より出土した。鍛造品の鉄斧で、長さ12cm、刃部最大幅5.2cm、最大厚6mm袋部最大幅4.3cm×厚さ3mmを測る。袋部は、両端を引き伸ばし、刃側へ折り返しており、断面が梢円形を呈している。サビの付着が著しい。

表土出土遺物 (Fig. 72-7, PL. 57, 58)

土師器

小型丸底壺(7) 口径12.2cm、復元高9cmを測る。口縁は内湾気味に外反し、端部は細くなる。頸部内面に稜を形成する。内外面ヨコナデ調整されているが、底部部分は、静止ヘラ削り調整が施されている。胎土は精選され、色調は暗い黄土色である。焼成は良好である。

小 結

古墳時代の3軒の住居跡は、ベットを有した方形、もしくは長方形の平面形を呈するものと考えられる。鉄斧が出土したPit 7は、その位置からみて、SI02住居跡内に伴う柱穴の可能性がある。住居跡の時期については、SI02内D 5、或いはSI01内のD 4出土遺物を検討すると、D 5出土の変形土器は、口縁が外反し、端部を肥厚させており、在地的要素が強く、17街区住居跡出土例と同類のものである。SI02は庄内期或いは布留占期に併行するものと考えたい。SI02は高台付鉢の形態からSI02と同じ時期が考えられる。SB01建物については、出土遺物が無いため時期比定ができない。梁間約7.6尺、桁間約8尺を測るもので、柱穴規模からみて、律令時代に築かれた倉庫跡と考えられよう。詳しくは、第55次調査報告で述べたい。

5. 第31次調査

調査の概要

調査対象地は、福岡市西区有田1丁目34-2番地に所在し、対象面積は580m²である。有田地区の最高所は標高16m前後を測り、平坦部を形成するが、この平坦面の西に偏在する。この地域は、北西から谷が形成され、舌状に分岐する台地の基部に位置しており、標高13mを測る。当該地の北側に北西方向から入る大きな谷が形成され、又、南側にはやはり北西方向から入る小さな谷が形成されている。又、この舌状台地の西側は室見川によって開析を受け、部分的に段丘を形成する。当該地の南側では第1、2次調査（旧称13街区）及び第12次調査が実施されており、古墳時代前期住居跡2、奈良時代炉跡3、掘立柱建物2が検出されている。

昭和54年11月に建築確認が申請されたので、試掘調査を実施し、その結果、住居跡を検出したので発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は昭和54年11月12日～12月1日迄実施した。調査は排水の関係上2分割して行ったが、立木の存在する部分については調査を除外した。遺構はローム層上に形成されるが、既に削平を受けているため、表上下約20cmで検出される。遺構は古墳時代住居跡1軒、掘立柱建物4棟、土壙1を検出した。地形が高い割に遺構が少ないので、削平の著しさを示している。

旧地形によると、当該地がこの舌状台地上の最高所に位置しているからであろう。

検出遺構

住居跡 (SI)

SI01 (Fig. 76, PL. 62)

南北長3.64m、東南長3.48m、深さ22cmを測る方形の住居跡である。主柱は四本で、径26～48cmを、深さは床より32～42cmを測る。掘方は叩き締められており、柱根径は20cm前後であろう。西壁の中央にはかまどを付設しており、又、西南の隅角には貯蔵穴を作っている。かまどは、青灰色粘土と褐色粘土を混ぜて築かれたもので、“コの字形”を呈する。かまどの奥行は80cm、間口46cm、奥壁幅30cm、残存高25cmを測る。底部は隅丸方形の浅いくぼみとなっているが



Fig. 74 第31次調査位置図 (1/2,500)

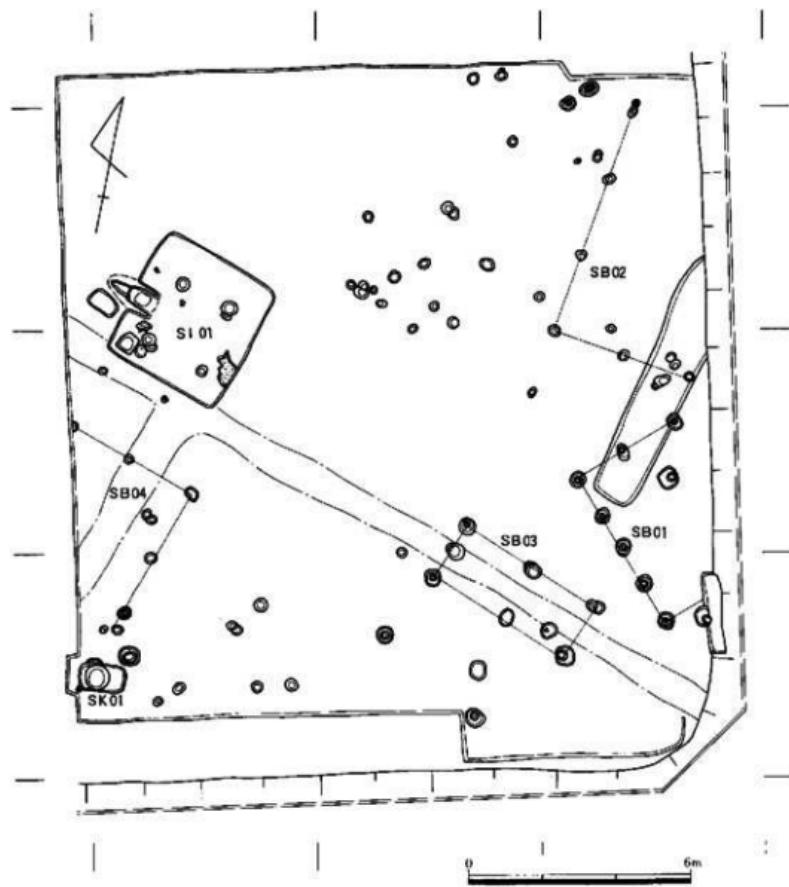


Fig.75 遺構配図 (1/150)

上部の構造は削平のため不明である。底部には炭化物、灰、焼土が充填しており、小型の鉢形土器と転石が支脚として据えられる。この支脚を覆う形で、高杯形土器が破片として出土した。住居跡外には煙出しが付設されており、全長54cm、煙道の長さ34cm、煙出し径16cm×18cmを測る。残存状態は悪く、わずかに深さ2~3cmを残している。煙道、及び煙道周囲の幅約20cmに亘って焼けていた。貯蔵穴は開丸方形を呈し、径50cm、深さは床面から45cmを測る。内部には変形

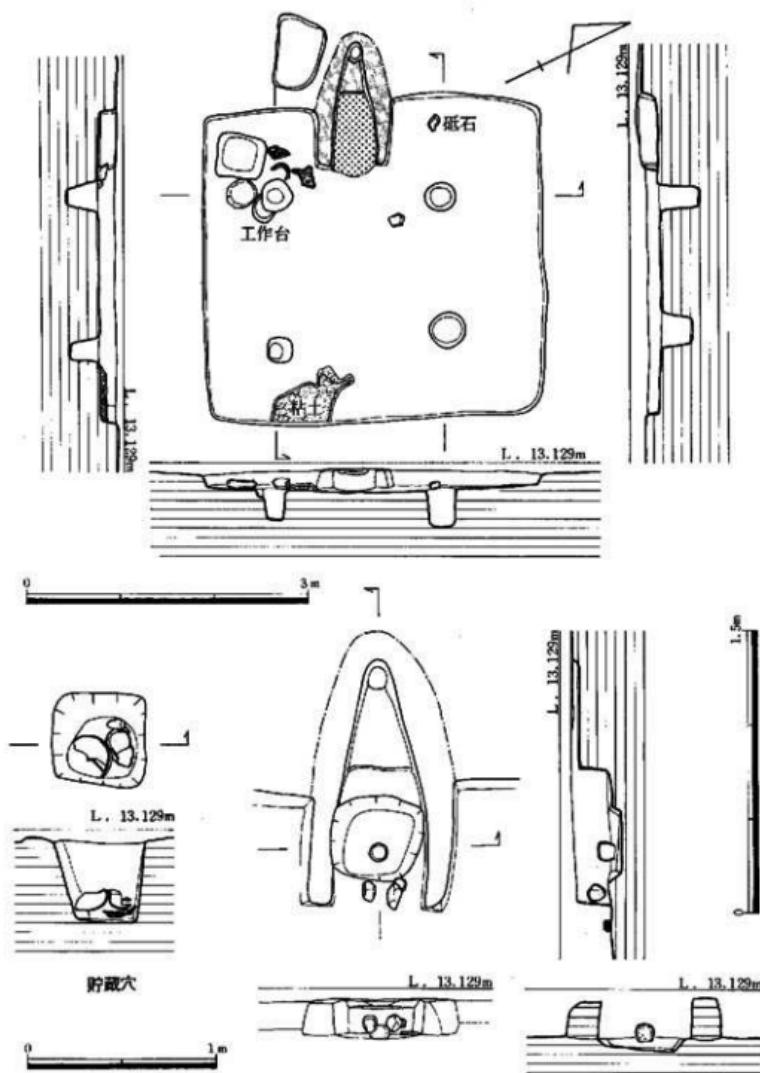


Fig. 76 住居跡 S101 (1/60) かまど, 貯藏穴 (1/30)

土器が大きく破損した状態で出土した。又、貯蔵穴の東側には工作台が置かれていた。東壁の東南隅丸角寄りには灰青色の粘土が検出された。出土遺物は覆土中より鉄製品1点、滑石製小玉4点、把手1点が、床面より須恵器杯蓋1点、壺形土器4点、壺形土器1点、砥石1点、工作台1点が、かまど内より須恵器杯身1点、小型鉢形土器1点、高杯形土器1点が出土した。

掘立柱建物 (SB)

計四棟検出されたが、削平或いは境界地に位置するため、規模が確認できるのは1棟だけである。

SB01 (Fig. 77, PL. 60)

調査地の東端に位置しているが、区画整理時に半分以上を削平されている。現存は梁行2間×桁行2間の掘立柱建物である。桁間に各1本の間柱が設けられている。主軸方位をN42°Wに置いて、現存の梁行間は307cm、梁間平均153.5cm。現存の桁行間455cm、桁間平均227.5cm、間柱間平均11.3.8cmを測る。掘方径35~42cm、柱根径15cm、深さ20~30cmを測り、同規模の柱穴で構成している。覆土は黒褐色土を呈しており締りは良いが、柱根は暗茶褐色粘質土で軟らかい。遺物は出土しなかった。

	梁 間	梁行間	桁 行	桁 間	桁行間	P	深 さ	長 桁	短 桁
P1 P2	162	307	P3 P4	122		1	52	38	30
P2 P3	142		P4 P5	98		2	51	40	27
			P5 P6	115	455?	3	44	36	34
			P6 P7	120		4	40	36	32
						5	39	42	36
						6	42	37	35
						7	42	41	37
平均	152		平均	113.8		平均	44.3	38.6	33

表6 SB01計測表

SB02 (Fig. 77, PL. 61)

調査区の東側に位置し、SB01同様に区画整理によって削平を受け、規模の確認は不可能であった。現存は梁行2間×桁行3間の掘立柱建物である。主軸方位をN 9°30' Eに置いて、現存の梁行間381cm、梁間平均191cm、現存の桁行間647cm、桁間平均215.7cmを測る。柱穴径は22~30cm、深さは10~28cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土である。しまりは悪い。遺物の出土は無かったが、柱穴の覆土からみて、中世に属する建物であろう。

SB03 (Fig. 78, PL. 61)

梁行1間×桁行2間の掘立柱建物である。建物が小規模で、東西に細長い事など考え合せる

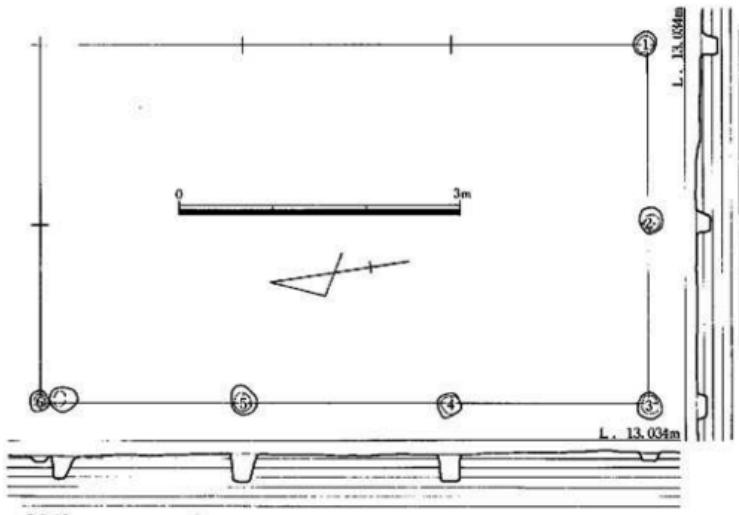
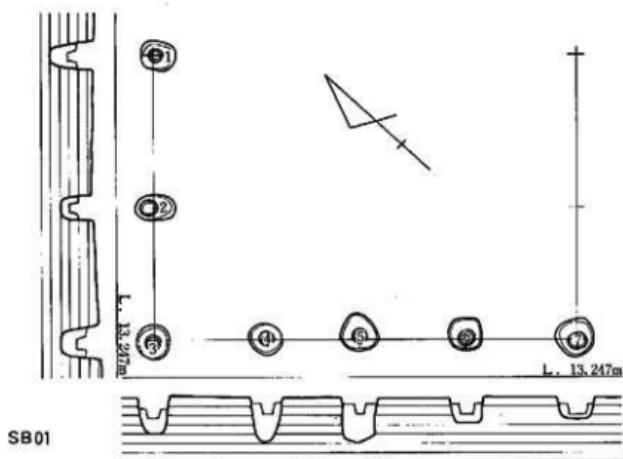


Fig.77 捨立柱建物 SB01, 02 (1/60)

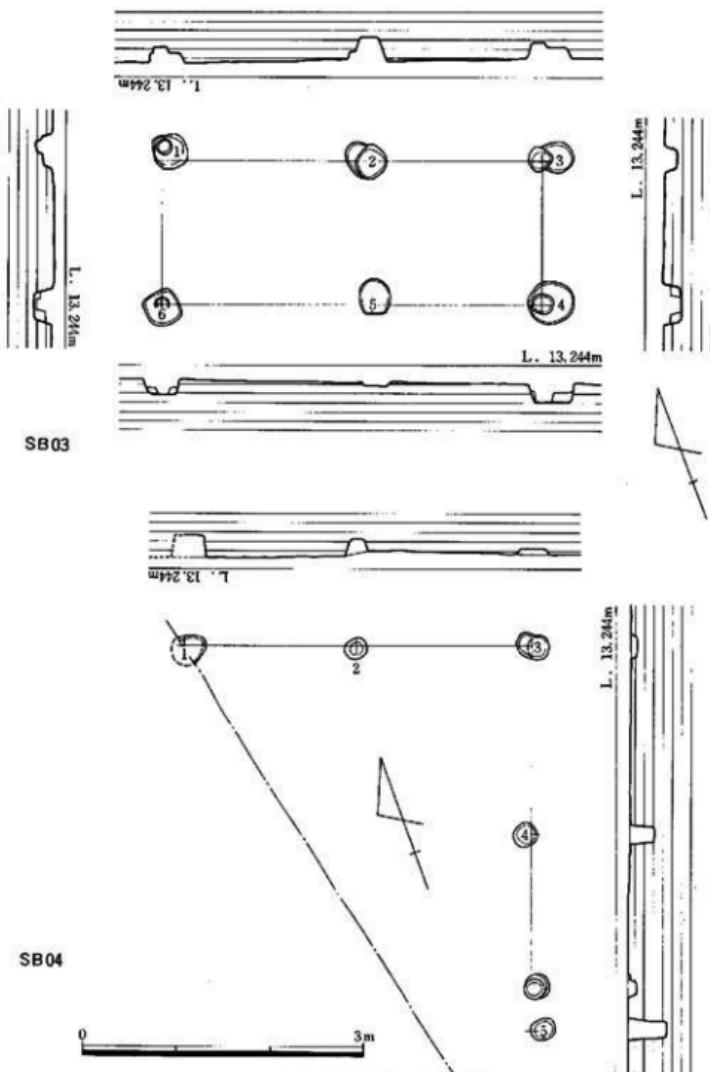


Fig. 78 挖立柱建物 SB 03, 04 (1/60)

と本来の建物構造を遺残していないかもしれない。主軸方位 N69°30' Wに置いて、梁間平均 160.5cm、桁間間404cm、桁間平均 202cmを測る。柱穴掘方径は36~50cmを測り、円形もしくは開丸方形を呈する。柱根径は15~20cmを測る。覆土は黒褐色粘質土に褐色土のブロックを含んだ土で、非常にしまりは良い。遺物は出土しなかった。

	梁 間	梁行間	桁 行	桁 間	桁行間	P	深 さ	長 径	短 径
P1 P2	191			212		1	26	24	22
P2 P3	193	384	P3 P4	221	649?	2	18	26	24
			P4 P5	216		3	12	27	24
			P5 P6			4	34	27	24
						5	34	32	25
						6	15	20	18
平均	192		平均	216		平均	23.2	26	22.8

表7 SB02計測表

	梁 間	梁行間	桁 行	桁 間	桁行間	P	深 さ	長 径	短 径
P1 P6	153	—	P1 P2	183		1	38	38?	34
P3 P4	168	—	P2 P3	220	403	2	44	38	30
			P4 P5	180		3	33	42	36
			P5 P6	224	404	4	39	50	46
						5	22	40	32
						6	32	44	27
平均	160.5		平均	202	403.5	平均	34.6	42.8	35.8

表8 SB03計測表

SB04 (Fig.78)

西側境界地で検出したので、建物として若干の不安が残る。現存では梁行2間×桁行2間の掘立柱建物である。主軸方位はN20°Eに置き、梁間平均186cm、桁間平均205cmを測る。柱穴径は25~35cmを測る。深さは一定ではない。覆土は暗い茶褐色粘質土であることから、中世の遺構と考えられる。遺物は出土しなかった。

土壤 (SK)

SK01 (Fig.79, PL.64)

開丸長方形プランを呈しており、長さ 110cm、幅65cm、深さ12cmを測る。床面の西寄りには、更に径68cm×60cm、深さ66cmの円形 Pitが設けられる。遺物は Pit 内り滑石製の小玉が2点

出土した。土壇の覆土は黒褐色粘質土に褐色土ブロックを混入した層である。土壇内 Pit は図示した通り 9 層に分けることができる。大規模な掘立柱建物の柱穴を考えることも可能である。

出土遺物 遺物は住居跡 と土壇内から出

土した。Pit か

らの出土遺物は全て細片で実測し得ない。

住居跡出土遺物 (Fig. 80, 81-1~3, PI.. 65)

須意器

杯蓋（3） 口径 13cm、器高 4.5cm を測る深い器形である。天井部と体部の境は緩い段がつき、その下を沈線状に巡らしている。口縁端部はつまみ出して、内面に明瞭な段を有す。ヘラ削りは天井部のほとんどに施される。ヘラ削りの方向は逆時計回りである。内底部には青海波のタキが認められる。灰青色を呈する。床より出土。

杯身（4） 口径 12.2cm、推定器高 3.3cm を測る浅い器形である。受け部は小さく、立上りは器壁が薄く、長さ 1.2cm を測り、外溝気味に直口する。天井部のヘラ削りは底部の約 2/3 に施され、削りの方向は逆時計回りである。灰色を呈す。かまど内の焼土より出土。

土師器

甕形土器（1, 5, 6, 7） 1, 5 は口縁が外反し、端部は丸味を持つ。頸部が強く締り、頸部が球体を呈する形態で、最大径は頸部中位にある。1 はひずみが著しいため、図上復元したものである。頸部から頸部中位迄は丸味をもたない。この部分には、上から下へヘラによる削り整形が施される。底部は平べったい丸底で、ヘラによるナデ調整が施される。口径 19cm、器高 26.1cm を測る。淡赤褐色を呈する。5 は口径 16cm を測る。II 線は外面に粘土を貼付けるた

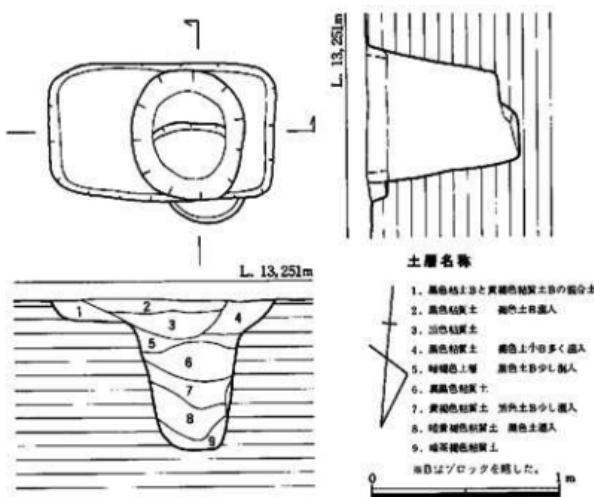


Fig. 79 SK 01 (1/30)

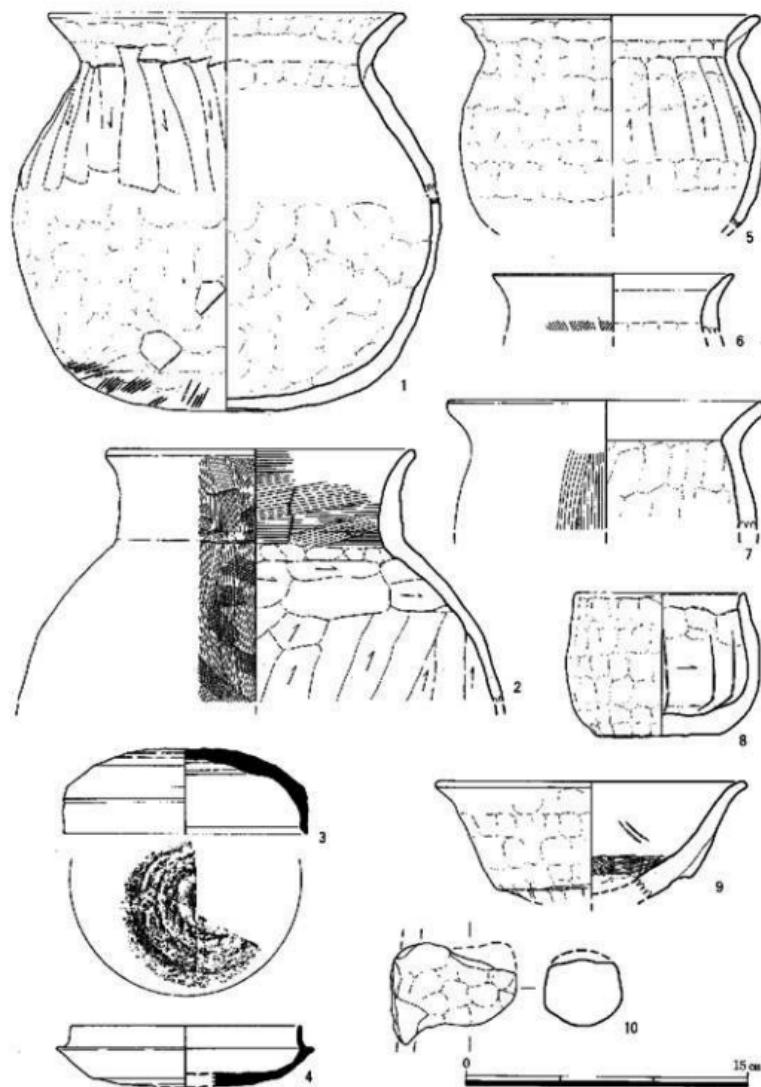


Fig. 80 住居跡 S101 出土遺物 (1/3)

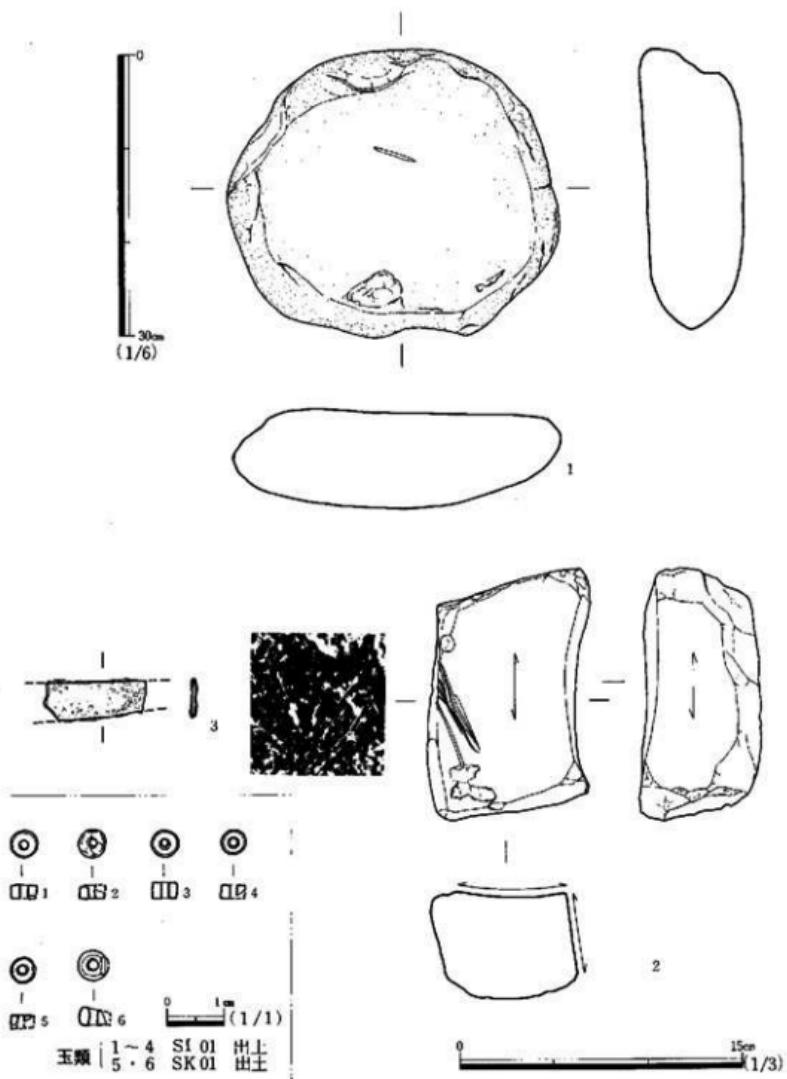


Fig. 81 出土遺物 (1/3)

め肥厚する。胴部内面は、中位から頸部方向にヘラ削りが施される。淡赤褐色を呈する。6, 7は、胴部が大きく張らず、やや長目の器形である。6の口縁は小さく外反する。口径13cmを測る。胴部外面にはタテ方向のハケ目を施す。茶褐色を呈す。7は口径17cmを測る。頸部内面には強い稜を有している。胴部外面にはタテ方向の荒いハケ目を施す。黄褐色を呈する。

壺形土器（2） 口径16cm、現存高13.5cmを測る。頸部は内面に粘土を貼付けて肥厚する。口縁の立上りは直口気味で、先端が緩く外反し、端部は丸味をもつ。胴部は丸味をもつが肩は張らない。口縁内面はヨコ方向の、外面にはタテ方向のハケ目を施す。胴部内面はヘラ削りである。茶褐色を呈する。

高杯形土器（9） 口径16.4cmを測る。脚部は欠尖している。器高の高い杯で、底部と体部の境に段を有する。段は外面に粘土を貼付けて形成したものである。口縁部は緩く外反し、端部には緩い稜を有する。内面は板状のもので粗いナデを施し、内底部にはヨコハケを施す。暗黄褐色を呈する。

鉢形土器（8） 手づくね土器であろう。歪みが著しい。口径9.2cmを測る。底部は平底を呈し、体部下半が膨らむ器形である。口縁は直口する。内面はヨコ方向の削りが施される。二次的に火を受け暗赤褐色を呈する。

把手（10） 貼付けの把手で、断面は円形を呈し、径4cmを測る。先端をつまり上げた形を呈する。黄褐色を呈する。覆土より出土。

石器

工作台（1） 不整円形を呈し、扁平な転石を利用したもので縁辺に若干の加工を施している。径35.4×30.6cm、厚さ10cmを測る。工作面は平坦で、やや中凹み状を呈する。玄武岩である。

砥石（2） 軟質砂岩製である。長さ13.5cm、幅8.7cm、厚さ5.8cmを測る。A面及び右側面を砥面として利用している。左側面、両小口は面取り整形され、裏面は自然面のままである。A面の左側辺近くに6条の条痕が走り、裏面には9本の鋭利な条痕が刻まれる。気泡が多い材質である。床面より出土。

鐵器（3） 刀子の破片で、現存長7cm、最大幅28cm、厚さ2mmを測る。上下の小口部分は丸味をもっている。覆土より出土。

玉類（Fig. 81-正類1, 2, 3, 4）

いずれも滑石製の小玉である。円筒状に成形した玉を2~3mm幅に切り落したものである。孔は一方向からあける。全て覆土中である。

SK01出土遺物

玉類（Fig. 81-5, 6, PL. 66）

滑石の小玉で、SI01出土の小玉と同様な作りである。側辺が丸味をもつ。一方向から穿孔している。

単位:mm

小 結

遺構は古墳時代後期の住居跡1軒、掘立柱建物4棟、土壙1を検出した。土壙SK01は、長方形プランの内部に径64cmの円形土壙を更に掘り込んでいる。こうした例は少なく、又、この地点から東へ50m程に第29次調査のSB01建物が所在しており、こ

No.	種類	径	厚	孔径	材質	色彩	備考
1	小玉	4.5	2.5	1.5	滑石	灰緑色	SK01出土
2	+	4.5	2.0	1.5	+	茶灰色	+
3	+	4.5	3.0	1.5	+	灰緑色	+
4	+	4.5	2.5	1.5	+	+	+
5	+	4.5	2.0以上	1.3	+	乳灰白	SK01出土
6	+	5.5	3.5	1.5	+	灰緑色	+

表9 玉類計測表

のSK01の土壙が掘立柱建物を構成する柱穴の可能性がある。掘立柱建物4棟は、いずれも柱穴の小規模な建物であるが、時期の比定できる遺物は出土していない。覆上からみて、SB02が中世後半に属し、他は古墳時代以降の所産と考えられる。SB01, 02, 04ともに削平、もしくは境界地に所在するため規模が不明であるが、SB01は、梁行2間×桁行2間の建物と推測され、梁間5尺、桁間7.6尺である。SB02は、梁行2間×桁行3間の建物と推測でき、梁間6.4尺、桁間7.2尺を測る建物である。SB03は、梁行1間×桁行2間の建物だが、平面形が細長く、建物の構造としては疑問がある。住居跡は西壁にカマドを設け、4本の主柱をもつた構造である。カマドの南側に貯蔵穴を設け、更に工作台を置くなど、当時のままに近い状態であった。遺物は、土師器の臺形土器、甕形土器、高杯、鉢、須恵器の杯身、蓋がセットで出土した。その他、覆土中からは、滑石の小玉、鐵器が出土し、床面から工作台、砥石が出土している。須恵器の杯蓋は、天井部と口縁部の境にわずかな段を有し、口縁端部内面に段をもつなど古式の器形を示している。杯身は体部に明瞭な段をもたず、口縁端部も丸味をもち、蓋に比べ新しい様子を示している。この須恵器は小田氏編年でⅢ-A期に属する時期が考えられる。住居跡の時期もこれに準じ、6C代中頃と比定される。

*註1. 小田富士雄「九州考古学研究」古墳時代篇 昭和54年

6. 第33次調査

調査の概要

調査対象地は、福岡市西区小田部1丁目230-231番地に所在し、対象面積は491m²である。有田・小田部の台地は、北へ向って伸びる舌状台地を多く派生しているが、小田部地区の内でも特に一丁目周辺の台地は高い位置を占めている。この台地は、長さ約260mを測り、最高所の標高は約10mを測る。台地の東側は強い斜面であるが、西側は、緩い傾斜を示している。台地の高低差は著しく比高差約6mを測る。又、台地の北側縁辺は、室見川の開析によって断崖状を形成している。当該地は、こ

の台地の西侧緩傾斜地の裾部分に位置している。又、この位置は、谷の開口部分に相当する。当該地は、標高約5mを測る緩傾斜地であるが、区画整理による造成が行なわれており、東隣地との比高差は1.5m前後を測る。現況は果樹園及び畠地であった。台地の尾根部分に於いては、第25~27次調査が実施されており、弥生時代から中世に至る時代の遺構、遺物が検出されている。昭和54年11月に建築確認が申請されたことにより、試掘調査を行った結果、申請地の西半分に遺構を確認したため、発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和55年5月20日~6月7日迄実施した。排土の関係上、調査区を東・西に二分して行った。又、生垣、果樹の移動の不可能な部分は未調査として残した。試掘の結果の通り遺構は西側に集中して検出されたが、東側は造成工事の切盛りによって削平されている。又、



Fig. 82 周辺地形図 (1/400)

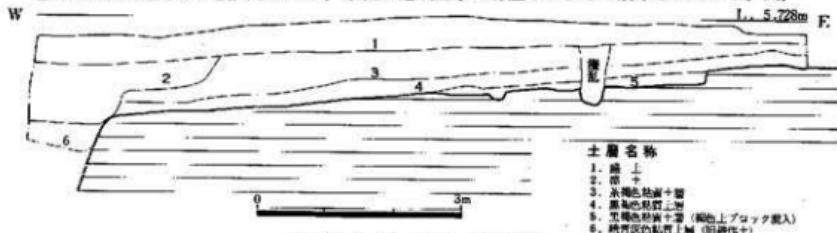


Fig. 83 北壁上層図 (1/80)

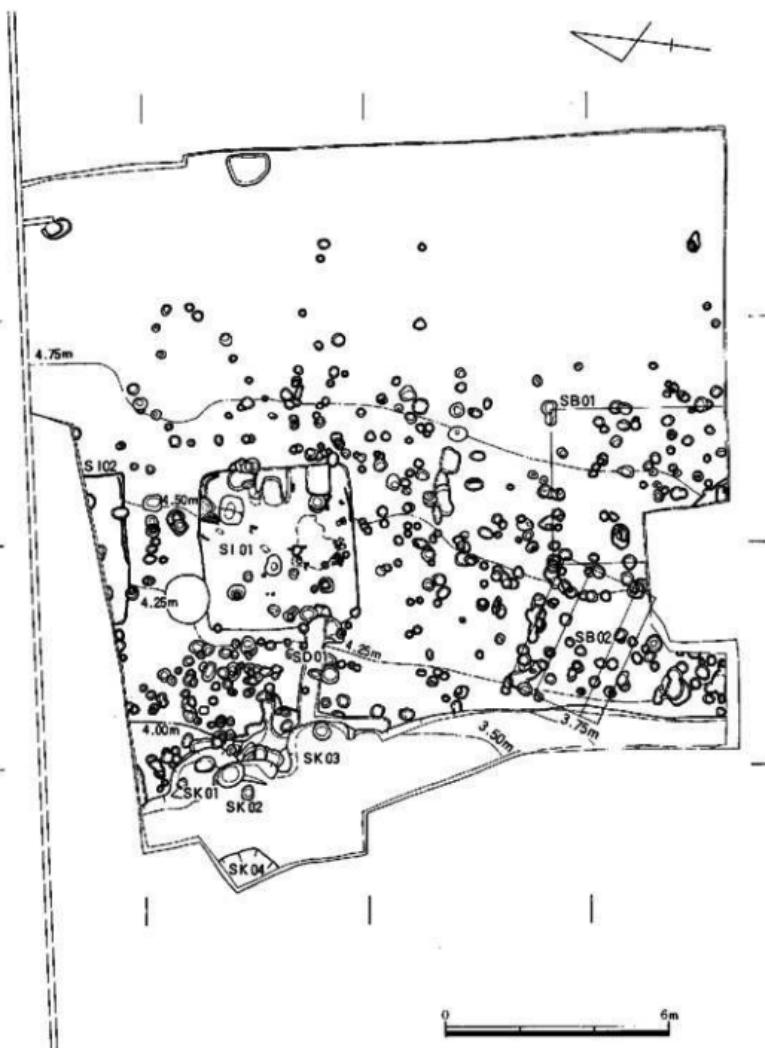


Fig.84 道構配図 (1/150)

申請地の西側境界地では、幅10mに渡って、水田化のため地下げが行なわれており、地山の比高差90mを測る。そのため境界地から東へ10mの幅については、遺構の遺存が悪いと判断し、一部、遺構を検出した部分を除いて、調査対象から除外した。土層図（Fig. 83）に示す通り、土層は5層に分けることができる。第Ⅰ～Ⅱ層は、近世の埋土である。第Ⅲ層は真砂土を、第Ⅳ層は残土である。第Ⅴ層は茶褐色粘質土で、これは旧畑地の耕作土である。第Ⅵ層は黒褐色粘質土で、遺物を含んでいる。約20mの厚さを堆積している。東側では削平のため存在しない。第Ⅶ層は暗青灰色粘質土で旧水田で耕作土である。遺構面は西側へ緩く傾斜しており、比高差は30cmを測る。又、水田化による削平部分迄の比高差 120cmを測る。よって、遺構迄の堆積上は東側が30cm、西側が 100cmを測る。

遺構はローム層上に検出され、古墳時代住居跡 2軒、不明土壙 3、井戸 1、溝状遺構 1、掘立柱建物 2棟を検出した。

検出遺構

住居跡 (SI)

2軒を検出したが、残存状態は良好ではない。他に痕跡を1ヶ所検出しているので、他に住居跡が存在した可能性がある。SI01は、西側が削平され、壁が明確ではない。又、SI02は境界地にあるため、規模確認はできなかった。

SI01 (Fig. 85, PL. 68)

西壁、及び北壁の一部は消滅しているため貼床部分で規模の確認を行った。東西長4.30m、南北長4.10m、現存壁高22cmを測る。隅丸方形を呈した住居跡である。主柱は4本で、P1～P4である。掘方径40～60cm、深さは床より40cm～50cmを測る。掘方の土は余りしまっていない。柱根径は20cm前後である。東壁のほぼ中央にU字形のかまどが付設される。又、かまどの両側に接して貯蔵穴が作られている。かまどは灰青色粘土と褐色土を混じえて構築されており、内部には灰、炭化物、焼土が充填していた。底部は浅く窪んでいる。かまどの長さ100cm、幅115cm、奥行75cm、開口約50cmを測る。煙道、煙出しは検出できなかった。床面はタタキ状を呈しており、他の部分からは、多くの炭化物、焼土が検出された。遺物は、南壁寄りに出土したが、いずれも原位置を保っているものと考えられる。周溝は、北東の隅丸部分や南壁の一部に認められたが、壁下を全周するものではない。周溝の幅5～15cm、深さ3cm～7cmを測る。貯蔵穴(D1)は長さ65cm、幅50cm、深さ約15cmを測り、不整隅丸長方形プランを呈する。内部からは土師器、杯2点、壺形土器などが出土した。この貯蔵穴はかまどに密着して作られ、覆土には焼土などが入っていた。又、粘土塊が一部を覆っており、かまどとは前後して作られた可能性もある。もう一つの貯蔵穴(D2)は東南の隅丸寄りに一辺を接して作られており、長さ124cm×幅94cm、深さ50を測り、隅丸長方形プランを呈する。断面形は袋状を呈し、覆土は暗茶灰色粘質土である。遺物は全

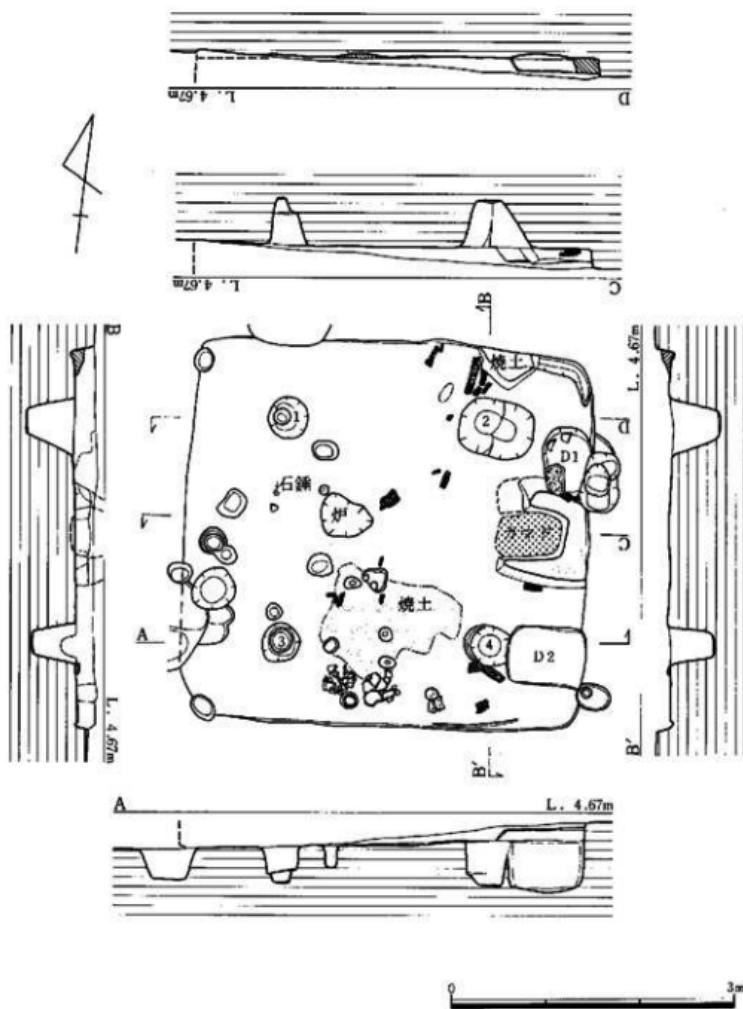


Fig. 85 住居跡 S101 (1/60)

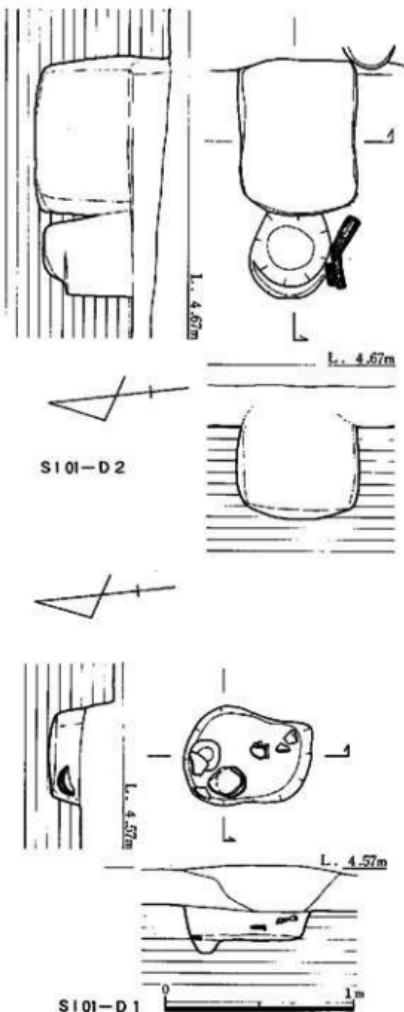


Fig. 86 住居跡 S101 内 D 1, D 2 (1/30)

いる。床面には東側の壁に接して、径 54cm × 37cm、深さ約 20cm を測る楕円形プランの Pit が設けられている。土壌の覆土は暗茶褐色粘土質を呈しており、出土した遺物は全て細片であつ

く含んでいない。この住居跡は焼土、炭化物の在り方などから検討すると、火災を受けた可能性がある。D 1 内の多量の焼土の検出、或いは炭化物、粘土塊の転落、被覆は火災の結果とも考えられよう。出土遺物は、土師器の杯形土器、甕形土器、鉢形土器、瓶形土器、手づくね上器、滑石製筋錘車が出土した。須恵器は 1 点も出土しなかつた。

S102 (Fig. 87, PL. 68)

境界地で検出したため、規模は不明である。隅丸方形プランを呈し東西長 3.86m、南北の現存長 102cm、現存の深さ 20cm を測る。床面のタタキ締めは認められなかった。周溝は南壁下に部分的に検出した。幅 4cm ~ 8cm、深さ 2cm を測る。出土遺物は非常に少なかったが、東南の隅角付近から、須恵器の平瓶が 1 点出土した。底部を床面に密着させており原位置での出土である。

不明土壙 (SK)

西側段落ち部分で、SK 01 ~ 03 が南北に並んだ状態で検出した。いずれも、水田の開削時に破損を受けている。又、湧水のため、調査は著しく阻害された。この土壙周辺からはスサ入り焼壙や、鉄滓の大塊が多く出土している。

SK01 (Fig. 88, PL. 73, 74)

SK 02 と切合っているが、前後関係は不明である。現存の長径 $165 + \alpha$ cm × 短径 $145 + \alpha$ cm、深さ 50cm を測り、不整円形プランを呈している。床面はやや凹凸を呈して

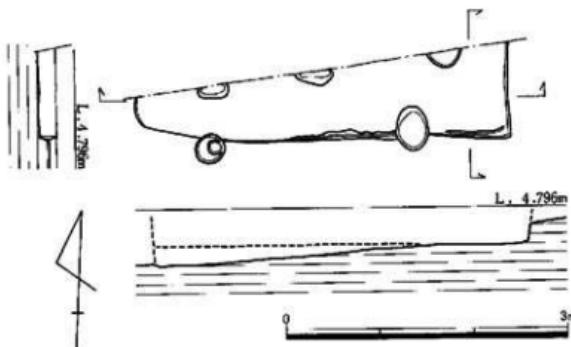


Fig. 87 住居跡S102 (1/60)

た。鉄滓、焼壁などは検出しなかった。

SK02 (Fig. 87, PL. 73, 74)

SK01と切合っており、SK01に比べ床面は深い。現存径は、長径 $180+\alpha$ cm × 短径 $80+\alpha$ cm、深さ64cmを測る。不整円形プランを呈している。床面は凸凹しており、北東側壁に接して径80cm×65cm、深さ10cmを測る不整円形プランのPitが設けられる。このPitの直上に、輪の羽L1点が床から浮いた状態で出土した。覆土は、SK01同様に暗茶褐色粘質土であり、出土した遺物は輪の他は細片であったが、須恵器高杯片と越州窯系の碗が出土した。鉄滓、焼壁等は検出しなかった。

SK03 (Fig. 87, PL. 73, 75)

SK01、SK02の南側に位置している。残存状態は先の二例に比べて良好である。残存径は長径 $185\text{cm} \times$ 短径 135cm 、深さ60cmを測り、平面形は円形を呈している。床面は凸凹しており、東側壁に接して、径48cmの円形プランのPitが設けられている。覆土はSK01、SK02同様に暗茶褐色粘質土である。遺物はいずれも細片であり、鉄滓、或いは焼壁などの出土は無かった。

以上3基の土壤については、内部から焼壁、鉄滓等の出土は無かったものの、土壤周辺からの多量の壁体片、鉄滓の大塊の出土、或いはSK02内部から輪の出土などの条件から、製鉄跡に関係する遺構と言えるだろう。年代については、覆土である暗茶褐色粘質土やSK02出土の越州青磁から或る程度、年代を推測し得るであろう。

SK04 (Fig. 88, PL. 75)

調査区の西北部分の境界地で検出した。水田の開削時に削平を受けているものの残りは良好であった。湧水及び盛土の崩壊の危険もあり、平面プランの確認だけに終った。平面プランは不整円形を呈し、径は約2.0m、深さ30cm以上を測る。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は、瓦質土器が出土している。中世の時期と考えられる。

掘立柱建物 (SB)

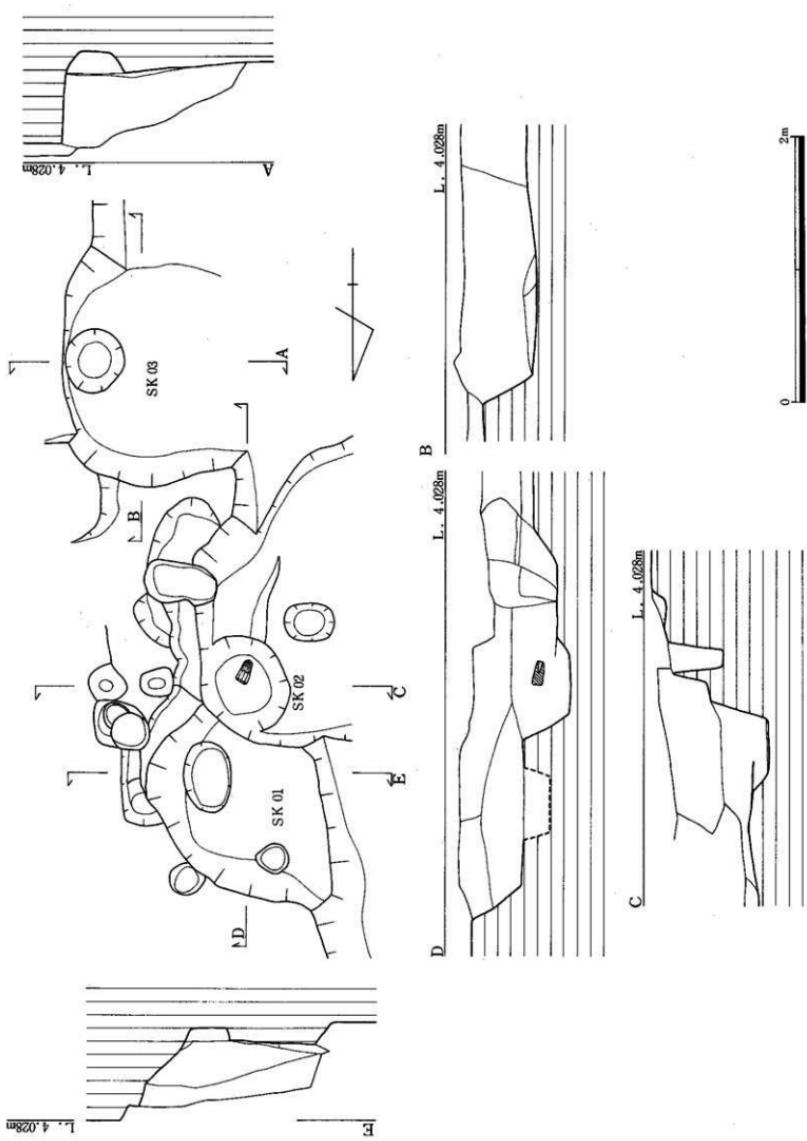


Fig. 88 SK 01, 02, 03 (1/30)

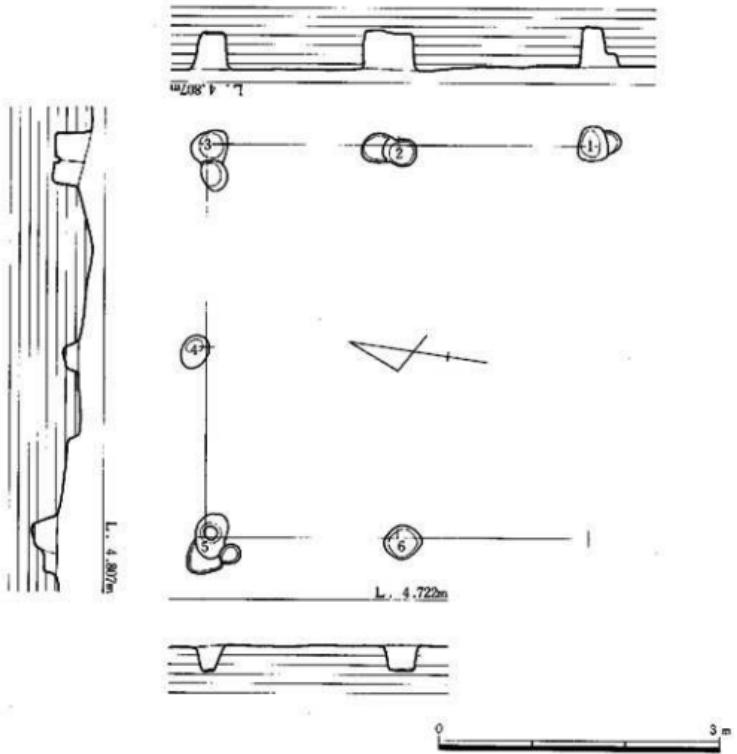


Fig. 89 脚立柱建物SB01 (1/60)

	梁間	梁行間	桁行	桁間	桁行間	P	深さ	長径	短径	単位: cm
P 3 P 4	217		P 1 P 2	205		1	41	42	32	
P 4 P 5	203	408	P 2 P 3	204	414	2	41	30	29	
			P 5 P 6	204	419	3	39	35	32	
						4	15	37	30	
						5	27	32	20	
						6	24	40	35	
平均	210			204.3		平均	40.8	36	30.5	

表10 SB01計測表

SB01 (Fig. 89)

調査区西側の境界地に位置しており、現存は梁行2間×桁行2間+αの掘立柱建物である。建物は主軸方位を N13°30'W に置いて、梁行4.08m、梁間平均2.05m、桁行4.14m、桁間平均2.08mを測る。柱穴径は32~42cmを、深さ15~41cmを測る。柱列は梁行、桁行共に通っている。柱穴の大きさから、2間×2間、或いは2間×3間の建物が考えられる。

溝状造構

調査地の西端で検出されたもので、L字形を呈している。SK01、SK03を切っている。溝幅は50cm、深さ6cm~12cmを測り、東西方向から、南北方向に直角に曲がっている。覆土は暗褐色粘質土である。出土遺物は細片であり、時期比定はできないが、覆土から中世の時期が考えられる。

出土遺物

包含層、SI01、02、Pitなどから出土している。特にSI01出土の遺物はまとまっている。

SI01出土遺物 (Fig. 90, 91, PL. 76)

土器

杯（1~4） 1、4が床面、2が覆土、3がD1出土である。1は口径12.8cm、器高4.9cmを測り、体部は丸味をもつが、口縁は開き気味である。外面は口縁と底部を除いて静止ヘラ削りが施される。削りの方向は時計回りである。口縁外面はヨコナデを施す。内面にはヘラによるヨコナデ痕が残る。2は口径12.4cm、現存高3.7cmを測る。1と同様に体部は丸く開き気味で、口縁を除く体部に逆時計回りの静止ヘラ削りを施している。1、2共に、器壁は底部が薄く、口縁周辺は肥厚する。二次的に火を受け、表面摩滅している。黄土色を呈している。3は口径12.4cm、器高4.6cmを測る。底部は平たく、体部は丸味をもち、口縁端部は細く丸味をもち、内傾する。体部から底部外面には、逆時計回りの静止ヘラ削りを施している。内底部分にはヘラによるヨコナデの痕跡が残っている。底部の器壁は厚い。暗い黄褐色を呈する。4は口径12.6cm、器高4.9cmを測る。器形は3と同じ作りであるが、器壁は薄手である。底部は丸味をもち、口縁端部は内傾する。外面体部の3/4に逆時計回りの静止ヘラ削りを施している。外面は淡黒色を、内面は暗黄褐色を呈する。

碗（5） D1内より出土。丸味をもった。器高の深い碗である。残存の最大径は15.8cmを測る。口縁を欠いている。作りは荒く、内外に指圧調整痕を残している。外面にはタテ、ナナメの不規則なハケが施される。板状の工具を用いて、器面の凹凸を調整したものである。二次的な火を受けている。暗黄灰色を呈する。甕形土器の底部の可能性もある。

手づくね土器（6~8） 砲弾形を呈した小型の鉢形土器である。6は口径7.2cm、現存高6.5cmを測る。口縁は直口し、端部を内側につまみ出し、棱をつくる。胴部上位を肥厚させて

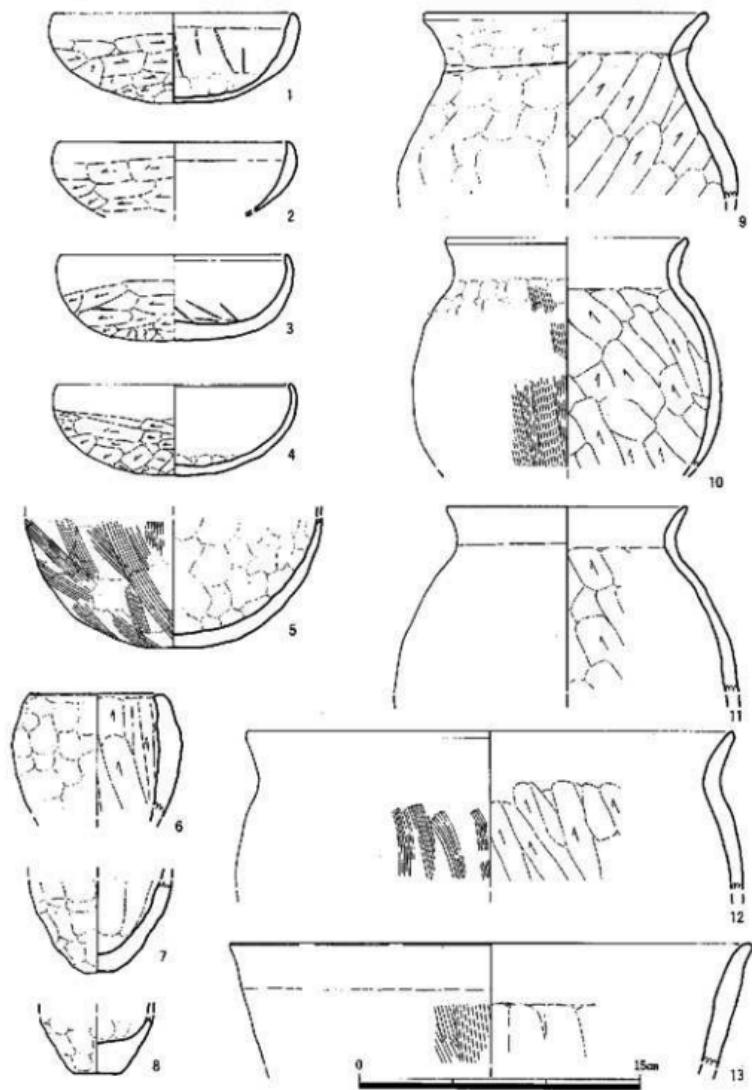


Fig. 90 住居跡ST01出土遺物 (1/3)

丸味をもたせている。底部は尖り気味の丸底であろう。内外に指圧痕残る。色調は暗黄灰色を呈する。9は口縁を欠いている。現存高5cmを測る。底部は尖り気味である。色調は暗灰黄色を呈する。8は底径2.4cmを測る。平底の底部を有するが、胴部、口縁は6、7同様に、丸味をもった肩部と直口するII縁を有する器形である。3個の復元高は10cm内外であろう。いずれも外面はナデ調整を施している。

壺形土器（9～12、14） 9は口径15.2cmを測る。頸部は丸味をもたず、口縁接合部分が強く締まる。肩の張った肩部を有する。最大径は肩部にある。底部はやや半底気味を呈す器形であろう。II縁下部は外面から粘土を貼付けて肥厚させ、接合部分の補強としている。端部は丸味をもつ。内面にはヘラ削りが施される。外面に指圧調整痕残る。摩滅が著しい。色調は淡赤褐色を呈している。10は口径13cm、現存高12.2cmを測る。肩部内面はヘラ削りが施され、外面はタテハケが施される。摩滅が著しい。色調はやや暗い褐色を呈している。11は覆土からの出土。口径13cm、現存高10cmを測る。最大径は肩部下位にある。肩部は肩が張らず、又頸部の屈折も緩かである。口縁は軽く外反し、端部は細く尖り気味である。肩部内面にヘラ削りを施す他は、内外摩滅のため調整は不明である。色調は黄褐色を呈している。12、14は大型の壺形土器である。12は口径26.2cmを測る。肩部は丸味をもつが、張りは小さい。口縁は小さく外反し、端部をつまみ上げるため、外面に稜をもっている。頸部の屈折は緩い。肩部外面はタテ方向のハケを施し、内面はヘラ削りを施している。内外摩滅している。色調は暗黄灰色を呈し、一部黒変している。14は肩部が球形を呈した、大型の壺形土器の底部である。現存の最大径は26.5cmを測る。外面にタテ方向の粗い目のハケを施す。内面はタテ方向にヘラ削りを施す。色調は茶褐色を呈する。

鉢形土器（13、16、17） いずれも楕器として用いた土器であろう。13はII縁28cmを測る。体部はやや外開きで、口縁部をわずかに外へつまみ出している。端部は丸味をもっている。外面にはタテ方向のハケが施され、内面は、タテ方向のヘラ削りがII縁下約3cmの部分迄施される。色調は黄褐色を呈する。摩滅著しい。16は覆土より出土。直口する口縁を有し、肩部はやや張っている。口径28cmを測り、口縁はわずかに外反させている。端部には沈線を入れている。外面は、端部の1cm幅にヨコハケを施こした後、ヨコナデ消しを行っている。その下はタテ方向のハケを施す。内面はタテ方向のヘラ削りである。色調は黄褐色を呈する。破片のため器形には若干不安が残る。口縁が緩く外開きする器形かもしれない。17は口径22.6cm、器高25.3cmを測る。肩部は截頭の砲弾形を呈しており、II縁部は直口するが、端部をかるく外反させている。底部は径7.4cmを測り、焼成前にくり抜かれている。肩部下位に一对の把手が付くが、この把手は插入式の接合である。外面には幅の広いハケをタテ方向に粗く施している。内面は、ヘラ削りを施すが、口縁内外と底部内面の周辺はヨコナデを行なう。色は淡茶褐色を呈する。図上で復元した。

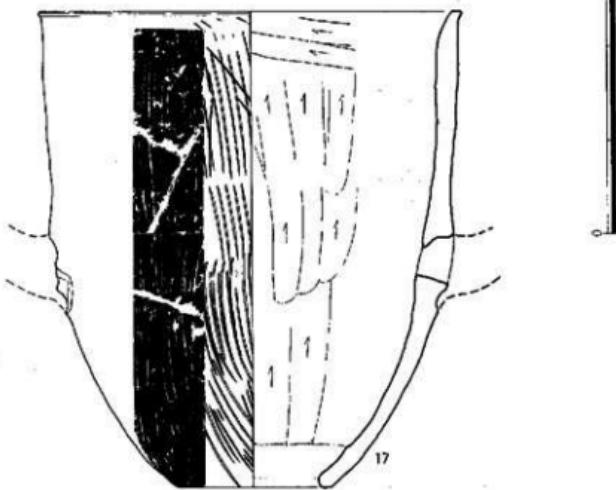
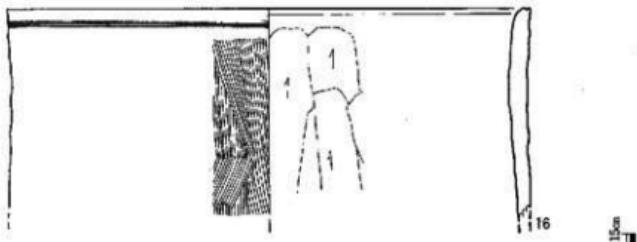
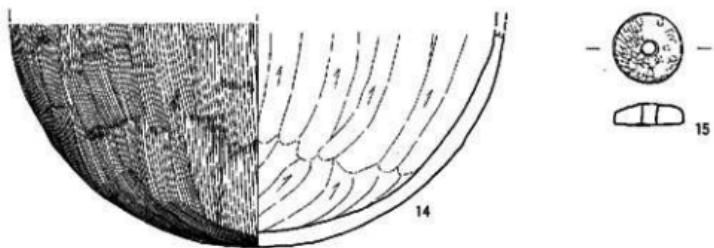


Fig. 91 住居跡S101出土遺物 (1/3)

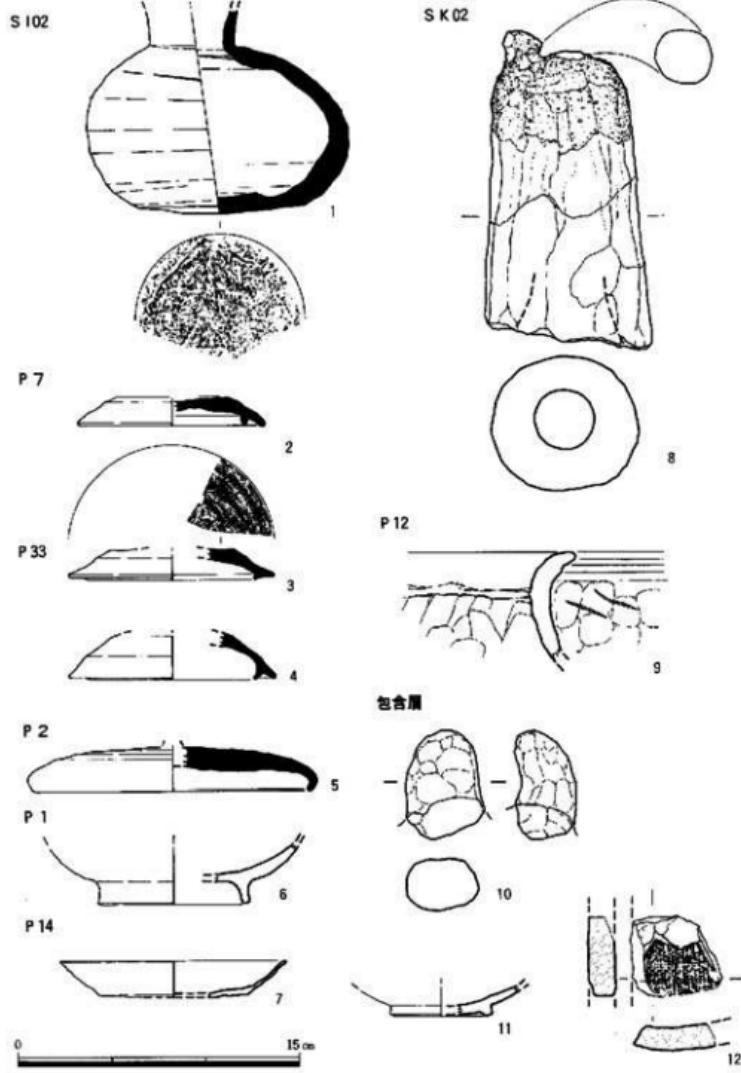


Fig. 92 出土遺物 (1/3)

石器

紡錘車 (15) 滑石製である。円形を呈し、径3.7cm、孔径0.7cm、最大厚1.2cm、側面の幅0.6cmを測る。中央部分が厚く、膨らむ。B面は平らに研磨され、又、側面も研磨を施される。A面は放射状の削り痕が残っており、一部研磨される。孔は一方向から穿孔する。色調は淡黒灰色を呈する。

SI 02出土遺物 (Fig. 92, PL. 77)

出土遺物は少なく、実測できるものは1点だけである。

須恵器

平瓶 (1) 口縁部を欠いている。底径9cm、最大径14cm、現存高10.9cmを測る。口縁部は漏斗状を呈するものと思われ、体部上面の中心から外れて接合される。体部はやや扁平で、ゆるやかに湾曲して、底部に至る。底部は平底だが、やや外へ膨らんでおり、安定が悪い。体部上面はヨコナデを、下半はヘラ削りを施している。底外面にヘラ記号状のヘラ描きが施される。暗い灰青色を呈し、下半は褐色を帯びる。

SK 02出土遺物 (Fig. 92, PL. 77)

輪 (8) 基部の一部を欠損しているが、ほぼ完形である。長さ16cm、基部径9cm、先端部径7cmを測る。筒形を呈し、先端は丸味をもつ。孔は中程で、径3.2cm、先端で径3cm×2.8cmを測る。基部では、約3cm幅に渡って断面漏斗状に器壁が削られ、孔径5.6cmを測る。器壁の厚さは1.7cm～2.6cmである。外面は指圧痕が残り、タテ方向にナデ調整されている。先端から中程迄は熱のため表面がガラス質化している。又、先端部周辺は鉄滓が付着している。色調は外面が黄褐色を、内面は黄灰色を呈する。ガラス質化した部分は暗青灰色を呈する。

Pit 出土遺物 (Fig. 92)

須恵器

杯蓋 (2～5) 2はP7出土、3, 4はP33出土である。2は復元口径7.8cm、口縁端部復元径10cm、器高1.5cmを測る。内面のかえりは断面三角形状を呈し、先端は鋭く、やや外反する。口縁端部より下方へは出ない。天井部は平らで、体部との境は段をなし、明瞭である。体部は丸味をもっている。天井部は回転ヘラ削りが施されるが、削りの方向は不明である。灰青色を呈する。つまみは付かない。3は復元口径9cm、口縁端部復元径11cm、器高1.7cmを測る。内面のかえりは断面三角形を呈するが、内傾しており、わずかに鋭い尖端が外反する。口縁端部より下方に2mm出る。天井部は平坦で、体部との境は明瞭な段をなしている。体部は丸味をもたない。天井部はヘラ削りを施される。又、ヘラ記号を施されている。色調は暗青灰色を呈している。4は復元口径8.8cm、口縁端部復元径11cmを測る。器高は深い。口縁端部より下方に1mm出ている。体部は丸味をもち、天井部との境は明瞭ではない。ヘラ削りは認められない。色調は淡青色を呈している。5は、どの器形の蓋になるのか不明である。復元口径14.8

cm、器高 2.4cmを測る。天井部と体部の境はなく、体部はやや丸味をもつ。口縁部は体部と比べて器壁が薄く、内湾しつつ立上り、端部は強く内傾する。体部の2/3ほどに回転ヘラ削りが施される。ヘラ削りの方向は時計回りである。つまみは欠損している。外面は風化しており、暗青灰色を呈している。

土師器 (Fig. 92-6, 7, 9)

杯(7) P14出土。復元口径 12.1cm、器高 2.0cmを測る薄手の土器である。底部はヘラ切り離しである。色調は暗褐色を呈する。

碗(6) P1出土。高台付の碗である。復元底径 8.2cmを測る。高台は細く高い作りで、やや外へ開く。高さ 1.3cmを測る。体部は丸味をもっている。内面は黒色研磨が施されている。内外面摩滅しており、外面の色調は黄白色を呈する。

變形土器(9) P12出土である。頸部の屈折は強く肥厚している。口縁部は強く外反し、端部は丸味をもっている。口縁直下に沈線を一条施している。胴部内面はヘラ削りである。色調は黄褐色を呈する。

包含層出土遺物 (Fig. 92-10, 11, 12)

土師器

把手(10) 鉢形土器、或いは瓶器の把手で、先端を上向きにした、やや扁平な形状である。接合は挿入式と思われる。

白磁

椀(11) 底径 5.5cmを測る。釉は薄目で、一部高台施される。胎土は白色で、釉は淡灰色を呈している。

瓦類

丸瓦(12) 破片である。厚さ 1.4cmを測る。側辺はヘラで切り落した状態のままである。外面には織目のタタキ痕が残り、内面には布目痕が残っている。暗灰色を呈している。

小 結

当該地の調査では標高 4~5cmを測る台地の斜面下部にも遺構が存在し、現在の谷推定線によって遺構の存在の有無を決定することが無意味であることが明らかになった。検出した遺構は住居跡 2軒、掘立柱建物 2棟、上塙 4、溝状遺構 1である。住居跡は南北に並置して存在しており、いずれも方形プランを呈している。S101は焼上や木炭の分布から焼失した可能性がある。又、遺物の内、須恵器は検出されなかった。図示した土師器は同一時期のセット関係を示すものである。時期は 6世紀の中頃から後半の年代が考えられる。S102は須恵器の瓶 1点であるが、S101と同じ時期である。土壤 S K01~03は周辺からの多量の鉄滓、壁体片の出土とSK02より輪の刃口が完形で出土したことなどから製鐵跡が考えられる。遺物は、覆土中より越州窯系の青磁の粗片と須恵器の第Ⅳ期に属する高杯片が出土したが年代の決め手にはなり得ない。

7. 第34次調査

調査の概要

調査対象地は、福岡市西区小田部1丁目157番地に所在し、対象面積は612m²である。小田部地区は北側、或いは北西方から谷が開析することで、1つの細長い舌状台地を形成している。これらの谷は台地の中心へ向っており、谷頭の集中する地域は、有田・小田部台地の鞍部というべき、平坦な地形を形成している。当該地は、この平坦地の谷頭近くに位置しており、標高は11m前後を測る。この地域では、昭和50年に当該地の東側に隣接して第3a次調査が、昭和51年には南側で第4次調査が実施されている。第4次調査では奈良時代以降の掘立柱建物40棟、製鉄炉跡などが検出されており、当

該地も同様の遺構の存在が予想された。現況は畠地であるが、周囲は住宅化している。昭和54年3月に埋蔵文化財の事前調査願いが申請されたので、試掘調査を実施した。試掘はトレントを東西方向に二本平行して設定した。その結果、掘立柱建物に関すると思われるPitを多数検出したので発掘調査を実施した。

発掘調査は、昭和55年6月9日～6月19日迄実施した。調査は排土の関係上、東、西は一分为して行った。遺構はローム層上に検出されるが、区画整理による削平を受けているので、遺構の密度は低い。特に東側は著しく削平を受けたようである。表土は耕作土で、西側が20m、東側は30mを測る。検出した遺構は古墳時代の住居跡1軒、掘立柱建物5棟の他、多数の柱穴を検出した。

検出遺構

住居跡 (SI)

削平のため、検出できたのは1軒だけである。

SI01 (Fig. 95, PL. 80)

周壁が全て削平を受けており、部分的に残った貼床や、遺物の出土から住居跡とした。調査

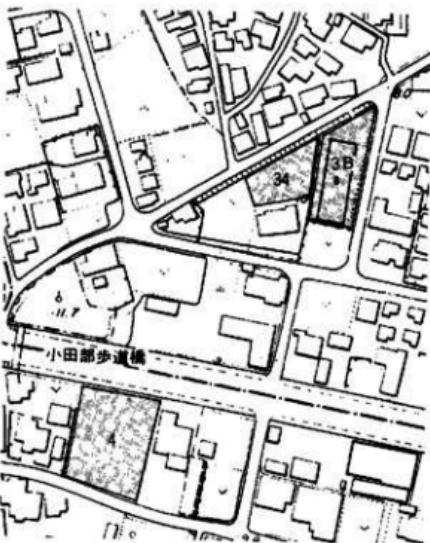


Fig. 93 第34次調査地位図 (1/2,500)



Fig. 94 造構配図 (1/200)

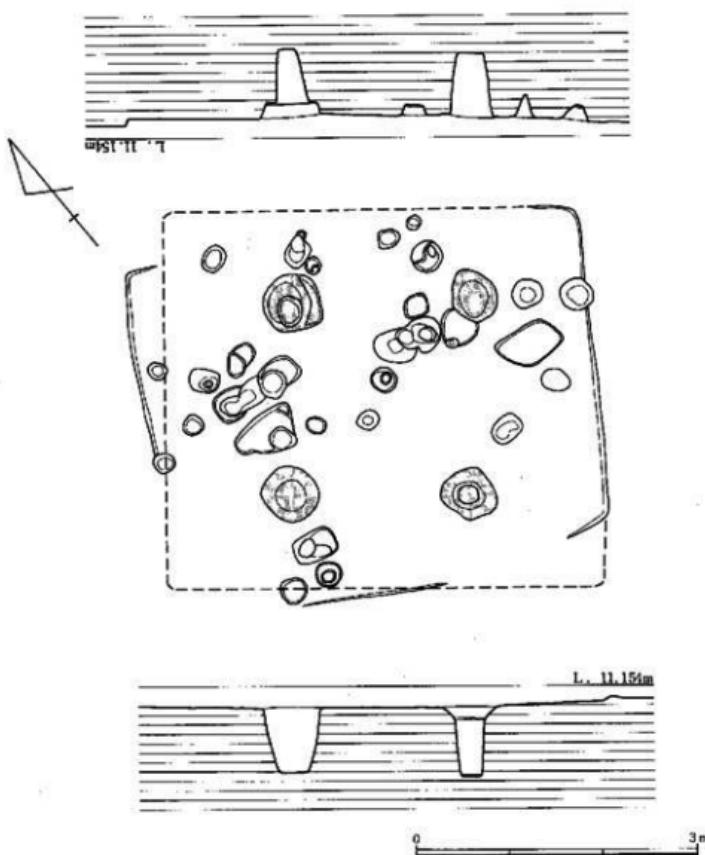


Fig. 95 住居跡 S101 (1/60)

は床面の暗茶褐色粘質土を追って、住居跡の規模の確認に努めた。検出した様の内、東側壁及び北東の隅角は、床面の残存度が良好だったので、ほぼ住居跡の構造の一部と考えて良いだろう。住居跡は主柱を四本とするもので、掘方深約30cm、柱根径約16cmを測る。柱間は東西間1.9m、南北間2.0mを測るもので、方形プランの住居跡を考えられる。壁は柱の見通し線に対し、ほぼ平行に構築されることを考慮に入れると、信頼度の高い東壁、及び北東隅角から規模推定ができる。東西長約4.5m、南北長約4mの住居跡が復元できる。床面は、耕作時の擾乱が著しい。地山面は、やや皿状になるので、貼床があったと考えられる。カマドは削平されて、

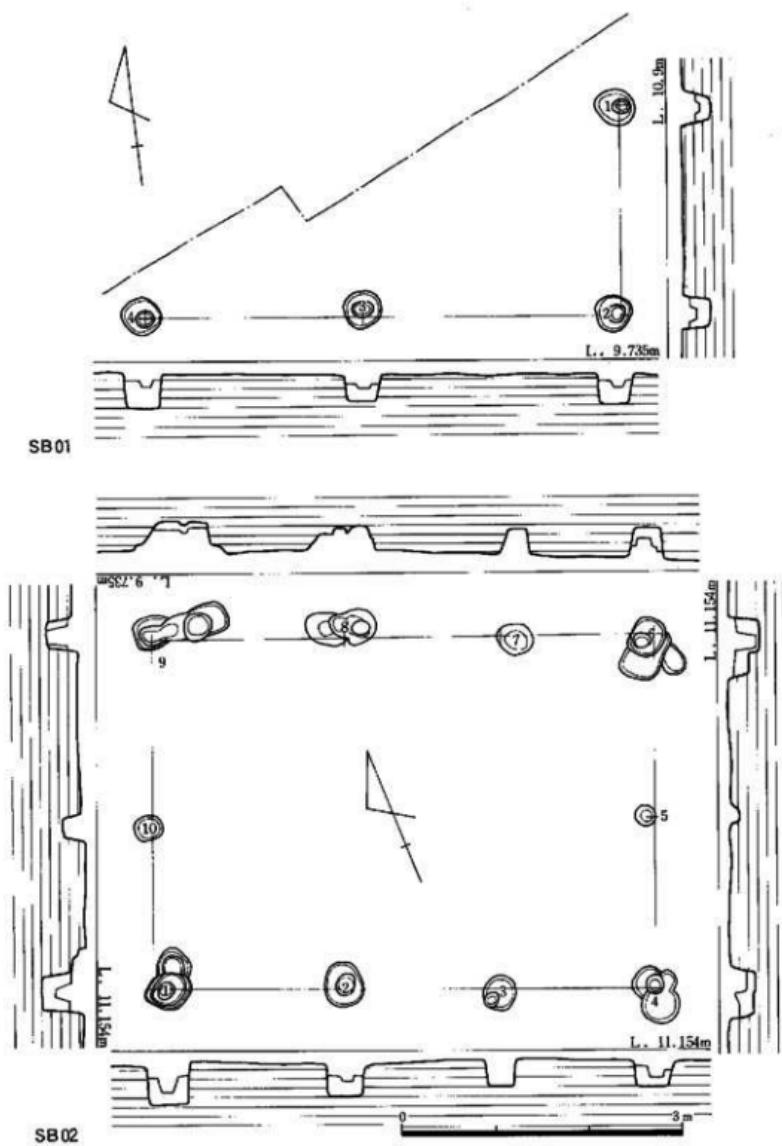


Fig. 96 捶立柱建物 SB01, 02 (1/60)

痕跡も見出せなかった。周溝は検出できなかったところから、本来、壁下には設けていない住居跡であろう。遺物は床面より須恵器の壺形土器片を1点検出した。

掘立柱建物 (SB)

建物跡は、東側の境界地で1棟、西側で4棟の計5棟を検出した。

SB01 (Fig. 96, PL. 80)

境界地で検出したので規模は不明である。検出し得た規模は、梁行1間+ α ×桁行2間+ α の掘立柱建物である。主軸方位をN 83°Wに置き、梁間2.24m、桁行5.06+ α m、桁間平均2.53mを測る。柱穴掘り方径は約40cm、柱根径15cm~20cm、深さは地山面から、15cm~20cmを測る。柱列は、梁行、桁行とともに、ほぼ直線的に通っている。柱穴の規模からみて、梁行2間×桁行3間の建物が推測できる。

SB02 (Fig. 96, PL. 81)

西側で検出されたもので、梁行2間×桁行3間の掘立柱建物である。主軸方位をN 69°Wに置き、梁行2.06m、梁間平均14.4m、桁行5.28m、桁間平均1.76mを測る。柱穴掘り方径は32cm~46cmを、柱根径は14cm~20cm、深さ30cmを測る。柱列は、梁行、桁行共に直線的に通っておらず、又、桁行の柱間は著しい相違がある。歪な平面プランを呈している。

SB03 (Fig. 97, PL. 81)

SB04と切合っている。梁行2間×桁行2間の総柱の掘立柱建物である。主軸方位をN 38°Eに置き、梁行3.06m、梁間平均1.53m、桁行3.20m、桁間平均1.60mを測る。柱穴掘り方径は38cm~48cm、柱根径は16cm~26cm、深さは地山より30cmを測る。柱列は梁行、桁行ともにはば通っているが、柱間の長さは一定ではない。南側梁行の間柱は、精査したにもかかわらず検出できなかった。柱穴の深さからみて、削半を受けたとは考え難い。

SB04 (Fig. 97, PL. 82)

SB03と切合関係にある。梁行2間×桁行2間の掘立柱建物である。主軸方位をN 80°Wに置き、梁行平均1.73m、桁行3.52m、桁間平均1.76mを測る。柱穴掘り方径は28cm~40cm、柱根径15cm~20cm、深さ40cmを測る。柱列は、梁行、桁行共にP 1を除いて、ほぼ通っているが柱間は一定ではない。梁行の間柱-P 4, P 8は南に寄っている。又、総柱の建物にはならない。

SB05 (Fig. 98)

両側の境界地に位置しているため、建物の規模は不明である。検出した建物の規模は、梁行2間×桁行1間+ α の総柱の掘立柱建物である。主軸方位をN 8°30'Wと置き、梁行3.365m、梁間平均1.68m、桁間平均2.04mを測る。柱穴掘り方径は45cm~55cm、柱根径約20cm、深さ25~40cmを測り、円形、又は隅丸方形プランを呈する。柱列はほぼ通っているが、柱間は一定ではない。

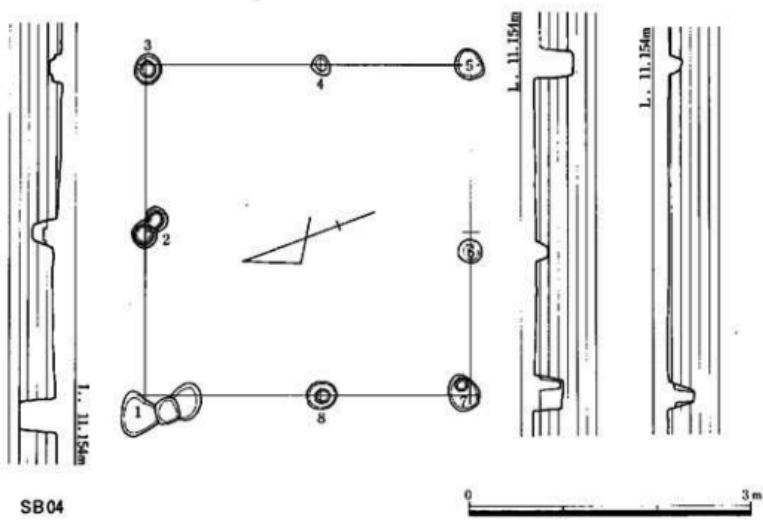
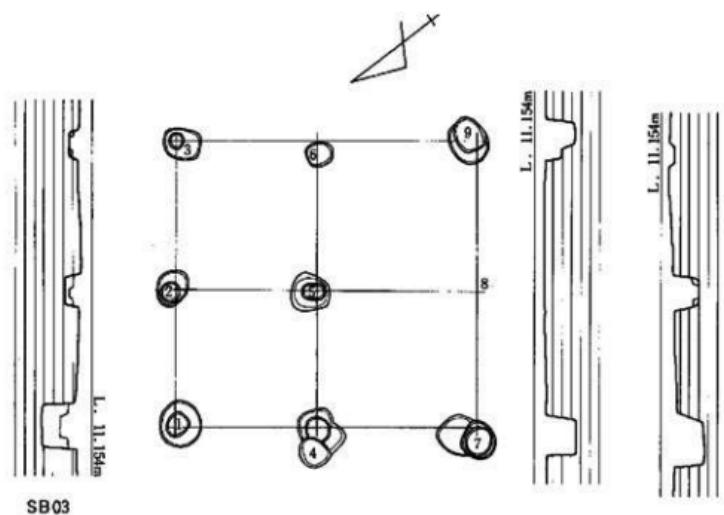


Fig. 97 挖立柱建物 SB03, 04 (1/60)

以上5棟の掘立柱建物を報告したが、SB 05を除いては、遺物が細片であるため年代の決め手にはなり得ない。SB 03, 04, 05の覆土は黒褐色粘質土で締っている。SB 02は、黒褐色粘質土に褐色土、或いは八女粘土の小ブロックを多く混入した層である。SB 01の覆土は掘方が黒色粘質土に褐色土のブロックを多く混入する層で、柱根は黒色粘質土である。

出土遺物

細片のため、実測報告できるのは以下の遺物だけであった。

SI 01出土遺物

須恵器 (Fig. 99, PL. 82)

菱形土器 (1) 1は破片である。厚さ8cmを測る。外面には格子目タタキを、内面には青海波のタタキを施している。色調は灰青色を呈している。

杯蓋 (2, 3) いずれもP 9出土。内面にかえりをもたない器形である。2は復元口径15.3cm, 器高約2.2cmを

測る。天井部と体部の境は明瞭な段をなし、口縁は内側へ小さく、折り曲げている。色調は、灰青色を呈する。3は口径11cm, 器高1.2cmを

測る。内面にかえりを持たず、口縁は体部からうすく引きのばし、端部を少し

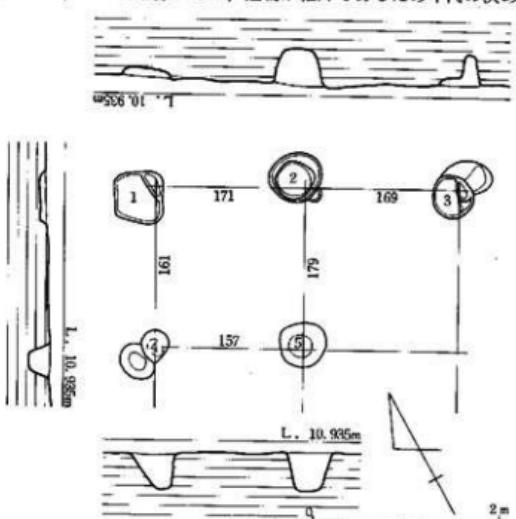


Fig. 98 掘立柱建物 SB 05 (1/60)

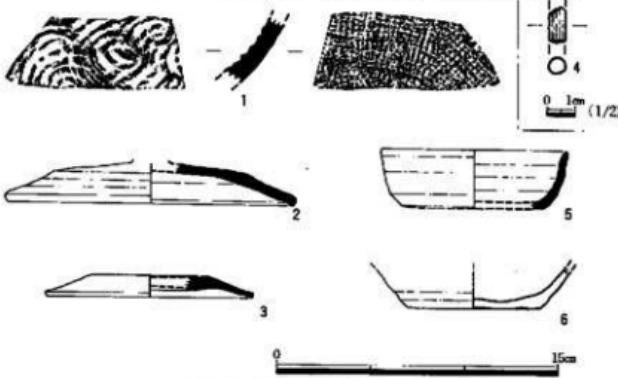


Fig. 99 出土遺物 (1/3)

内側へつまみ出している。天井部と体部の境は明瞭な段をなしている。器高の低い器形である。色調は灰青色を呈する。いずれもつまみの有無は不明である。内外丁寧なナデ仕上げを行っている。

杯身（5） P 35出土。口径10cm、器高 3.1cmを測る。無高台で、底部は安定している。体部の立ち上がりは、やや内湾気味で、口縁はわずかに外反する。端部は丸味をもっている。

土師器

杯（6） P 38出土。口縁を欠いている。底径 7cmを測る。底部はヘラ切り離しである。体部の立ち上りは大きく開いている。内底面にはナデが施される。色調は淡茶褐色を呈する。

包含層出土遺物 (Fig. 99, PL. 82)

石器（4）滑石製である。断面は径 0.6cmのやや梢円形を呈した、円柱形である。現存長 1.2cmを測り、表面には縱長の細い削り痕が残っている。色調は灰色を呈する。

小 結

検出した遺構は古墳時代住居跡 1軒、掘立柱建物 5棟である。掘立柱建物は本調査地点から南側の第5次調査の建物群が連続するものと考えられる。掘立柱建物を構成する柱穴からの遺物は細片であるため時期比定できない。しかし、覆土にやや相違がみられ、幾つかの時期に分けることが可能かもしれない。掘立柱建物 SD03、05の覆土は褐色土のブロックを含んだ黒褐色粘土質土のしまった土である。柱根は黒褐色粘土質土を呈しており、見分けることが困難であった。掘立柱建物 SD04は黒色粘土質であるが、削平を受けているため、柱根部分しか残していない。掘立柱建物 SD01の掘り方の覆土は黒褐色粘土質土であり、柱根の覆土は暗茶褐色粘土質土で明瞭に区別することが可能であった。有田・小田部における中世遺構は暗茶褐色粘土質土が充填されているのが一般的であり、それゆえ、掘立柱建物 SD01の年代は中世の時期が考えられる。掘立柱建物 SD02～05は、周辺から出土した遺物からみて、古墳時代～8C代迄の年代が考えられ、住居跡SI01は、周壁が全て削平されているため規模は不明である。時期は須恵器の壺片しか検出できなかったが、この壺から6C～7C代の年代が考えられる。床のわずかに残った部分から東西長約 4.5m、南北長約 4 m を測る住居跡の復元を行った。しかし、住居跡の同一方向の壁長と柱間の長さは比例関係にあることが認められているので、同様な規模と同時期と思われる住居跡—第31次、第33次のSI01住居跡を検討した。第31次のSI01は、南北の柱間約 180cm、南北の壁長 364cm、東西の柱間 155cm、東西の壁長 344cmを測る。南北の柱間と東西の柱間の比率は約 1:1.2である。又、各々の柱間の長さと壁長の関係は約 1:2 の比を示している。第33次のSI01は南北の柱間 240cm、南北の壁長 364cm、東西の柱間 223cm、東西の壁長 430cmを測る。南北の柱間と東西の柱間の長さの比率は 1:1.1を示し、各々の壁長との関係は南北が 1:1.7、東西が 1:1.9を示す。以上を総合すると柱間の比率は、1:1.1～

単位: cm

梁間	梁行間	桁行	桁間	桁行間	P	深さ	長径	短径
P1 P2	224	P2 P3	274	506	1	191.2	42	36
		P3 P4	232		2	186.7	38	38
					3	184.2	38	38
					4	191.2	38	38
		平均	253		平均	188.325	39	37.5

表11 SB01計測表

単位: cm

梁間	梁行間	桁行	桁間	桁行間	P	深さ	長径	短径
P1P10	174	P1 P2	193		1	176.2	42	38
P9P10	205	P2 P3	156	523	2	168.5	47	42
P4P5	182	P3 P4	174		3	158	38	34
P5P6	186	P6 P7	136		4	158	(32)	36
P2P8	—	P7 P8	200	526	5	143	(20)	(20)
P3P7	—	P8 P9	190		6	159.7	40	38
					7	165	38	34
					8	168	46	34
					9	169.7	38	34
					10	150	(28)	(20)
平均	186.7	376.7	平均	174.8	524.5	平均	161.61	36.4

表12 SB02計測表

単位: cm

梁間	梁行間	桁行	桁間	桁行間	P	深さ	長径	短径
P1P2	146	P1 P4	151		1	173.2	48	46
P2 P3	161	P4 P7	170	321	2	147.7	40	32
P4 P5	150	P2 P5	151		3	142.7	40	34
P5 P6	150	P5 P8	170	321	4	135.7	42	36
P7 P8	—	P3 P6	151		5	158.7	42	40
P8 P9	—	P6 P9	160	311	6	133.5	28	26
					7	165.7	38	36
					8	(160)	—	—
					9	161.2	50	40
平均	151.7	310.0	平均	158.8	317.6	平均	154.8	41

表13 SB03計測表

単位: cm

梁間	梁行間	桁行	桁間	桁行間	P	深さ	長径	短径
P3 P4	188	P1 P2	194		1	188.4	38	34
P4 P5	151	P2 P3	176	370	2	165.7	30	28
P2 P6	—	P4 P8	—	353	3	148	33	28
P1 P8	188	P5 P6	200		4	151	24	19
P7 P8	150	P6 P7	142	342	5	170.7	34	30
					6	148	25	21
					7	165.2	40	32
					8	164.5	31	30
平均	169.2	341	平均	178	355	平均	162.688	31.875

表14 SB04計測表

1:1.2、柱間と壁長との比率は1:1.7~2(1.85)を考えることが可能である。本調査地で検出した住居跡の柱間は東西間190cm、南北間200cmを測るもので、その長さの比率は、1:1.1を示している。計測した柱間の長さから上記の壁長との比率に置きかえると東西壁の長さは約352cm、南北壁の長さは約370を測る値が計算できる。住居跡の項で述べた様に床面の残存部分と思われる範囲からの推定復元の計算値とは著しい相違をみる。柱間の長さと壁長の長さの比率を用いた計測値については、検討した住居跡がわずかに2例にすぎないため全幅の信頼を得ることのできない。古墳時代住居跡の構造及び規模の変化をも含めて、今後の検討課題としたい。

単位:cm

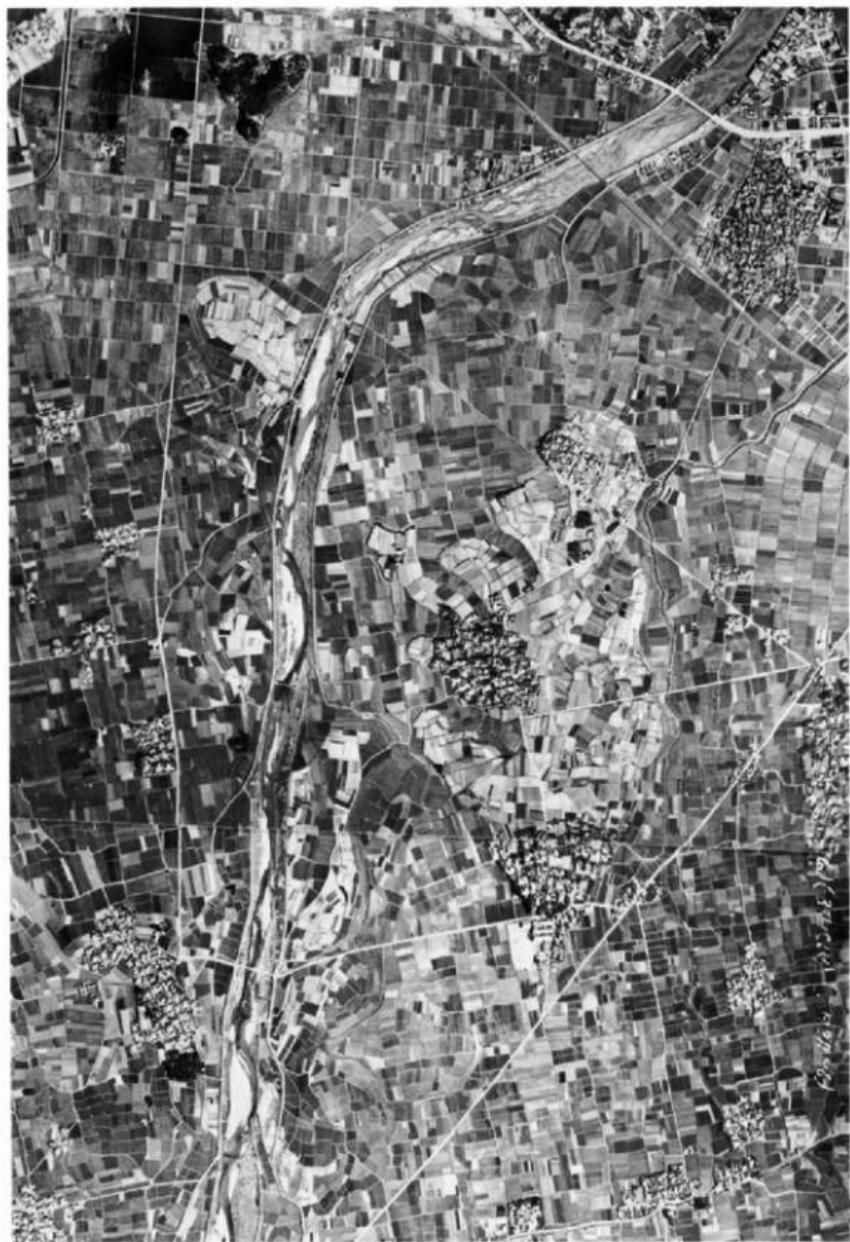
	梁間	梁行間	桁行	桁間	桁行間	P	深さ	長径	短径
P 1 P 2	228		P 1 P 5	245	490	1	58	126	115
P 2 P 3	228	684	P 5 P 9	245		2	54	145	117
P 3 P 4	228		P 2 P 6	245		3	54	116	101
P 5 P 6	228		P 6 P 10	245	490	4	50	129	102
P 6 P 7	228	684	P 3 P 7	245		5	54	119	98
P 7 P 8	228		P 4 P 8	245		6	56	100	96
P 9 P 10	228					7	40	108	104
						8	44	121	71
						9	42	85	68
						10	36	18	70
平均	228		平均	245		平均	52.4	120.5	94.5

表15 第29次SB01計測表

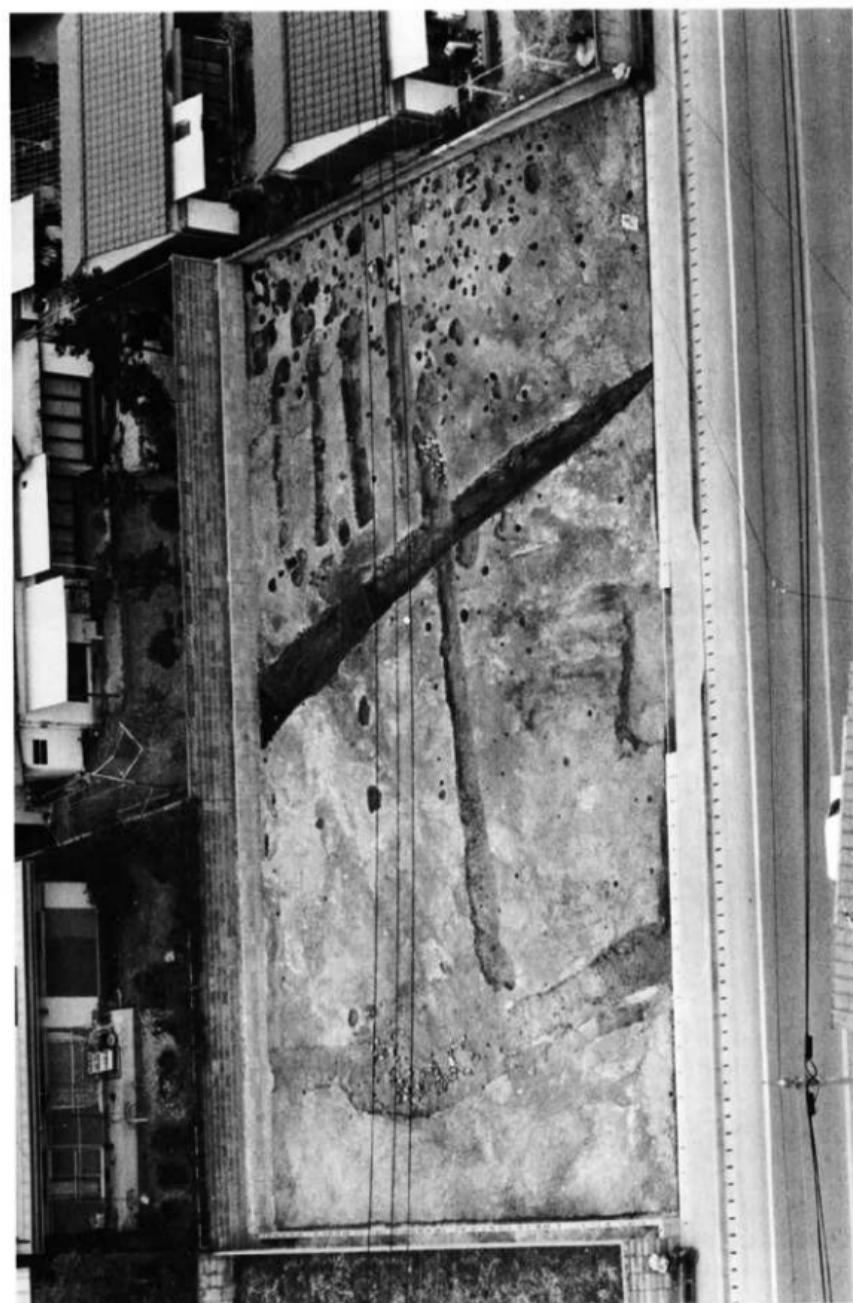
図 版



有田・小田部周辺航空写真 (昭和50年撮影)



有田・小田部周辺航空写真 (昭和21年米軍撮影)





(1) 遺跡全景（西から）



(2) 溝 SD01, 03（東から）



(1) 溝 SD01 調査中 (雨から)



(2) 溝 SD01 発掘完了 (雨から)



(1) 潜り部分（南から）



(2) SD 01 潜り部分土層（南から）



(3) SD 01 南側土層

(1) 溝 S D01 跪群検出状況



(3) 遺物の出土状況



(2) 遺物の出土状況

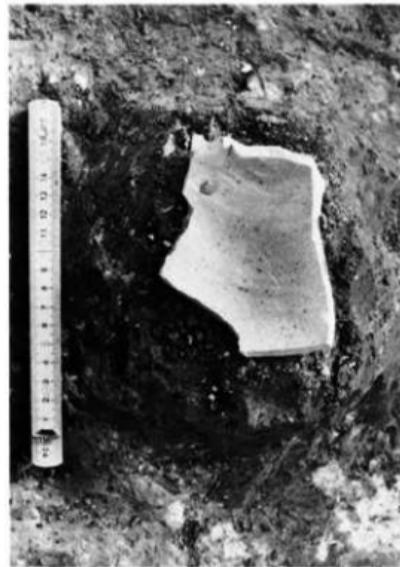




(1) 溝 SD 01 内遺物出土状況



(2) (1)に同じ



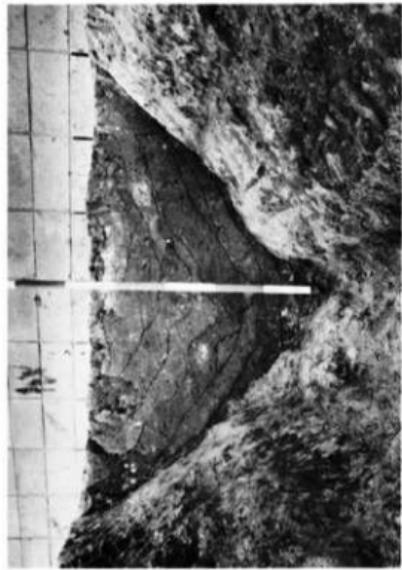
(3) (1)に同じ



(4) (1)に同じ



(1) 溝 SD02 (南から)



(2) 北壁土層 (南から)



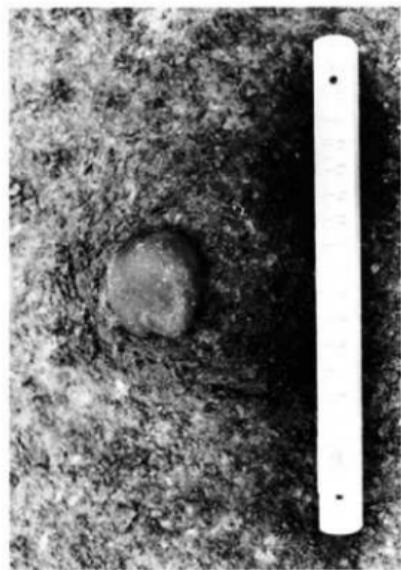
(3) 中央アゼ土層 (南から)



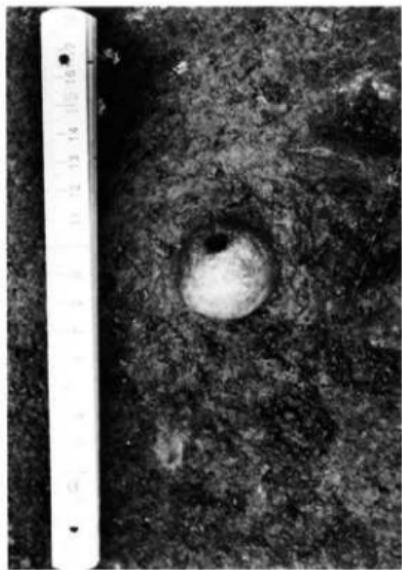
(1) 溝 SD 02 内遺物出土状況



(2) (1)に同じ



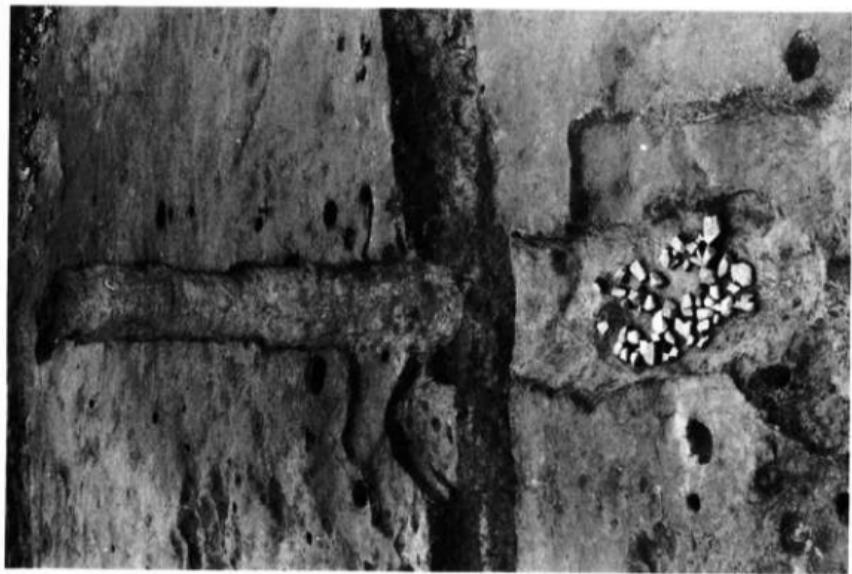
(3) (1)に同じ



(4) (1)に同じ



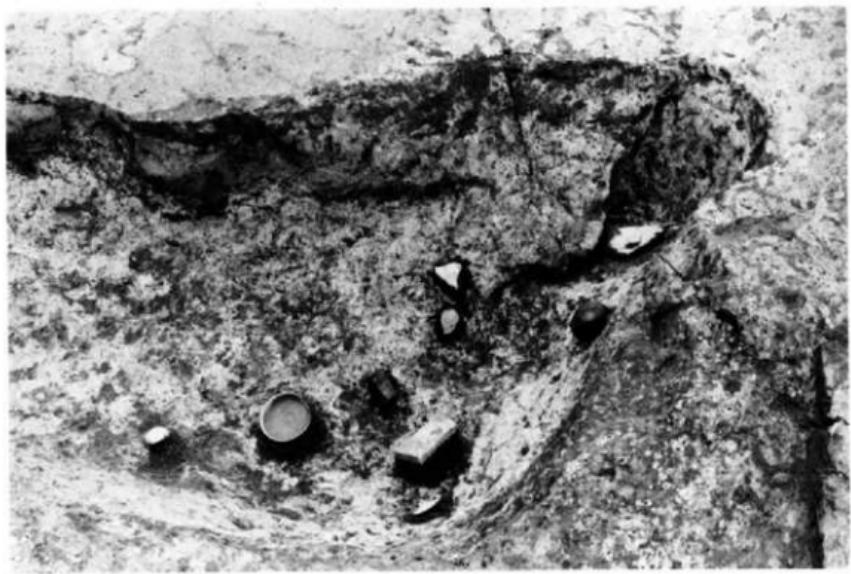
(1) 溝 SD 03 (西から)



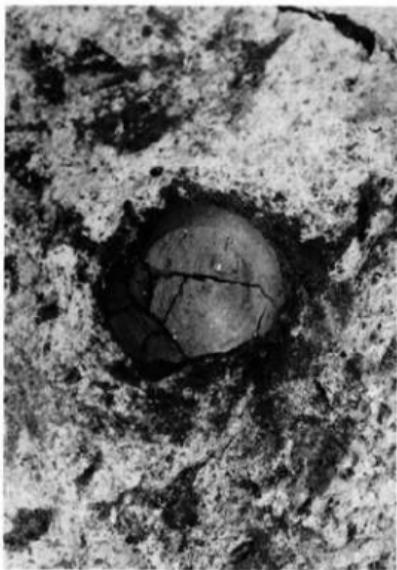
(2) SD 03 (東から)



(1) SD 03 東端部分羣



(2) SD 03 西端部分





(1) 掘立柱建物 SB 01 (南から)



(2) SB 01 (西から)



(1) 挖立柱建物 SB 02, 03 (西から)



(2) 溝 SD 04-07 (西から)



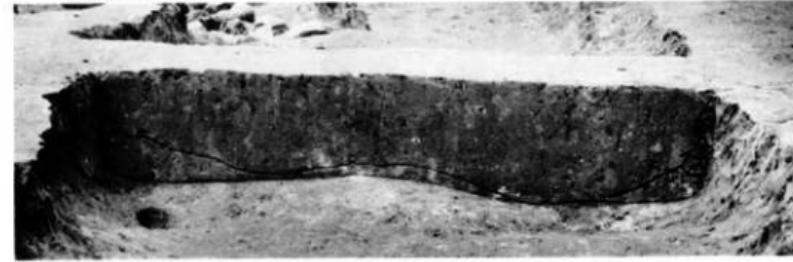
(1) SD 04の土層



(2) SD 05の土層



(3) SD 06の土層



(4) SD 07の土層



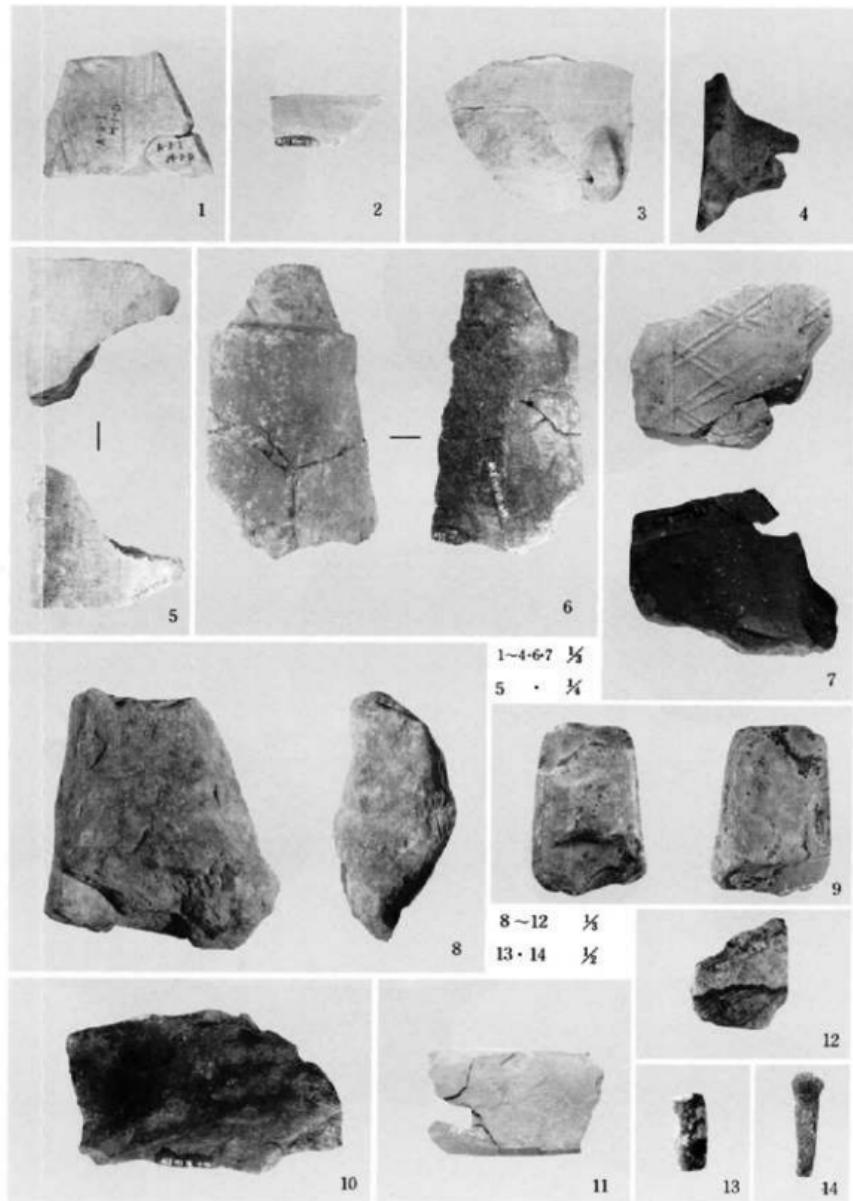
(1) Pit 206



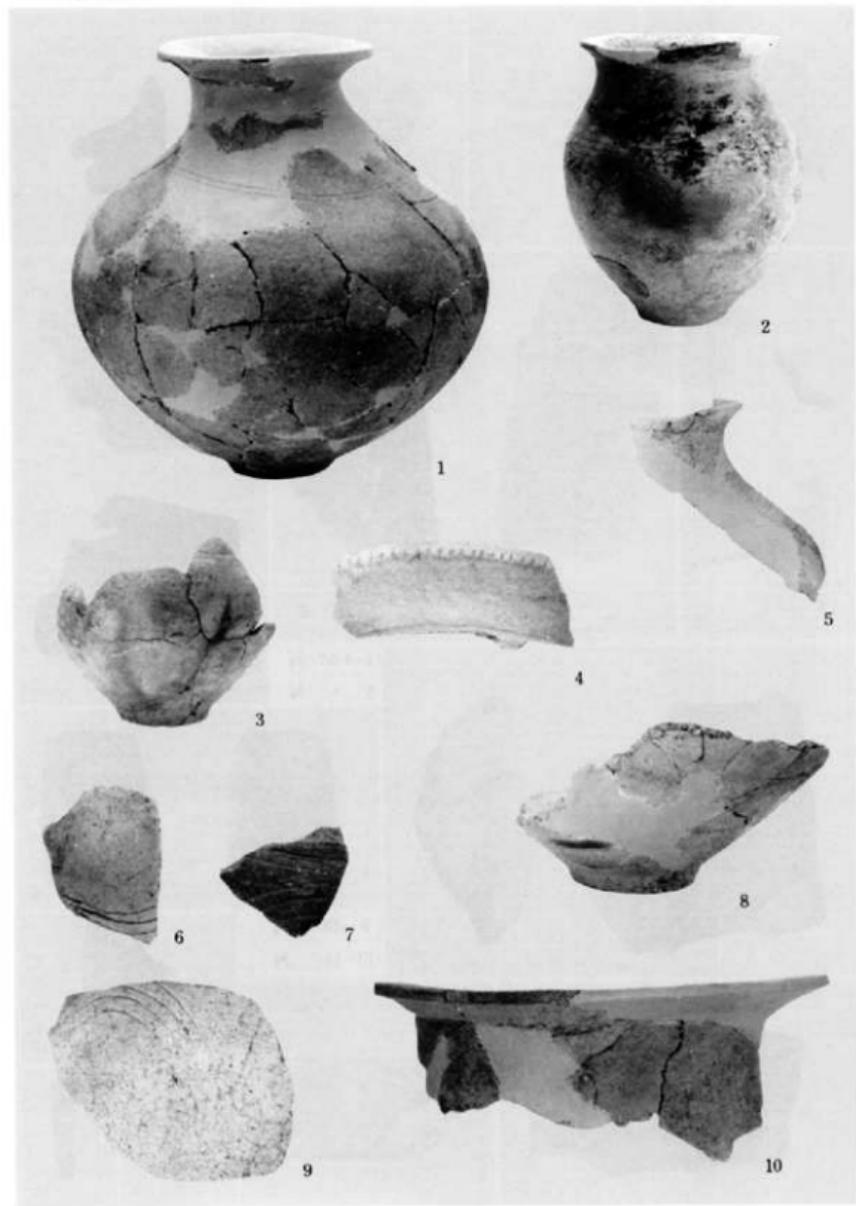
(2) Pit 206 內 貨錢出土狀況



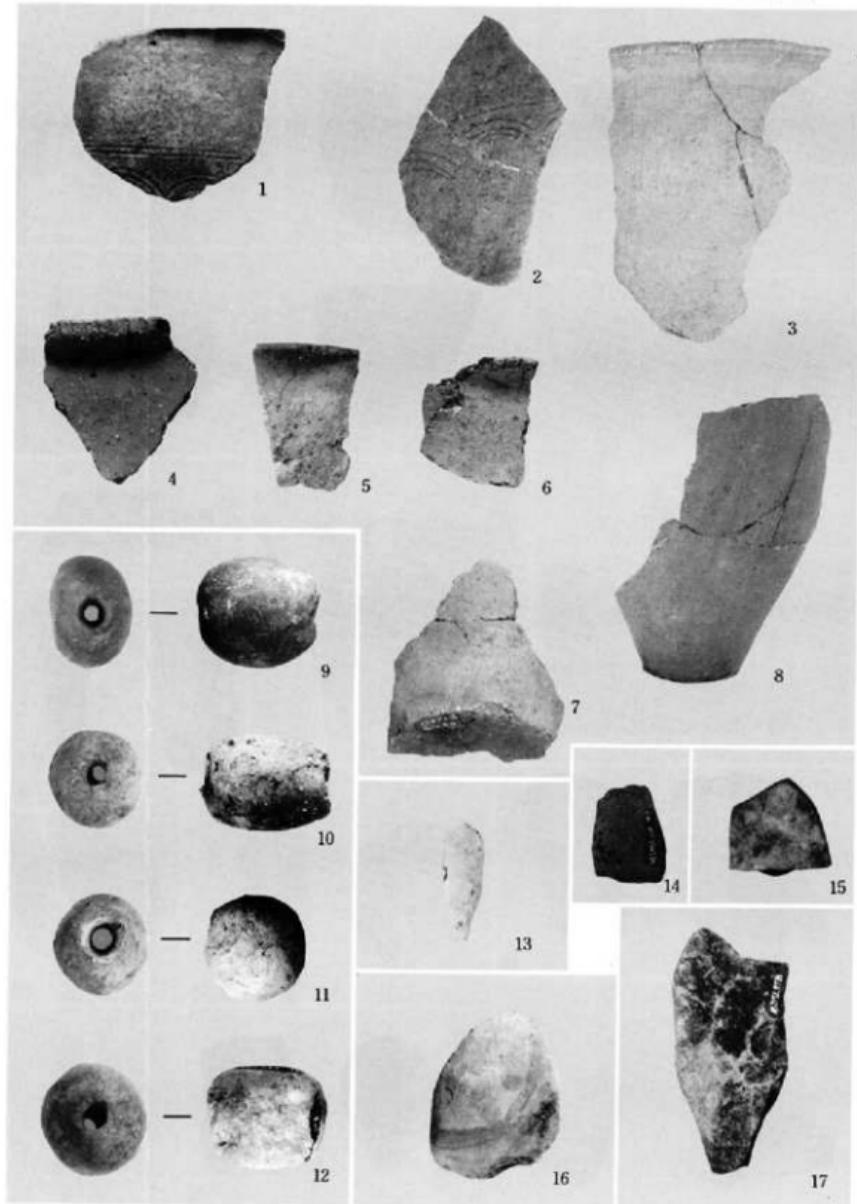
SD 01 出土遺物 (4,7,8は青磁、5は李朝、12・14は美濃、15は常滑)
(縮尺: 6, 12, 他は3)



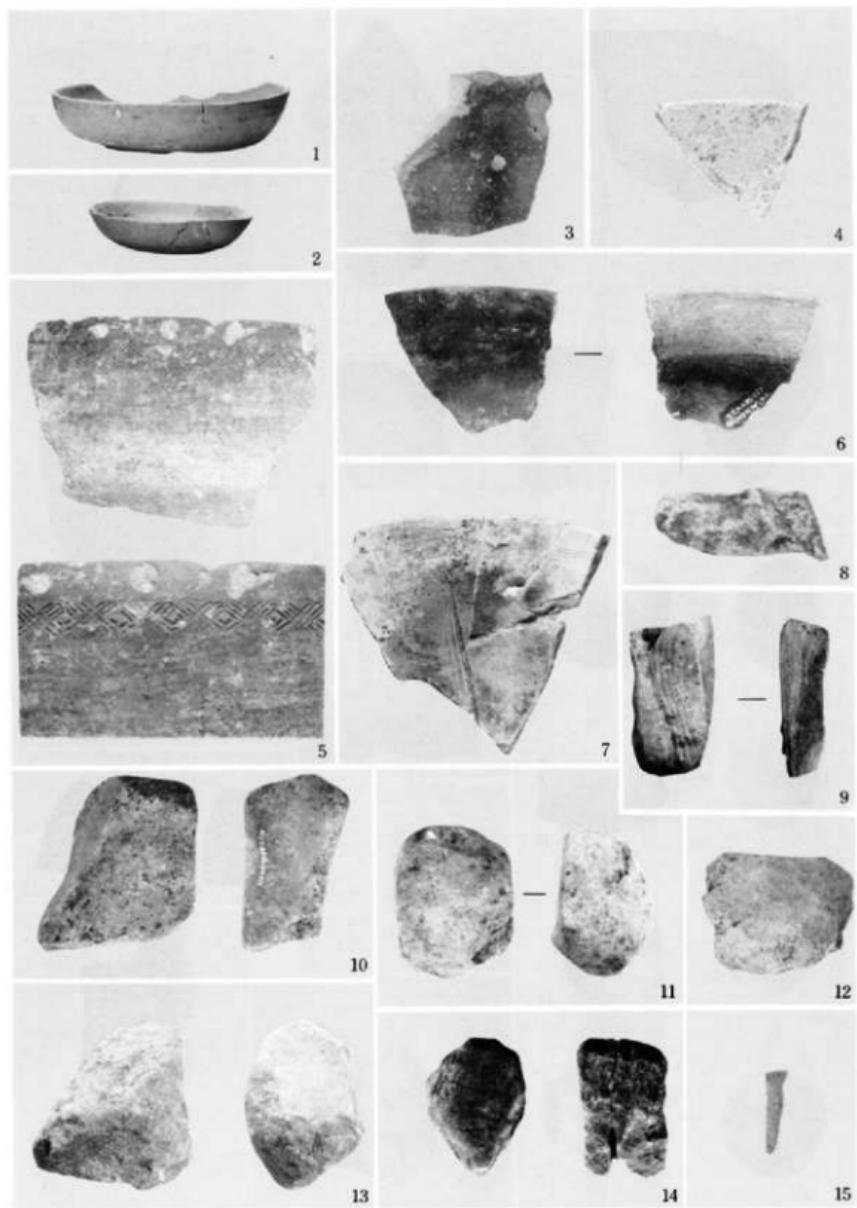
SD 01 出土遺物



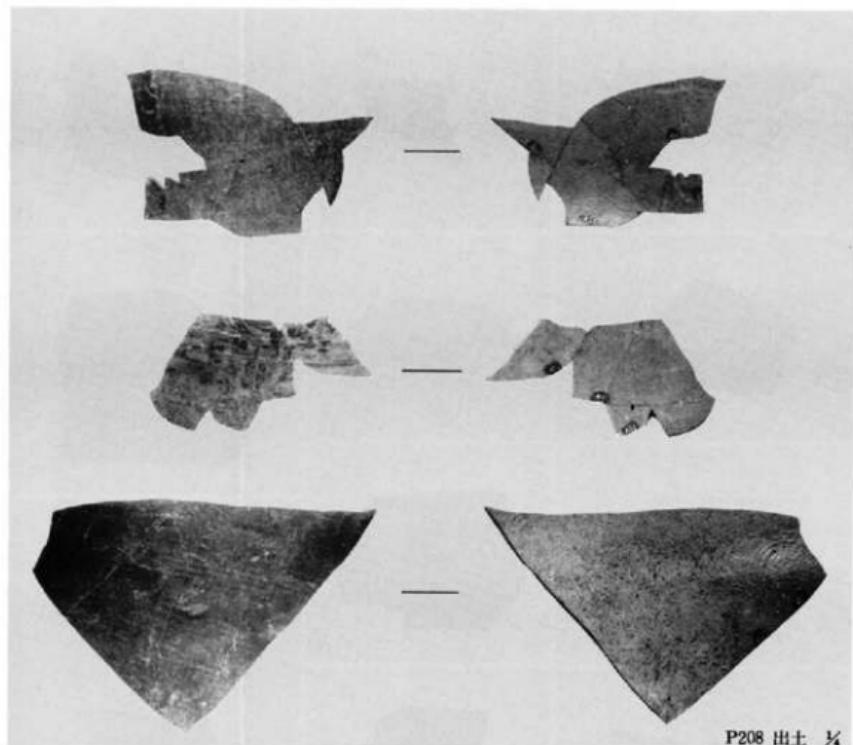
SD 02 出土遺物 (縮尺: 6・7・9, 3%, 他は5%)



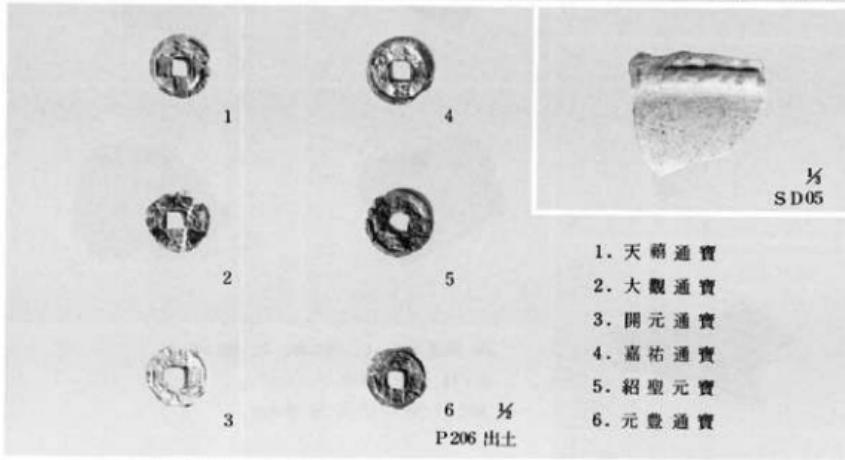
SD 02 出土遺物 (縮尺: 1・2・4・9~12, ½, 8は34, 他は36)



SD 03 出土遺物 (6は大壺, 8は瓶把手, 12は石劍)
(縮尺: 15, 月, 他は15)

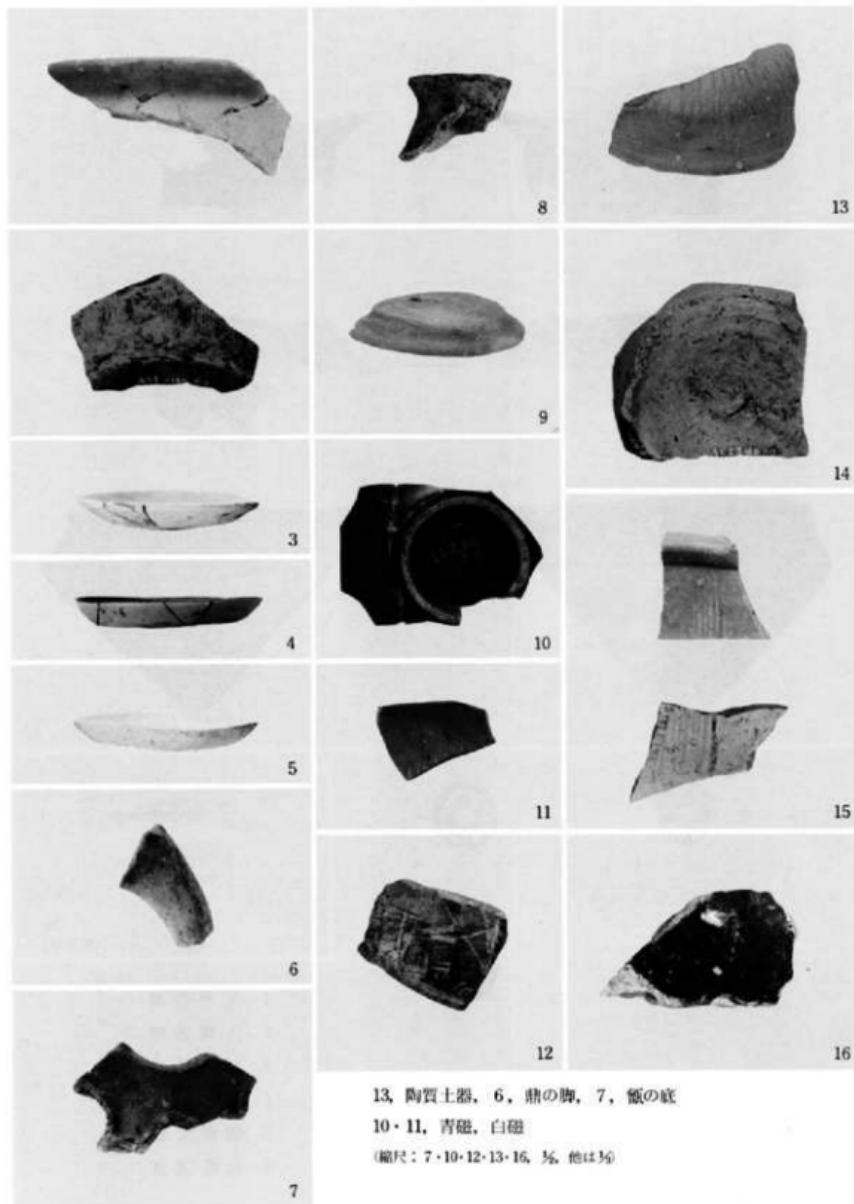


P208 出土 34



1. 天祐通寶
2. 大觀通寶
3. 開元通寶
4. 嘉祐通寶
5. 紹聖元寶
6. 元豐通寶

Pit 206, Pit 208, SD 05 出土遺物



13. 陶質土器, 6, 脚の脚, 7, 額の底

10・11, 青磁, 白磁

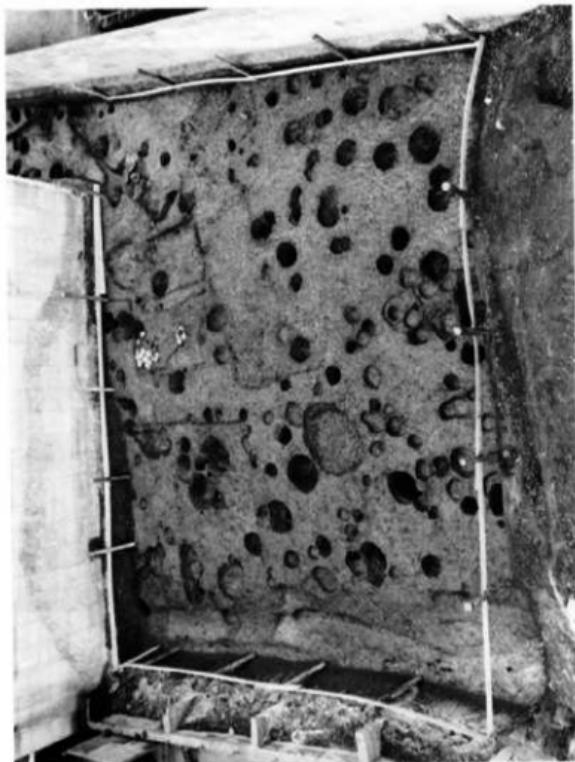
(縮尺: 7・10・12・13・16, 5分, 他は3分)

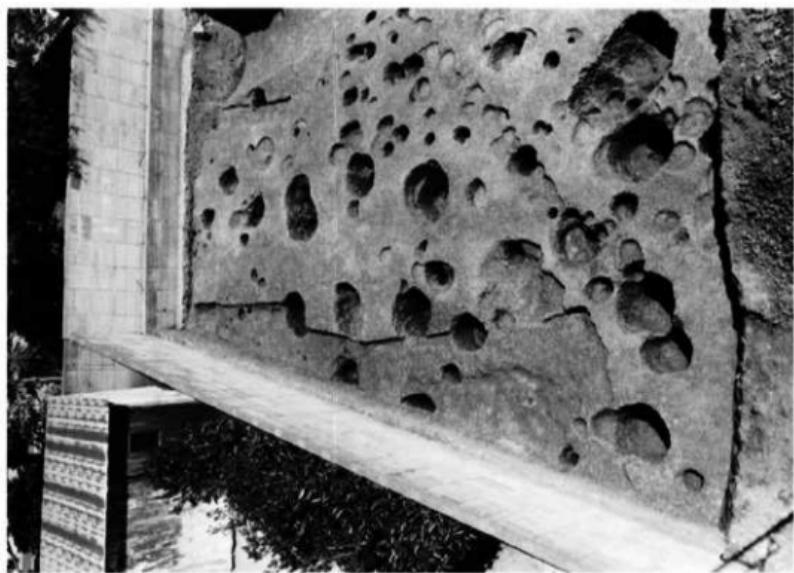


(1) 第8次調査全景

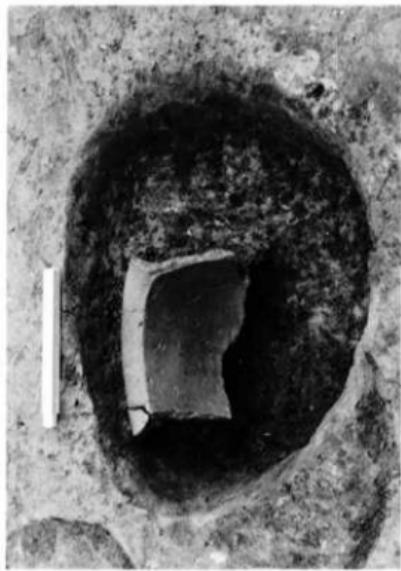


(2) 遺構北半分





(1) 住居跡 SI 03, 04, 05, 獨立柱建物 SB 01



(2) 遺物出土状況



(3) 遺物出土状況



(1) 住居跡 SI 03, 04 (東から)



(2) 住居跡 SI 04, 05 (東から)



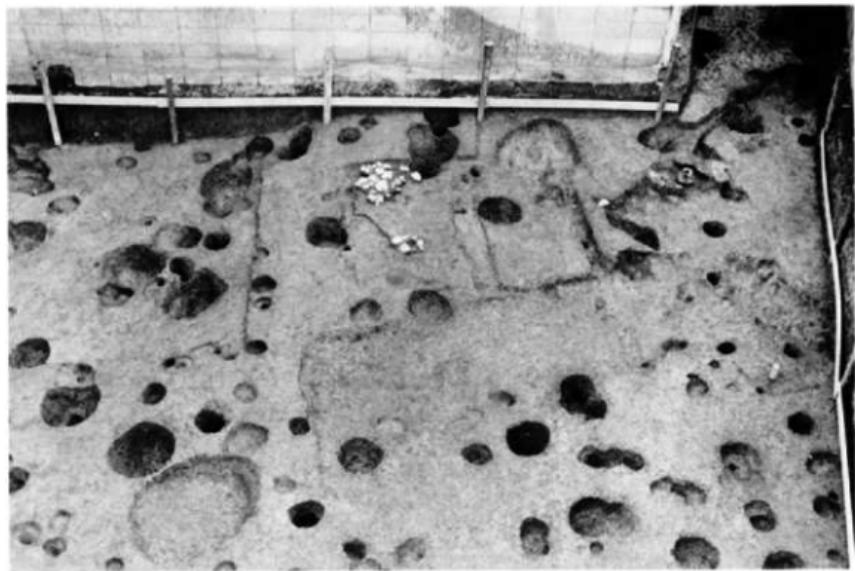
(1) 住居跡 SI 01, 02 (東から)



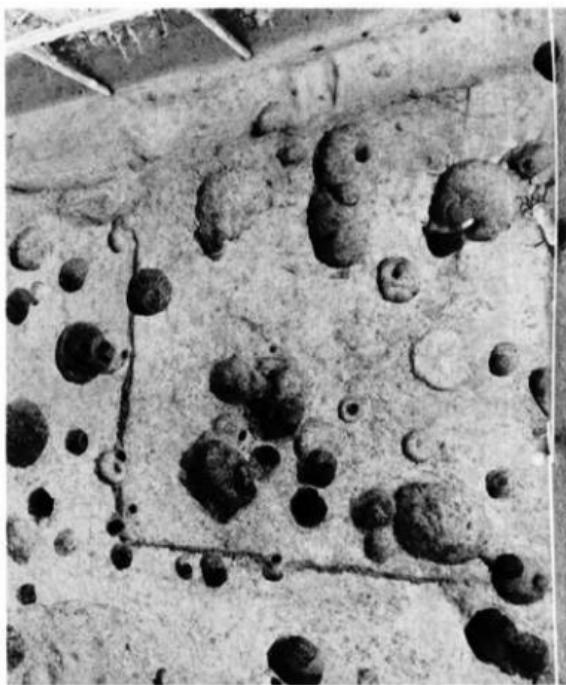
(2) 住居跡 SI 10 (東から)



(1) 住居跡 SI 07,08 (東から)



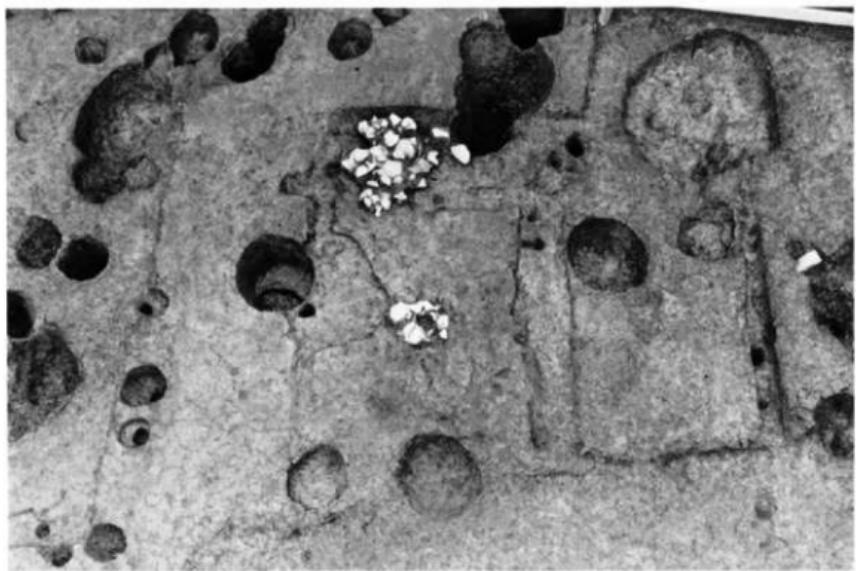
(2) 住居跡 SI 08,09 (北から)



(1) 住居跡 SI 07 (雨から)



(2) 住居跡 SI 11 (雨から)



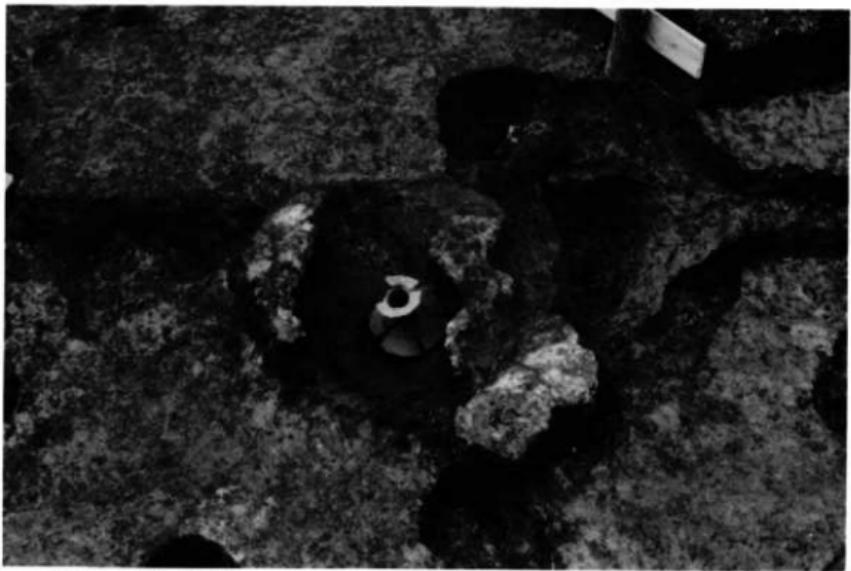
(1) 住居跡 SI 08 (北から)



(2) 遺物の出土状況



(1) 住居跡 SI 09 (南から)



(2) かまどの出土状態



1



3



2



4



5

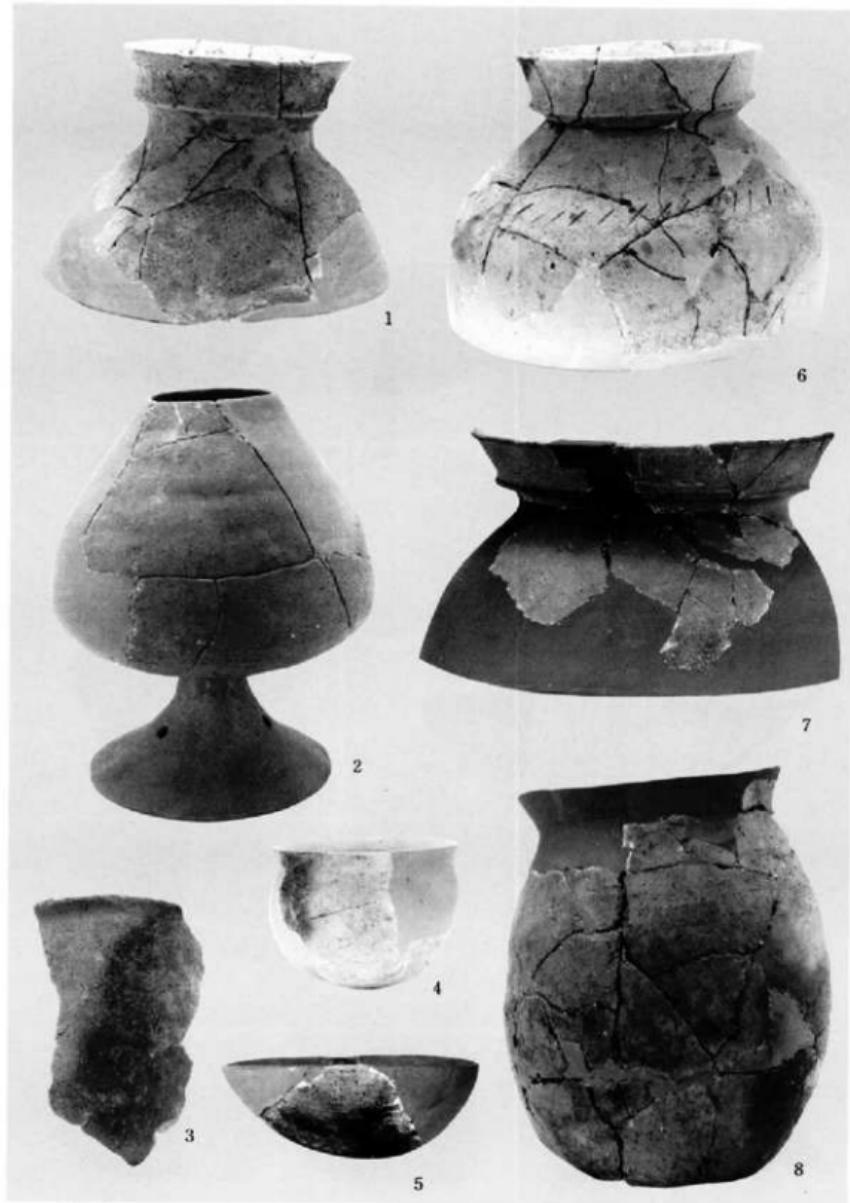


6

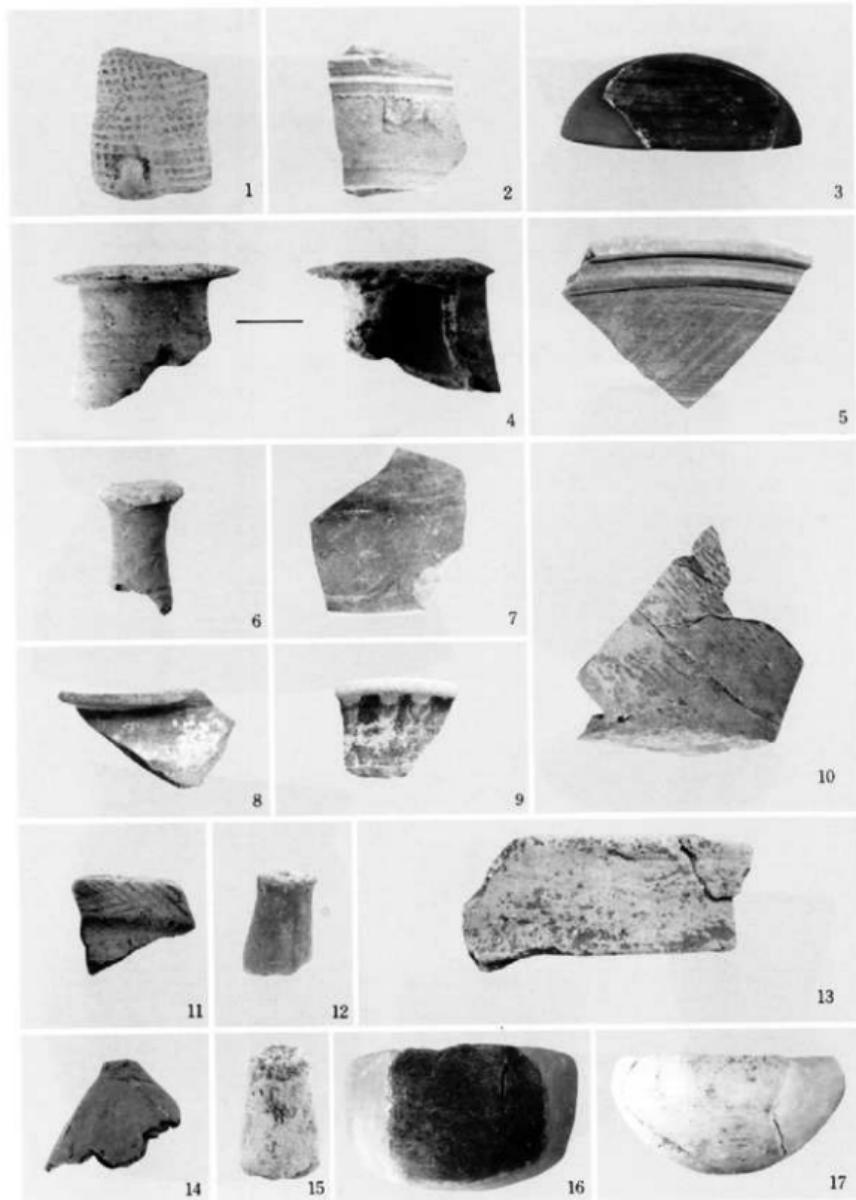


7

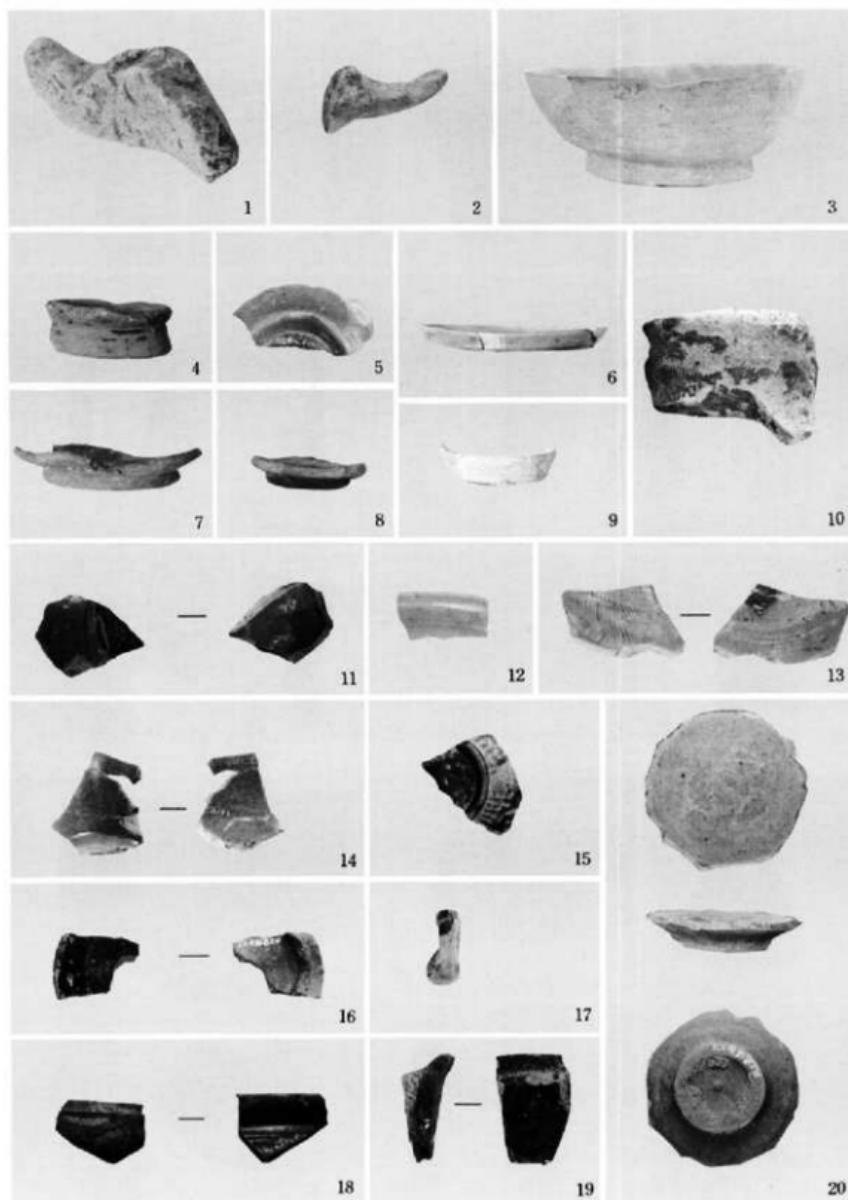
1 ~ 4	SI 07
5	SI 09
6	SI 03
7	SI 01



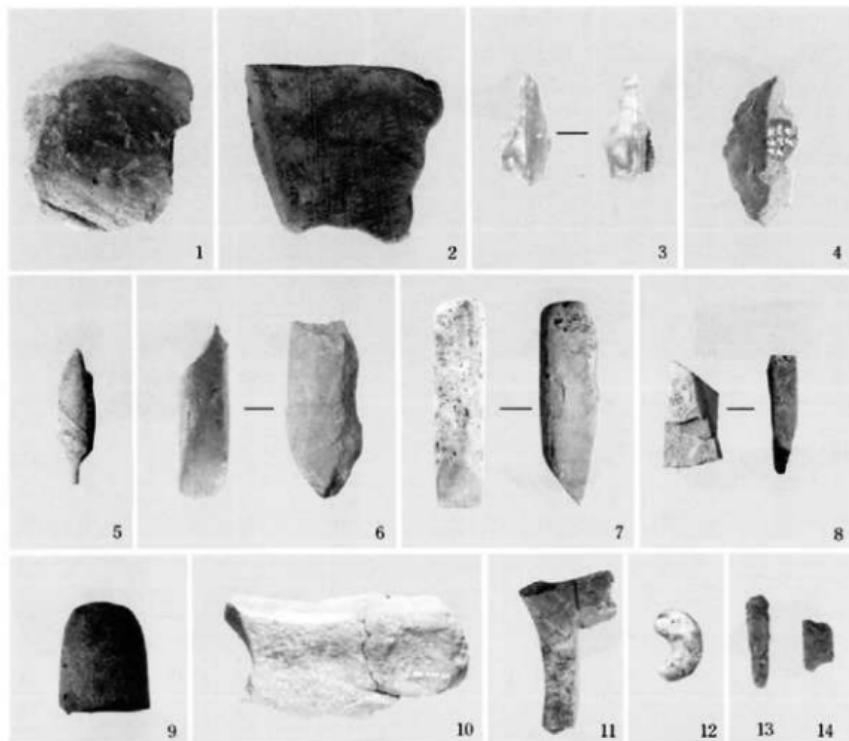
住居跡SI 08　出土遺物 (縮尺: 1・2・6~8, 3/4, 他は1/2)



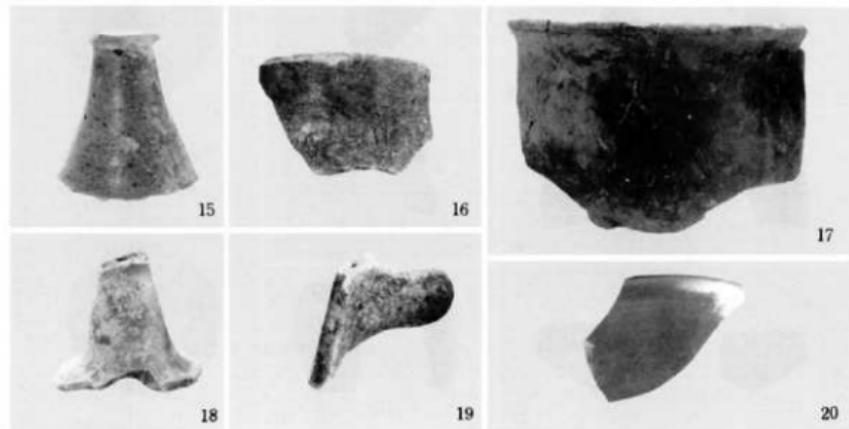
遺構面出土遺物 (1. 陶質土器, 7. 長頭器, 13. 磬)
(縮尺: 2. 号, 他は4)



遺構面出土遺物 (11~14、186器、193攝前、204古物標)
(縮尺: 13、18、½, 他1/3)



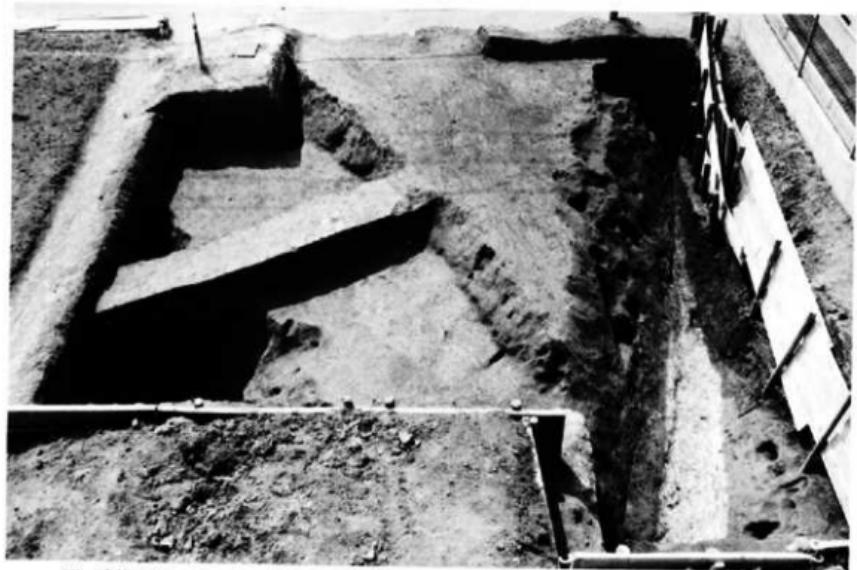
(1) 造構面出土遺物



(2) Pit 出土遺物 (縮尺: 3~5・12~14, 3%, 他は3%)



(2) 第28次調査全景



(2) 調査構南側



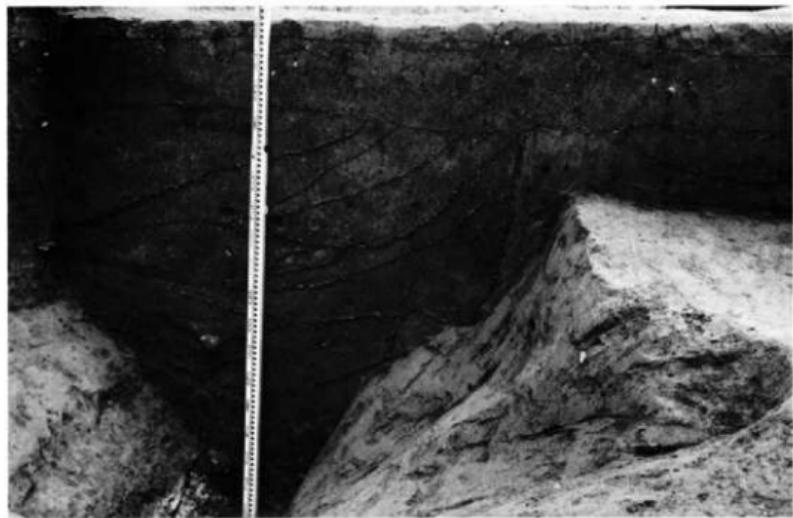
(1) 溝 SD 01 (南から)



(2) 溝 SD 03 (北から)



(1) 溝 SD 02 土層



(2) 溝 SD 03 土層



(3) 溝 SD 03 墓出土状況



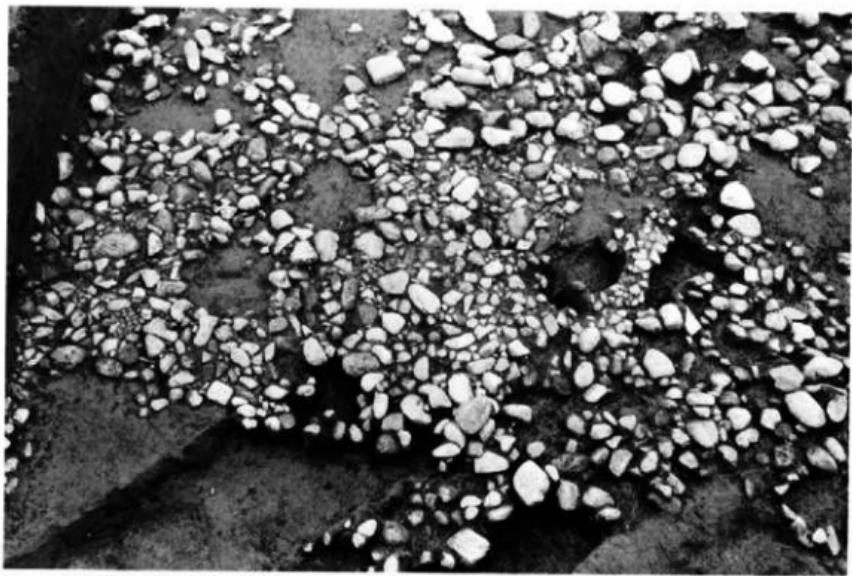
(1) 造構北半（西から）



(2) 造構北半（南から）



(3) 溝 SD 03 磚出土状況（南から）



(2) (1)と同じ（東から）



(1) SD 01, SD 03 北壁土層



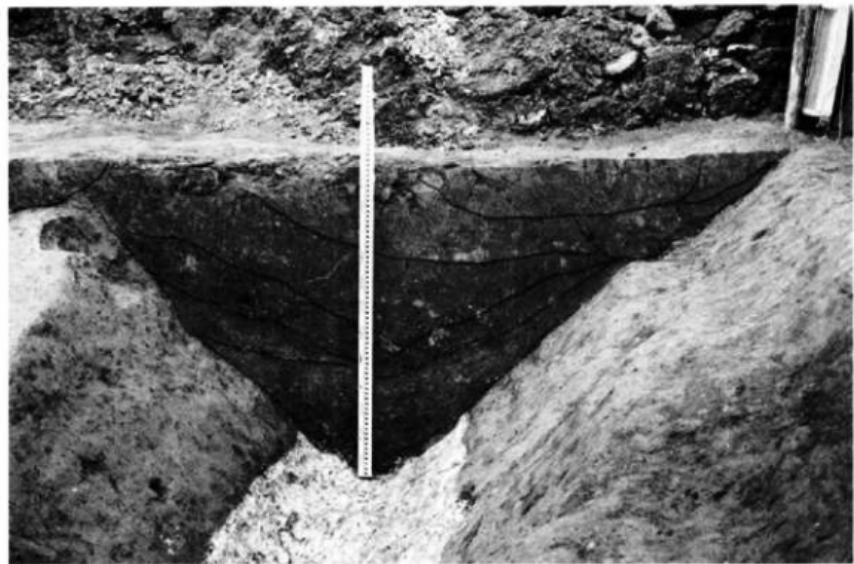
(2) SD 03 北壁土層



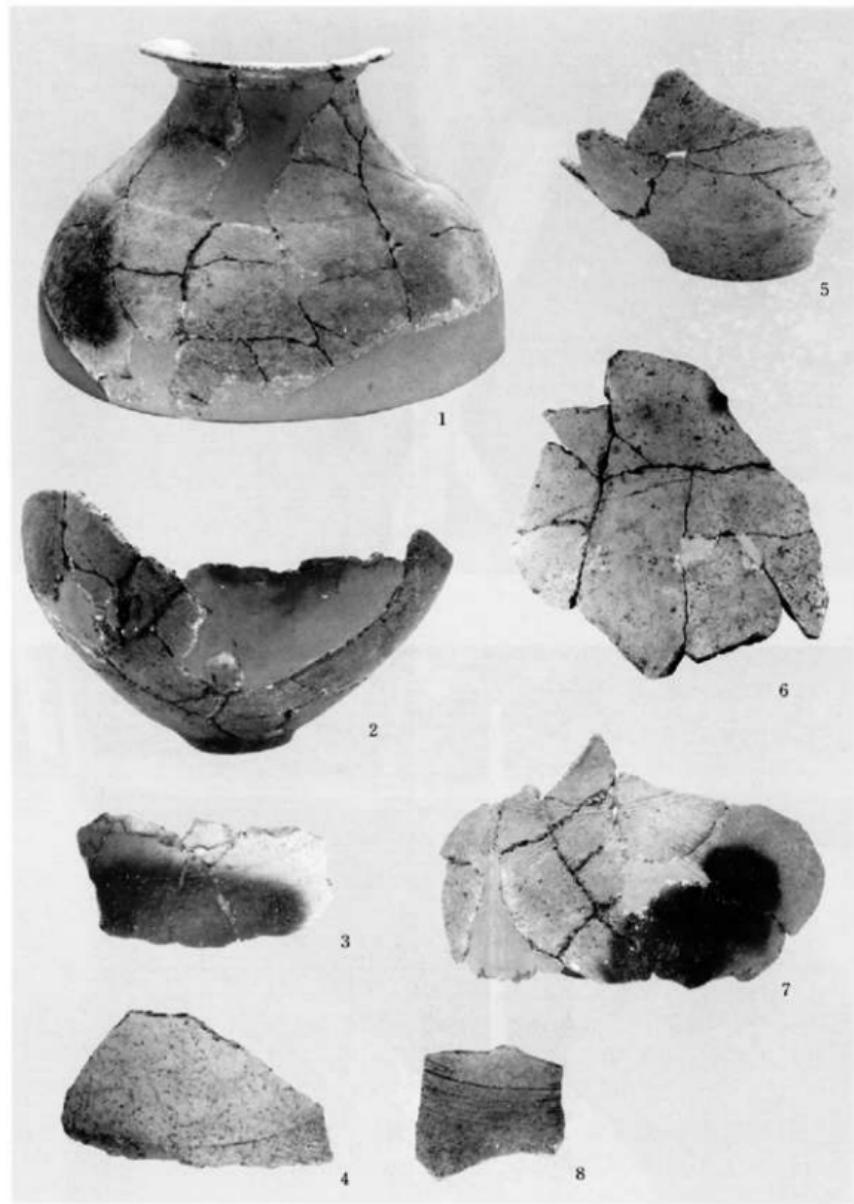
(3) SD 03 東壁土層



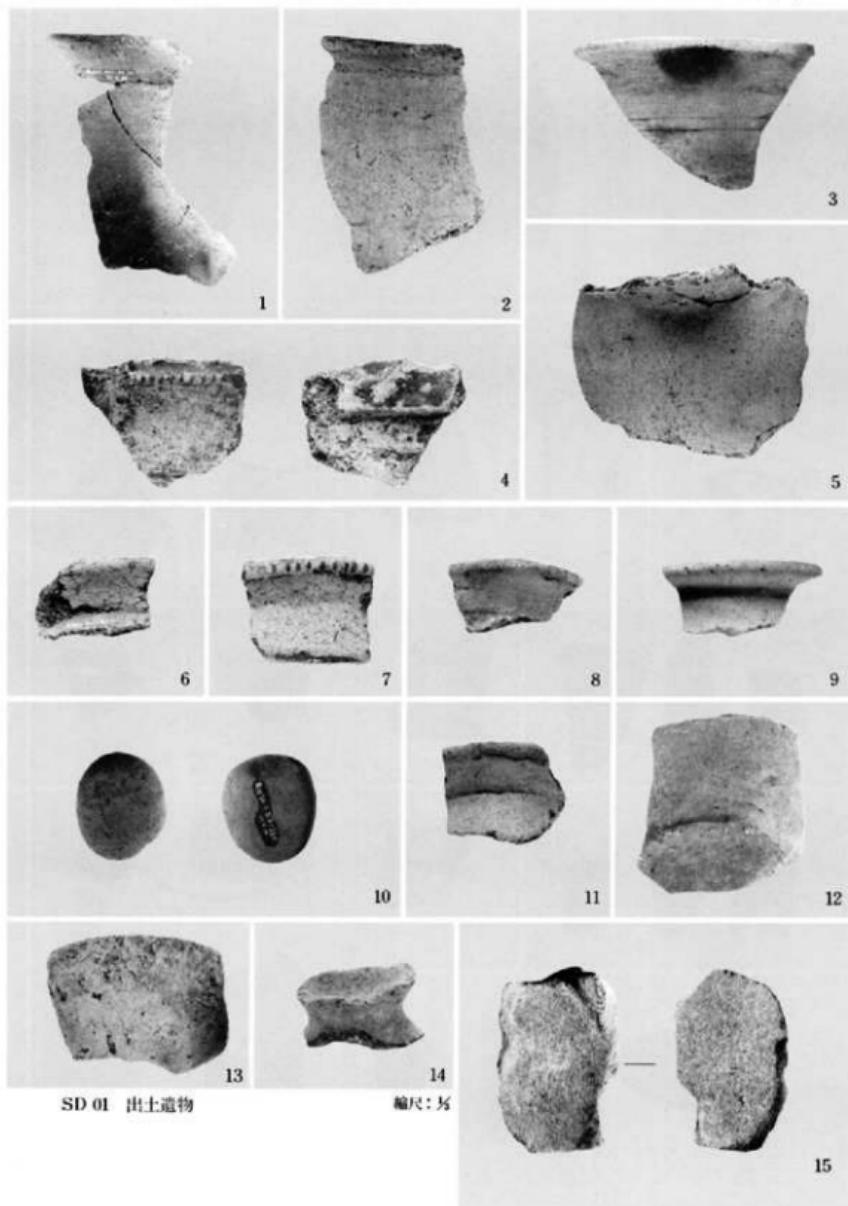
(1) 溝 SD 01, SD 03



(2) SD 01 中央土層（北から）

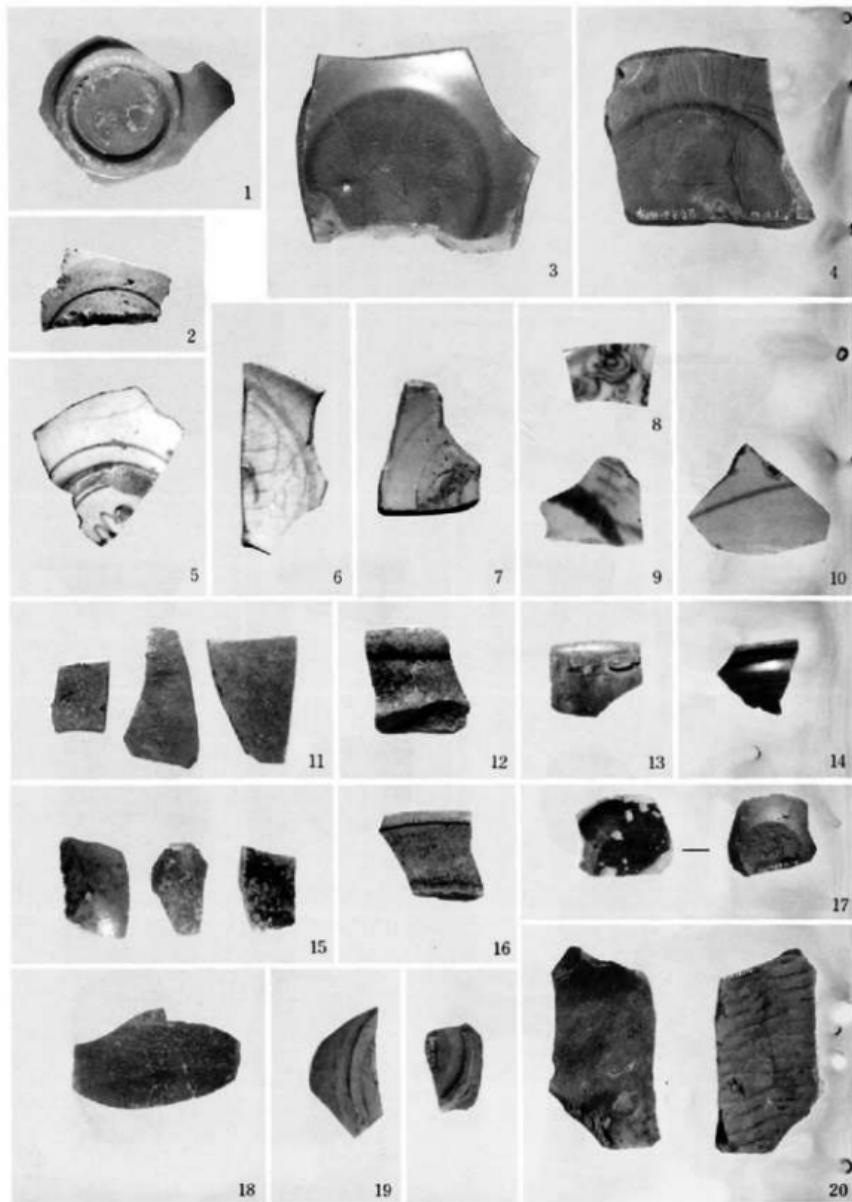


SD 01 出土遺物 (縮尺: 1・2・5—7, 3/4, 他は1/2)

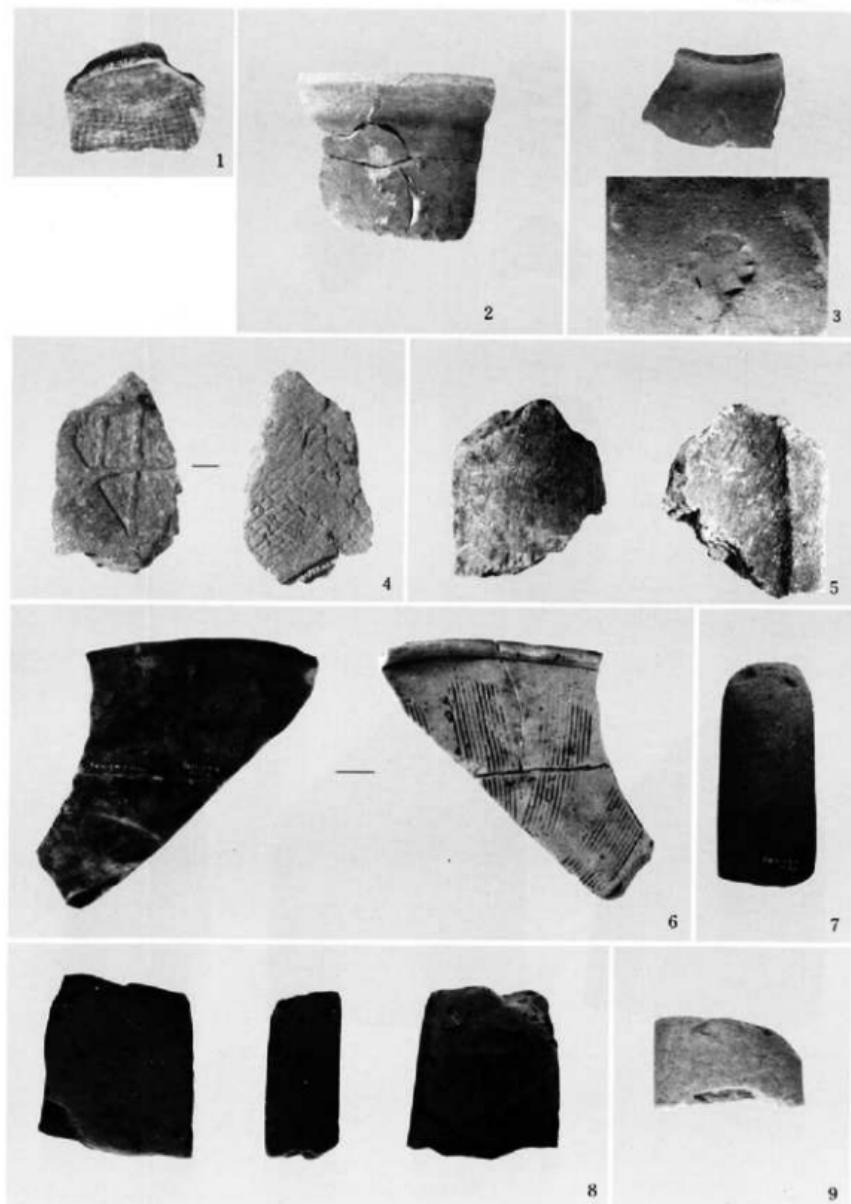


SD 01 出土遗物

縮尺: 1/4



SD 02, SD 03 出土遺物 (5-10, 初期伊万里及び船内津)
縮尺: 3~9, 1/2, 他は3/4



SD 02, SD 03 出土遺物 (縮尺: 1/2)



|



1



|



2



|



3



4



5

缩尺：1~6, 3倍；7, 5倍



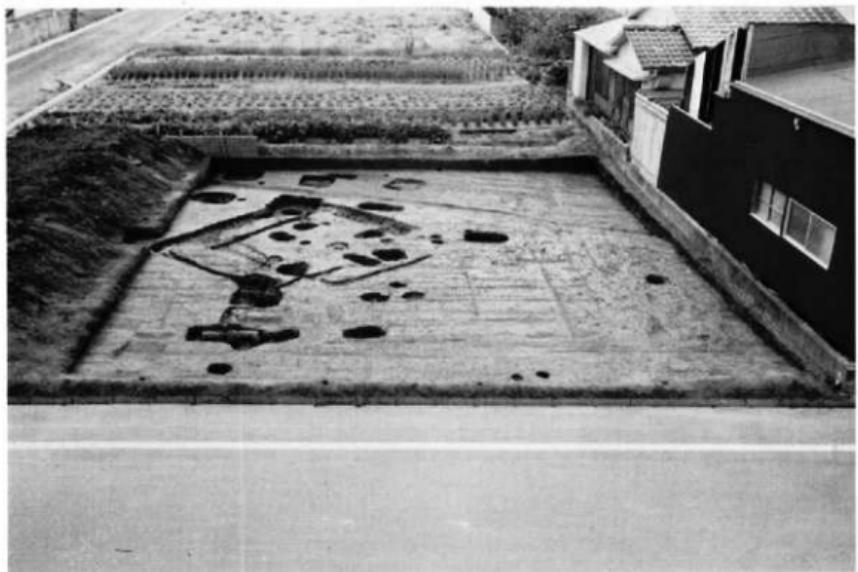
—



6



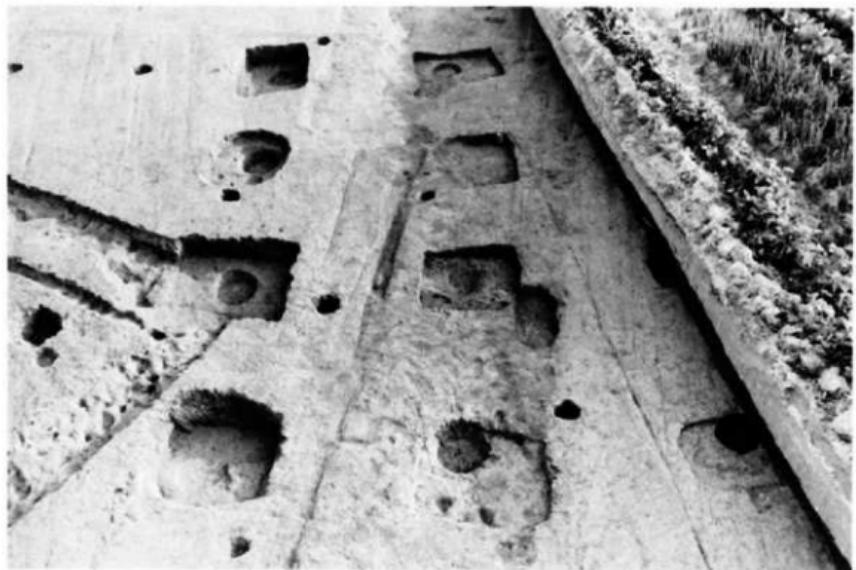
7



(1) 第29次調査北半



(2) 調査南半



(1) 振立柱建物 SB 01 (北から)



(2) SB 01 (東から)



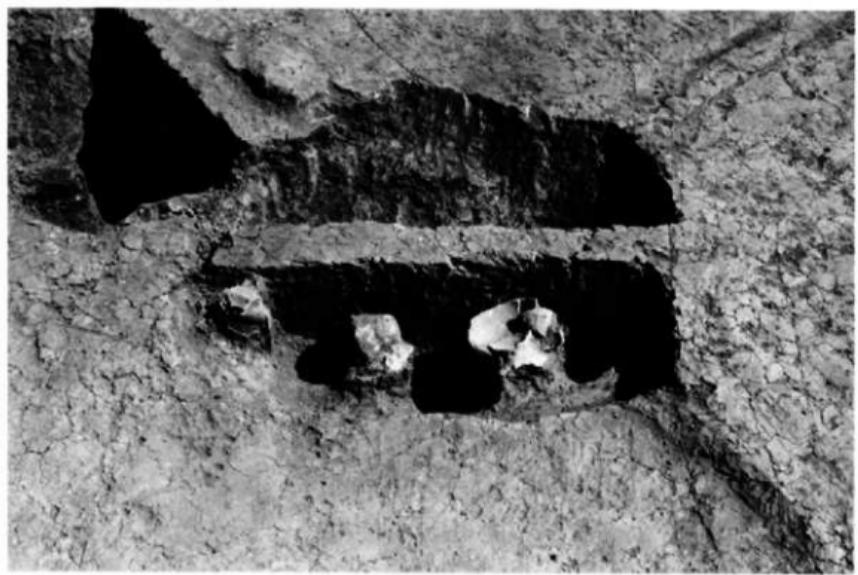
(1) 住居跡 SI 01



(2) SI 01



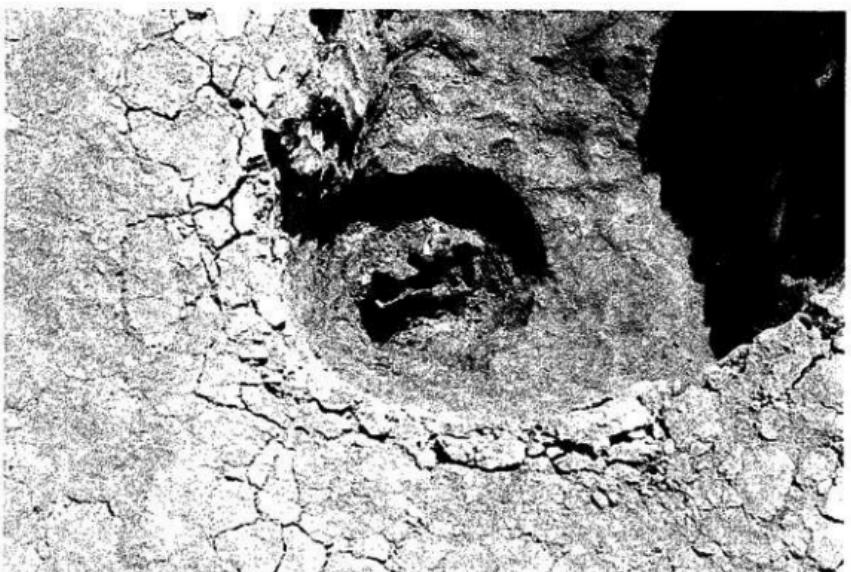
(1) 住居跡 SI 01, SI 02



(2) SI 01内 D-4



(1) 住居跡 SI 02内D-5 (東から)



(2) Pit7内鉄斧出土状況



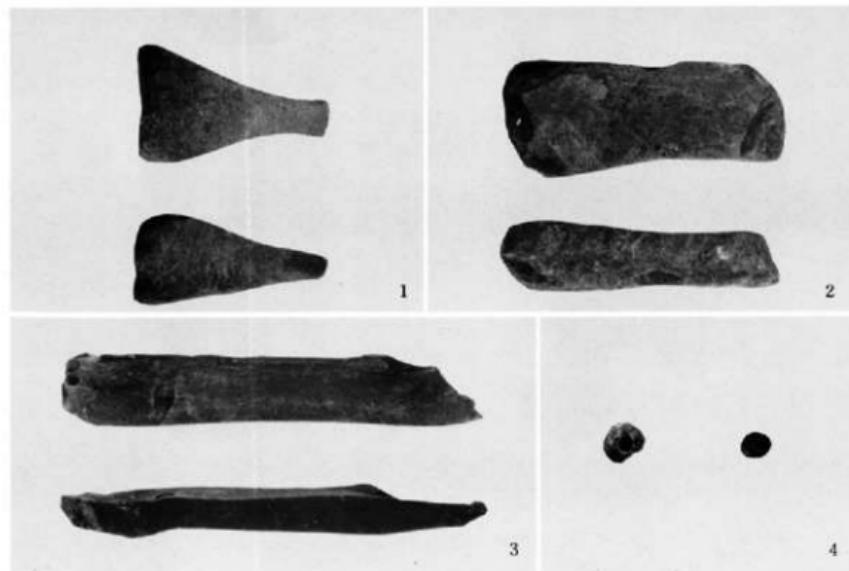
(1) 住居跡 SI 03



(2) SI 03 内土壤



(1) 土城 SK 01



(2) 出土遺物 (4はSB明柱穴内出土。左、右は縦)



1



5



2



6



7



3



8



4



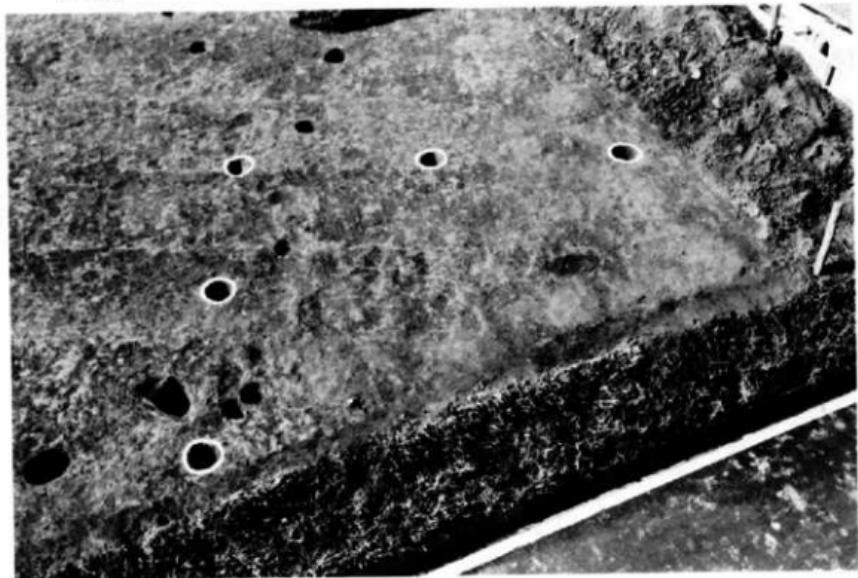
9



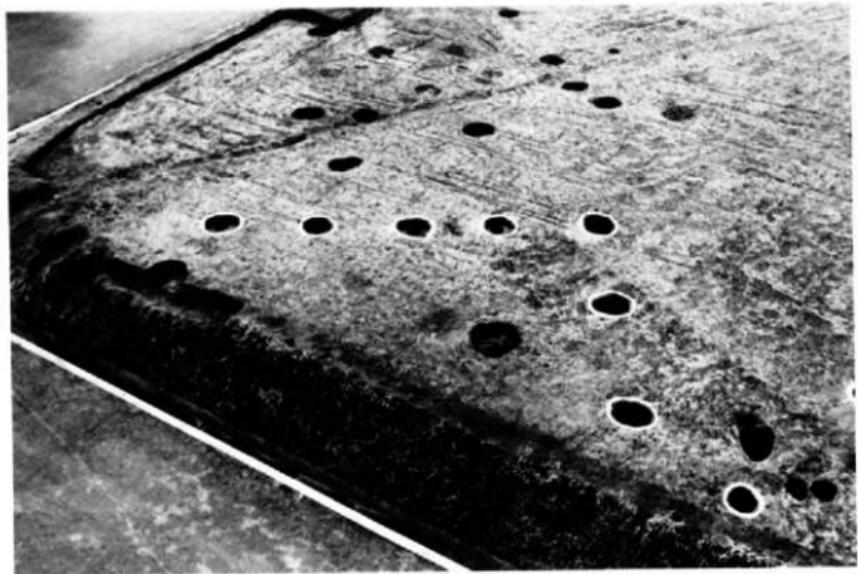
(1) 第31次調査全景（東から）



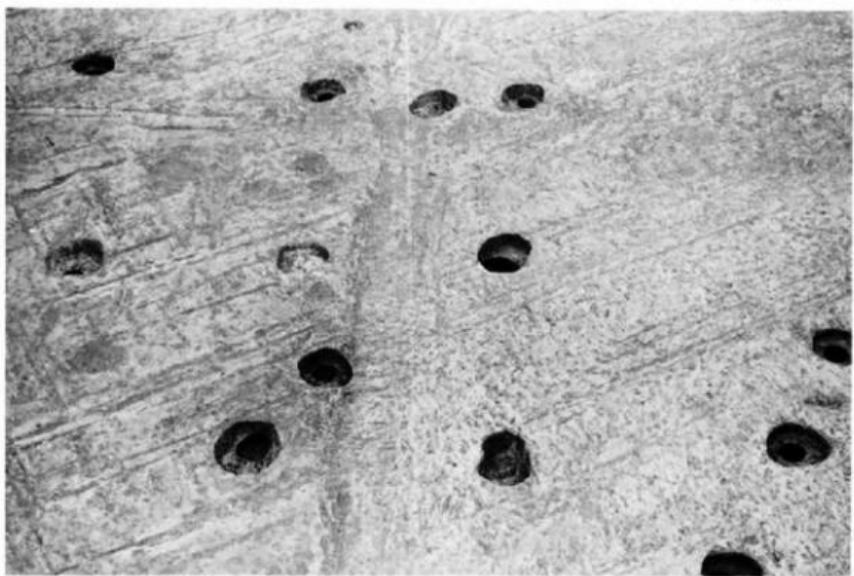
(2) 第31次調査全景（東から）



(1) 掘立柱建物 SB 01, 02 (南から)



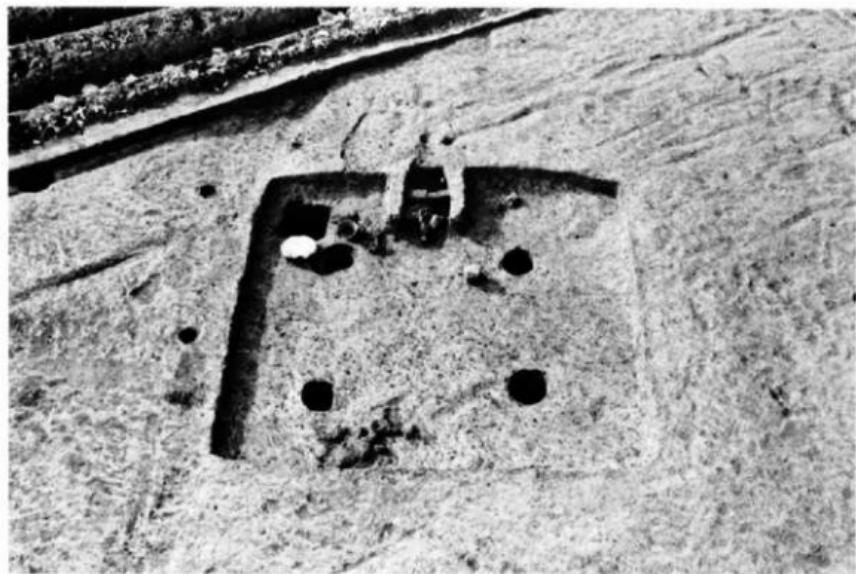
(2) SB 01, 03 (東から)



(1) 摺立柱建物 SB 02 (東から)



(2) 摺立柱建物 SB 03 (東から)



(1) 住居跡 SI 01 (東から)



(2) SI 01 かまどの状態



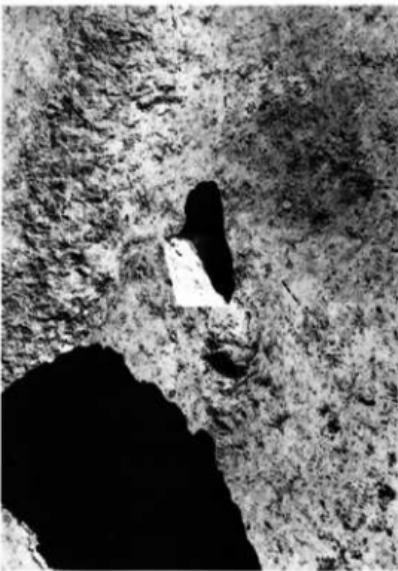
(1) かまどの状態



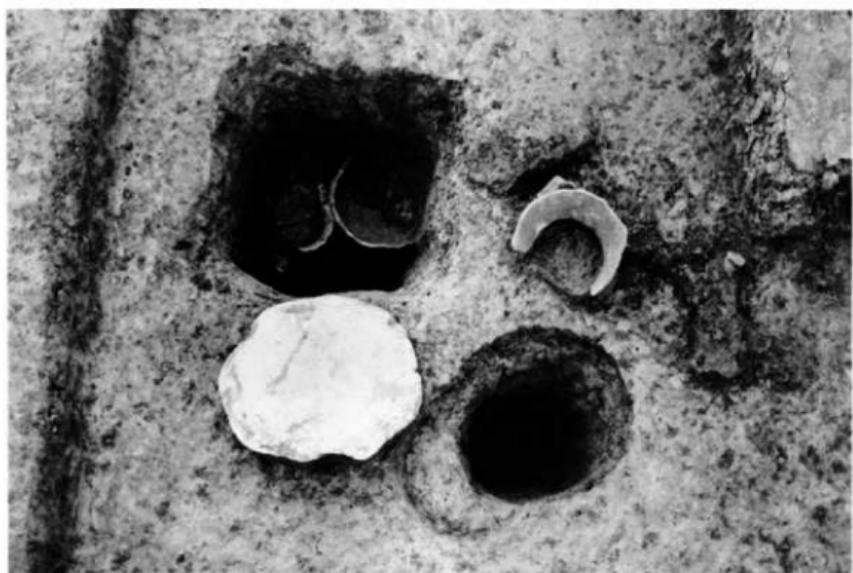
(2) かまどの状態



(3) かまどの支脚



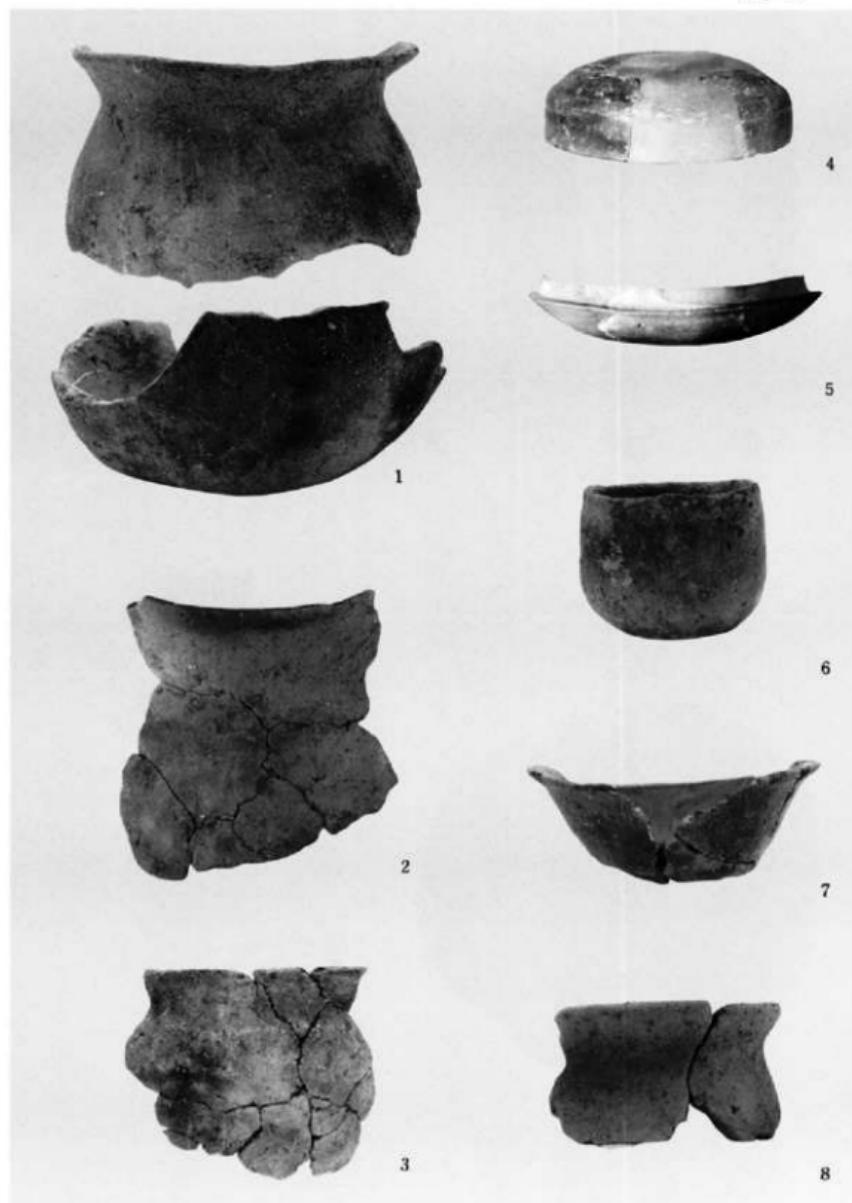
(4) 磁石の出土状況



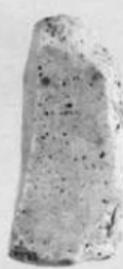
(1) SI 01内土壤及び工作台



(2) 土壌 SK 01 (北から)



SI 01出土遺物 (縮尺1・3, 4, 他は1)



1



4

5

2

3



6

3はSK 01 出土
他はSI 01 出土
縮尺: 2・3 月
6 他は
 年
 月



(1) 第33次調査全景



(2) 造構東側



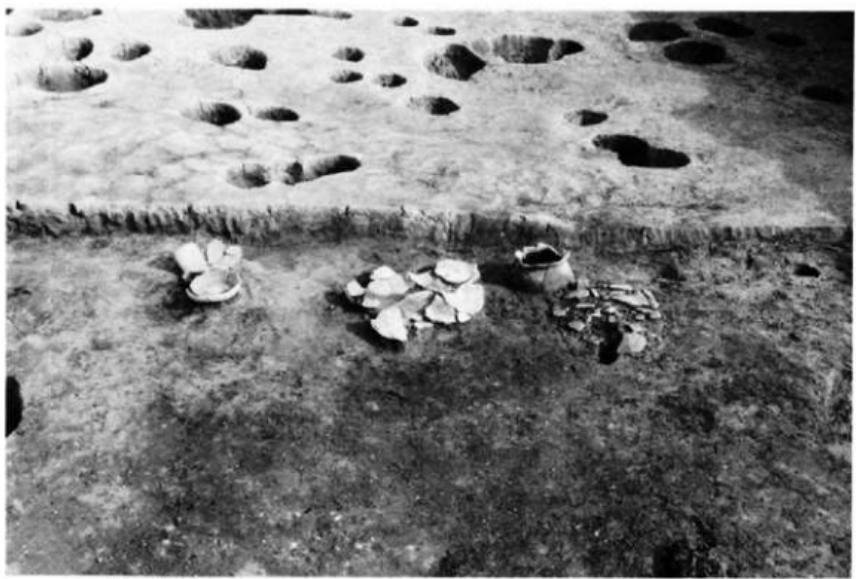
(1) 住居跡 SI 02 (東から)



(2) 住居跡 SI 01 (南から)



(1) SI 01 内土壤



(2) 遺物出土状況



(1) 遺物出土状況



(2) (1)に同じ



(3) (1)に同じ



(4) (1)に同じ



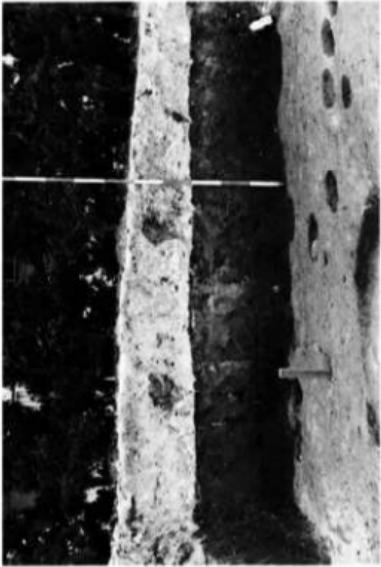
(1) かまどの状態



(2) かまどの状態



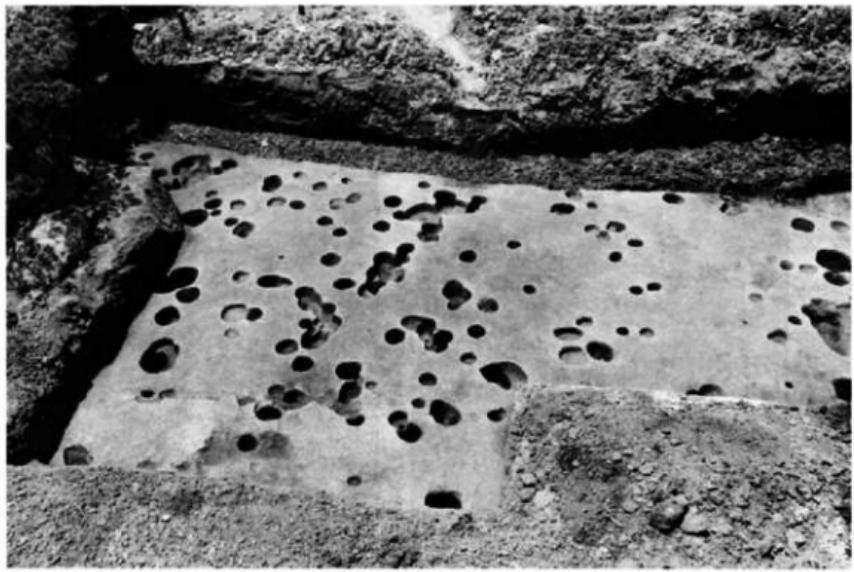
(3) 北壁の土壌状態



(4) 北壁の土壌状態



(1) 遺構西半分（北から）



(2) 遺構西半分（東から）



(1) 西側段落ち状況



(2) 土壌 SK 01, 02, 03 (西から)



(1) 土壤 SK 01, 02 (西かづ)



(2) SK 02 内出土状況



(1) 土壌 SK 03 (西から)



(3) 土壌 SK 04 (東から)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



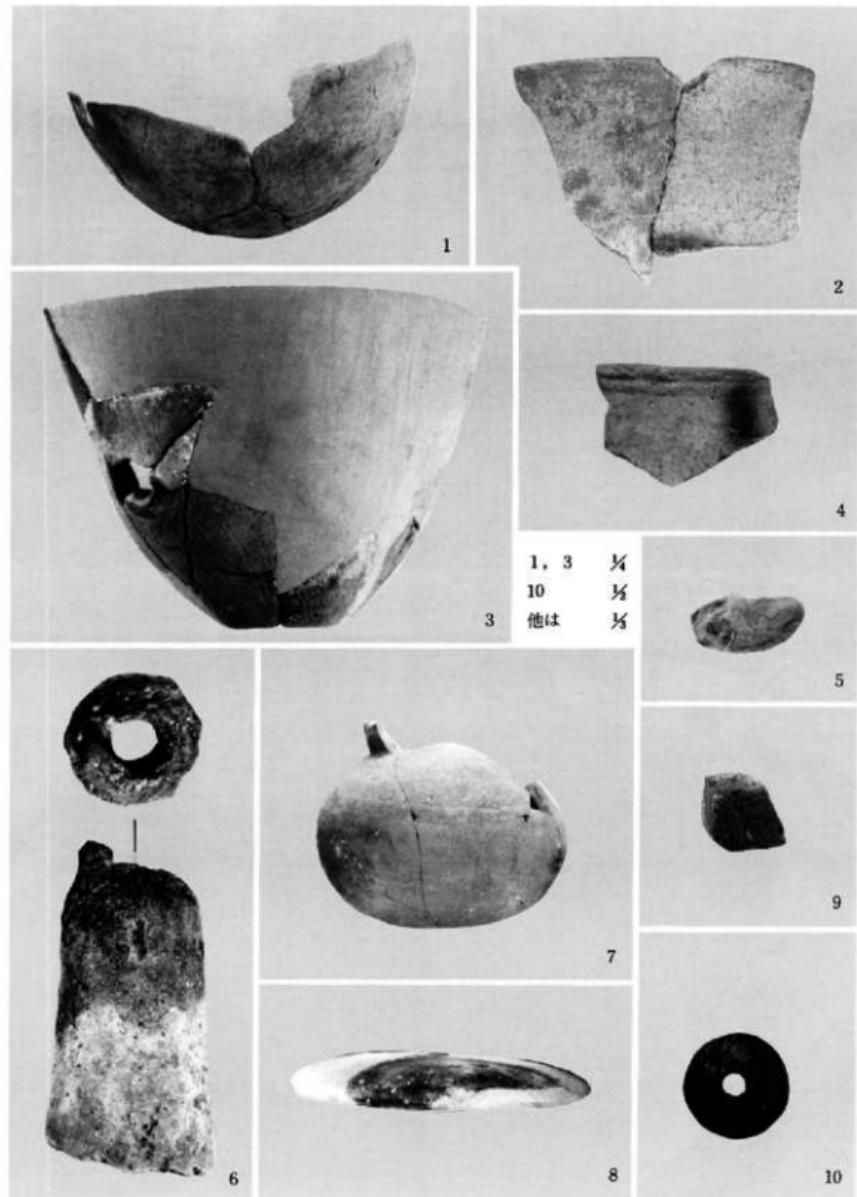
10



11



12



出土遺物 (1~4, 10, SI 02出土 6, SK 02出土)
(5, 7, SI 01出土)



(1) 第34次調査現況（西から）



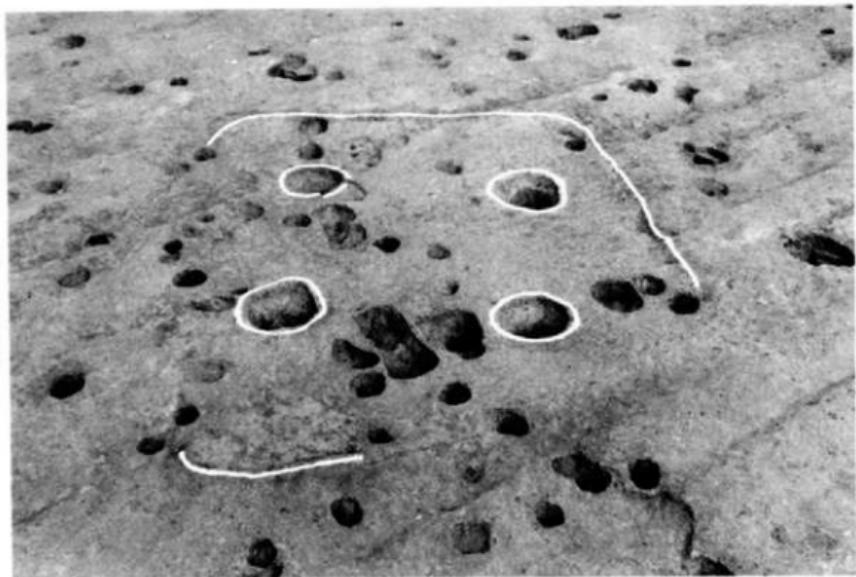
(2) 遺構全景（東から）



(1) 造構東側（南から）



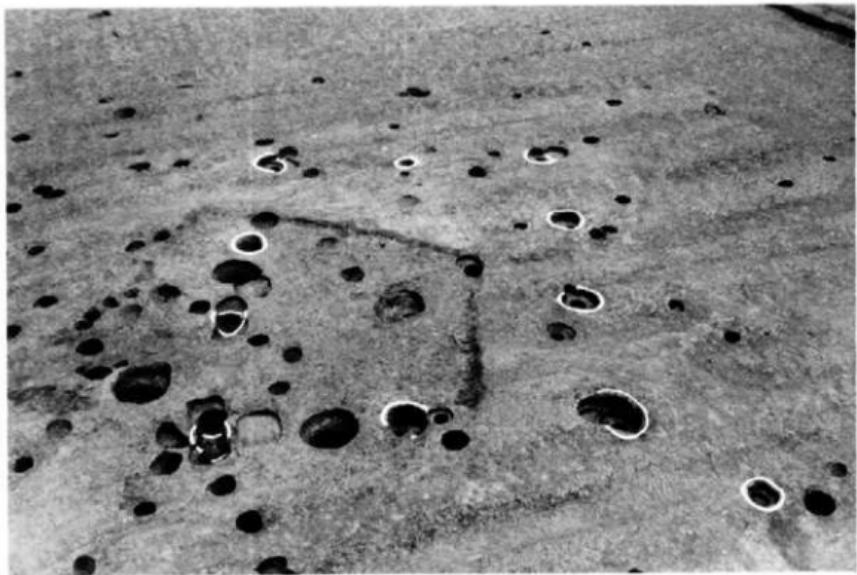
(2) 造構西側（南から）



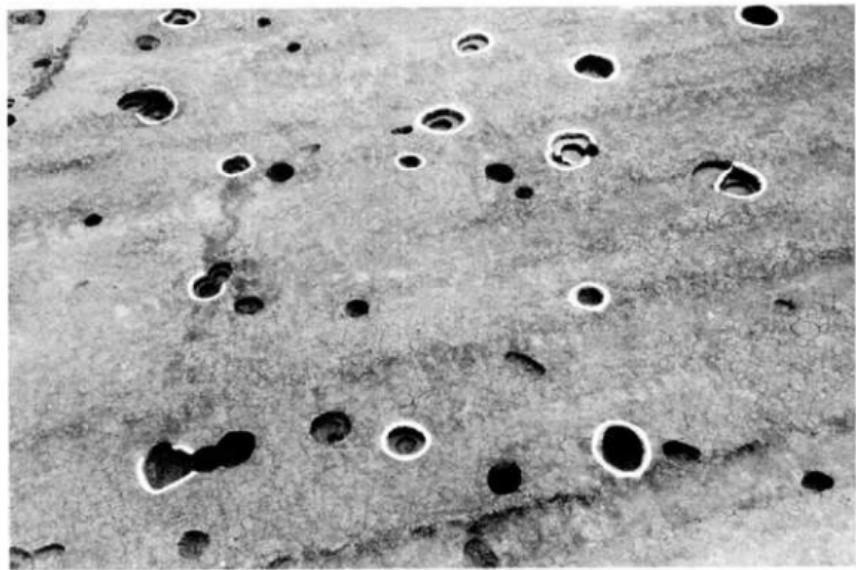
(1) 住居跡 SI 01 (東から)



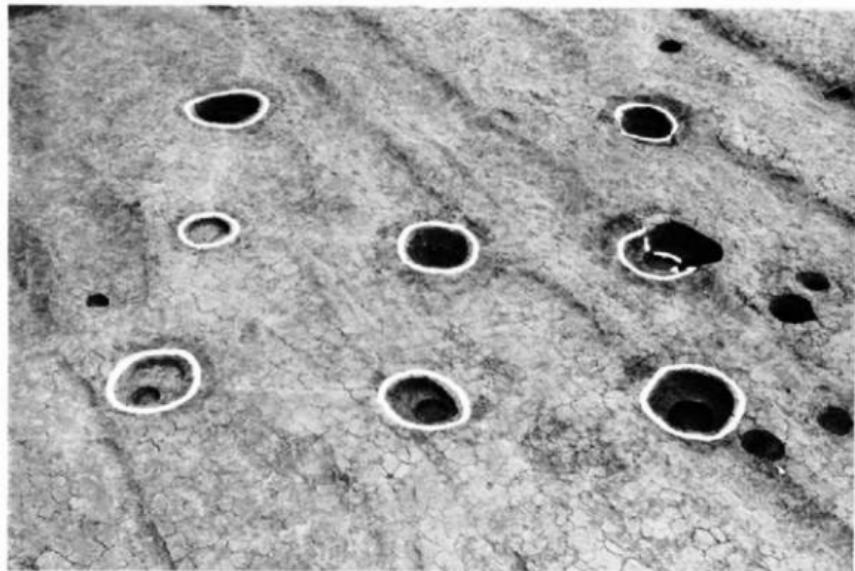
(2) 据立柱建物 SB 01 (南から)



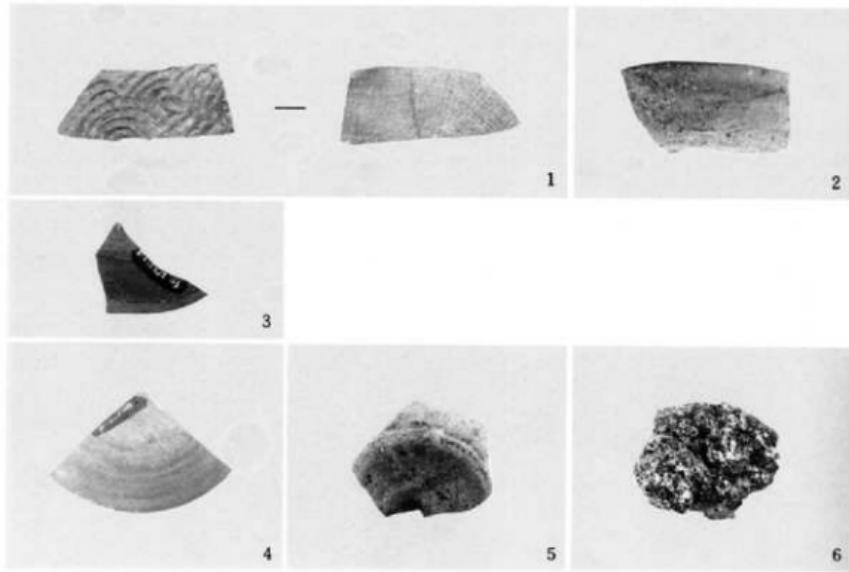
(1) 捜立柱建物 SB 02 (東から)



(2) 捜立柱建物 SB 03 (北から)



(1) 挖立柱建物 SB 04 (東から)



出土遺物 (縮尺: 1/2)

有田・小田部 第2集
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第81集

1982年(昭和57年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-7-23
印刷 秀巧社印刷株式会社

有田・小田部 第2集

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第81集

1982

福岡市教育委員会